

西新町遺跡出土品再整理事業報告書

西新町遺跡 3・12～15・17・20・22 次出土品総括報告

2025

九州歴史資料館

西新町遺跡出土品再整理事業報告書

西新町遺跡 3・12～15・17・20・22 次出土品總括報告

2025

九州歷史資料館

序

博多湾沿岸地域は、弥生時代以来、日本列島における大陸への玄関口であり、多くの人々が往来するとともに、大陸の様々なモノ、情報、技術などを盛んに受容することで、日本列島の諸社会に大きな影響を与えてきたことが、発掘された遺跡や文献史料などから明らかになっています。

西新町遺跡は、早良平野の北東部、博多湾沿いの砂丘上に立地します。これまで福岡県教育委員会や福岡市教育委員会によって行われた発掘調査によって、列島最古級の竪穴住居の造り付けカマドや多種多様な朝鮮半島系土器、畿内や山陰、瀬戸内地域等の日本列島各地に由来する遺構・遺物が発見されました。その量・質ともに古墳時代初頭において比類なき内容であり、弥生・古墳時代における日韓交流史研究が大きく発展する契機となった遺跡といえます。

令和4～6年度、福岡県所蔵の西新町遺跡出土品の再整理を行うにあたり、地域研究として、他地域に由来する各種遺物・テーマに精通した研究者を招聘し、出土品の再評価を行うための検討会を実施しました。その成果をまとめたものが、本報告書です。

検討の結果、広域的な人の交流の在り方、交易・流通、各種生産活動や地域社会の特徴等の諸要素を具体的に捉えることができました。これは、海という道を通して、新しい文化要素、情報・技術・モノの伝達に携わり、朝鮮半島・日本列島の各地域を取り結ぶ役割を担った、西新町遺跡の歴史的意義の一端を示していると考えられます。

最後に、本書が福岡県と国内外の各地域との交流史、研究利用の基礎資料として活用されることを期待するとともに、執筆者の皆様、御協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます、発刊の御挨拶とさせていただきます。

令和7年3月31日

九州歴史資料館
館長 吉田 法稔

例 言

- 1 本書は、令和4～6年度にかけて国庫補助（埋蔵文化財活用事業）を受けて、福岡県教育委員会が実施した、福岡市早良区西新に所在する西新町遺跡の出土品再整理事業と本遺跡出土品の再評価を目的に地域研究として、本遺跡で出土した国内外各地に由来する遺物を対象に、その遺物に精通した外部研究者及び本県職員とで行った検討の成果をまとめた報告書である。
なお、報告書刊行費用は、福岡県一般財源から支出した。
- 2 本書では、出土品再整理事業の対象となる福岡県教育委員会が実施した本遺跡第3・12～15・17・20・22次調査出土品に加え、福岡市教育委員会の調査実施分をはじめとする本遺跡に関わる関連資料を地域研究による検討の対象とした。
〈西新町遺跡出土品再整理事業対象報告書〉
3次調査：福岡県教育委員会 1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集
12次調査：福岡県教育委員会 2000・2001『西新町遺跡Ⅱ・Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第154・157集
13次調査：福岡県教育委員会 2002・2003『西新町遺跡Ⅳ・Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第168・179集
14・15次調査：福岡県教育委員会 2005『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集
17次調査：福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第208集
20次調査：福岡県教育委員会 2008『西新町遺跡Ⅷ』福岡県文化財調査報告書第218集
22次調査：福岡県教育委員会 2009『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第221集
- 3 執筆は分担して行い、目次及びそれぞれの担当原稿の最後に執筆者名と所属名を明記した。
- 4 律令畿内制の規定範囲に近い地域圏が古墳時代には成立していたという立場に立ち、本書でも「畿内」の地域呼称を使用した。
- 6 本書の編集は、大庭孝夫・坂本雄紀が行った。

目 次

序

例言

本文目次

挿図目次

第1章 はじめに（大庭孝夫）

第1節	本書の目的	1
第2節	本書の構成	2
第3節	事業の経過と体制	4
第4節	西新町遺跡・藤崎遺跡の概要	7

第2章 出土品からみた交流拠点としての西新町遺跡の様相

第1節	朝鮮半島系土器の受容と展開（重藤輝行）	13
第2節	布留系甕の様相（田中元浩）	41
第3節	布留系小型精製器種の様相（市村慎太郎）	61
第4節	西新町遺跡出土の山陰系土器（松山智弘）	75
第5節	吉備系土器の様相（河合 忍）	97

第3章 九州内での西新町遺跡

第1節	玄界灘沿岸地域における西新町遺跡集落の特質（森本幹彦）	105
第2節	九州内における布留式系土器の影響と西新町遺跡（檀 佳克）	123

第4章 西新町遺跡出土品の特徴

第1節	西新町遺跡出土金属製品の特徴（出見優人）	133
第2節	西新町遺跡における玉関連資料の特徴（坂元雄紀）	139
第3節	九州型石鍾からみた西新町遺跡（大庭孝夫）	146
第4節	漁具からみた西新町遺跡の地域間交流の様相（大庭孝夫）	149
第5節	九州型石鍾からみた北部九州と日本海沿岸地域の地域間交流の一様相（大庭孝夫）	173

第5章 総 括（大庭孝夫） 189

挿図目次

第1図	西新町遺跡と関係する弥生・古墳・近世遺跡 (1/50,000) ……	1の左頁
第2図	西新町遺跡と藤崎遺跡 ……	6
第3図	西新町遺跡の遺構配置図 (1/3,000) ……	9
第4図	藤崎遺跡の遺構配置図 (1/3,000) ……	11
第5図	関連遺跡分布図 ……	13
第6図	西新町遺跡出土半島系土器 (1) (1/6) ……	14
第7図	西新町遺跡半島系土器 (2) (1/3、1/6) ……	16
第8図	西新町遺跡出土韓半島系土器の類例 (1) (1/12、1/6) ……	17
第9図	西新町遺跡出土韓半島系土器の類例 (2) (1/6) ……	19
第10図	半島系土器の模倣品・土師器の模倣品 (1/6) ……	20
第11図	西新町遺跡出土甗 (1/6) ……	22
第12図	甗等の類例 (1/6) ……	23
第13図	西新町遺跡4次SC39住居跡出土土器 (1/8、1/6) ……	26
第14図	西新町遺跡12次93号住居跡出土土器 (1/6) ……	27
第15図	全羅南道海南新今遺跡II段階の土器(1/6) ……	28
第16図	西新町遺跡第12次22号竪穴住居カマドとその出土土器 (1/80、1/10) ……	32
第17図	西新町遺跡の交通ネットワーク ……	36
第18図	西新町遺跡の布留系甗 (1/8) ……	41
第19図	西新町遺跡における布留系甗の口縁部形態 (2/3) ……	43
第20図	肩部施文の分類(博多湾沿岸地域の模式図、1/3) ……	44
第21図	西新式甗・布留系甗の容量(土器1/16) ……	46
第22図	博多湾沿岸地域における布留形甗の変遷 (1/8) ……	49
第23図	畿内地域と西新町遺跡の精製器種B群の器種構成 (1/6) ……	51
第24図	布留式土器(布留系甗)の展開に関するモデル ……	55
第25図	小型丸底壺 (1/6) ……	62
第26図	中河内・大和における小型丸底壺の法量の変遷 (1) ……	63
第27図	中河内・大和における小型丸底壺の法量の変遷 (2) ……	64
第28図	西新町遺跡における小型丸底壺の法量分布 ……	65
第29図	小型器台 (1/6) ……	65
第30図	有段口縁鉢ほか (1/6) ……	67

第31図	有段口縁鉢ほかの法量分布 ……	68
第32図	他の精製土器 (1/6) ……	70
第33図	出雲地域の弥生時代終末から古墳時代中期前葉の土器編年 (1) (1/16) ……	76
第34図	出雲地域の弥生時代終末から古墳時代中期前葉の土器編年 (2) (1/16) ……	77
第35図	小形甗の変化 (1/10) ……	79
第36図	西新町遺跡出土の山陰系土器の主要器種 (1/10) ……	81
第37図	出雲平野の集落遺跡と西新町遺跡の山陰系土器の器種構成 ……	82
第38図	出雲市古志本郷遺跡SI01出土土器 (1/10) ……	83
第39図	出雲平野の古墳時代前期前半の山陰系土器 (1/10・1/16) ……	84
第40図	西新町遺跡の山陰系土器 (1/10・1/16) ……	85
第41図	岡山県足守川下流域の山陰系土器 (1/10) ……	85
第42図	西新町遺跡の篋書き文 (1/6) ……	86
第43図	壺形土器の断面比較 (1/4) ……	86
第44図	羽状文壺の変化 (1/10・1/4) ……	87
第45図	山陰の竹管文を持つ土器 (1/6・1/8・1/12) ……	88
第46図	西新町遺跡の羽状文・竹管文を持つ土器 (1/10・1/12) ……	89
第47図	出雲平野の半島系土器と共伴土器 (1/8) ……	91
第48図	山持遺跡・古志本郷遺跡の出土土器量の変化 ……	92
第49図	西新町遺跡におけるおもな吉備系土器 (1/6) ……	98
第50図	北部九州(おもに博多湾沿岸東半地域)における吉備系土器 (1/6) ……	99
第51図	瀬戸内海ルートと吉備型甗の分布 ……	100
第52図	弥生時代後半から古墳時代前期の主な遺跡 ……	105
第53図	弥生時代中期後半の西新町遺跡 ……	106
第54図	西新町遺跡における古墳時代の竪穴建物分布 ……	109
第55図	西新町遺跡東部の古墳時代建物とカマドの分布 ……	110
第56図	古墳時代前期前葉(新)の同時併存建物の推定 ……	111
第57図	博多遺跡群 ……	113
第58図	中原遺跡 ……	114
第59図	弥生時代から古墳時代にかけての土器の変化 ……	124
第60図	布留系甗形土器の器壁の厚みの差異 ……	124
第61図	九州古式土師器の系統分類 ……	125

第62図	土器交流拠点の候補となる遺跡	127
第63図	西新町遺跡出土土器の事例 (1/8)	129
第64図	西新町遺跡出土の鉄鏝 (1/2)	133
第65図	西新町遺跡出土の刀子 (1/2)	133
第66図	西新町遺跡出土の手鏝 (1/2)	134
第67図	西新町遺跡出土の鉄製農具 (1/2)	135
第68図	西新町遺跡出土の青銅器 (実大)	136
第69図	14次調査出土ガラス小玉実測図 (2/1)	140
第70図	鋳型及び石製玉類製品・未成品 (1/2、2/3)	141
第71図	石製玉類未成品及び玉砥石 (1/2、2/3)	143
第72図	博多湾周辺の本稿と関係遺跡分布図	150
第73図	今山遺跡 8次製塩土器廃棄遺構 (1/60)	150
第74図	今宿遺跡 5次 SK032 (1/40)	151
第75図	今宿遺跡 5次脚台式脚台内面に施された丁字 なナデ	152
第76図	今宿遺跡 5次の一体成形と円盤充墳	152
第77図	大阪湾系製塩土器 (1/4)	152
第78図	博多湾沿岸の遺跡出土製塩土器 (1/4)	153
第79図	玄界灘の製塩土器脚台端部径比較	154
第80図	西新町遺跡 12次 105号堅穴住居跡出土土器	155
第81図	海の中道遺跡脚部との接合	155
第82図	大橋前田遺跡脚台部接合痕	156
第83図	博多湾以外の製塩土器 (1/4)	157
第84図	多々羅製塩遺跡製塩土器脚部内面の被熱痕	158
第85図	西新町遺跡 20次 47号堅穴住居跡飯蛸壺の底部	162
第86図	博多湾沿岸地域の飯蛸壺 (1/4)	163
第87図	堅粕遺跡 10号土壇横土壇 (1/40)	164
第88図	堅粕遺跡飯蛸壺の底部の板状圧痕	165
第89図	箱崎遺跡 8次飯蛸壺の底部穿孔	165
第90図	那珂遺跡 18次飯蛸壺 (1/4)	165
第91図	列島西部における脚台式製塩土器出土遺跡	169
第92図	列島西部における飯蛸壺出土遺跡	169
第93図	日本海沿岸の本稿関係遺跡分布図	173
第94図	玄界灘における九州型石鏝分布図 (1/4)	175
第95図	西川津遺跡出土石鏝と関連資料 (1/3)	176
第96図	青木遺跡出土石鏝 (1/3)	177
第97図	博労町遺跡出土石鏝 (1/3)	177
第98図	妻木晩田遺跡出土石鏝 (1/3)	178
第99図	切削技法	178
第100図	青谷上寺地遺跡出土石鏝と関連資料 (1/3)	180
第101図	青谷上寺地遺跡石鏝の切削技法	180
第102図	畝田寺中遺跡出土石鏝と関連資料 (1/3)	181

第103図	畝田寺中遺跡石鏝の切削技法	182
第104図	九州型石鏝と北部九州系土器の分布図	183

表目次

第1表	西新町遺跡の調査履歴一覧	8
第2表	西新町遺跡出土の主要半島系土器の時期	25
第3表	短頸壺のタタキ文様	30
第4表	西新町遺跡における布留系壺の口縁部形態	43
第5表	西新町遺跡における布留系壺の肩部施文	44
第6表	畿内地域と博多湾沿岸地域の布留系壺の諸属性の 比較	47
第7表	西新町遺跡の布留系壺の諸属性と精製器種の器種 組成	52
第8表	土器編年対照表	97
第9表	主な湾岸立地集落の消長 (弥生時代後半期～古墳 時代前期)	116
第10表	古墳時代前期の主な再開発集落遺跡	117
第11表	九州出土甕形土器各系統の属性別諸特徴 (古墳時代前期)	126



第1図 西新町遺跡と関係する弥生・古墳・近世遺跡 (1/50,000) (『西新町遺跡IX』より引用)

第1章 はじめに

第1節 本書の目的

西新町遺跡は、北部九州の弥生時代後期終末～古墳時代初頭の在在地系土器である西新町式の標識遺跡として、かつ古墳時代初頭、列島最大級の国内外交流拠点として著名な遺跡である。

発掘調査は、主に福岡県・福岡市教育委員会によって継続的に実施されているが（第1表）、1998年以降の福岡県教育委員会による県立修猷館高校大規模改築工事に伴う発掘調査（12～15・17・20・22次調査）によって、古墳時代前期以前の列島ではほとんど例のない造り付けカマド付竪穴住居跡、同時期の列島内では群を抜く量の朝鮮半島系土器、畿内系、山陰系を中心に吉備系、西部・東部瀬戸内系、豊前系、筑後・肥後系土器など西日本各地に由来する遺物が多量に出土した。

これは、日韓及び列島各地の交易ルートの整備により、本遺跡が国際交易港として位置づけられたことを示す。また、「加耶の鉄」と呼ばれる鉄をはじめとした対外交渉のため、朝鮮半島諸地域からの一定数の渡来人が往来したことを示すとともに、朝鮮半島からもたらされたモノ、情報等を得るために、西日本各地の人々も本遺跡に集まり、交易を行っていたことが想定される。古墳時代初頭、列島西部各地で広域交流拠点と考えられる大規模集落遺跡が形成され、人々やモノの移動がさらに活発化したとされるが、この交流・交易ネットワークの核となった本遺跡の調査成果は、遺跡立地の特殊性、生業・生産、交易・流通、儀礼、集団構造等、古墳時代初頭の列島規模での社会構造を検討するにあたり、重要な素材を提供したといえる。このような本遺跡の調査成果は、土器の移動現象をもとにした3・4世紀の具体的な朝鮮半島と日本列島との対外交渉を論じる下地が整ったと評価されている（中久保2017）。

報告書刊行後、本遺跡に関わる各種遺物の生産・流通関係、地域間関係、社会構造等について、全てを把握できないほど、日韓双方で数多くの論考が発表されている。本県においても、修猷館高校改築事業に係る調査報告書の最終巻にあたる『西新町遺跡IX』で、遺跡・遺物の総括的な検討を行った。その中で出土土器の編年の整理に基づく集落の変遷、カマドという特徴的な遺構の系譜関係等、遺構については一定程度検討しているものの、遺物については朝鮮半島系土器・玉関連遺物・漁具など一部のみの検討にとどまり（下原編2009）、特に地域間関係や交易の特質を示す国内外各地由来の土器に関する整理については不十分であった。

そこで、国庫補助による出土品再整理事業と同時に、地域研究として、各地域に由来する遺物の形態的特徴と製作技法等の検討から、活発な地域間相互交流の具体相を探るため、近年土器研究を主として各地域で活躍している研究者をテーマ、地域ごとに招聘し、対象とする遺跡出土品を目の前に九州の研究者と一緒に検討する「検討会」を実施した。その「検討会」の成果の一部は、各年度に一般向けに作成したパンフレットに掲載したが、検討会で外部から招聘した研究者から数多くの論点が提示されたため、その「検討会」のまとめとして、多角的な視点に基づく本遺跡出土品の総括的な報告書の作成を行うことにした。

以上、本書は古墳時代初頭の列島内外各地域との活発な地域間交流からうかがえる本遺跡の歴史的意義について、現在の資料状況と研究段階に基づいた、新たな遺跡像がみえるかどうかということを目として、事務局が依頼したテーマに基づき、検討会に参加した外部研究者と本県職員が執筆したものである。

本書での検討項目は、朝鮮半島系土器、畿内系土器、山陰系土器、吉備系土器、玉生産関連遺物、鉄器、製塩土器・飯埴壺という各種遺物に加え、西新町遺跡盛行前後の博多湾岸という地域社会の特質と変化、位置付け、九州各地域との地域間関係という、地域社会からの視点に基づくテーマについても取り上げた。なお、各論の中で検討テーマに基づいた本遺跡の評価についても触れていた。

最後に総括として、各論者による整理に基づく分析を接続することにより、地域間交流・交易の実態、手工業生産等の論点を整理し、今後の課題の提示を行った。

なお、博多湾岸では久住猛雄氏による土器の系統的な理解と各資料の一括性の評価に基づく編年研究及び広域的な併行関係の検討が進んでいる（久住 1999）。この時代の土器研究が盛んな分野であるゆえに、土器編年や広域的な併行関係については様々な見解がある。そこで、今回は編年作業の追求よりも、広域的なヒト・モノの動きの実態を追求することを第一の目標とした。

なお、今回取り上げたテーマ以外、例えば、文字の使用を示す板石硯については、所属年代も含めて議論があり、それらについては今後の課題としたい。

第2節 本書の構成

古墳時代初頭において、海上交通による長距離交易が活発化し、列島各地で港湾機能を備えた交流拠点が形成されるが、その中でも本遺跡は規模や内容がいずれも大きく、朝鮮半島から北部九州、山陰、瀬戸内北岸・南岸、畿内等を繋ぐ広域的なネットワークの一大結節点としての重要性が指摘されている。

本書では、本遺跡が盛行する前後の時期や他遺跡出土品、特に土器を検討対象とし、それぞれの故地の在り方がどの程度本遺跡でみられるのか、どの程度変容しているのか、どの時期、どの地域との接触が最もみられるのか、故地と同じように使われているのかなど、出土品から見通せる先の朝鮮半島、列島各地との広域的なネットワーク及び交流モデルの実態とその意義についての把握を目指した。以下では、本書の第2～4章の各検討テーマの考え方を示す。

○朝鮮半島系土器の受容と展開（第2章第1節）：重藤輝行（佐賀大学芸術地域デザイン学部）

本遺跡から出土した多種多様な朝鮮半島系土器は、近年朝鮮半島における資料の蓄積により、朝鮮半島南部の地域色解明が進み、全羅道や慶尚道など朝鮮半島南部の諸地域からもたらされたことが明らかになりつつある。先行研究では日韓交易形態は時期により変化することが指摘されているが、それがどのようなルートで本遺跡にもたらされたのか、さらに交易形態やそれに関わる遺跡がどのような変遷を辿り、それらを引き起こした文化・社会的背景がどのようなものであったのかという問題は重要である。

また、これまで渡来系遺物の研究は、最も捉えやすい搬入品・忠実再現品の検討に偏っていた（武末 2010、p3）。しかし、本遺跡で出土した朝鮮半島の製作技法や在来の土師器の技法で製作された酸化焰焼成の模倣土器は、渡来系・在地系集団の地域社会への関わり方、またそれが一時的なものか継続的なものかを把握する上で重要である。加えて、弥生時代中期以降の朝鮮半島系土器の存在形態の変遷に関する分析を行い、古墳時代初頭の本遺跡の特質について論じた。

○列島各地域からみた西新町遺跡（第2章第2～5節）

古墳時代初頭前後、西日本を中心に、地域的な個性のある土器が広域的に広がるが、そこからみえる交流の多様性は古墳時代成立のプロセスを考える上で手がかりとなる。

ここでは、交流拠点としての本遺跡について、出土品の中でもある程度数量があり、傾向が把握できる畿内系（甕と小型精製器種）・山陰系・吉備系土器を対象に、器形、製作技術、使用痕跡など各種土器の有する特質を探り、故地の推定、移動軌跡、本遺跡での在り方・特徴について連鎖的に検討することで、遺構からは直接的に把握しにくい地域間関係の把握を試みた。加えて、各論者の各自の視点に沿った本遺跡の位置づけについても評価している。

なお、本来なら他地域との比較研究を行う上でも、本稿の対象とする北部九州の古墳時代初頭前後における土器編年の提示とそれを踏まえた各地域との広域的な併行関係の議論が必要である。しかし、各論者でも意見の相違があり、併行関係にズレが認められる。本事業では本遺跡と列島内外諸地域との関係の基礎的な資料の提示と対比という基礎的な整理が主目的であるため、今回は各論者の編年観に沿って各テーマを論じてもらい、あえて編年観を統合整理することはしていない。ただし、今回各論者から併行関係を考える上での基準資料となる搬入土器が提示されており、今後編年研究の進展が期待される。

第2節 布留系甕の様相：田中元浩（和歌山県立紀伊風土記の丘）

第3節 布留系小型精製器種の様相：市村慎太郎（（公財）大阪府文化財センター）

第4節 西新町遺跡出土の山陰系土器：松山智弘（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

第5節 吉備系土器の様相：河合 忍（岡山県教育庁）

○九州内での西新町遺跡（第3章第1・2節）

前節では九州外との地域間関係を論じてきたが、本遺跡は交流拠点としての戦略的な立地であると同時に、孤立した場所に立地していることを考えると、地域社会でのバックアップなしには存在しえない遺跡であり、周辺地域との相互関係の視点からの検討が必要である。久住猛雄氏は、博多湾内で機能分化した集落が広い範囲に有機的に配置された様相を呈することから、博多湾沿岸を領域とする広範囲の集団が一つの経済圏として、各種の機能を分け持つようになったと指摘する（久住2007）。役割分担という面から、鉄をはじめとする物資の流通の活発化に伴い、朝鮮半島諸地域との交換財や特産物等の戦略物資を生産するため、有機的な配置がなされたと理解される。ここでは、本遺跡がどのような脈絡で地域内で出現していくかを明確にするため、玄界灘沿岸地域を中心に、北部九州地域社会における位置づけ、特徴、関係、変化等について論じた。

第1節 玄界灘沿岸地域における西新町遺跡集落の特質：森本幹彦（福岡市経済観光文化局）

第2節 九州内における布留式系土器の影響と西新町遺跡：檀 佳克（八女市教育委員会）

○西新町遺跡出土品の特徴（第4章第1～5節）

本遺跡の集団は、漁労活動及び玉生産などの複数の手工業生産等、小規模ながら多角的な生業を指向したことが明らかになっている。ここでは、本遺跡の成立の背景として、どのような社会経済

的關係性が存在したのかを探るため、土器以外の各種の特殊遺物から、本遺跡の特徴・評価、技術伝播の在り方について検討する。なお、第5節については、本遺跡とは必ずしも時期的に一致しないが、本遺跡における日本海沿岸地域との密接な関係を考察する上では重要と考え、掲載した。

なお、本章は、福岡県職員（九州歴史資料館・福岡県教育庁文化財保護課）が執筆した。

第1節 西新町遺跡出土金属製品の特徴：出見優人

第2節 西新町遺跡における玉関連資料の特徴：坂元雄紀

第3節 九州型石鍾からみた西新町遺跡：大庭孝夫

第4節 漁具からみた西新町遺跡の地域間交流の様相：大庭孝夫

第5節 九州型石鍾からみた北部九州と日本海沿岸地域の地域間交流の様相：大庭孝夫

○総括（第5章）

前章までの検討を踏まえ、本遺跡を特徴づける諸要素を検討した結果、地域間交流の活発化、前方後円墳の出現、社会変化など、時代的特質による共通した背景が想定できる。総括として、特に国内外の交易機能、手工業生産機能に係る論点を整理することで、遺跡の特質を提示する。



第1回検討会



第2回検討会



パンフレット

第3節 事業の経過と体制

1. 事業の経過

県調査報告書刊行後、「発掘された日本列島展」への出品をはじめとする国内外の博物館・資料館での展示が行われるとともに、国内の研究者や学生はもとより、韓国の研究者等による資料調査が多く行われ、その利用頻度としては福岡県所蔵考古資料の中では今でもトップクラスを誇る。

しかし、様々な調査研究・活用がなされる反面、調査報告は各調査によって個別になされ、計9冊の報告書に分かれていること、膨大な遺物量であったため収納場所の関係から遺物整理箱に詰めて整理していたことから、活用に支障が生じていた。そのため、令和4～6年度にかけて国庫補助埋蔵文化財活用事業の台帳作成（出土品再整理）を行い、報告書に掲載されたもので活用頻度の高いものを選別し、活用に資するよう遺物整理箱に適切に収納する作業を実施した。

また、国内外各地域に由来する遺物の評価については、現地指導や整理段階等で有識者等に個別にコメントをいただいていたが、各調査次數の調査・整理報告書が個別事業でかつ発掘担当者が変わる状況であったため、情報整理が不十分なままになってしまっていた。

今回、先述したように九州と各地域の研究者を招聘した計4

回の検討会を実施したが、主な検討対象としては地域間交流の実態が把握しやすい土器を素材とし、本遺跡における搬入土器、折衷・模倣土器の在り方について、胎土、製作技法を観察し、故地と適合するかどうかなどについての確認・意見交換を行い、基礎的な整理を図った。

検討会での成果としては、列島内外の様々なヒト・モノの動きについて具体的に明らかにすることができ、古墳時代初頭の社会構造、地域間関係等を探る上でいくつかの切り口を把握できた。

検討会については、令和4・5年度の2ヶ年で実施した。参加者は以下の通りである。なお、検討会の実施にあたっては、本遺跡12次・17次調査の主担当であった佐賀大学芸術地域デザイン学部の中藤輝行教授に今回の検討のプロジェクトリーダーをお願いし、各検討会での議論をまとめていただいた。開催場所は全て九州歴史資料館で行った（以下の肩書は開催当時、◎は本書執筆者）

なお、この成果の一部は、令和4・5年度に国庫補助によりパンフレットを作成し、公表した。

○テーマ：朝鮮半島系土器（検討会：令和4年8月18日）

中藤輝行 考古学 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授：プロジェクトリーダー◎
寺井 誠 考古学 大阪歴史博物館
古澤義久 考古学 福岡大学人文学部准教授
森本幹彦 考古学 福岡市経済観光文化局文化財活用部◎
事務局 森井啓次・坂元雄紀◎・大庭孝夫◎

○テーマ：山陰系土器（検討会：令和5年1月12日）

中藤輝行 考古学 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授：プロジェクトリーダー◎
池淵俊一 考古学 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
松山智弘 考古学 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（追加：7月18・19日）◎
森本幹彦 考古学 福岡市経済観光文化局文化財活用部◎
事務局：森井啓次・坂元雄紀◎・大庭孝夫◎・出見優人◎

○テーマ：瀬戸内系土器（検討会：令和5年3月16日）

中藤輝行 考古学 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授：プロジェクトリーダー◎
柴田昌児 考古学 愛媛大学先端研究・学術推進機構 埋蔵文化財調査室教授
河合 忍 考古学 岡山県教育庁文化財課◎
事務局：森井啓次・坂元雄紀◎・小川泰樹・大庭孝夫◎・出見優人◎

○テーマ：畿内系土器（検討会：令和5年5月10・11日）

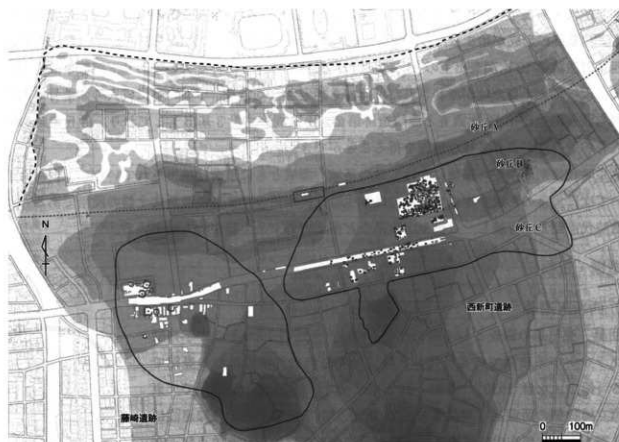
中藤輝行 考古学 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授：プロジェクトリーダー◎
市村慎太郎 考古学 公益財団法人大阪府文化財センター◎
田中元浩 考古学 和歌山県立紀伊風土記の丘◎
森本幹彦 考古学 福岡市経済観光文化局文化財活用部◎
檀 佳克 考古学 八女市教育委員会文化振興課 八女市岩戸山歴史文化交流館◎
事務局：坂元雄紀◎・大庭孝夫◎・岡田諭

なお、愛媛大学の柴田昌児教授におかれては、令和7年1月にご逝去された。謹んでご冥福をお祈りいたします。

2. 調査の組織

出土品再整理事業は、令和4～6年度国庫補助を受け、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課と九州歴史資料館が実施し、令和6年度の報告書作成費用については福岡県一般財源から費用を支出した。関係者は次のとおりである。

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
福岡県教育委員会			
教育長	吉田 法稔	吉田 法稔	吉田 法稔（～4.30） 寺崎 雅巳（5.1～）
副教育長	上田 哲子	上田 哲子	上田 哲子
理事兼教育総務部長			松永 一雄
教育総務部長	松永 一雄	松永 一雄	
文化財保護課長	明永 好弘	比山 裕隆	比山 裕隆
参事	田上 稔	杉原 敏之 （兼課長技術補佐）	杉原 敏之 （兼課長技術補佐）
課長補佐	赤間 寛人	赤間 寛人	野美山 智美
課長技術補佐	杉原 敏之 （兼企画・埋蔵文化財係長）		



第2図 西新町遺跡と藤崎遺跡（福岡市博物館提供）

管理係長	広津 壽子	古賀 功親	古賀 功親
企画・埋蔵文化財係長		大庭 孝夫	大庭 孝夫
企画・埋蔵文化財係	大庭 孝夫	岡田 諭	岡田 諭
	城門 義廣	城門 義廣	梶佐古 幸謙
	出見 優人	出見 優人	廣重 知樹
文化財保護係長	岸本 圭	森井 啓次	下原 幸裕
文化財保護係	岡田 諭	野木 雄大	日野 綾子
九州歴史資料館			
館長	城戸 秀明	城戸 秀明	城戸 秀明（～4.30） 吉田 法稔（5.1～）
副館長	吉村 靖徳 （兼埋蔵文化財調査室長）	吉村 靖徳	吉村 靖徳
総務室長	黒岩 計光	黒岩 計光	山下 雄二
総務班長	高山 美保子	岡本 裕子	岡本 裕子
埋蔵文化財調査室長		吉田 東明	吉田 東明
埋蔵文化財調査室室長補佐			入佐 友一郎
文化財調査班長	森井 啓次	進村 真之	進村 真之
文化財調査班	小川 泰樹	岸本 圭	坂本 真一
	坂元 雄紀	小田 和利	出見 優人
大宰府調査班長	吉田 東明	宮地 聡一郎	宮地 聡一郎
大宰府調査班	宮地 聡一郎	坂元 雄紀	坂元 雄紀
	小嶋 篤	小嶋 篤	小嶋 篤

協力者（検討会関係者・機関以外）

福岡市博物館 福岡市埋蔵文化財センター 文化庁文化財第一課 文化庁文化財第二課 今井哲哉 久住猛雄 松永悦枝 山崎頼人 横須賀倫達

第4節 西新町遺跡・藤崎遺跡の概要

本遺跡の集落構造やカマドなどの遺構については、『西新町遺跡IX』でまとめているが、出土品の検討に入る前に、本遺跡と藤崎遺跡の立地的な特徴と概要を取り上げることとした。

1. 西新町遺跡・藤崎遺跡の立地環境と集落景観

本遺跡は、福岡市早良区西新・高取の、大規模な潟湖である博多湾に面した海浜砂丘上に立地する（第1図）。遺跡西側には藤崎遺跡、その西には室見川が位置する。弥生・古墳時代当時、遺跡北端から200 m程度北で海岸線に至ったとみられる。

樋井川左岸の西新から藤崎方面にかけて、博多湾の海岸線に並行して形成された3列の砂丘（浜堤）と砂丘間低地が連なる。砂丘全体は長さ2.5 km、幅約170 m、標高8 mを測り、3列中央の砂

第1表 西新町遺跡の調査履歴一覧（網掛けが今回の出土品再整理事業対象）

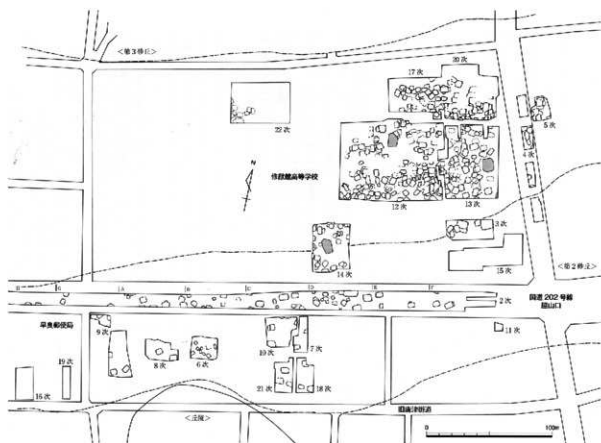
調査 回数	所在地	調査原因	調査主体	調査面積 (㎡)	調査年	報告書	特記事項
1	旧西新町内	民間開発	福岡市		1947	未報告	
2	西新6丁目	地下鉄建設	福岡市	6,230	1976-1978	市79集	弥生終末～古墳前期住居57
3	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	700	1984	県72集	古墳前期住居7
4	西新3丁目	道路拡幅	福岡市	800	1986	市203集	古墳前期住居8
5	西新3丁目606-4	病院増築	福岡市	303	1992	市375集	弥生終末～古墳前期住居9
6	西新5丁目643-4他	民間開発	福岡市	1,041	1994	市483集	弥生終末～古墳前期住居9
7	西新5丁目638-9	民間開発	福岡市	369	1994	市483集	弥生終末～古墳前期住居2
8	西新5丁目644-1・2	民間開発	福岡市	610	1994	市484集	弥生中期住居1、弥生終末～古墳前期住居3
9	西新5丁目594他	民間開発	福岡市	920	1995	市505集	弥生中期住居11、弥生終末～古墳前期住居8
10	西新5丁目641-3	共同住宅建設	福岡市	462	1995-1996	市683集	弥生終末～古墳前期住居7
11	西新5丁目632-6	店舗建設	福岡市	52	1997	市年報12	古墳前期土坑2
12	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	5,214	1998	県154・157集	弥生終末～古墳前期住居158
13	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	2,800	2000-2001	県168・178集	弥生終末～古墳前期住居86、井戸1
14	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,110	2001-2002	県200集	弥生終末～古墳前期住居29、井戸1
15	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,800	2002	県200集	近世遺構
16	西取1丁目105	共同住宅建設	福岡市	395	2003	市846集	弥生中期住居22、弥生中期ガラストンボ玉
17	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,990	2003-2004	県208集	弥生終末～古墳前期住居39
18	西新5丁目572他	共同住宅建設	福岡市	345	2005	市939集	縄文前期包舎、古墳前期住居3
19	西取1丁目111他	民間開発	福岡市	164	2006	市984集	弥生中期住居8
20	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,850	2006	県218集	古墳前期住居45
21	西新5丁目572-2	共同住宅建設	福岡市	369	2006	市985集	縄文包舎、弥生～古墳住居3、井戸2
22	西新6丁目1-10	高校改築	福岡県	1,257	2007-2008	県221集	弥生終末～古墳前期住居10、近世遺構
23	西新3丁目204-3	市開発事業	福岡市	90	2020-2021	市1477集	古墳前期土坑3

丘列と最も南側の砂丘列との間には、標高3m未満の低湿な環境を示す砂丘間低地が認められる。

本遺跡はこの3列の砂丘のうち、最も海側の元寇防壁が築かれた北側と中央の砂丘間の鞍部を中心に営まれ、一部遺構は北側の砂丘まで展開する（第2図）。北側の能古島があるものの、基本的に集落は直接的に波風が当たる砂丘の海側斜面を避けて、砂丘間の鞍部及び内陸側斜面に展開しており、このような波風を避け、集落が営まれた在り方は、博多湾東部の箱崎遺跡でも同様の状況が認められ、博多湾岸における波風の影響を受ける砂丘上に立地する海浜集落では一般的な在り方であったと想定できる。また遺跡は海と河川が交わる場所ではないことから、必ずしも港津を作るのに適した地形条件を必ずしも備えてはいないものの、かつての潮間帯は埋め立てられ、当時の状況は不明であるが、潮流や風向きなどの条件も港津機能としては重要であり、このような自然環境や地形的な条件が本遺跡の展開に大きく影響したと推測される（第3図）。

中央の砂丘列を中心に遺構が展開する藤崎遺跡では、弥生時代前期の甕棺墓を中心とする墓地区が発見されており、少なくとも弥生時代前期以前には陸化していたと想定される。しかし、中央の砂丘列は海浜砂層最上部に弥生時代後期終末の土器が二次的に堆積している箇所があり、弥生時代後期まで中央砂丘列北側の一部は海浜の状態にあったとされる（下山他1998）。最も北側の砂丘列は、現在西南学院大学構内に一部保存されている元寇防壁に沿って東西に延びるが、幅50m未満と狭い。この北側の砂丘列より海側は江戸時代以降に陸化した。

遺跡立地としては、周囲とは孤立した海沿いの立地に特徴があり、本遺跡のみでは集落の維持が困難で、食料や薪などの日常生活用品は周辺の集落が支えることが必要である。そのため、本遺跡の経営にあたっては在地勢力が大きく関与したと推測される。また、遺跡はちょうど伊都国と奴国の中間点に立地し、当時の政治勢力の関係が遺跡の位置や存続に大きく影響したとの指摘など（久住2007）、朝鮮半島や列島諸地域との接触の増加により、短期間存続した、特殊な在り方を示す遺



第3図 西新町遺跡の遺構配置図（1/3,000）（濱石 2016 より引用、網掛けは井戸）

跡であり、本遺跡の盛行・衰退にあたっては、外部的な事情に強く影響されたと想定できる。

なお、港津及び物資保管先となる建物（掘立柱建物？）は、海に近い集落北部に存在した可能性はあるが、北東部は竪穴住居域、北西部はほぼ未調査であり、古墳時代前期前半に集落の中心が北東側に遷移することが示されているため（森本論考、第54図）、あくまでも推測の域を出ないが、移動後の北西部に集落共有の倉庫等の保管施設が存在した可能性がある。強い風から安全に停泊・着岸可能な場所という観点で遺構と地形分布をみると、第2図にある藤崎遺跡と本遺跡との間は、地形的に低く、ここに港湾施設が存在しても良く、また遺跡では大型の井戸3基のうち、2基は古墳時代前期前半の集落域の西端に偏在するが、倉庫は防火用水の備えも必要で、近くに井戸があった方がよい。加えて、本遺跡に至る陸路としては主に西ないしは南側からのアクセスが考えられ、集落西側に倉庫域と交易の場（市）を設置すれば陸路からも都合が良い。

以上、遺跡西側に倉庫域、交易の場があったと想定すると、集落の正面観は西ないしは南向きになる。竪穴住居カマドの方向をみると、北に方位を向けたものが大半で、次いで北西、北東となる（『西新町遺跡IX』、p99）。北部九州におけるカマド方位は地形等にかかわらず、カマドは基本的に北方向に付設されることが一般的であるにせよ、本遺跡のカマドを付設した竪穴住居は南が入口のものが大半で、竪穴住居南側に通路が存在したとみられる。以上、集落には概ね西から陸路でアクセスでき、そこから枝分かれして各竪穴住居を繋ぐ通路が走っていたと推測しておきたい。

ただし、竪穴住居が密集して建ち並んでいる景観は、国際交流港としては貧弱な印象を受ける。本遺跡の設置、運営にあたっては、在地勢力の関与が想定され、重厚な建物等何らかの装置を、現在判明している遺構ではそのことは全く読み取れない。

なお、近世の北前船の寄港地には船頭が風や天候を予測するために遠方を展望できる小高い「日和山」がある場所が多い。本遺跡周辺は荒津山（西公園）や紅葉山という低い丘はあるものの、遠く展望は望めないことから、古墳時代初頭段階では遺跡周辺から直接外洋航海に向かうのではなく、沿岸伝いの地乗り航法で航海したとみられる。

ちなみに、GoogleEarth を用いて海から本遺跡をみると、糸島半島（西側）から船で本遺跡に向かうとなれば、奥に荒津山を見つ、手前の室見川を越えた所、紅葉山の麓に本遺跡が立地する。一方、志賀島から船で向かうとなれば、西に室見川河口を見つ、平野の奥に位置する油山が奥のランドマークとなっており、近くになると紅葉山が集落の目印になると想定される。

2. 西新町遺跡・藤崎遺跡の調査成果

本遺跡は、古墳時代前期における国内外との交流・交易・生産の内容や構成、役割等、当時の社会構造の特質に迫れる多くの情報を有しており、これまで日韓の多くの学術論文や研究などで取り上げられてきた。ここでは、本遺跡について、発掘調査成果及び先行研究に基づいた概要についてみる。なお、西新町遺跡・藤崎遺跡の概要、主要参考文献については、『新修福岡市史』資料編考古①の中で濱石哲也氏によりまとめられているので、参照いただきたい（濱石 2016）。

（1）西新町遺跡

本遺跡の範囲は、東西 430 m、南北 250 m と想定されている（第 2 図）。これまで、23 次にあぶ発掘調査で、520 棟を超える弥生時代後期終末～古墳時代前期前半を中心とする竪穴住居跡が確認されている（第 3 図）。遺跡は、西に隣接する藤崎遺跡とあわせると、砂丘上には弥生時代を通じて墓地が営まれるものの、中期以降小規模な集落が営まれるにすぎなかったが、古墳時代前期初頭以降、博多湾沿岸地域における集落・居住域が急拡大する動きに合わせて、本遺跡も大規模集落として急速に発展する。

古墳時代初頭の集落範囲については北端が 17 次及び 20 次でその北限が捉えられ、13・20 次東端では地形が落ち込み、竪穴住居跡が少なくなる。集落の構成は、弥生時代後期後半～終末には南西側を中心に竪穴住居跡が散在するが、古墳時代前期前半以降、竪穴住居が激増し、中央から北東側が集落の中心域となり（武末 2010）、時期が新しくなるにつれ生活遺構が東側に集約化される。なお、最大 100 棟前後が併存していたと復元されている（下原編 2009）。

本遺跡では布留系甕を竪に設置して炊飯を中心とした従来の調理を行うとともに、竪穴住居の造り付けカマドと甕を用いた蒸し調理、半島系生活様式が併存する。朝鮮半島系のカマドなどの遺構や遺物などの比率から、集団の規模、単位を推定すると、竪穴住居の比率では約 500 棟のうち、106 棟を占めるカマド付竪穴住居に渡来人が居住したと仮定すれば、確定な竪穴付竪穴住居も 103 棟なので、渡来人が集落の半数近く占めていたと推測する意見がある（重藤 2024）。ちなみに、竪穴付竪穴住居とカマド付竪穴住居では住居構造、外観上異なっていたことが推測される。在地系・渡来系の住居が一目瞭然であったのであれば、集落変遷とともに景観復元を行うことで、本遺跡の在り方を検討することもできる。ただし、本遺跡で認められる半島の生活様式は、周辺地域に定着・拡散することはない（武末 1996）。集落レベルでは定着したが、地域レベルでは定着に失敗したと

いえる（武末 1998、p37）。

後ほど森本幹彦氏が指摘するが（森本論考、p110）、井戸周辺では空地が広がる。砂丘上に立地する本遺跡では大規模かつ継続的な集落展開にとって井戸の水は重要で、井戸は集落諸施設や諸生産活動も展開しており、集落の空間展開の核となっていた可能性がある。加えて、本遺跡は集落規模も大きいことから、ゴミや排泄物は集落周辺に捨てられたと想定できるので、集落環境としては良くなく、継続的な土地利用に係る清水を得るために井戸は必須であったことも予測される。また森本氏は古墳時代前期前半になると、集落域が東に移動することを明確に示しているが（森本論考、pp107-112）、堅穴住居数も増え、移動というより集落東側にまとまったということが実態であった可能性がある。

また前節で述べたが、本遺跡では、交津としての重要な部分を担う高床倉庫などの掘立柱建物や貯木施設、港湾施設等の物流拠点の機能は未確認である。砂丘上に立地するため、高床建物の柱穴自体の検出は困難であるという条件とともに、重藤輝行氏は砂丘上で強い海風を受ける場所でもあるので、高床倉庫は建設されなかったことも想定している（重藤 2024、p555）。ただし、列島内外各地に由来する土器にはまとまりがなく、列島内外各地の人々がエリア別に居住していたとは考えられない。ということは、倉庫となる施設もエリア別に設置されていたと考えるよりも、集落の一角にまとまって整備された、つまり集落共有の倉庫が存在した可能性がある。

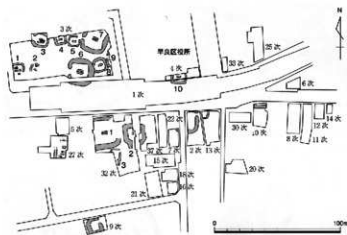
このように、砂丘上の限定された地形の中で、交易拠点としての諸施設が空間的にどのように展開していたか、堅穴住居や掘立柱建物同士等がどのように組み合っていたのか、その規模など、集落の基本構造の分析と今後そのような視点での調査及びその成果を踏まえた分析が必要である。

なお、本遺跡では動物遺存体が皆無であることは、漁労活動において獲得・加工・消費の場所が分けられ、集落内に持ち込まれる部位が選別されていた可能性があり、集落外の実地に近い場所に漁労活動の拠点が置かれていたなど、居住域外のエリアの利用も考える必要がある。

古墳時代中期以降、明確な生活遺構の痕跡は認められず、しばらくの間、本遺跡一帯を積極的に利用した痕跡は見当たらない。

（2）藤崎遺跡

本遺跡の同一砂丘上、西に隣接する藤崎遺跡では、弥生時代後期末～古墳時代前期前半にかけて本遺跡と時期的にほぼ並行する時期の方形周溝墓群が営まれており（第4図）、本遺跡に対応する墓地と考えられている。32次1号方形周溝墓からは三角縁盤龍鏡1面と素環頭大刀、3次6号方形周溝墓から三角縁二車馬鏡1面が出土する。藤崎遺跡の墳墓は方形周溝墓で、かつその主体部である箱式石棺と供献土器は在地系要素を示す一方、先の複数の舶載三角縁神獸鏡を副葬するという点で特徴的な在り方を示す。



第4図 藤崎遺跡の遺構配置図（1/3,000）

（濱石 2016 より引用、網掛けは方形周溝墓周溝）

この三角縁神獣鏡は、古墳時代前期前半において被葬者が倭王権とのつながりによってこの地にもたらされた可能性が高く（辻田 2013）、倭王権が朝鮮半島の鉄などの財や様々な情報、技術、先進必要物資などを安定して入手するため、国内外の交易ネットワークを維持管理・調整した地域勢力、西新町・藤崎遺跡の集団を重視した結果と捉えられる。

ただし、藤崎遺跡では本遺跡で多量に出土する朝鮮半島系土器が副葬されていないことから、藤崎遺跡には朝鮮半島系の人々の墓が含まれず、本遺跡に一時滞在した渡来人がこの地で一生を終えることなく、本貫地へと戻っていった可能性が想定されている（武末 2010）。なお、本遺跡に集った列島各地域の人々も、同様の在り方を示す可能性がある。

さらに、銅鏡、鉄製武器の副葬は顕著だが、半島系土器を含む交易品や漁具副葬はほぼなく、藤崎遺跡の被葬者は交易を直接的に担った海人集団そのものというよりも、本遺跡における交易に従事した在地集団を組み込んだ首長層やその関係する集団の墓地の可能性はある。

【参考文献】

- 大庭孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究会』62-143
- 久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交渉機構—」『考古学研究』第 53 巻第 4 号
考古学研究会
- 重藤輝行 2024「古墳時代の渡来人集団の特性と動態」『東アジア考古学の新たな地平—宮本一夫先生退職記念論文集』宮本一夫先生退職記念事業会
- 下原幸裕編 2009『西新町遺跡IX』福岡県文化財調査報告書第 221 集 福岡県教育委員会
- 下山正一・磯望・野井英明・高塚渥・小林茂・佐伯弘次 1998「鳥飼低地の第四紀層と地形形成」『福岡平野の古環境—と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版会
- 武末純一 1996「西新町遺跡の甕—その歴史的意義」『碩叅尹容鎮教授停年退任記念論叢』
- 武末純一 1998「日韓交流と渡来人—古墳時代前期以前—」『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報』第 4 号
- 武末純一 2010「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第 63 集 九州古文化研究会
- 辻田淳一郎 2013「古墳時代の集落と那津官家」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交渉』大阪大学出版会
- 濱石哲也 2016「古墳時代 1 西新町遺跡 / 藤崎遺跡」『新修福岡市史 資料編考古①』福岡市

（大庭孝夫 福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

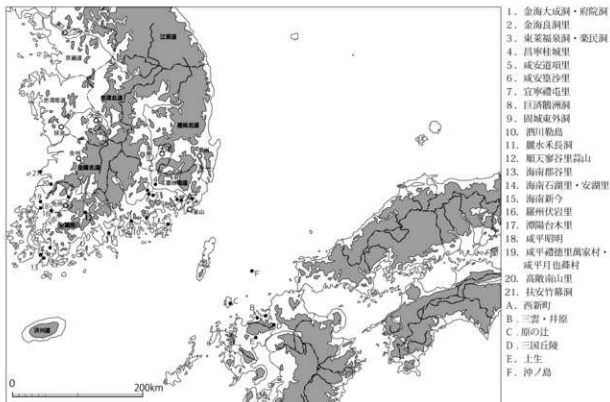
第2章 出土品からみた交流拠点としての西新町遺跡の様相

第1節 朝鮮半島系土器の受容と展開

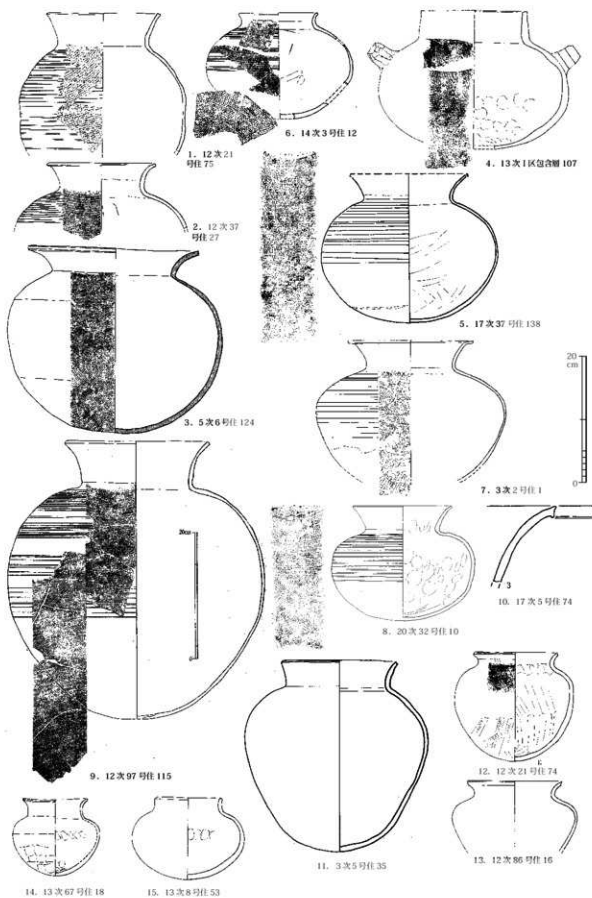
1. はじめに

西新町遺跡では多数の朝鮮半島系土器が出土し、古墳時代前期においては国内では最多である。遺跡では20次を超える調査が蓄積し、朝鮮半島の竪穴住居の炊事・暖房施設であるカマドの遺構も多い。遺跡の性格として、九州北部の朝鮮半島との交通、交易の拠点であり、博多湾沿岸の地域的特色、古墳時代前期の時代性を物語るものとして、日本・韓国の双方で評価されている。

西新町遺跡と朝鮮半島との関係については研究も多い。西谷正氏は西新町遺跡のカマドが、朝鮮半島南部との関係で出現したことを明らかにした(西谷1983)。武末純氏は西新町遺跡のカマドについて定着しないことに注目するとともに(武末1996)、修猷館高校改築に伴う調査の資料も加えて、西新町遺跡出土の朝鮮半島系土器に南西部の全羅道に起源のあるものが多いことを指摘する(武末2000・2004)。一方、白井克也氏は弥生時代から古墳時代前期にかけての朝鮮半島と九州北部の交易について、弥生時代中期後半～後期の「原の辻貿易」の段階に続き、古墳時代前期には西新町遺跡など博多湾岸に山陰・瀬戸内、さらに朝鮮半島諸地域の人々が集まって、交易を行う「博多湾貿易」が成立するとした(白井2001、p173)。久住猛雄氏はこれを発展させて、「後期博多湾貿易」の段階である古墳時代前期には西新町遺跡が倭国全体の対外交易港、国際的な貿易港になったと評価する(久住2007)。また、韓国考古学においても、同時代の全羅道との交流センターとしての西新町遺跡の役割が研究されている(정재원他2024)。



第5図 関連遺跡分布図



第6図 西新町遺跡出土半島系土器 (1) (1/6)

ここでは朝鮮半島系土器（以下、半島系土器とする）を甗以外の搬入品、半島系土器の模倣品、土師器の模倣品、搬入品とそれを模倣して土師器の技法で製作されたものが混在する甗に分けて、主要器種を概観するとともに、朝鮮半島南部における関連遺跡（第5図）を参照しながら、類例、故地を検討する。さらに、土器からみた時期や地域的関係を取り上げ、先行研究を基礎に、半島系土器の使用、渡来人の活動と倭人との関わり、交易地としての遺跡の性格を論ずることにしたい。

2. 西新町遺跡出土の半島系土器

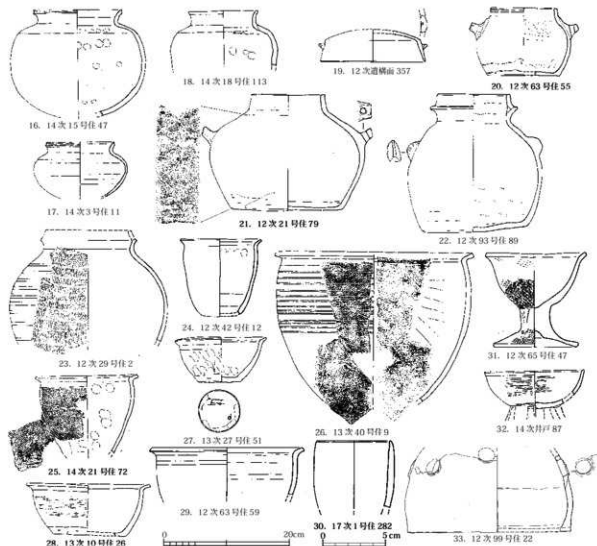
（1）搬入品とその類例

甗を除く搬入品 西新町遺跡出土の朝鮮半島南部で製作された土器のうち、甗以外の搬入品と考えられる器形のものを示したのが第6・7図の1～33であり、その比較対象となる類例を第8・9図に示した¹⁾。

短頸壺 第6図1～8は外面にタタキ文様を持つ短頸壺で、タタキの後、螺旋状に沈線を巡らすものが多い。1はやや長胴になると推測され、胴部の張りが小さく、口縁は外傾し、端部は外に拡張気味である。胴部外面は格子タタキの後、沈線を巡らす。灰褐色で陶質。2は胴部の張りが大きく、口縁は緩やかに外反する。外面平行タタキ後沈線を巡らし、灰色で陶質を呈す。3は胴部の張りが強く、頸部から急激に外反して、口縁端部に至る。外面は小さな格子タタキを施し、焼成は陶質である。4は肩部に縦方向に穿孔した大きな耳を貼付したものの。胴部の張りが大きく、口縁部はほぼ直立する。外面は平行タタキを施し、瓦質で灰色を呈する。5は胴部の張りが強く、頸部が丸みを帯びて屈曲し、口縁へと至る。外面上部は平行タタキの後、沈線を巡らし、下部は小さな格子タタキである。灰色を呈し、焼成はやや甘く瓦質に近い。6は胴部の張りが強く、頸部は短く緩やかに外反するもの。外面は上部が細かい平行タタキ、下部が粗い斜格子タタキである。器表は黒褐色、器壁中央は黄褐色を呈すことが特徴的で、軟質に近い焼成である。7は胴部の張りが強く、口縁部はやや直線的に開く。端部の外への屈曲が強く、水平に近い面をなすことが特徴的である。胴部外面上部は平行タタキ、下部はやや大きな格子タタキを残し、軟質でやや褐色を呈す。8は扁球形の胴部に外反する口縁部が付くもの。胴部外面は上部平行タタキ後、沈線、下部は格子タタキである。暗灰色～茶褐色で、瓦質に近い焼成である。

朝鮮半島南部、4世紀以前の金海・釜山では陶質で全面に格子タタキを施す短頸壺が多いとされ（정주희 2016, p202）、3は形態的にも慶尚南道金海大成洞 29号墳出土品（第8図1）のような金海・釜山地域出土品に近い。耳付短頸壺は金海・釜山、慶尚南道咸安地域では金海大成洞 29号出土品（第8図6）のように縦長の耳に水平方向に穿孔するものが主体を占める。4のような縦方向の穿孔を施し、口縁部が直立する短頸壺は、釜山市東萊福泉洞 84号墳（第8図7）や慶尚南道金海良洞里 280号墳（東義大 2017）、金海大成洞 70号墳（慶星大 2003）にもあるが、これらは無文である。金海大成洞 52号墳（慶星大 2003）の縦方向の穿孔の耳付壺は格子タタキであるが、耳の位置、穿孔方向は第7図20の全羅道の両耳付壺に近い。

また、第6図7のような口縁端部を水平に屈折させる特徴は忠清南道天安市清堂洞遺跡（国立中央博 1993）の2世紀後半～3世紀後半とされる墳墓群出土品や、全羅南道咸平萬家村古墳群（第8図4）に褐色軟質のものがあつて、7と共通する。このような短頸壺は西新町遺跡の出土の半島系土器の多数を占めるので、後でタタキ文様等から西新町遺跡出土品の製作地について分析すること



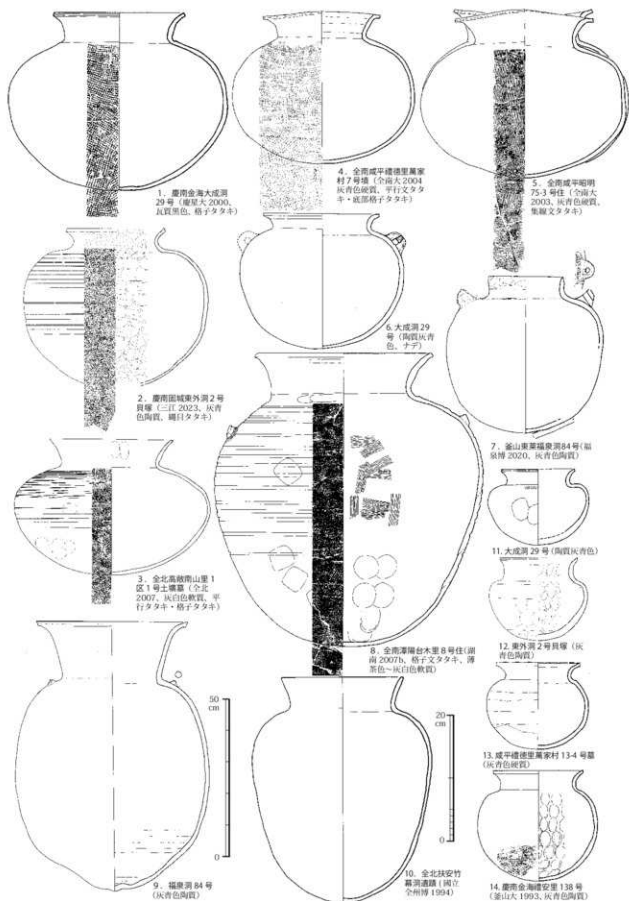
第7図 西新町遺跡出土半島系土器(2)(30は1/3、他は1/6)

にしたい。

胴部倒卵形の大型壺 第6図9はやや大形品で、倒卵形に近い胴部に、緩やかに外反しながら長く伸びる口縁の壺である。胴部外面は平行タタキを施し、上半は沈線を巡らす。灰色～黄灰色で瓦質に近い焼成である。全羅道では同様の器形、外面調整で器高40cmを超える大型壺が潭陽台木里遺跡出土例(第8図8)のように一定量、存在し、集落遺跡に加えて、墳墓遺跡で甕棺に使用される。これに対して慶尚南道では同種の土器の出土例が少ないので、生産地が限定される。

陶質大型甕 第6図10は灰色陶質の大形甕口縁部で、外面は無文で口縁端部はナデによりシャープに上下に拡張する。東萊福泉洞84号出土例(第8図9)は器高84.9cmに達する大型品で、口縁部の形態が本品と類似する。同古墳は3世紀末に位置づけられ(정주희 2016)、本遺跡の時期とも符合する。同様の形態、法量のものは4世紀以前の全羅道ではほとんど例がなく、金海・釜山周辺のものと考えられる。

無文壺 第6図11は外面のタタキを丁寧にナデ消した瓦質に近い灰色の壺である。胴部は倒卵形で、口縁部は短く緩やかに外反し、端部が角張る。全羅北道扶安郡竹幕洞遺跡出土の4世紀の土器(第8図10)に類似する。



第8図 西新町遺跡出土韓半島系土器の類例 (1) (9は1/12、他は1/6)

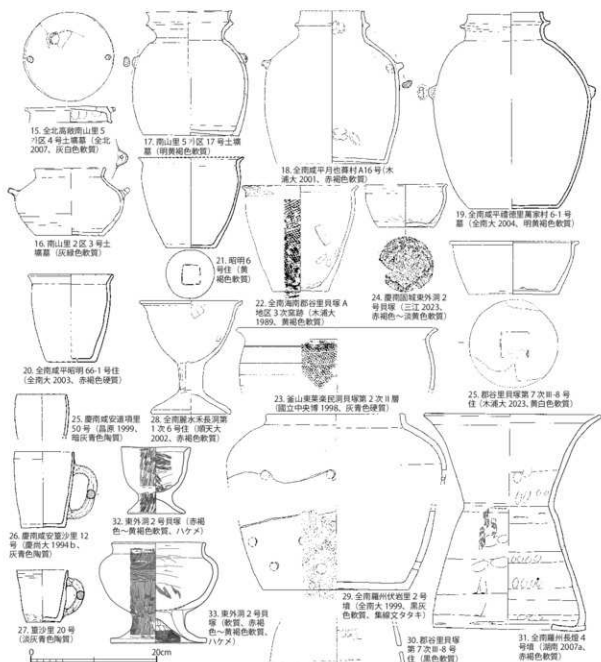
陶質無文小型壺 第6図12～15、第7図16～18は無文の小型の壺である。いずれも陶質の焼成で、胴部にはタタキ痕は観察されない。12は頸部から急激に短い口縁が外反し、胴部は球形を呈する。胴部外面下部には微かな擦痕、胴部内面には微かなナデ上げの痕跡が観察される。13は肩が張った胴部で、口縁端部は直立に近い面をなす。灰褐色を呈す。14はやや尖り底気味の底部で、頸部は内傾し、緩やかに外反しながら口縁端部に至る。胴部外面下部はナデにより小さく微かな稜のある面が形成される。暗赤紫色で陶質焼成である。15は口縁が短く直立し、胴部がやや張るもの。やや甘い焼成で黄灰色を呈す。16・17はいずれも胴部の張りが強く、口縁端部に凹みが巡るものである。16は黒灰色、やや小形の17は青灰色～黒灰褐色を呈す。18は器壁がやや厚く、頸部内面に粘土接合痕を残す粗雑な印象のもの。肩が張り、口縁部は頸部からやや直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する。12～18のような小型の陶質壺は、金海や成安、固城などの慶尚南道に多い(第8図11・12・14)。したがって、これらは大半が慶尚南道南海岸からの搬入品と考えられる。ただ、全羅南道の咸平禮德里萬家村古墳群で3世紀中頃～4世紀前半と考えられる硬質無文の土器(第8図13)が出土していることも注意しておきたい。

両耳付壺 第7図20・21は縦方向穿孔の耳をもつ両耳付平底壺で、19はその蓋と推測されるものである。20・21はいずれも忠清道・全羅道に特徴的な器形(第9図15・16)で、搬入品であろう。20は内外ナデ仕上げで、胴下部外面は横方向に持ちヘラケズリを施し、口縁部は短く直立する。軟質で褐色を呈す。21は外面に小さな格子タタキをとどめたやや大形品である。口縁部は短く直立し、黄褐色～赤褐色を呈す。19は天井部がやや丸みを帯び、口縁部が直線的に内傾する蓋である。小片であるが、口縁上部の外面に縦方向に穿孔した耳が貼付される。両耳付蓋壺は天井部と口縁部の境界の屈曲部に耳を貼付するものが多い(金鍾萬1999)ので、やや特異である。軟質で褐色を呈し、胎土・焼成・調整は小型丸底壺等の土師器の精製器種と類似するので、西新町遺跡での模倣品にまで可能性を広げて考える必要がある²⁾。

二重口縁壺 第7図22は平底で穿孔の無い耳を貼付した二重口縁壺。底部は大きな平底で、肩部に穿孔の無い縦長耳を貼付する。頸部高・口縁立ち上がり高の小さい二重口縁をなし、割れ口にその接合方法を明瞭に観察することができた。内外ナデ仕上げである。軟質であるが、器表は煙したように黒灰色を呈する。第7図23は頸部下の外面にタタキ工具角の刺突による三角列点文を巡らした二重口縁壺である。胴部は球形で、頸部・口縁部は短い。胴部外面には平行タタキの後、凹線を巡らす。赤褐色であるが、土師器よりは硬い焼成である。これらの二重口縁壺も全羅道に特徴的な器種(第9図17～19)で、3～4世紀を中心とする器種とされる(林永珍1998、徐賢珠2006)が、三角列点文を施す例は少ない。

軟質深鉢 第7図24・25はいずれも赤褐色を呈する軟質深鉢で、韓国考古学では「深鉢」と呼ばれる。25は胴部外面に小さな格子タタキを施すのに対して、24は内外ナデで仕上げる。これらの土器は百済、新羅、加耶に共通して存在する調理用の器種であるが、百済中央では縄目タタキが多いのに対し、全羅南道海南郡谷里貝塚の事例(第9図22)にみるように全羅道では格子タタキが多いとされる(土田2017、p93)。また全羅道では、タタキを残すものに先行して「硬質無文土器」と呼ばれる無文の平底鉢(第9図20・21)があり(곽명숙2014)、24はこれに相当する。

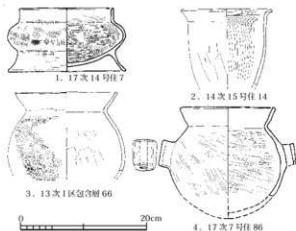
その他の鉢 第7図26は大形で深い壺に口縁部の鉢である。胴部外面には斜格子タタキの後、沈線を巡らす。やや軟質で、灰褐色を呈す。同様の器形は忠清南道にも存在するが、加耶で例を探す



第9図 西新町遺跡出土韓半島系土器の類例 (2) (1/6)

と、同様に沈線を巡らすものとして、初期の把手付炉形器台も想定される。ただ、釜山市東萊桑民洞貝塚(東萊貝塚)の出土品(第9図23)と類似し、器形がやや深いので深鉢形土器、あるいは甌と考えられる。

第7図27～29はいずれも短く外反した口縁の平底の鉢である。27・28はやや浅い器形で、いずれも底部と体部の接合部外面に手持ちヘラケズリを施す。27は内外ナデ仕上げで、底部外面には回転台上に設置する際に生じた低い突起が見られる。灰色を呈し、瓦質焼成である。28は内外回転ナデ仕上げで、黒灰色～灰色、瓦質焼成である。29はやや大型で深い器形のもの。内外回転ナデで仕上げ、淡黄褐色を呈す。同様の器形は広範囲に存在するが、武末純一氏は27・28のような口頸部がそのまま広がるものは加耶系とする(武末2004, p321)。一方、回転台上に設置する際の突起を残す例は慶尚南道固城東外洞遺跡や郡谷里貝塚第7次調査出土品にあり(第9図24・25)、



第10図 半島系土器の模倣品・
土師器の模倣品（1/6）

全羅道から慶尚南道西部に分布の中心があると考えられる。

把手付杯 第7図30は口縁が直立する小形の杯である。内外ナデで、陶質、灰色を呈する。把手付とすれば、4世紀代の咸安など加耶西部の陶質土器に对照すべき資料が多いが、加耶の把手付杯は口縁部下に突帯や稜線を形成することが多く（第9図26・27）、無文のもの（第9図25）は最古式に限られる。一方、忠清道では5世紀でも杯部は突帯などがない無文のものが多く、全羅道も含めて、今後も資料を検索する必要がある。

高杯 第7図31は軟質で赤褐色の高杯である。

杯部は深く、脚柱部が中実で太い点が特徴的である。杯部外面、脚裾部外面には粗い格子タタキが残る。外面に格子タタキが確認されず、器高が本例よりやや高いものの、同形態の例が全羅南道麗水市永長洞遺跡1次6号住居跡（第9図28）にある。32は脚部を失うが、底部に透し上端の痕跡が残る、透付高杯杯部と考えられる。内外にミガキを施し黒褐色を呈し、いわゆる黒色磨研土器に通じる雰囲気、全羅道からの搬入品の可能性も考慮されるが、形態的に類似する例は探し得ていない。

不明平底土器 第7図33は平底で胴上部がすばまり、肩部近くには2ヶ所に大きな焼成前穿孔が見られる特異な器形のもの。焼成、色調は土師器に類似するが、大きな平底をつくる点は、両耳付壺などと共通するため半島系土器として位置づけた。完全に同一の器形ではないものの、穿孔する平底土器を探すと、全羅南道羅州市伏岩里古墳群2号墳墳丘東側出土品（第9図29）があるが、5世紀以降の可能性がある。海南郡谷里貝塚7次Ⅲ-8号住居跡出土例（第9図30）も穿孔があり、下部の径が大きくなるという共通する特徴をもつ。また、全羅道の古墳等での祭祀に用いる壺形の墳周土器（第9図31）は、底部が平底で、下部の大きな器形となる点で類似点がある。全羅道を中心に、なお類例の検討が必要な土器である。

（2）半島系土器の模倣品と土師器の模倣品

半島系土器の模倣品 第10図1・2は半島系土器の器形を模倣して土師器工人が製作した土器と考えられるものである。1は径の大きい脚を付け、口縁が直立する壺である。内外に細かいハケメ調整が見られ、胎土は土師器精製器種と共通するが、径の大きい脚は土師器及び弥生時代後期末以来の在地系土器には見られない。器形としては金海大成洞古墳群、釜山老圃洞古墳群等の3世紀後半の釜山・金海の瓦質戸形土器に近く（정주희 2016）、その模倣の可能性が指摘される（武末2010, p4）³¹。2は形態が軟質深鉢に類似するが、胴外面下部板ナデ、胴内面粗いハケメであり、その模倣品と考えられる。図示はしていないが、この他に肩部に縦方向穿孔の耳をもつ土師器壺が14次8号住居跡から出土し、両耳付壺の属性を取り入れたものと考えられる。

土師器の模倣品 第10図3・4は形態が土師器甕に類似するが半島系土器の技法・属性が見られ、土師器模倣品と考えられるものである。3は形態的には土師器甕に類似するが、外面に残された小

きな斜格子タタキは土師器には見られない特徴で、半島系土器の影響と考えられる。胴部内面には土師器甕と同様にケズリを施すものの、その範囲も胴下部に限られ特異である。朝鮮半島出身の工人により製作された可能性が考えられるが、3のような弥生後期～古墳時代前期の格子タタキで仕上げる弥生土器・土師器は福岡市西区元岡・桑原遺跡群周辺でも出土する（武末 1991、森本 2019）。ただ、元岡・桑原遺跡群周辺では3と類似する形態のものは無く、西新町遺跡周辺で製作されたと考えられる。

4は土師器甕に類似する器形であるが、縦方向穿孔の耳を胴部に貼付する点が最大の特徴である。加えて、器壁が土師器甕に比べ厚く、胴部の内外を板状工具を用いたナデで仕上げる点も注意される。これらの特徴から考えて、土師器とは異なる技法で、土師器甕を模倣して製作したものと考えられる。ただ、胎土が西新町遺跡出土の土師器と異なる点も問題である。釜山や金海など半島南海岸では、古墳時代前期に相当する時期に倭人が移住して製作したと考えられる土器、あるいは土師器を模倣した土器を出土する遺跡がある（高久 2004、조성원 2016 他）。したがって、4については朝鮮半島南部からの搬入品の可能性も含めて考える必要がある。

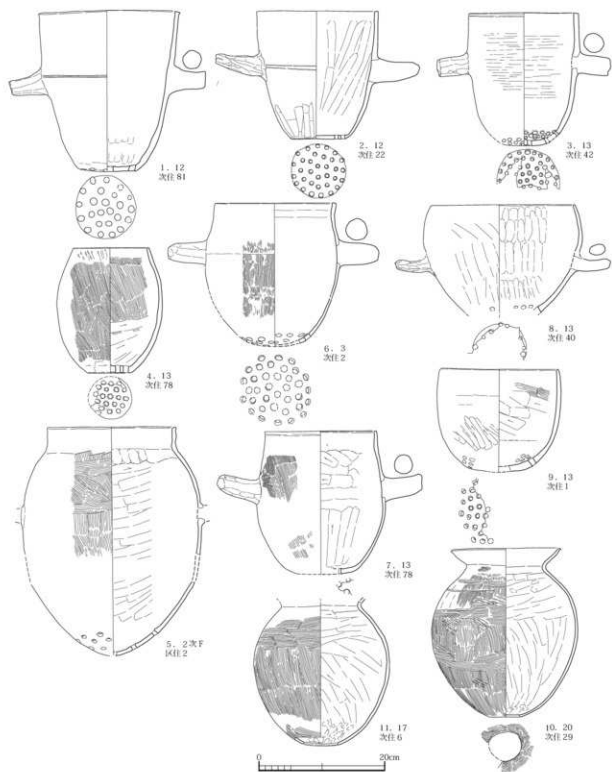
なお、固城東外洞遺跡では第9図32・33のような小型の鉢、壺に脚を付けた土器が一定量、出土している。西新町遺跡では精製の小型丸底壺に脚を付けた例が出土しており（12次86・101号住居跡等）、朝鮮半島南部における小型の脚付の器種と同様な機能、使用法で製作された可能性も考えておきたい。

（3）甕とその類例

甕とカマド これまで西新町遺跡では500棟を超える竪穴住居が調査されているが、106棟程が朝鮮半島に起源があるカマドを設置した住居である。一方、弥生時代以来の伝統的な調理・暖房施設である炉を設置した住居は103棟程で、残る300棟余りは竪穴住居の重複や、近世以降の掘削により、カマド及び炉の有無が判明しないものである。日本列島の中央部でカマドの普及が進むのは古墳時代中期後半以降であり、それに先立つ初期のカマドは、それ自体、渡来人の存在の一つの指標とされる（亀田 1993、p764）。単純にカマド付竪穴住居に渡来人が居住し、炉を設置した住居に倭人が居住したとは断定できないが、相当数の渡来人が居住したことは間違いない。

甕は西新町遺跡を特徴づける古墳時代前期の竪穴住居のカマドで使用された土器で、古墳時代前期の土師器には一般的でない器種である。甕には朝鮮半島からの搬入品も含まれるが、一方では土師器の技法により製作されたものもあるので、主要な例を第11図にまとめた⁴⁾。

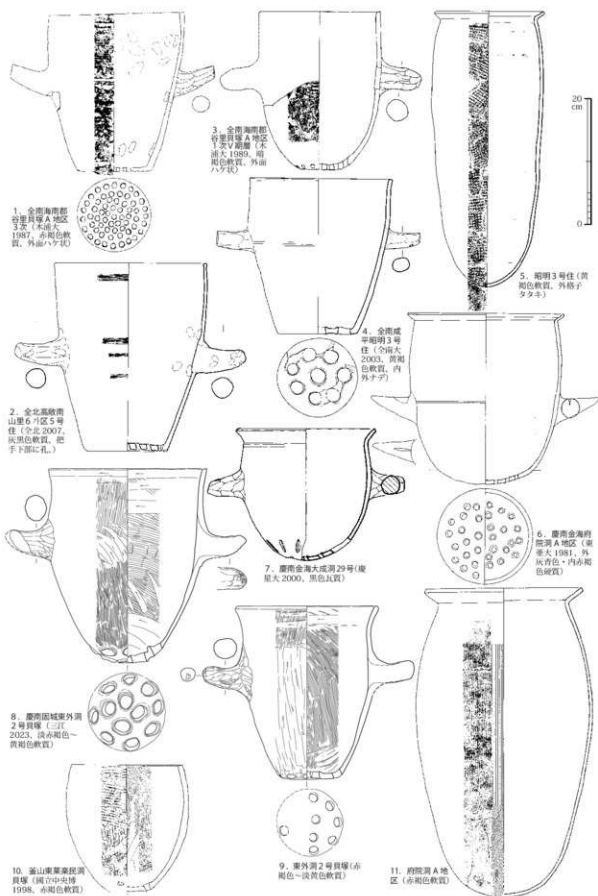
全羅道からの搬入甕 1・2は軟質であるが、土師器とは焼成・色調・調整が異なり、搬入品と判断できる。口縁部は直立し、底部は平底で、同心円状に多数の穿孔を施す。胴中間部に把手の位置を割り付ける沈線を描き、1の把手は先端が面をなすのに対し、2は先端が牛角形に細くなる。第7図に示していないが第2次89号住居跡でも同様の特徴をもつものが出土し、搬入品と考えられる。なお、2や12次89号住居跡出土品は胎土、色調が12次45号土坑出土ガラス小玉鋳型と共通し、搬入品との推測が裏付けられる。1・2のような口縁部が直立し、平底に底部に多数の小さな蒸気孔を穿孔する甕は全羅道に多く（寺井 2016、오후배 2003 他）、その地域からの搬入品と考えられる。類似する例として、海南郡谷里貝塚（第12図1）、高敞南山里遺跡（第12図2）の出土例がある。1・2の甕はホ・ジナ氏の分類（허진아 2007）のⅢ式・Ⅳ式、編年で言えばⅢ期



第11図 西新町遺跡出土甗（1/6、各報告書よりトレース）

に相当し、2世紀後葉～4世紀後葉にあたる。2のように把手端部が牛角形に細くなるものは栄山江流域のものであり、この時期の甗は把手上面の切込みは施されないといわれる。西新町遺跡出土の甗把手破片のほとんどで切込みが無いことと符合する。

3は瓦質で暗灰黄色を呈し、内外には板状の工具によりナデを施す。底部は平底に近いがやや突出した底部で、孔の数は1・2よりも多く、その直径も1・2より小さい。形態的に類似する事例



第12図 甔等の類例(1/6)

に郡谷里貝塚例（第12図3）があるが、それは暗褐色で外面に縦方向のハケメ状調整が残る。全羅道の甔は平底であり、蒸気孔は小孔を多数、同心円上に配置するものが4世紀以前は主であり、5世紀以降になると蒸気孔が大型化し、中央に1孔とその周辺に一重に孔を巡らすようになる（第12図4）。これら全羅道の甔は、カマドでは長胴の甔（第12図5）の上に置いて使用される。

土師器調整・焼成の甔 4は平底で1・2と同様に、同心円状に多数の蒸気孔を配置するが、外面と内面上部をハケメで仕上げ、内面下部にケズリを施し、胎土も含め、土師器や弥生時代後期終末の在地系土器と共通する。ただ、類似した器形は東萊民洞貝塚（第12図10）、固城東外洞遺跡等にあり、後述するようにこれらの遺跡では倭系土器が集中し、倭人の製作、倭人と加耶の人々の交流により倭人の技術を習得した加耶の人々による製作も考えられる。

5～9は4と同様に土師器の胎土、土師器の技法で仕上げたもので、武末純氏は5、6、9のような丸底の甔を加耶系とする（武末2004、p321）。加耶の甔は丸底で、溝状の蒸気孔のもの（第12図7）、小円孔を多数、同心円上に配置するもの（第12図6・8）があり（寺井2016他）、孔の特徴から、5・6は後者に該当する。7は形態の比較からは、丸底の5、群谷里貝塚出土品と類似する平底気味の3のいずれにも近いと言える。8・9はハケメが外面に残らず、特に内外をナデで仕上げた9は西新町遺跡出土の土師器と比較するとやや異質な感を受ける。

なお、全羅道に近い固城東外洞遺跡など加耶西部は平底に近い底部の甔（第11図9）もある。固城東外洞遺跡の甔（第11図8・9）は内外面にハケメ、ケズリが観察され、東萊民洞貝塚出土の小型甔と同様の製作事情が考えられる。このような加耶に渡った倭人の製作あるいは倭人から伝達された技術で製作された甔に伴う甔としては、慶尚南道金海府院洞遺跡出土の長胴で内外ハケメ仕上げのものがある。技法としては弥生時代終末の甔と共通し、西新町遺跡等、九州北部の弥生時代終末～古墳時代初頭の在地系甔も器高が大きいが、それを凌駕する長胴の器形である。

形態や穿孔の比較からは5～9は慶尚南道、あるいは全羅南道の甔を模倣して製作されたものと言える。これを倭人が製作したか、朝鮮半島南部からの渡来人が倭人の土師器製作技法を習得して製作したかは、形態、技法のみからの決定は難しいので、カマドでの使用状況や、渡来人の動向と照らし合わせて考える必要がある。

布留系甔と共通する形態の甔 10・11は布留系の土師器甔の底部を大きく焼成前に穿孔したものであり、外面のスス、内面のコゲ等、火にかけて使用した痕跡は見られない。古墳時代後期の底部に大きな蒸気孔を形成する甔と同様に10・11も甔として使用した可能性が高い。これらの甔は倭人が確実に製作したと考えられる。

3. 半島系土器の編年の位置づけと地域間関係

（1）西新町遺跡における編年の位置づけ

半島系土器の出現・増加 西新町遺跡出土の器形が分かり、土師器との共伴からある程度、時期が決定できる主な半島系土器について、西新町遺跡出土土器をⅠ～Ⅳ式に分ける2次調査報告書での編年（常松他1982）、そのうち古墳時代前期の土師器であるⅢ式、Ⅳ式のそれぞれを古段階、新段階に二分した『西新町遺跡IX』における時期区分に基づいて、時期を示したものが第2表である。これによると西新町遺跡における半島系土器は古墳時代前期初頭、近畿の土師器編年で言えば布留0式段階に併行するⅢ式古段階に出現し、Ⅲ式新段階にかけて量が増加する。西新町遺跡における

竪穴住居数の増加、遺跡の規模の拡大と半島系土器の増加は合致している。朝鮮半島との交易あるいは人々の渡来の活性化によって、遺跡規模が拡大したことを示唆し、西新町遺跡の役割を端的に物語る。新たな調査や資料の再検討によってⅡ式以前に遡る例が発見される可能性は排除しないが、その数は多く無いと思われる。

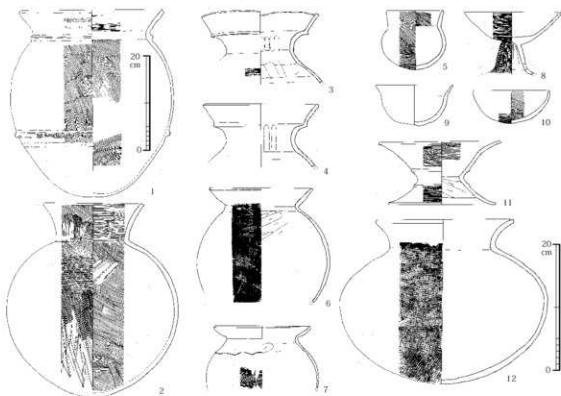
半島系土器と遺跡の性格 第2表には小片をカウントに含めていないが、表ではⅣ式新段階が最多である。ただ、各時期の年代幅が一定ではない可能性、あるいは竪穴住居等の遺構、半島系土器等の遺物の残存状況が理屈の上では集落の終焉直前のⅣ式新段階が最も良好であることを考慮すると、Ⅳ式新段階に交易あるいは人々の渡来のピークがあったと断定することはできない。しかし、西新町遺跡の終焉直前のⅣ式新段階、古墳時代前期末に近い頃まで、西新町遺跡が朝鮮半島との交通の重要拠点であったことを示す結果と言える。

なお、カマド付竪穴住居はⅡ式に1基（5次SC09）、Ⅲ式古段階に2基（2次F区1号住居跡、22次1号住居跡）があり、Ⅲ式新段階13基、Ⅲ式古段階29基、Ⅳ式新段階29基を数え、半島系土器の量の変動とはほぼ合致すると思われる。

以上のように、西新町遺跡における半島系土器は古墳時代前期初頭から前期末に近い頃までの時間幅をもつ。古墳時代の暦年代は研究者により多少の差があるが、ここでは西新町遺跡の朝鮮半島系土器を、3世紀中頃から4世紀第3四半期としておきたい⁵⁾。

第2表 西新町遺跡出土の主要半島系土器の時期

遺構番号	時期	器種	本図記	備考	遺構番号	時期	器種	本図記	備考
2次D1住	Ⅲ古	両耳付壺	第7図21		13次住40	Ⅳ古～Ⅳ新	土師質甗	第11図8	
4次SC39	Ⅲ古	陶質短壺		格子タタキ	13次住40	Ⅳ古～Ⅳ新	軟質大型鉢	第7図26	
12次住93	Ⅲ古	二重口縁壺	第7図22		20次住32	Ⅳ古～Ⅳ新	軟質短壺	第6図8	平行・格子タタキ
17次住14	Ⅲ古	伊形土器模倣土師器	第6図1	伊形土器とすれば3世紀後半	3次住2	Ⅳ新	軟質短壺	第11図6	
2次E1住	Ⅲ新	陶質短壺		格子タタキ	3次住2	Ⅳ新	土師質甗	第6図11	無文
2次F2住	Ⅲ新	土師器丸底甗	第11図5		3次住5	Ⅳ新	瓦質甗	第6図3	格子タタキ
13次住42	Ⅲ新	軟質甗	第11図3		12次住21	Ⅳ新	陶質甗	第6図1	格子タタキ
13次住48	Ⅲ新	土師質甗			12次住21	Ⅳ新	陶質無文小型甗	第6図12	
13次住78	Ⅲ新	土師質甗	第11図4		12次住21	Ⅳ新	両耳付壺		
13次住78	Ⅲ新	土師質甗	第11図7		12次住22	Ⅳ新	軟質甗	第11図2	
14次住3	Ⅲ新	陶質無文小型甗	第7図17		12次住30	Ⅳ新	瓦質短壺		
14次住3	Ⅲ新	軟質短壺	第6図6		12次住37	Ⅳ新	陶質短壺	第6図2	平行タタキ
14次住8	Ⅲ新	土師質両耳付壺		半島系両耳付壺の模倣か	12次住42	Ⅳ新	軟質深鉢	第7図24	無文
14次住21	Ⅲ新	軟質無文深鉢			12次住63	Ⅳ新	両耳付壺	第7図20	
14次住21	Ⅲ新	軟質深鉢	第7図25	格子タタキ	12次住63	Ⅳ新	軟質鉢	第7図29	
17次住1	Ⅲ新	陶質杯	第7図30		12次住65	Ⅳ新	軟質高杯	第7図31	
17次住7	Ⅲ新	土師器模倣壺	第10図4		12次住76	Ⅳ新	軟質短壺		格子タタキ
20次住12	Ⅲ新	軟質深鉢		格子タタキ	12次住96	Ⅳ新	二重口縁壺		
14次住15	Ⅲ新～Ⅳ古	陶質無文甗	第8図16		12次住97	Ⅳ新	瓦質大型甗	第6図9	
14次住15	Ⅲ新～Ⅳ古	深鉢模倣土師器	第10図2		13次住26	Ⅳ新	瓦質短壺		平行タタキ
12次住29	Ⅳ古	二重口縁壺	第7図23		13次住27	Ⅳ新	瓦質鉢	第7図27	
12次住81	Ⅳ古	軟質甗	第11図1		13次住27	Ⅳ新	陶質無文小型甗		
12次住86	Ⅳ古	陶質無文小型甗	第6図13		13次住27	Ⅳ新	軟質大型鉢		
12次住89	Ⅳ古	軟質甗		12次住22と類似	13次住67	Ⅳ新	陶質無文甗		
12次住99	Ⅳ古	軟質不明平底土器	第7図33		17次住5	Ⅳ新	陶質大型甗	第6図10	
13次住1	Ⅳ古	土師質甗	第11図9		17次住37	Ⅳ新	瓦質短壺	第6図5	
13次住10	Ⅳ古	陶質甗		平行・格子タタキ	20次住1	Ⅳ新	軟質短壺		
13次住10	Ⅳ古	瓦質鉢	第7図28		21次住1	Ⅳ新	軟質深鉢		格子タタキ
13次住20	Ⅳ古	軟質甗		格子タタキ					
13次住23	Ⅳ古	軟質鉢							
20次住45	Ⅳ古	瓦質短壺		平行タタキ					



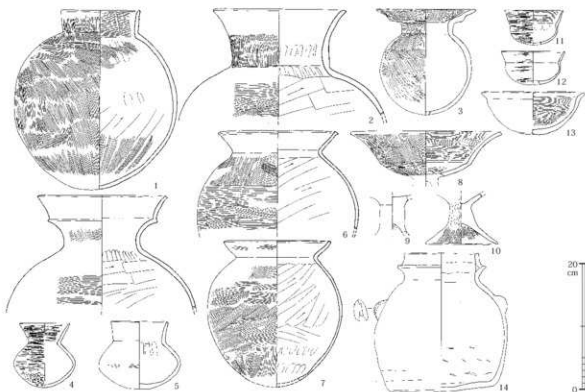
第13図 西新町遺跡4次SC39住居跡出土土器（1は1/8、他は1/6）

（2）加耶との併行関係

短頸壺の併行関係 3世紀中頃から4世紀中頃は朝鮮半島南部における陶質土器の出現期に相当する。慶尚南道における陶質土器は金海・釜山が先行し、金海大成洞29号墳における横方向に穿孔した耳付無文の短頸壺（第8図6）等に始まるとされる（정주희 2016, pp196-198）。西新町遺跡では縦方向に先行した両耳付土器は一定量出土しているが、横方向に穿孔した陶質無文短頸壺の良好な例は出土していない。ただ、Ⅲ式古段階の4次SC39号住居跡土器（第13図）の「軟質の須恵器程度」の焼成で灰色を呈し、胴部外面に格子タタキを残すⅢ式古段階の4次SC39号住居跡出土の短頸壺と同様ものは金海大成洞29号墳でも多数出土している。したがって、Ⅲ式古段階は陶質土器出現期とされる金海大成洞29号墳を遡らない可能性が考えられる。

炉形土器模倣品 また、Ⅲ式古段階には17次14号住居跡の炉形土器を模倣したような土器器も含まれる。炉形土器は原三国時代より継続する器種であるが、金海・釜山では4世紀になると消滅し（정주희 2016）、17次14号住居跡の事例は金海大成洞29号墳やそれとほぼ同段階の釜山老圃洞遺跡21号墓出土例に形態的には近い。

加耶との併行関係 Ⅲ式古段階は短頸壺、炉形土器模倣品から考えて、加耶における陶質土器の出現期に前後するものと考えられる。実年代や確実な併行関係は詳細な検討が必要であるが、これらが加耶と西新町遺跡、さらには古墳時代前期との年代的関係を検討するための重要な資料となる。ただ、4世紀以前の加耶の陶質土器の中で編年の指標となる炉形器台、高杯は西新町遺跡では出土していない。そのため、西新町遺跡出土資料のみからではⅢ式新段階からⅣ式新段階の間の加耶との併行関係の検討は難しい。



第14図 西新町遺跡12次93号住居跡出土土器(1/6)

(3) 全羅道の馬韓系土器との併行関係

器種別の併行関係 上述したように西新町遺跡の半島系土器では全羅南道・全羅北道の馬韓系土器が多い。この地域の馬韓系土器は、1990年代以降の大規模発掘調査による資料の増加を基礎に、編年が進み、キム・スンオク氏による集落遺跡出土品を中心とした編年(金承玉 2000)、ソ・ヒョンジュ氏による墳墓遺跡出土品の編年(徐賢珠 2006)が体系的である。ソ・ヒョンジュ氏は西新町遺跡出土資料を取り上げて、西新町遺跡が交易の拠点であり、全羅北道高敞、全羅南道靈光・咸平等の西海岸の資料との関連が高いとする。上述のように西新町遺跡に搬入された確実な全羅道の馬韓系土器には二重口緑壺、両耳付壺、甗があり、平底鉢や深鉢もその可能性が高いものが多い。

ソ・ヒョンジュ氏は二重口緑壺を3世紀中葉～4世紀に編年するが、2世紀に出現年代が遡るとする説もある(尹温植 2008)。二重口緑壺は編年の細分が進んでいて、西新町遺跡12次93号住居出土の二重口緑壺はパク・ヒョンヨル氏の編年によるⅢ期の型式に相当し、3世紀中頃に位置づけられる(박형열 2013, pp147-148)。二重口緑壺の編年は研究者により差があるが、西新町遺跡12次93号住居出土土器(第14図)はⅢ式古段階に相当するので、今後、全羅道の編年との併行関係を考える重要な基準となる。

甗については、13次42号住居跡の甗に類似するとして郡谷里貝塚例は2世紀前半～3世紀後半とされる第Ⅴ期層から出土したものである。また、13次42号住居跡のように底部と同部の境界が丸味を帯びる甗は12次22号住居跡のような完全な平底の甗に先行するという見解もあり(전세원 2017, p80)、3世紀中頃まで遡る可能性もある。13次42号住居跡は出土遺物が少ないが、Ⅲ式新段階～Ⅳ式古段階と推定される。Ⅲ式新段階～Ⅳ式古段階が3世紀後半と一部重なるということになり、二重口緑壺とともに甗も郡谷里貝塚や同時期の全羅道との併行関係を考える鍵となる器種と言える。なお、全羅道から搬入されたと考えられる平底で多孔の甗は、Ⅳ式古段階の12次

81号・8号住居跡、IV式新段階の12次22号住居跡で出土するので、全羅道との関係は西新町遺跡の終焉まで継続していたと言える。

両耳付壺は忠清南道では3世紀に位置づけられる公州長院里遺跡などで出土しているが⁶⁾、ソ・ヒョンジュ氏は梁山江流域ではやや遅れて出現したとし、全羅道の例を4世紀前葉～中葉に位置づける(徐賢珠 2006, p160)。ただ、日本では弥生時代後期の長崎県対馬市塔の首遺跡で広形銅矛と共に出土しており、2世紀以前に遡る可能性もある。

全羅南道・全羅北道の軟質深鉢は胴部最大径が上位にあり、底径に対して頸部径が大きく器高の高いものが4世紀以前に多い(허진아 2007, 과학속 2014)。無文のものは3世紀半ば以前に限定され、強いナデを加え断面C字上に深くくぼむ頸部を形成するものは4世紀以降とされる。また、4世紀以前に格子タタキが多いのに対し、平行タタキが4世紀後半に現れ、5世紀になると大半を占めるという変遷も指摘される(과학속 2014, pp96-100)。西新町遺跡では格子タタキのものが多く、Ⅲ式新段階には出現している。ただ、無文のものはIV式新段階と推測される12次42号住居跡でも出土し、やや整合しない。無文と格子タタキの構成比率やその変化、地域差を考慮した検討が必要となる。

なお、馬韓及び百済では鳥足文タタキの土器が特徴的であり、九州北部でも出土する。しかし、西新町遺跡では全羅道の土器が多いにもかかわらず鳥足文土器は皆無であるので、全羅道での鳥足文土器の出現、盛行は西新町遺跡の存続時期よりも後のことと考えられる。

海南新今遺跡との対比 以上のような様相から、西新町遺跡と併行する時期の全羅南道において対比可能な土器の様相を示す集落遺跡のひとつに海南新今遺跡(湖南 2005)がある⁷⁾。新今遺跡は住居跡72基が調査されているが、大きく4段階に区分され、Ⅰ段階は3世紀中頃、Ⅱ段階は3世紀後半、Ⅲ段階は4世紀、Ⅳ段階は5世紀の実年代が与えられている。このうちⅡ段階の土器を第15図に示した。二重口縁壺、短頸壺、甗は西新町遺跡出土品と類似している。Ⅰ段階の短頸壺は胴高よりも胴部最大径が大きい扁球形の胴部のもの(壺形土器Ⅰ型式)か、胴高と胴部最大径のほぼ等しい球形胴のもの(壺形土器Ⅱ型式)に限られるが、Ⅱ段階には長胴のもの(壺形土器Ⅲ型式)が出現し、Ⅲ段階になると扁球形のものが消滅するとされている。西新町遺跡では扁球形の短頸壺が多数出土しており、新今遺跡Ⅱ段階以前と接点をもつと考えられる。朝鮮半島からの搬入品と考えられる西新町12次22・89号住居跡出土甗と新今遺跡60号住居跡出土甗は全体的な形態、底部穿孔の大きさ、配置も類似しているといえる。また、新今遺跡ではⅡ段階になって陶質に近い硬質の土器が出現するとされ、西新町遺跡における陶質の半島系土器の存在とも符合する。西新町遺跡の半島系土器は全体として、新今遺跡のⅢ段階以前、特にⅠ～Ⅱ段階のものと併行関係が問題となる資料であろう。なお、新今遺跡Ⅱ段階の55号住居跡出土の陶質短頸壺は縄目タタキで、窯詰め方法も特徴的であるので咸安系土器とされる(박친수 2016, p23)。

(4) 短頸壺のタタキ文様から見た地域間関係

タタキ文様の地域性 西新町遺跡では胴部外面にタタキを施す短頸壺が多数出土する。これらの短頸壺は慶尚南道の咸安、全羅道のいずれにおいても、4世紀以前は胴部が扁球形から球形への変化が指摘される(정주희 2016,尹温植 2008, p63 他)が、時期区分の指標となる変化が少なく、編年が難しい。ただ、3～4世紀の加耶では、金海は格子タタキ、咸安は縄目タタキが多いとされる(정주희 2016, p202 他)。加耶及び馬韓のタタキ文をもつ短頸壺について、タタキ文様等を調べ、

その地域性が把握できれば、西新町遺跡と加耶、馬韓等、朝鮮半島南部との地域間関係に迫ることができると考えられる。

検討対象 そこで、完形に近い短頸壺の資料が多く得られる墳墓遺跡を対象に、加耶及び馬韓の4世紀以前のタタキ文をもつ短頸壺について、タタキ文様を調べ、各遺跡・遺構、各時期における割合を算出することにした。対象とした遺跡・遺構は次のとおりであるが、加耶については時期区分(정주희 2016)に応じてまとめた。また、全羅南道東部は墳墓遺跡が少ないので、集落遺跡を対象とすることとした。

慶尚南道金海大成洞 13・18・29・47・52・55・59号墳、金海礼安里 90・92・138・160号墳、釜山
市東萊福泉洞 84号墳、慶尚南道咸安道項里(文) 2・35号墳、咸安道項里(慶) 33号墳、慶尚南道義
寧禮屯里遺跡、咸安道沙里遺跡、全羅南道順天寥谷里蒜山遺跡(集落)、全羅南道海南安湖里・石湖里遺跡、
全羅南道咸平禮德里萬家村遺跡、全羅北道高敞萬家村遺跡

報告書の記載にもとづいて、タタキ文様は格子タタキ、縄目タタキ⁸⁾、平行タタキ、集線文タタキに分けるが、横方向の沈線の有無でさらに分けた。胴部タタキの後、底部に格子タタキを施す複合タタキもあるので、それらは別に集計した。なお、「集線文」は全羅南道の報告書で使用され、平行タタキと縄目タタキを含む(이은정他 2008, p50)。厳密に言えば、平行タタキと縄目タタキに区分する必要があるが、ここでは一括した。また、焼成を報告書に基づいてカウントした。このような基準で作成したのが第3表である。

検討結果 金海・釜山を見ると、Ⅱ期以前では沈線の無い格子タタキが多数を占め、焼成は瓦質がほとんどであるが、Ⅲ期以降には縄目タタキ、陶質焼成が増加する。咸安地域では縄目タタキに沈

第3表 短頸壺のタタキ文様

地域	遺跡名 (nは対象点数)	時期 (参考表 2016)	格子タタキ		縄目タタキ		平行タタキ		集線文タタキ		集線文 タタキ 底面格子タタキ	平行 タタキ 底面格子タタキ	集線文 タタキ	群	瓦質	陶質	焼成 不明	備考、文献
			沈線有		沈線有		沈線有		沈線有									
			沈線有	沈線有	沈線有	沈線有	沈線有	沈線有	沈線有	沈線有								
釜山・ 慶尚 南道	大成洞29号(n=30)	新羅・唐山Ⅰ	94.1	5.9											100.0		慶大2000	
	福泉洞84号(n=12)	新羅・唐山Ⅱ	58.3	16.7			16.7	8.3				8.3			83.3	16.7	福泉洞2020	
	礼安里90号・160号、 大成洞29号(n=15)	新羅・唐山Ⅱ	73.3			26.7									93.3	6.7	釜山1993、慶大2003	
	大成洞2号・59号 (n=24)	新羅・唐山Ⅱ 一併	87.5	12.5											100.0		慶大2003	
	大成洞13号・18号、 礼安里90号(n=2)	新羅・唐山Ⅱ	28.6		14.3	57.1									42.9	57.1	慶大2000、釜山1993	
	礼安里138号、 大成洞47号(n=34)	新羅・唐山Ⅱ	42.9	21.4	14.3	21.4									64.3	28.6	7.1 釜山1993、慶大2003	
咸安 地域	咸安Ⅰ(文) 39号 (文) 2号・(慶) 33 号(n=11)	咸安Ⅰ・Ⅱ			9.1	90.9											(文)は釜山1997、 (慶)は慶大2000、 佛経記参照し。	
	禮屯里(n=8)	咸安Ⅱ				100.0									100.0		白頭と焼成、慶大1994a	
	禮沙里(n=21)	咸安Ⅱ・Ⅲ			38.1	61.9									9.5	90.5	慶大1994b	
全羅 南道	寧禮里山(n=10)		10.0	10.0						10.0			70.0	70.0	30.0		軟質には瓦質を含む可能性 あり。大韓2013	
	安清里遺跡、石洞遺跡 土器(n=37)		24.3	16.2			2.7	16.2					40.6	81.1		38.9	軟質には瓦質を含む可能性 あり。大韓2019	
	禮徳里萬家村(n=14)		28.6	21.4			14.3						35.7	71.4	7.1	21.4	軟質には瓦質を含む可能性 あり。釜山2004	
	蒜山(n=15)		33.3								6.7	60.0		93.3	6.7		軟質には瓦質を含む可能性 あり。釜山2007	
西新 町	西新町合計(n=47)		8.5	21.3	2.1	12.8	2.1	14.9				38.3		21.9	34.0	31.9	12.8	
	西新町新式古墳群・新式群(n=8)		22.2	44.5		22.2						11.1		11.1	33.3	55.6		
	西新町旧式古墳群(n=7)			14.3				28.6				57.1		14.3	42.9	14.3	28.6	
	西新町旧式新式群(n=16)		6.2	18.8	6.2	18.8	6.2	12.5				31.3		25.0	37.4	18.8	18.8	
	西新町新式群(n=15)		6.7	13.2		6.7		13.2				53.2		26.7	26.7	40.0	6.7	
	西新町新式群(n=15)																	

数字はパーセンテージ、タタキの数値は30%以上、50%以上で数値を強調

線を巡らすものがほとんどであり、道項里古墳群では焼成のデータが得られなかったが、陶質が大半を占める。金海・釜山と咸安の併行関係は問題となるが、釜山・金海での縄目タタキの増加は咸安からの影響と考えるならば、先行研究の指摘する格子タタキは金海・釜山、縄目タタキは咸安という地域性を追認できる。

全羅南道では胴部集線文タタキ、底部格子タタキで沈線有、全羅北道では胴部平行タタキ、底部格子タタキで沈線有が多数を占め、両地域とも格子タタキおよび格子タタキに沈線を施すものがこれに次ぐ。胴部平行タタキ、底部格子タタキで沈線有は福泉洞 84 号墳に 1 例あるものの、これを除けば金海・釜山で胴部平行タタキあるいは縄目タタキで底部に格子タタキを施すものは無い。したがって、胴部平行タタキ、縄目タタキで、底部に格子タタキを施す短頸壺は全羅道の地域性を示すと考えられる。ただ、格子タタキおよび格子タタキに沈線有るものはタタキ文様から言えば金海・釜山と共通し、そこから全羅道への搬入品が含まれる可能性を検討する必要がある。

金海・釜山の短頸壺は瓦質が多く、全羅道は軟質が多いが、後者には瓦質のような焼成も含まれる可能性がある。そこで、全羅道の 4 遺跡で格子タタキおよび格子タタキに沈線有のもの計 29 点の色調を見ると、瓦質とも言えるような黒灰色・灰青色・暗灰色・灰緑色・灰黒色・暗灰色・灰白色は 31.0% (9 点) であるのに対し、軟質焼成といえる赤褐色・暗褐色・黄褐色 51.8% (15 点)、色調から瓦質・軟質かの判定が難しい灰黄色・灰黄色 13.8% (4 点)、不明 3.4% (1 点) である。赤褐色・暗褐色・黄褐色のものは瓦質焼成が主体となる金海・釜山とは異なるので、格子タタキの軟質の長胴甕、平底鉢等と共通する技術・道具により、全羅道で生産された可能性が高い。

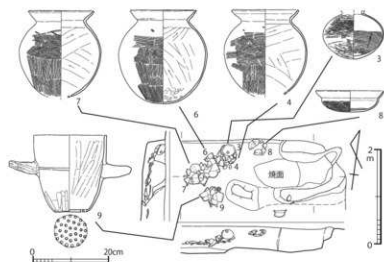
短頸壺タタキ文様からみた地域間関係 西新町遺跡出土の短頸壺についても慶尚南道、全羅道と同様の基準で調べてみた。第 3 表に示したように、全時期を合計すると、胴部平行タタキ、底部格子タタキで沈線有のものが多数を占め、全羅道と共通する。これは甕、二重口緑壺、両耳付壺のようなその地域の土器の出土と相関する結果である。データ数は少ないが IV 式古段階、IV 式新段階においても同様であり、遺跡の終焉の直前まで全羅道から短頸壺が搬入されたと考えられる。

ただ、III 式古段階・新段階に限って言えば、データは少ないが、格子タタキや縄目タタキがやや多く、焼成では陶質、瓦質のものが多く。この段階には金海・釜山、咸安の短頸壺が一定量、搬入されたと考えられ、上述した 4 次 SC39 号住居跡出土はこれに含まれるだろう。なお、陶質無文の小型壺が IV 期古段階、IV 期新段階でも出土しており、加耶との関係も西新町遺跡終焉段階まで継続していたと考えられる。

4. 半島系土器からみた西新町遺跡の特質と意義

(1) カマド付住居と半島系土器

西新町遺跡のカマド付住居と土器 西新町遺跡を特徴づけるカマド付住居では甕が使用されたと考えられるが、全羅道等で甕とセットとなる長胴甕は出土数が少ない。カマド付住居で使われた土器群について良好な事例を見ると、西新町遺跡 12 次 22 号住居跡ではカマド周辺から全羅道からの搬入品と考えられる甕 1 点とともに土器がまとまって出土しているが、その他は煮沸具としての土師器甕、供膳具としての土師器鉢である (第 16 図)。搬入品の甕と土師器からなる器種構成であるので、倭人が甕を入手し、カマドの構築技法を習得して生活した可能性と、渡来人が倭人から土師器を入手し、生活した可能性の双方が考えられる。同様にカマド周辺から土器がまとまって出土



第16図 西新町遺跡第12次22号竪穴住居カマドとその出土土器（カマドは1/80、土器は1/10、報告書をトレース）

する12次81号住居跡等でも半島系土器が主体ではなく、土師器が煮沸具、供膳具の主体となる。

渡来人とカマド 武末純一氏が指摘するように、西新町遺跡のカマド付竪穴住居はこの時期、周辺遺跡には拡散しない（武末1996他）。すなわち、西新町遺跡で倭人が渡来人からカマドの構築法を習得し、周囲に拡散させたという状況は考えられない。カマド構築技法を習得した倭人が西新町遺跡でのみ実践しながら、それを交易、生産等で関係する周辺集団に伝達しないのも無理がある。

そこで、渡来人がカマド付竪穴住居に居住したとすると、12次22号住居跡のような土器の構成からは、渡来人が土師器を交換で入手するか、食料も含めて倭人から提供を受ける状況が想定される。西新町遺跡出土の土師器甕も渡来人が倭人に製作を依頼し、提供を受けたものと解釈できる。渡来人からの依頼に応じて散発的に製作されたため、土師器系甕は定型化せず形態的な多様性を形成することになったとも言える。西新町遺跡では土師器模倣の土器も出土しているが、このような状況から、渡来人中の土器製作者は多くなかったと推測される。

この時期の博多湾沿岸の福岡市西区元岡・桑原遺跡群、同博多区比恵・那珂遺跡群、同東区箱崎遺跡等でも半島系土器が出土する。福岡市博多区の博多遺跡群では半島系土器に加えて、半島南部の技術的影響も想定される精錬鍛冶を含む一連の鉄器製作が行われ（村上2007、p123）、鉄資源の輸入や製作に関わる渡来人の存在も推測される。これらの遺跡では西新町遺跡と同様に渡来人が居住し、今後、そこでカマドが発見されることは十分に考えられる。ただ、それらの渡来人の存在を想定しても、九州北部の各地に広く渡来人が拡散する状況は考えにくい。このような問題については、西新町遺跡における渡来人の役割、活動の目的、滞在期間などの面から、検討する必要がある。

（2）渡来人集団と交易拠点

弥生時代の渡来人 弥生時代開始期には朝鮮半島から九州北部に水田稲作をもたらした人々が渡来したと考えられる。九州北部における弥生土器の形成、水田稲作の定着と広がりから考えて、弥生時代早期から弥生時代前期に至る長期間の渡来人の定着、拡散の過程があったと想定される。弥生時代開始より後の渡来人との関係は朝鮮半島の無文土器、およびその一部の特徴をもつ無文土器系土器の出土遺跡から類推される。

無文土器の出土が集中する福岡県小郡市三国丘陵の遺跡群に対しては山崎頼人氏の研究がある（山崎2019）。山崎氏は前期後半に少数の渡来系集団が在来系集団の中に一時的な滞在や往来という形で存在したが、前期末には渡来人特有の居住形態が出現し、無文土器も集中して増加、多器種化することから、在来人と一定の距離を置いた居住域を形成したと推測する。そして、中期初頭に

無文土器が集中して出土する集落群が縮小し、隣接する集落が拡大するとともに無文土器の一部の要素のみが見られる擬無文土器が出現するので、渡来人の子孫が周辺集落に拡散、同化したと推測している。

佐賀県小城市土生遺跡では弥生時代前期末～中期前半にかけて、円形粘土帯土器と三角形粘土帯土器、牛角把手付壺等の壺類、無文土器に由来する高杯が出土する。壺類は無文土器的な焼成・色調の黒色磨研土器があるとともに、弥生土器的焼成・文様のものも含まれる。円形粘土帯土器から三角形粘土帯土器に及ぶ断続的な渡来人の受け入れが見込まれるとともに、渡来人はある程度、長期間、独自の生活様式を維持しながらも、弥生土器の製作技法を習得し、定着したと考えられる（武末 2004、p314 他）。山崎頼人氏は長期居住・交流拠点型とし、土器の変容から、渡来系集団と在来集団が長期にわたり交流し、同化しているとする（山崎 2020、p325）。土生遺跡では青銅器鋳型も出土するので、有明海的最奥部にある拠点集落と位置づけることができ、渡来人は青銅器生産に関わったと推測される。

長崎県壱岐市原の辻遺跡は一支国の拠点集落で、弥生時代前期から集落が形成され、西新町遺跡に先行する「原の辻貿易」（白井 2001）の段階の交易の拠点とされる。中期の須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式古段階の船着場も検出されている。原の辻遺跡では円形粘土帯土器期から三角形粘土帯土器期にかけて間断なく流入し、甕、牛角把手付長胴壺、長胴壺、高杯、蓋、（黒色）磨研長頸壺、小壺、小型土器などの器種が揃う。古澤義久氏は生活に必要な土器に加え、磨研長頸壺や小型土器など祭祀色も強い土器が出土するので、一定期間の粘土帯土器人の滞在が考えられるとし、祭祀の季節性を考慮すると通年、滞在した人々も存在したとする（古澤 2020、p271）。

三角形粘土帯土器に代わるように、弥生時代後期の九州北部では楽浪土器の出土が散見されるようになる。楽浪土器の出土遺跡について、武末純一氏は1遺跡1～2点で小規模な交渉の結果とみられる対馬の諸遺跡等の対馬型、対馬型の累積という面だけでなく大規模で公的な対外交渉の結果という面もある原の辻遺跡や長崎県壱岐市カラカミ遺跡などのカラカミ型、壺・鉢・大鉢・筒鉢・器台などの器種が揃い、楽浪郡からの官人が居住した可能性のある福岡県糸島市三雲・井原遺跡群における三雲番上型に区分している（武末 2004、p314）。

朝鮮半島南海岸地域の倭系土器・渡来人 弥生時代中期には慶尚南道泗川靑島遺跡が朝鮮半島南部と楽浪郡との交通の拠点のひとつとなり、弥生土器とその模倣・折衷品が出土することから、そこに多くの九州北部を中心とする西日本からの渡来人が居住したことが良く知られる。靑島遺跡に続く弥生時代後期に併行する時期には、固城東外洞遺跡や海南郡谷里貝塚等からなる南海岸地域の交通ネットワークが形成され、固城東外洞遺跡はその交易拠点となったとされる（寺井 2008、28）。固城東外洞遺跡でも弥生時代後期後半を中心とする時期の弥生土器の模倣・折衷品が多く出土する。また、古墳時代前期に併行する3世紀後半～4世紀には半島南部の各地で土師器系土器が出土するが、集落遺跡では金海府院洞遺跡・鳳凰洞遺跡周辺、東萊楽民洞貝塚に多く、墳墓では金海大成洞古墳群、東萊福泉洞古墳を中心に見られる（井上 2014、조성원 2016 他）。

靑島遺跡では弥生中期初頭の城ノ越式段階から弥生土器が出現し、須玖式の段階が多く、一部に弥生後期以降の資料もある。糸島半島、壱岐の土器が多いが、中期末になると九州中部、瀬戸内、山陰など西日本各地の土器があるとされる。各地の土器が出土する点は西新町遺跡と類似するが、現地生産品、模倣品も多数、製作される点やその継続性は西新町遺跡と異なる。これらの様相

から、勸島遺跡は国際的な交易港であり、倭人は鉄器、鉄素材を求めて継続的に滞在したとされる(이창희 2015 他)。金海・釜山の土器系土器は、集落遺跡での出土は甕、壺、鉢、高杯等の各器種が揃っており、煮沸形態の土器も含まれ、集団の移動が推測される(井上 2014, p202-203)。金海・釜山では現地生産品、模倣品と推測されるものが多数含まれ、断続的に渡来、長期滞在して定着したとされるのに対し、慶尚南道西部では短期滞在で、地域間に差があるとする意見もある(조성원 2016, p163)。

他遺跡との比較と渡来人 上述したように西新町遺跡のカマドは周辺に拡散せず、周辺地での半島系土器の生産の開始には至らなかった。弥生時代の三国丘陵の遺跡群や土生遺跡では無文土器系土器から渡来人の拡散、弥生人との同化が認定されるが、同様の過程は西新町遺跡では認められない。

西新町遺跡では多種の半島系土器が出土し、古墳時代初頭～前期末頃まで継続的に半島系土器が出土する点で原の辻遺跡に匹敵する交易拠点と言える。ただ、3世紀後半～4世紀の加耶では埴形土器、埴形器台、高杯等が墳墓などで多く出土するが、西新町遺跡では埴形土器模倣土器と考えられるものが出土するのみで、墳墓での儀礼、祭祀用の土器は少ない。馬韓を含む半島南部の同時期の器種からコンテナとしての各種壺と甕・深鉢形土器等の煮沸具を中心に選択的に搬入されており、祭祀的色彩は強くない。三雲・井原遺跡群における楽浪土器は器種が豊富で、楽浪郡等での儀礼に対応している可能性があるが、楽浪土器を使用した人々の居住遺構の様相が不明なため、性格や定着度の比較が難しい。

一方、朝鮮半島南部の弥生時代併行期の勸島遺跡や、古墳時代前期併行期の金海・釜山では土器の現地生産、模倣に示されるように、倭人の滞在期間は長期に及び、定着度は西新町遺跡における渡来人よりも高かったと解釈される。また、土器製作者を含む多様な職掌で構成された集団での移住、定着も想定される。

このような点から、西新町遺跡の渡来人は長期滞在、移住、定着というよりは、交易などの目的で来航し、交易を行った後、帰路に着くための風向きの良い季節が来るのを待つ間など短期的に滞在して、その後、帰還するなど往來を繰り返したのではないかと推測される⁹⁾。カマドが周辺の遺跡に拡散しないことや、渡来人の墓地と思われる事例が西新町遺跡周辺に存在しないこともこれに符合する。また、渡来した集団は交易を目的とし、土器生産者を含む場合が少なかったため、半島系土器の生産につながらず、倭人との交換等により土器を入手したと解釈される。このような交易を目的とした馬韓、加耶の人々の往來、滞在が集中した交易港として、西新町遺跡の性格を捉えることができる。

(3) 九州北部・朝鮮半島南部の交通・交易と西新町遺跡

金官加耶の対外交渉 金官加耶は大成洞古墳群で王墓が形成された3世紀後半から政治的な成長が認められる。金官加耶が内陸部の鉄生産を掌握したことは鉄器の多量副葬に示されるが、政治的な成長とともに各地からの交易品が王墓に副葬されるようになる(高久 2004, 박원수 2016 他)。外部からの交易品として、晋式の帯金具、五胡十六国のひとつ前燕の青銅製容器と馬具、シリア産のローマングラス、日本列島製の碧玉製鐵形石製品や琉球列島産の貝製品等がある。また、日本列島製か金官加耶製か見解の分かれる筒形銅器も大成洞古墳群、福泉洞古墳群で出土する。鈴木靖民氏は金官加耶が3世紀後半の大成洞古墳群の成立の頃から政治的勢力を結集し、周辺に影響を及ぼし、魏や北の滅、南

の倭への国際交流の基地、諸民族集団の集散地になった、と述べる（鈴木 2012、p93）。

このような金官加耶を核とする交通ネットワークへの関与は、鉄器、鉄素材を朝鮮半島に依存する倭人にとって命運を左右する問題であり、金海、釜山周辺での倭人の定着にも必然性があったと言える。それは加耶とヤマトをつなぐ結節点としての博多湾沿岸・糸島半島、なかでも西新町遺跡を介して、はじめて可能になったと考えられる。

馬韓の集団の動向 西新町遺跡では馬韓諸国とそれに続く社会が形成された全羅道からの搬入土器が多い。この様相は、朝鮮半島南部の沿岸地域の広い範囲との交通の中で、九州北部と距離的に近い加耶との関係だけでなく、西新町遺跡と朝鮮半島南西部の間にも交易関係があったことを示す。

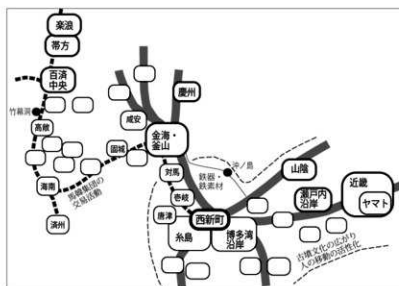
鈴木靖民氏は馬韓の西晋への入貢が咸寧3年（277）、同4年（278）、太康元年（280）、同2年（281）、同7年（286）、同8年（287）、同9年（288）、同10年（289）、永熙元年（290）、元康元年（291）と頻繁で、咸寧7年（341）から永和元年（345）にかけての頃、百濟人が東晋と関係の深かった前燕と接触していた形跡もあることを指摘する（鈴木 2012、pp119-120）。馬韓諸国の中から後に百濟が成長したので、西晋に入貢した馬韓人は京畿道、忠清道も含めて考える必要があるが、馬韓の集団、朝鮮半島南西部の沿岸地域の人々が中国大陸や楽浪・帯方郡への海洋交通を掌握していたと理解される。このような馬韓の集団の動きの東端の拠点の港湾として西新町遺跡が位置していたと言える。チョン・ジェヒョン氏は、古墳時代前期前半の全羅道からの土器の流入の増加に示される新たなネットワークの形成を主導したのが馬韓の集団であり、西新町遺跡がその交流センターになったと評価する（정재현他 2024、p161）。

西新町遺跡では全羅道の土器類が多く出土するが、その土器類は今のところ全羅北道の高敞南山里遺跡や扶安竹幕洞遺跡に北限がある。扶安竹幕洞遺跡は宗像沖ノ島と対比される海上交通に関わる祭祀遺跡であるが、西新町遺跡と同様の大型の無文壺、二重口縁土器が出土することから、その開始期は4世紀以前に遡る。扶安竹幕洞遺跡の祭祀は高敞の北、扶安の南に位置する菟浦湾を舞台に活躍した高敞の勢力が主宰したとする意見もある（박선수 2023、pp542-543）。西新町遺跡に関わる倭人集団は馬韓からの渡来人・交易者を通じて、竹幕洞での祭祀に関する情報を得ていた可能性があり、その時期は沖ノ島祭祀へのヤマト王権の本格的な関与に先行すると思われる。

なお、馬韓の勢力は4世紀後半以降、加耶に移住した痕跡があり、慶尚南道昌寧桂城里遺跡、慶尚南道巨濟鵝洲洞遺跡で梁山江流域の土器と住居が見つかった。昌寧桂城里遺跡、鵝洲洞遺跡は土師器系土器も出土することから、鉄をめぐる交易拠点と評価する意見があり（박선수 2023、pp87-88）、西新町遺跡の終焉時期の馬韓の集団の動向を示唆する。

西新町遺跡とヤマト 西新町遺跡では畿内系、山陰系、吉備系等西日本各地の土器が出土し、搬入品も多く、これら各地からの土器の搬入、移住・交易のための集団の移動が想定される。その中で、畿内系土器は西新町遺跡Ⅲ式以降の土器構成の主体を占めるようになり、半島系土器の活発な流入時期と符合する。古墳時代前期の西日本の諸集団、なかでもヤマトの勢力によって、西新町遺跡を介した交易、交通により入手可能となった加耶の鉄、あるいは朝鮮半島南西部の沿岸地域を掌握した馬韓の諸集団がもたらす品々は、社会的統合に必要な物資であり、権力基盤の一部であったと考えられる¹⁰⁾。

また、西新町遺跡に対応する古墳群が営まれた藤崎遺跡では方墳などの小型の古墳を主体としながらも、三角縁神獣鏡が出土する。博多湾沿岸～糸島半島では三角縁神獣鏡、前期の前方後円墳も



第 17 図 西新町遺跡の交通ネットワーク

る。西新町遺跡Ⅲ式の古墳時代初頭がその画期であり、西新町遺跡での交易、諸集団の接触の政治的、社会的意義は古墳時代開始とも関わるものであったと理解すべきだろう。

5. おわりに

西新町遺跡は多種多様な半島系土器が多数出土することがその価値の一つ、歴史的な意義と認めることができる。九州北部では弥生時代早期の水田稲作の開始以来、朝鮮半島との関係が深く、無文土器、三韓土器、秦浪土器の出土する遺跡がある。そのような朝鮮半島との対外交渉の延長線上に西新町遺跡が成立したと言える。土器から解明できるように全羅道の馬韓、金海や咸安などの加耶から、交易のために往来、短期滞在する渡来人の存在が推測できる。また、ここでは取り上げなかったが、畿内、山陰、吉備等の日本各地の人々も西新町遺跡に集ったことが想定される。無文土器や秦浪土器の集中する遺跡には見られない特質である。加耶、馬韓の諸集団との交易に関わった港湾拠点であり、対馬海峡を挟む日本列島と朝鮮半島の貿易の一段階を画する遺跡として西新町遺跡を評価し、そこに九州北部の伝統的な勢力だけでなく、近畿など西日本各地の勢力との関係を想定する見解に同意できる部分が多い（久住 2007 など）。ただ、その形成と展開は西日本各地の諸勢力とともに、金海・釜山を中心とする加耶諸国、半島南海岸部の交通を掌握した馬韓の諸集団と活動が大きく作用したと考えられる。

辻田淳一郎氏は弥生時代後期～終末期の鏡の流通の様相から、瀬戸内以東の各地から派遣された使者たちが、九州北部の人々を水先案内人として秦浪郡、帯方郡におもむき、鏡を入手したという「水先案内人モデル」を想定する（辻田 2019, pp98-99）。このようなモデルは古墳時代前期の西新町遺跡の盛行期にも当てはまるが、西新町遺跡を中心とする博多湾沿岸、糸島の海人を介してつながった加耶や馬韓の人々こそが水先案内人を務めたと言える。

したがって、西新町遺跡の役割を解明するには西日本各地との関係はもちろん、加耶、馬韓との関係を青銅器時代以来の朝鮮半島南部の交易、政治社会の展開を踏まえて理解する必要がある。古墳時代の開始という視点とともに、加耶における政治体の成長、馬韓の諸集団の動向を踏まえた視点から、西新町遺跡を位置づける必要がある（第 17 図）。

多い。西新町遺跡およびその周辺遺跡では半島系土器、カマドは普及しなかったが、西新町遺跡の開始と前後してもたらされた畿内系土器、山陰系土器は博多湾沿岸、さらには九州北部の古墳時代の土器様式を大きく変化させた。西新町遺跡の主体を担った早良平野、博多湾沿岸の諸集団は加耶や馬韓と交易する一方で、古墳での葬送儀礼、土器を用いた祭祀等においてはヤマトを中心とする社会関係に積極的に参入したと考えられる。

このような問題を考えるためには、西新町遺跡の周辺地域、あるいは西日本各地から西新町遺跡に集められ、朝鮮半島に輸送された物資・情報や移動した人間集団、さらには楽浪・帯方郡や中国大陸、北方地域から朝鮮半島南西部の馬韓諸集団、あるいは金官加耶を介して西新町遺跡、さらには日本列島各地にもたらされた物資・情報と、それらを担った社会集団を解明する必要がある。また、ここでは西新町遺跡の半島系土器を中心にとりあげたが、博多湾沿岸、九州北部の交易、交通の重層的で、弥生時代以来、変化の経路上にあるネットワークの中に西新町遺跡を位置づけることも課題である。

ところで、西新町遺跡では確実な京畿道の土器は無いので、西新町遺跡の交通のネットワークは百済中央部にまで及ばなかったと考えられる。西新町遺跡に続く古墳時代前期末～中期初頭には奈良県石上神宮所蔵の七支刀銘文が実証するようにヤマト王権と百済の国家的外交が本格化する。また、漢城期百済との接触により、中期初頭の九州北部では横穴式石室が古墳の埋葬施設として採用される。さらに、西新町遺跡の段階では定着、拡散しなかったカマド、陶質・軟質の半島系土器が、古墳時代中期中頃にはカマド付竪穴住居の普及、須恵器生産の開始あるいは土師器の新器種の成立として日本列島の生活文化を構成するようになる。その時期には西新町遺跡の段階とは異質の渡来人の動き、倭人と渡来人の相互交流があったと考えられる。そのような後の時代の日韓の関係、行き来した人々の実態を考えるうえでも、西新町遺跡は重要な歴史的意義を持つだろう。

【註】

- 1 瓶を除く搬入品とその類例に関する記述は『西新町遺跡IX』を改定したものである。第6～9図は同報告書の第52・53・55・56図を再構成したものである。
- 2 両耳付壺蓋について『西新町遺跡IX』では、搬入品としたが、模倣品の可能性も含めて検討する必要がある。
- 3 武末純一氏(2010)は4次SD44溝跡出土品中にも炉形器台模倣品の存在を指摘するが、17次14号住居跡出土品よりやや小型である。
- 4 第11図は重藤2024に掲載した図を再構成した。
- 5 古墳時代前期の年代幅について、岩本崇氏は3世紀第2四半期～4世紀第3四半期とする(岩本2018、308)。岸本直文氏は箸墓古墳の被葬者を卑弥呼と推測し、中期の開始を4世紀末と捉え、図表等では古墳時代前期を3世紀中頃～4世紀第3四半期頃としている(岸本2020)。
- 6 公州長院里遺跡の出土例およびその年代についてはソン・ジョンヨン氏の論文(成正鑑2006)を参考にした。
- 7 新今遺跡に関する記述は『西新町遺跡IX』を改定したものであり、第15図も同報告書より転載した。
- 8 これまでの西新町遺跡の報告書では「縄文タタキ」の用語を使用してきたが、適切でないといわれるので(谷1998、258)、タタキ板に縄を巻いたものを「縄目タタキ」とした。この点については、寺井誠氏に御教示いただいた。
- 9 田中史生氏は、渡来人は移住定着を目的とした集団だけでなく、交易者を含む様々な行動、往来のパターンがあったとする(田中2005、pp24-25)。
- 10 田中史生氏は西新町遺跡を国際交易港と評価し、邪馬台国が伊都国に置いた一大率が、外交の港となる唐津湾と、交易の港となる博多湾をにらみながら、九州北部に集まる西日本諸国の人々を検査し、国際交流の秩序維持をはかっていたとする(田中2019、pp63-64)。

【引用文献】

(日本語)

井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』 学生社

岩本崇 2018「古墳時代前期層年代の試論」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』 六一書房
pp301-310

亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』第30集(中) pp747-778

岸本直文 2020『倭王権と前方後円墳』 塙書房

久住猛雄 2007「博多湾貿易」の成立と解体『考古学研究』第53巻第4号 pp20-36

重藤輝行 2024「古墳時代の渡来人集団の特性と動態」『東アジア考古学の新たな地平』宮本一夫先生退職記念論集
下 中国書店 pp551-570

白井克也 2001「勸島貿易と原の辻貿易—粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易—」『弥生時代の交易—モノの動きとその担い手—』第49回埋蔵文化財調査会発表要旨集 pp157-176

鈴木靖民 2012『倭国史の展開と東アジア』 岩波書店

高久健二 2004「韓国の倭系遺物—加耶地域出土の倭系遺物を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
pp367-391

武末純一 1991「福岡市元岡遺跡の器台」『肥後考古第8号 三島格会長古稀記念 交流の考古学』1991年6月
肥後考古学会 pp257-262

武末純一 1996「西新町遺跡の竈—その歴史的意義」『碩啓尹容鎮教授停年退任記念論叢』 pp599-615

武末純一 2000「北部九州の百済系土器—4・5世紀を中心に—」『福岡大学総合研究所報』第240号 pp99-114

武末純一 2004「加耶と倭の交流 古墳時代前・中期の土器と集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
pp311-333

武末純一 2010「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第63集 pp3-20

田中史生 2005『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』歴史文化ライブラリー199 吉川弘文館

田中史生 2019『渡来人と帰化人』 角川選書

谷豊信 1998「秦漢時代の陶磁器」『世界美術大全集 東洋編』第2巻 pp256-263

古澤義久 2020「杵岐島・対馬島における粘土帯土器と集落」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—(最終報告書・論考編)』「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会・「新・日韓交渉の考古学—青銅器—原三国時代—」研究会 pp270-290

辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』 角川選書

土田純子 2017『東アジアと百済土器』 同成社

常松幹雄・折尾学 1982「第4章 結語」池崎譲二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編『福岡市高速鉄道
関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 pp173-192

寺井誠 2008「中継地の形成—国城郡東外洞遺跡の検討を基に—」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究
室50周年記念論文集』上巻 pp237-253

寺井誠 2016『日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究』平成25年度日本学術振興会科学研究費補助
基金基盤研究(C)研究成果報告書 公益財団法人大阪市博物館協会大阪歴史博物館

西谷正 1983「加耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢 九州歴史資料館開館十周年記念』上巻 吉川弘文館
pp33-72

村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店

森本幹彦 2019「元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流」『元岡・桑原遺跡群 34』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1385集 pp123-142

山崎頼人 2019「無文土器系土器と集団—三国丘陵における土器生産からみた日韓交流—」『九州考古学』第94号 pp1-26

山崎頼人 2020「日韓粘土帶土器と集落」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告書・論考編）」「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会、「新・日韓交渉の考古学—青銅器—原三国時代—」研究会 pp302-331（韓国語（カナダ順））

慶南考古學研究所 2000『道項里・末山里遺蹟』

慶尚大學校博物館 1994a『宜寧禮屯里墳墓群』

慶尚大學校博物館 1994b『咸安菟沙里墳墓群』

慶星大學校博物館 2000『金海大成洞古墳群Ⅱ』

慶星大學校博物館 2003『金海大成洞古墳群Ⅲ』

라명숙 2014「전남지역 주거지 출토 심발형토기 연구（全南地域住居址出土深鉢形土器の研究）」『湖南考古學報』第47輯 pp75-109

國立全州博物館 1994『扶安竹幕洞祭祀遺蹟』

國立中央博物館 1993『淸堂洞』

國立中央博物館 1998『東萊栗洞貝塚』

金承玉 2000「호남지역 마한 주거지의 편년（湖南地域馬韓住居址の編年）」『湖南考古學報』第11輯 pp29-78

金鍾萬 1999「馬韓圈域出土 兩耳附壺 小考」『考古學誌』第10輯 pp49-78

大韓文化財研究院 2013『順天寥谷里蒜山遺蹟』

大韓文化財研究院 2019『海南安湖里・石湖里遺蹟』

東亞大學校博物館 1981『金海府院洞遺蹟』

東義大學校博物館 2017『金海良洞里古墳群Ⅱ』

木浦大學校博物館 1987『海南郡谷里貝塚Ⅰ』

木浦大學校博物館 1989『海南郡谷里貝塚Ⅲ』

木浦大學校博物館 2001『咸平月也蒜村遺蹟』

木浦大學校博物館 2023『海南郡谷里貝塚Ⅵ』

박원수 2016「가야사 연구 서설—소국에서 영역국가로-（加耶史研究序說—小国から領域国家へ-）」중앙문화재단구원編『가야고고학개론（加耶考古學概論）』진인진 pp6-70

박원수 2023「고대 한일교류사（古代韓日交流史）」경북대학출판총서4 경북대학출판부

박형일 2013「호남 서남부지역 고분 출토 이중구연호의 형식과 지역성（湖南西南部地域古墳出土二重口綠壺の型式と地域性）」『湖南考古學報』44輯 pp109-163

福泉博物館 2020『東萊福泉洞古墳群第5次發掘調査76～84號』

釜山大學校博物館 1993『金海禮安里古墳群Ⅱ』

三江文化財研究院 2023『固城東外洞遺蹟』

成正謙 2006「中西部原三国時代土器様相」『韓國考古學報』第60輯 pp88-129

徐賢珠 2006『榮山江流域古墳出土土器研究』學研文化社

順天大學校博物館 2002 『麗水系長洞遺蹟Ⅱ』

오후배 2003 「시루의 (甬)의 形式分類와 變遷過程에 關한 試論」 『湖南考古學報』 第 17 輯 pp41-82

尹溫植 2008 「2~4 세기대 영산강유역 토기 변천과 지역단위 (2~4 世紀代榮山江流域土器의 變遷と地域単位)」 『湖南考古學報』 29 輯 pp59-89

이은경·방민아·전상학 2008 「타날 실험을 통해 본 문양연구와 타날기법 검토 -호남지역 출토 3~6세기 타날문토기를 중심으로- (タタキ実験を通じて見た文様研究とタタキ技法の検討- 湖南地域出土 3~6 世紀のタタキ文土器を中心として-)」 『야외고고학 (野外考古学)』 제5호 pp41-77

이창희 2015 「勅島交易論-金屬器交易에 대한 新觀點」 『嶺南考古學』 73 號 pp4-25

林永珍 1998 「竹幕洞土器와 榮山江流域土器의 比較考察」 『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』 國立全州博物館 pp281-296

全南大學校博物館 1999 『伏岩里古墳群』

全南大學校博物館 2003 『咸平昭明住居址』

全南大學校博物館 2004 『咸平禮德里萬家村古墳群』

全北文化財研究院 2007 『高敞南山里遺蹟』

전세원 2017 「영산강 상류의 원삼국 - 삼국시대 위락 연대 재고 (榮山江上流域原三國~三國時代集落年代再考)」 『嶺南考古學』 79 號, pp63-100

정주의 2016 「가야의 토기 (伽耶의 土器)」 중앙문화재연구원編 『가야고고학개론』 전인진 pp194-255

정재현·장승지 2024 「북부 규슈 마한 교류 네트워크의 변천 및 구조 연구 (北部九州馬韓交流ネットワークの變遷及び構造の研究)」 『호서고고학 (湖西考古学)』 58, pp129-172

조성원 2016 「영남지역 출토 4~5 세기대 토師器系土器의 제검토 (嶺南地域出土 4~5 世紀代土師器系土器の再検討)」 『韓國考古學報』 第 99 輯 pp138-169

昌原文化財研究所 1997 『咸安道項里古墳群Ⅰ』

昌原文化財研究所 1999 『咸安道項里古墳群Ⅱ』

湖南文化財研究院 2005 『海南新今遺蹟』

湖南文化財研究院 2007a 『羅州長燈遺蹟』

湖南文化財研究院 2007b 『潭陽台木里遺蹟Ⅰ』

허진아 2007 「湖南地域 시루의 型式分類와 變遷」 『韓國上古史學報』 第 58 号 pp131-157

重藤輝行 (佐賀大學芸術地域デザイン学部)

第2節 布留系甕の様相

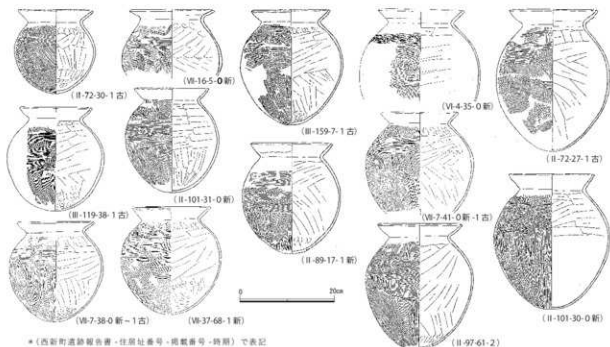
1. はじめに

福岡市西新町遺跡は、古墳時代前期において堅穴建物数の急増と居住域の急拡大が認められ、多数の韓半島系土器、造り付けカマドが確認される。博多湾に面した東西に延びる砂丘上に位置する集落は、当初の漁村的な様相から、国際的な交流拠点へと急激な変貌を遂げる。さらに、集落の変化に伴い土器様相も、布留0式新相以後（以下、本稿では土器編年区分を寺沢1986に基づき表記する¹⁾）に在地の土器様式で構成された西新式土器（森1966）から布留式土器へと一変する。こうした土器様相の変化は、西新町遺跡に先行して博多湾沿岸地域の中心的な交流拠点となる福岡市比恵・那珂遺跡群や福岡市博多遺跡群でも認められる。

これらは、集落と土器の変化がほぼ同時期に発生し、韓半島との交易、さらに古墳出現といった様々な考古学事象の変化が一致する点で、古墳時代初頭における交流と社会の特質を示している。そして、考古学事象の変化として表れた土器様相の変化の背景をどのように説明するか、当該時期の土器研究の課題でもある。そこで、本稿では布留式土器のうち布留形甕（以下、本書の表記に従い「布留系甕」とする。）の諸属性について西新町遺跡の様相を中心に検討し、博多湾沿岸地域における布留式土器の展開について考察したい。

2. 布留系甕の諸属性

西新町遺跡において「畿内系」²⁾土器とされる布留系甕は、布留0式古相に出現し、次の布留0式新相以降に増加する。その出現の背景については、畿内地域からの直接的な技術伝播や集団移入が考えられてきたが、様々な点で畿内地域の布留系甕とは相違が認められる。これらは、久住猛雄により北部九州型布留形甕（甕D以下、「北部九州型布留系甕」とする。）としてその特徴が整理され、



第18図 西新町遺跡の布留系甕 (1/8)

その細分型式としての比恵・博多型(変D<H>)、西新町型(変D<N>)などが設定されている(久住 1999・2017)。久住によると西新町型(変D<N>)の特徴としては、山陰系甕と共通する口縁端部形態、口縁部内外面の凹凸をもつナデ調整、体部形態はなで肩で倒卵形または球咽とされている。これに対し比恵・博多型(変D<H>)は、西新町遺跡のものとは肩部ヨコハケ(ヨコハケが少ない)や、体部形態(肩が張る)、口縁部ナデ調整(擦痕を伴うようなヨコナデ)、体部調整(タキ痕を残す)などの点で差異が指摘されている。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえつつ、布留系甕の諸属性に着目し、畿内地域からみた西新町遺跡、博多湾沿岸地域における布留系甕の特色について述べたい。

(1) 口縁部形態

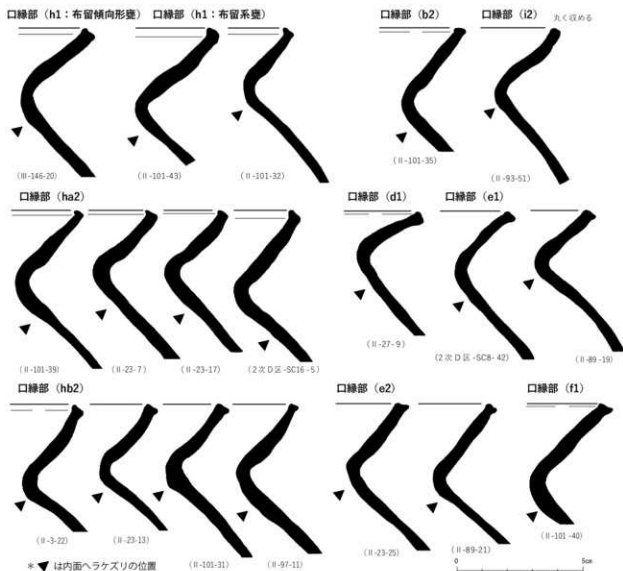
西新町遺跡をはじめとした博多湾沿岸地域の布留系甕の口縁部・口縁端部形態(以下、「口縁部形態」とする。)は、畿内地域における庄内形甕や布留系甕のものとは異なる。布留系甕の口縁部形態には多様なバリエーションが存在し、型式変化を示す属性であるとともに、その分布に空間的差異が認められることから、地域差を示す属性でもありと考えられる。以下、布留系甕の口縁部形態をa～iまでに分類し、筆者が実見した範囲での西新町遺跡での出土傾向とその特徴を述べる³⁾(第19図、第4表)。

畿内地域のものとなる、端部を摘み上げる庄内形甕の口縁部(a)や、内湾して立ち上がり、端部を内側に肥厚し、内傾する面または水平面を作る布留系甕の口縁部(b1～b4)は、西新町遺跡をはじめとした博多湾沿岸地域での出土はごくわずかである(大和型・I型、田中 2024)。類別としては、12次 101号住(35-b2)が該当する。

これに対して、西新町遺跡では、「筑前型庄内甕」(久住 1999、以下、「筑前型庄内形甕」とする。))と共通し、口縁部が直線的に屈曲し、口縁端部を短く摘み上げ、または断面三角形に突出させる口縁部(h)が布留0式古相から新相に少量だが存在する。また、口縁部(h1)の口縁部が伸び、頭部外面に強いナデを施すことに変化した口縁部中位から厚みをもち、やや内湾して立ち上がる口縁部が存在する。これらは口縁部(h1)と同様に口縁端部を内側にわずかに突出させる口縁部(ha1)、または口縁端部を外側へ突出させる口縁部(hb1)に区分でき、布留0式新相か布留1式古相にかけて増加し、内湾気味へと変化する(ha2・ha2)。以後、西新町遺跡においては主流となる(北部九州型・IV型)。

これらは一見古相を呈し、畿内地域における布留0式の初期布留系甕と共通するのように見えるが、畿内地域においても口縁部形態は大和地域(大和型・I型)と中河内地域(列島西部型・II型)が分布で異なり(田中 2005・2024)、大和地域における初期布留系甕の口縁部(b1・b2)と西新町遺跡との共通性はない。畿内地域では口縁部形態と口縁部のナデ調整、肩部施文がそれぞれ相関しており、特徴ある布留系甕を生み出している。

また、中河内地域と同様に、出雲地域西部、備中、備後、伊予地域の日本列島西部では、口縁端部に面を持たせ厚みのある口縁部(c～d⁴⁾)が広域に分布する(列島西部型・II型、田中 2024)。博多湾沿岸地域にも、これらの口縁部が分布している。西新町遺跡においても、直線的に伸びるもの(c1～d1)から、口縁部中位が内湾して伸びる(c2～d2)へと布留0式新相から布留1式古相に変化する。12次 27号住(9-d1)や12次 89号住(19-e1、21-e2)、2次



第19図 西新町遺跡における布留系糸の口縁部形態 (2 / 3)

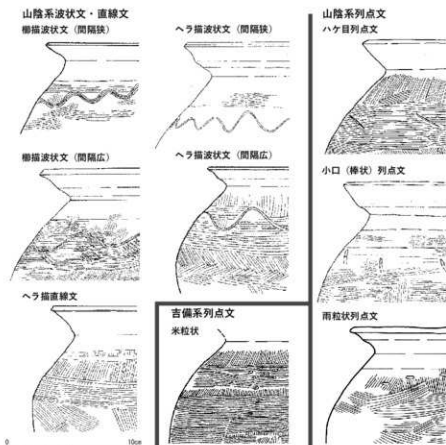
D区SC8(42-e1)などが存在し、少数ながら布留1式古相まで一定数を占める。さらに、そこから派生し、口縁部(c~d)よりも口縁部が長く伸び、端部下端を引き出し、上端部を内側にわずかに捻み上げる口縁部(f)がわずかに存在する。これらは、松山市宮前川遺跡、大分市下郡遺跡をはじめとした伊予・豊後地域で多く分布する(伊予・豊後型・II'型)。西新町遺跡でも12次23号住(24-f1)、12次101住(40-f1)などが見受けられる。

一方、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群の布留系糸の口縁部形態は、布留0式には口縁部(h1)

第4表 西新町遺跡における布留系糸の口縁部形態

調査 次数	報告書/ 地区	遺構名	本稿	重藤 2009	久住 2017	a	b	c	d	e	f	h1	ha2	hb2	i
17	Ⅶ	8号住	0古	Ⅲ古	ⅡA				2				2		1
12	Ⅱ	27号住	0新	Ⅲ古	ⅡB				1						
12	Ⅱ	93号住	0新	Ⅲ古	ⅡB			4	2	1		1	2	2	
2	D	8号住	0新	Ⅲ新	ⅡB					3		2	3		
2	D	7号住	0新	Ⅲ新	ⅡB		1					1	1	2	2
12	Ⅱ	101号住	0新	Ⅳ古			1					2	1	8	4
12	Ⅲ	119号住	1古	Ⅲ古						1		2	6	7	2
12	Ⅱ	23号住	1新	Ⅳ新						1	2	1	7	11	4
12	Ⅱ	89号住	1新	Ⅳ古	ⅡC					2			4	2	1
5	-	SC06	1新	Ⅳ新	ⅡC新			1	1			3	9	8	4
12	Ⅱ	97号住	2古	Ⅳ新			1			1		2	13	18	4
12	Ⅱ	21号住	2古	Ⅳ新	ⅢA古								8	8	3

筆者が実見・断面実測をした一括資料に限る。 時期 布留0式古相=0古 トーンは上位20%



第20図 肩部施文の分類(博多湾沿岸地域の模式図、1/3)

第5表 西新町遺跡における布留系甕の肩部施文

調査 次数	報告書/ 地区	遺構名	本館	重要 2009	久住 2017	山陰系								吉備系	
						波状文 櫛描	直線文 櫛描	波状文 貝殻	直線文 貝殻	波状文 ヘラ描	直線文 ヘラ描	雨粒状	小口	ハケ目	未粒状
17	Ⅷ	8号住	0古	明治	ⅡA										
12	Ⅱ	27号住	0新	明治	ⅡB										
12	Ⅱ	93号住	0新	明治	ⅡB	1							1		
2	D	8号住	0新	明治	ⅡB					1	2	1			1
2	D	7号住	0新	明治	ⅡB					2	1	1			
12	Ⅱ	101号住	0新	Ⅳ古											1
17	Ⅷ	7号住	0新・1	明治		1				1	1		1	1	
12	Ⅱ	119号住	1古	明治						3	3	1			
12	Ⅱ	23号住	1新	Ⅳ新		3	2			2	2				
5	～	SC06	1新	Ⅳ新	ⅡC新					2	4				1
12	Ⅱ	89号住	1新	Ⅴ古				1		1	2				
12	Ⅱ	97号住	2古	Ⅳ新		2				4	4	1	1		
12	Ⅱ	21号住	2古	Ⅳ新	ⅡA古	1				1	1				

時期 布留0式古相～0古 トーンは上位20%

多くは山陰系波状文・直線文(櫛描・ヘラ描)である(第20図、第5表)。山陰系波状文・直線文においては特にヘラ描施文が多数を占めているが、当初の布留0式古相は数が少ないものの、布留0式新相には櫛描施文が主流であり、太筋のヘラ描施文や、肩部を全周しないもの、2段に施すもの、波状文の波形の間隔が狭いものが加わり、布留1式古相には細筋のヘラ描施文や波形の間隔が広い波状文が見れる。

また、山陰系列点文は12次36号住(12-ハケ目)、12次50号住(40-小口)、12次91号住(20-小口)、12次139号住(47-ハケ目)などで数多く認められるが、吉備系列点文について

が多い。このことは、これらの遺跡群での布留系甕の出現が先行することを示すとともに、布留系甕の出現に筑前型庄内形甕からの連続的な変化を認めることができる。そして、布留1式以降は口縁部(ha2・hb2)へと変化し、博多湾沿岸地域においては口縁部形態には大きな差が認められなくなる。このことから、口縁部形態はより広い、博多湾沿岸地域といった布留系甕の地域性を示すようになると思われる。

(2) 肩部施文

口縁部形態以外の布留系甕の諸属性として、肩部施文(次山1995)が特徴的である。肩部施文は、山陰系波状文・直線文(櫛描・貝殻・ヘラ描)、山陰系列点文(雨粒状・小口・ハケ目)、吉備系列点文(米粒状)に分類できる⁵⁾。

西新町遺跡においては多数の布留系甕において肩部施文が認められるが、

はわずかであり、遺跡全体でも12次36号住(13-米粒状)、12次139号(57-米粒状)、12次101号住居(39-米粒状変則)、5次SC06(61-米粒状)、17次6号住(28-米粒状)のみである。なお、山陰系波状文・直線文については口縁部形態と相関せず、いずれの口縁部形態にも多いが、山陰系列点文については口縁部(h・ha・hb)とともに口縁部(c~e・f)に対応する。

畿内地域における山陰系波状文・直線文は、櫛描・貝殻施文が布留0式に存在するが、布留1式以降にはへら描施文が出現し、以後増加する。博多湾沿岸地域ではへら描施文が特徴的に分布しており、他地域に先行して出現している可能性がある。

比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群の布留系甕は、各種の肩部施文が認められるが、山陰系波状文・直線文、山陰系列点文が多く、円形竹管状の刺突文も巡らせるものが比恵遺跡9・10次SE15(112-円形刺突)で出土している。吉備系列点文が非常に少ない点は、博多湾沿岸地域の特徴であろう。

西新町遺跡に比べ布留0式古相から新相と古い時期のものも多く、波状文・直線文には櫛描・貝殻施文が存在し、波状文を2段に施すもの比恵遺跡9・10次SE15(219-へら描波状文)や波状文の波形の間隔が狭いものが比恵遺跡9・10次SE15(109-へら描波状文)などの古い時期には認められる。肩部施文の種類については、博多湾沿岸地域では次第に細筋のへら描施文へと移行するため、細かな施文方法や施文原体の変化は時期差を反映している可能性がある。

(3) 調整技法(体部内面へラケズリ、口縁部内外面ナデ、肩部外面ヨコハケ)

布留系甕の調整技法についても、西新町遺跡の特徴を整理する。これらは、口縁部形態や肩部施文と同様に西新町遺跡の布留系甕の特徴を示すが、他の諸属性との関係は明確に対応するわけではなく、量比の多寡という傾向を示している。

①体部内面へラケズリ

体部の内面へラケズリの上部位置については、口縁部(b~f)は内面の頸部境界からわずかに下がった位置から行う。これらは、畿内地域や列島西部各地に分布する布留系甕の特徴である。

一方、西新町遺跡の口縁部(h・ha・hb)については、頸部下部にユビオサエを巡らせるため、面をもち、頸部境界よりさらに下がった位置より体部内面へラケズリを行う(第19図)。また、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群については、当初は、筑前型庄内形甕と同様に頸部境界からわずかに下がった位置にあるが、次第にユビオサエの範囲が広がるという変遷をたどる。

②口縁部内外面ナデ

西新町遺跡の口縁部内外面のナデは、回転性がありナデ調整の単位の凹凸が明瞭なナデ(ナデB、田中2005・2024、久住1999のナデII b)が施される個体が多い。これに対して、比恵・那珂遺跡群・博多遺跡群では、凹凸を持たない平滑なナデが多い(ナデA、田中2005・2024、久住1999のナデII a)。ナデと口縁部形態については、口縁部(h・ha・hb)がナデA・Bに、口縁部(c~e・f)がナデBに対応する。

同様の口縁部内外面のナデの差は、畿内地域でも大和型庄内形甕(布留傾向形甕⁶⁾)の影響が強い大和地域と、山陰系土器の影響のみの中河内地域でも認められ(田中2005・2024)、前提となる土器製作技術の違いによるとみられる。

③肩部外面ヨコハケ

西新町遺跡の布留系甕については、肩部ヨコハケ(回転性のあるもの)が基本的にどの個体にも

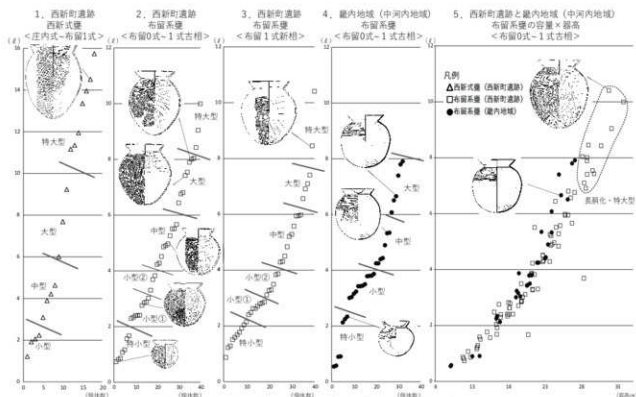
施される（布留傾向形甕を除く）。一方、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群の布留系甕については、久住が指摘するように布留0式には肩部ヨコハケを欠くものが多いが（久住 2017）、ハケ目の見えない板ナデも多く観察される。また、肩部ヨコハケが不明瞭で、肩部施文のみのものも多く存在する。

畿内地域においては肩部ヨコハケは多いが、大和地域では肩部ヨコハケを省略するものが多く、布留傾向形甕の影響を受けている。

（4）容量による作り分け

西新町遺跡においては、田崎博之や溝口孝司、久住らによって在来系の西新式甕の法量の影響を受け変容・折衷した布留系甕の存在が指摘されている（田崎 1983、溝口 1988、久住 1999）。また、小林正史と鐘ヶ江賢二により北部九州地域における深鍋のス・コゲと容量が検討されている（小林 1997、鐘ヶ江・小林 2011）。古墳時代前期への容量のサイズ組成の変化として、超小型・小型・中型・大型の作り分けが2ℓ台・4ℓ弱付近・8ℓ付近に存在し、畿内地域との共通性が高まり、中型・小型の増加と大型が減少することなどが示される。また、西新式甕は、畿内地域のものとは比べて容量が大きいのが存在することが特徴である。

そこで、本来の土器の用途や作り分けを反映すると思われる容量に着目し、西新町遺跡の布留系甕の容量について計測を行った（第21図）⁷⁾。布留系甕の容量の計測は、12次・13次出土で完形または図上復元が行えるものを対象とし、西新式甕については県調査のすべてを対象とした。時期は、布留系甕は布留0式～布留1式古相、布留1式新相に区分し、西新式甕は両時期とした。その結果、布留0式～1式古相の布留系甕には、2ℓ付近、6ℓ付近、8ℓ前後に明確な分布の断絶が、3ℓ・4ℓ付近にもやや弱い断絶がある（第21図-2）。そして、10ℓ付近を最大とする。それぞれ特小型（2ℓ以下）、小型（3ℓ以下①、4ℓ②以下でもさらに区分）、中型（6ℓ以下）、大型（8



第21図 西新式甕・布留系甕の容量（土器1/16）

ℓ未満)、特大型(8ℓ以上)に区分される。布留1式新相の布留系は2.5ℓの間、3ℓ、4ℓ、6ℓ、8ℓの間にそれぞれ分布の断絶が認められ、10.5ℓ付近を最大とし、より特小型～中型の作り分けが明瞭になる(第21図-3)。また、西新式は小型(3ℓ以下)、中型(6ℓ未満)、大型～特大型(6ℓ以上)となり、布留系とはサイズの区分が対応しない(第21図-1)。特大型は、最大15.7ℓ(他の地点では20ℓ前後も存在する)となる。

一方、畿内地域については、布留0式～布留1式古相の東郷・中田遺跡群の八尾市萱振遺跡SE03・SK03、八尾市小阪合遺跡落ち込み7(第1次KS82-01)、小阪合遺跡SD316(第3次KS83-03)、小阪合遺跡SD1(第4次KS84-04)を対象とし、容量の計測を行った⁸⁾。畿内地域は、1ℓ、3ℓ、4ℓ、6ℓに分布の断絶があり、8ℓ程度を最大とする。特小型(3ℓ以下)、小型(4ℓ以下)、中型(6ℓ以下)、大型(8ℓ未満)に区分される(第21図-4)。

畿内地域と比較すると、西新町遺跡は中型・大型の区分はほぼ共通するが、小型の細分と特大型の有無に大きな差がある。小型に関しては、西新町遺跡では1ℓ単位での作り分けが認められ、それぞれサイズごとに容量が近接していることから明確な作り分けが認められる。また、畿内地域に存在しない8ℓ以上の特大型は、容量区分としては西新式に近く、この容量の影響を受けていることを示している。さらに、西新町遺跡の布留系は、容量に応じて器高が高くなり、大型は長胴化が著しくなる点で形態的にも特徴がある(第21図-5)。特大型は、西新町遺跡、福岡市藤崎遺跡などの早良平野、糸島市三雲遺跡群などの糸島地域にも多く分布し⁹⁾、在来系の西新式の残存度合いの高さやその容量の影響を受けたものとして評価できる。西新町遺跡の布留系については、

第6表 畿内地域と博多湾沿岸地域の布留系諸属性の比較

1. 布留0式

(注:内式部形略—布留式古相新相:森田・西村2006、B(新)・B(旧):久住1999)

	畿内地域		博多湾沿岸地域	
	<大和>	<中河内>	<比叡・那珂・博多>	<西新町>新相のみ
口縁部形態	a・b (c～d少)	c～d (a・b少)	h・ha・hb (c～d少)	
胴部絶文	吉備系・山陰系		山陰系	
調整技法	調整ヘラケズリ 口縁部ナデ 胴部ヨコハケ		調整ヘラケズリ 口縁部ナデ 胴部ヨコハケ	
容量	特小型、小型、中型、大型		特小型、小型 (①、②) 中型、大型 中型、大型、特大型	
布留傾向形態	○	なし	○	少
布留系諸属性の分類	大和型・I型		北部九州型 (比叡・博多型) (西新町型)	
畿内: 田中2008・2024 博多湾沿岸: 久住2017				

2. 布留1式

(布留式古相新相:森田・西村2006、B(新)・B(旧):久住1999)

	畿内地域		博多湾沿岸地域	
	<大和>	<中河内>	<比叡・那珂・博多>	<西新町>
口縁部形態	b		ha・hb (c～d少)	
胴部絶文	吉備系・山陰系 (ヘラ線)		山陰系 (ヘラ線)	
調整技法	調整ヘラケズリ 口縁部ナデ 胴部ヨコハケ		調整ヘラケズリ 口縁部ナデ 胴部ヨコハケ	
容量	特小型、小型、中型、大型		特小型、小型 (①、②) 中型、大型 特小型、小型 (①、②) 中型、大型、特大型	
布留傾向形態	少	なし	少	なし
布留系諸属性の分類	定型・I型		北部九州型 (比叡・博多型) (西新町型)	
畿内: 田中2005・2024 博多湾沿岸: 久住2017				

山陰系土器製作技術
西新町遺跡の特徴

容量の作り分けの豊富さが特徴として挙げられる。造り付けカマド検出住居や韓半島系土器、山陰系土器出土住居に関係なく布留系甕が出土することから、これらが幅広い住居で使われている。特大型、長胴化という点では韓半島の軟質土器甕とも共通しており¹⁰⁾、様々なサイズを作り分けることでその用途や機能に対応したと考えられる。

(5) 小 結

以上の検討により、西新町遺跡の布留系甕について、畿内地域、そして、博多湾沿岸地域の比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群との比較を行った。その結果、口縁部形態、肩部施文については時期を示す独自の変化であるとともに、博多湾沿岸地域の布留系甕の地域性を示す属性であることを確認した。これらについては久住が指摘した体部形態などに加え、北部九州型布留系甕の特徴として把握することができる(第6表)。なお、列島西部型の布留系甕に特徴的な口縁部(c～e)も存在しており、北部九州型布留系甕とともに、これらの特徴には山陰系土器の製作技術体系からの影響が認められる。

また、土器の容量による作り分けからは、西新町遺跡では小型に関しては1ℓ単位での明確な作り分けが認められる。さらに特大型の有無にも西新式甕の影響があり、小型の細分と超大型の有無から、幅広い需要に対応した豊富な作り分けが存在するという点は、西新町遺跡の特徴となる。

さらに、細部の調整技法について着目すると、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群との違いも存在する。特に布留0式の口縁部内外面ナデ、肩部外面ヨコハケ、布留傾向形甕の有無については、布留系甕の出現過程の違いを示している。

3. 博多湾沿岸地域における布留系甕の出現

西新町遺跡の布留系甕は畿内地域のものとは異なる特徴があり、さらに博多湾沿岸地域の内部でも比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群と西新町遺跡では体部形態や細かな調整技法の違いが認められた。こうした差異の背景について検討するため、当地域での布留系甕の出現過程を示す(第22図)。

(1) 比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群における庄内形甕の出現

比恵・那珂遺跡群では、庄内式併行期(庄内2式前後か、久住I B期)に筑前型庄内形甕が出現する。筑前型庄内形甕は比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群を中心に分布し、その製作地が近傍に存在する可能性が高い。筑前型庄内形甕の影響関係に関しては、大和地域の大和型庄内形甕とされるが(久住1999・2017)、小平底、やや細筋の体部外面タタキ目、頸部内面のヘラケズリの位置がやや低い点で、生駒西麓型庄内形甕へと分化する直前の中河内地域の庄内形甕もこの特徴を有しており、系譜関係は明確ではない。しかしながら、前段階の西新式甕に対して、庄内形甕には新たに畿内地域からの「軽量薄甕」の出現という形式規範(器形概念)と「外面タタキと内面ヘラケズリ」による土器製作技術体系という受容が併せて認められる。

(2) 比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群における布留系甕の出現

布留0式古相から新相にかけては、筑前型庄内形甕をハケ調整で平滑に仕上げた、布留傾向形甕(庄内形甕)が増加し、そこから北部九州型布留系甕が出現する。布留系甕には口縁部(h)や口

に大和地域)からの「器面の平滑化」という形式規範(器形概念)と、山陰系土器の製作技術体系という2つの異なる変化が発生している。

(3) 西新町遺跡における布留系甕の出現

一方、西新町遺跡のように、前段階から庄内形甕の「軽量薄甕」という形式規範(器形概念)や、その製作技術体系を持たない集落では、布留0式新相以降に、比恵・那珂遺跡群や博多遺跡群で先行して出現した布留系甕の影響を受け、山陰系土器の影響が強い布留系甕が、製作技術体系と形式規範(器形概念)を併せて受容する。また、西新式甕の容量・法量の影響を受けた特大型の布留系甕の存在や長胴化傾向など、前段階の土器の影響を残す点で西新町遺跡の特徴を示している。

(4) 小 結

博多湾沿岸地域における布留系甕の差異は、前段階の筑前型庄内形甕の影響が強い比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群と、すでに博多湾沿岸地域で出現した北部九州型布留系甕の影響を受け、山陰系土器の製作技術体系の影響が強い西新町遺跡という、両遺跡の保有する土器の製作技術体系の違いを反映している。さらに、博多湾沿岸地域における庄内形甕・布留系甕の受容には、同じ「く」の字状口縁部」であるが西新式甕にはない庄内形甕や布留系甕の「軽量薄甕」と、庄内形甕にはない布留系甕の「全面ハケ調整化」という畿内地域からの新たな形式規範(器形概念)の受容も存在する。このため、製作技術体系と形式規範(器形概念)の2つの受容が存在するといえる。

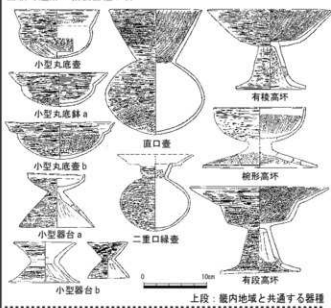
こうした状況は、畿内地域や各地域でも存在しており、前段階からの土器の製作技術体系の違いを反映している。畿内地域では、大和型庄内形甕→布留傾向形甕→大和型の初期布留系甕という変化を見せる大和地域と、生駒西麓型庄内形甕の残存により、山陰系土器の土器製作技術を受容した列島西部型の初期布留系甕が分布する中河内地域という違いがある。また、前段階に「軽量薄甕」が存在しない西部瀬戸内地域(伊予・備後)、豊後地域においても、後者の変化に近く、列島西部型の初期布留系甕が存在する。

しかし、博多湾沿岸地域の内部では、検討した口縁部形態、肩部施文、調整技法などの諸属性は、それぞれが一对一对せず、明確な型式差とはならない。また、北部九州型、伊予・豊後型、畿内地域における大和型、さらに列島西部型といった布留系甕の型式差というよりも、遺跡ごとのおおよその傾向であり、次の布留1式にはこうした差異はほぼ解消される。このため、博多湾沿岸地域における北部九州型布留系甕の差異は、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群の方が西新町遺跡に先行して出現するという、布留系甕の出現にかかる時期差も反映しているといえる。

4. 西新町遺跡の精製器種の特徴

西新町遺跡では、精製器種は精良な胎土、細筋横方向のヘラミガキ、脚部頂部凸面接合などの共通する製作技法を用いた土器の製作技術体系である精製器種B群(次山1993)が主体を占める。吉備地域から影響を受け畿内地域で成立したこれらの精製器種は、布留系甕とは異なる製作技術体系であるが、西新町遺跡では布留系甕とほぼ同時期である布留0式古相から新相にかけて出現する¹¹⁾。畿内地域と西新町遺跡の精製器種との比較については、本書では市村慎太郎が検討を行っているため詳細はそちらを参照されたい。ここでは、畿内地域からの布留式土器総体の受容について考える

西新町遺跡：精製器種 B 群



小型器器 D

上段：畿内地域と共通する器種

下段：西新町遺跡（博多湾沿岸地域）に特徴的な器種

直口鉢

低脚杯

有段口縁壺

小型壺

第23図 畿内地域と西新町遺跡の精製器種B群の器種構成(1/6)

ため、布留系甕との比較として精製器種B群の器種構成とその変化を示す器種の消長と型式変化について若干の所見を述べる。

(1) 精製器種の器種組成

精製器種B群の器種組成では、畿内地域と共通する器種として小型九底壺、小型九底鉢（くの字外反口縁部をもつもの:a、有段口縁部をもつもの:b）、小型甕台（中実、皿状の坏部をもつもの:a、中空X字形のもの:b）、中型壺（直口壺・二重口縁壺）、高坏（有稜、有段、壊形）がある¹²⁾。

一方、浅い鉢形をもち、博多湾沿岸地域では下大隈式末（常松 1991）にはすでに存在する直口鉢、山陰系土器の低脚环、小型壺および山陰系土器と同じ有段口縁部を持つ有段口縁壺³³⁾などは、畿内地域には存在しない器種＝形式規範（器形概念）であり、西新町遺跡（博多湾沿岸地域）に特徴的な精製器種 B 群の器種として存在する（第 23 図）。なお、小型丸底鉢 a は、畿内地域には精製器種 B 群としてのみわずかに存在しないが³⁴⁾、西新町遺跡では主体となる。

また、畿内地域との関係では、西新町遺跡の小型丸底壺の形態については、器高に対し体部が深く壺形を呈するものが多く、これは体部が浅く鉢形を呈する大和地域の小型丸底壺に対して、中河内地域の特徴とされる（次山 2006¹³⁾）。さらに、中型壺のうち、二重口縁壺については中河内地域でのみ精製器種 B 群を構成しており、中河内地域との親縁性がある。

(2) 器種の消長と型式変化

第7表 西新町遺跡の布留系甕の諸属性と精製器種の器種組成

[illegible]

小型丸形歯については、口輪部高/唇高の値を算出し有数化し、数値と共に口輪部の伸びから判断した。

①: 0.2-0.25, ②: 0.25-0.35, ③: 0.35-0.45, ④: 0.35-0.5

器種の消長としては、小型丸底鉢 a、小型器台 a が布留 2 式まで継続し、小型精製器種三種を構成する点で古い様相をもつ器種が残存する。また、高坏についても、畿内地域では有段高坏、埴形高坏が布留 1 式古相で激減するが、西新町遺跡では布留 2 式まで継続する点で同じである(第 7 表)。

一方で、畿内地域では布留 1 式古相(森岡・西村 2006 の布留式古段階新相)の指標となる有段口縁部をもつ小型丸底鉢 b の数は少なく、その出現は遅れる。布留 2 式(同、布留式中段階古相)の指標となる X 字形を呈する小型器台 b についても、少数である。また、小型丸底壺の口縁部が伸長するという型式変化があるが、一括資料中では、新しい時期のものとやや古い時期のものが混在しており、その型式変化も不明瞭で個体差がある。

(3) 小 結

精製器種においては、精製器種 B 群という精製器種に共通する製作技術体系と、「小型器種」そのものの形や高坏、壺などの器種=形式規範(器形概念)を受容している。精製器種 B 群は細部の違いはあるが、総じて畿内地域の精製器種と共通性が高い。このため、新たに畿内地域から影響を受けた形式規範(器形概念)と製作技術体系という同一の変化が認められる。この点は、布留系喪とは異なる。

一方、畿内地域には存在しない直口鉢や低脚坏などの器種を含む博多湾沿岸地域や西新町遺跡の精製器種 B 群の器種構成の豊富さは、これらを製作する集団が、新たな形式規範(器形概念)を取り込み製作する主体性を持つことを示している。また、精製器種 B 群は、小型丸底壺の型式変化や、器種の消長からは、形式規範(器形概念)、器種構成などの土器に関わる情報が頻繁に更新されるような状況ではなく、布留 0 式新相前後に中河内地域から伝わった精製器種に関わる形式規範(器形概念)や製作技術体系が大きく変化することなく、当初のまま保持されるような状況にあるといえる。このため、精製器種 B 群には、一定の基準で製作技術体系を維持できる製作者集団の存在が考えられる。

5. 布留式土器の展開とその背景

博多湾沿岸地域における布留式土器の展開に関する既往の研究には、【政治的関係モデル】【集団移入モデル】【交易ネットワークモデル】、そこから発展した【政治的取引ネットワークモデル】の 4 つのモデルが存在する。その背景をどのように考えるか、それぞれ意見が異なる。

(1) 博多湾沿岸地域の布留式土器の展開に関するモデル

寺沢薫は西日本における布留 0 式土器の分布を検討し(寺沢 1987)、広範囲かつ高い密度で「畿内系土器群」が分布する北部九州地域については、「初期ヤマト政権」(本稿では、「倭王権」とする。)中枢との政治的関係を反映しているとした【政治的関係モデル】。これに対して、博多湾沿岸地域では、外来系土器の受容という視点から、地域や遺跡、土器製作者や移入者集団の性格付けが行われた(溝口 1988、井上 1991)。これら布留式土器への評価はいずれも「畿内系」土器とされ、畿内地域からの集団の移入や移動を想定する【集団移入モデル】。

一方、久住は、北部九州地域における布留式土器の波及は、畿内地域との特殊な(政治的な)情報の共有を背景とし、工人集団を移植することで半ば独自に生成・進化されたと考える(久住 1999・2004)。その前提として土器の生産と消費が交換によって成り立つ「市」ネットワークの

存在を想定する【交易ネットワークモデル】。その後、久住は、土器様相の面では畿内地域の倭王権からの影響を受けて比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群で筑前型庄内形甕、精製器種B群、北部九州型布留系甕が成立し、その背後に対外的な交易である「博多湾貿易」の成立をみている（久住2007）【政治的取引ネットワークモデル】。

（2）布留式土器に係る「形式規範（器形概念）」「製作技術体系」の2つの受容

本稿の検討では、博多湾沿岸地域における布留式土器の受容には、筑前型庄内形甕にみる「軽量薄甕」、布留系甕や布留傾向形甕にみる甕の「器面平滑化」や、精製器種における「小型器種」そのものの形といった形式規範（器形概念）と、それを形作るための庄内形甕や山陰系土器、精製器種B群といった製作技術体系の2つの受容が存在することが明らかになった。これらは、庄内形甕や精製器種B群のように両者が併せて受容される場合もあり、布留系甕のように個別に受容される場合もある。

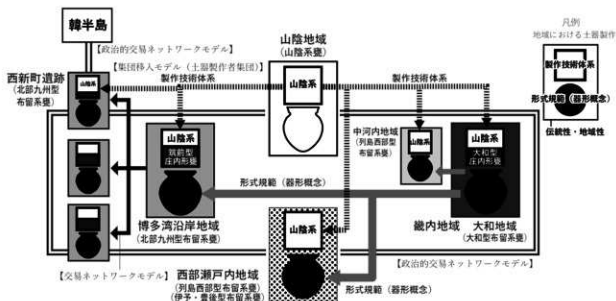
形式規範（器形概念）は、畿内地域からの情報をもとに筑前型庄内形甕や北部九州型布留系甕、精製器種が出現する。独自の型式学的特徴の存在や、製作技術体系、細部の調整技法の違いは、「形式規範（器形概念）」のみの受容であり、各地で製作、変容が可能であったことを示す。これら、筑前型庄内形甕や布留系甕、精製器種などの情報は、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群に対して先行して伝わる。

一方、土器製作技術は、山陰系土器や中河内地域の影響が強く認められる。独自の特徴と変化をもちつつ山陰系土器の強い影響を受けた布留系甕や、規格度や精緻度とともに製作技術体系の保持性の高さをもつ精製器種からは、これらの製作技術体系をもつ集団の専門性や凝集性の高さがうかがえる。

さらに、博多湾沿岸地域では、畿内地域にはない容量の作り分け、新たな器種の追加や、土器の変化が異なることから、先行して各地に存在する形式規範（器形概念）や製作技術体系が影響し、各地の伝統性や地域性といった状況に合わせて、土器情報を改変していくという側面も認められる。

（3）布留式土器の2つの受容とモデルとの対比

こうした2つの受容を考えるならば、博多湾沿岸地域における布留式土器の展開に係る既往のモデルについては、次のように考えられる。まず、【政治的関係モデル】では、土器という日常品の生産と流通は、社会的な地位や階層に基づくものではない。当該期の土器研究からは、特定の集団による再分配や従属的生産によって日常品が交換されるわけではないことが示されている。一方、【集団移入モデル】では、畿内地域からの集団の移入を考えるには、畿内地域と博多湾沿岸地域での布留系甕には大きな違いがあり、搬入品が乏しい点は説明が難しい。また、精製器種B群については、畿内地域、特に中河内地域からの影響が考えられるが、畿内地域の布留系甕がわずかにしか存在しない点は、畿内地域からの集団移入の課題となる。一方、搬入品ではなく直接的な伝習や習熟が必要である製作技術体系については、山陰系土器や精製器種B群といった土器製作技術体系をもつ土器製作者集団の移入や移動を考えることができる。さらに製作者集団であれば、精製器種のみだけの受容についても説明が可能である。しかし、山陰系土器の土器製作者集団の移動だけでは、布留系甕の出現については山陰地域に「くの字状口縁部」という形式規範（器形概念）が存在



第24図 布留式土器（布留系壺）の展開に関するモデル

しないことから説明できない。

また、【交易ネットワークモデル】では、ネットワークを通じた形式規範（器形概念）という情報の移動として理解することが可能である。また、比恵・那珂遺跡群と西新町遺跡・その他の集落といった博多湾沿岸地域の内部における関係としては、土器の交換については説明可能である。しかし、交換されるのは製品としての土器であり、わずかな地域差をもつ土器の製作技術体系や形式規範（器形概念）の移動やその導入の背景については、別の説明が必要になる。さらに、【政治的交易ネットワークモデル】では、形式規範（器形概念）の移動については同様に理解可能であるが、首長やエリート層における交易として土器が交換されるのであれば、鉄素材や舶載品としての鏡、副葬用鉄鏃、水晶・碧玉製玉類などの交易品と土器が同列に扱われる必要がある。しかし、布留式土器の搬入・搬出は少ないことから、土器は交易品とは同義ではなく、日常品と考えられる。このため、広域的な博多湾貿易や日本列島における首長やエリート層の政治的交易ネットワークモデルでも、すべてを説明できない。むしろ西新町遺跡の状況を踏まえると、交易に従事する人々の用いる日常品という性格が強い。このことから、政治的交易ネットワークそのもので移動する物ではなく、交易従事者の用いる日常品といった、ネットワークに関わる副次的な移動が想定できる。

以上のモデルの検証からは、それぞれのモデルが単独では成り立つことが難しいことを示しており、いわば、重層的なモデルの存在が当該期には想定しうる（第24図）。

（4）結 論

古墳時代前期の日本列島西部において、首長やエリート層が介在する政治的交易ネットワークが存在したことは、西新町遺跡、比恵・那珂遺跡群をはじめ、宮前川遺跡、岡山市津寺遺跡、出雲市古志本郷遺跡や、畿内地域における東郷・中田遺跡群、桜井市纏向遺跡など交流拠点とされる遺跡群が各地に存在することから明らかである。そして、それに伴い各地で人々の移動が活発化し、「軽量薄壺」「器面平滑化」「底部丸底」「小型器種」など日常品である土器の用途や志向という形式規範（器形概念）などの情報が畿内地域から伝えられたとみられる（第24図）¹⁶⁾。さらに、弥生時代後期

後葉以降、列島規模で集団と社会の流動性が高まり、山陰系土器や精製器種 B 群など各地域の土器や製作技術体系を持つ集団が各地へ移動し、土器製作に関わったことが想定できる¹⁷⁾。

このように見れば、政治的取引ネットワークに伴う人々の移動と、列島規模での社会と集団の流動性の高まりに伴う土器製作者集団の移動によって、布留式土器が博多湾沿岸地域に伝えられたことになる。そして、博多湾沿岸地域の内部では、久住が指摘するように比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群を中心とし、周辺には交流ネットワークを介して展開している（久住 1999）。

西新町遺跡のように交流拠点となった集落遺跡には、その外来系土器から他地域から多くの人々が交易従事者として往来し、滞在・居留していたことを示している¹⁸⁾。日本列島各地に存在する交流拠点はその交流先が異なるものの、それらの人々が滞在時に使用する汎用性が高い日常土器が必要とされたと考えられる。また、西新町遺跡の砂丘上や臨海地にこれらの遺跡が立地するという点は、交流のために人が集まる場所であるとともに、土器作りに必要な粘土の採取が近傍では可能ではなく、外部からの供給を必要としていたとみられる。このため、交流で行き来する人々への日常品としての供給が必要であり、土器製作者集団の移入先として選ばれたのではないだろうか。

以上の点から西新町遺跡の布留式土器は、古墳時代前期における日常品としての土器の特質を示していると思われる。

【註】

1 西新町遺跡における当該期の編年としては重藤 2009、久住 1999・2017 があり、図表では適宜これらを併記する。ただし重藤編年と久住編年では、一括資料の位置づけについて相違が認められる。これには、布留系甕・小型丸底甕の系統認識の違いとともに、資料の一括性や混入品といった資料の取扱いの差がある。当該遺跡が砂地の遺跡において多数の堅穴建物が重なり合って検出されたためであり、今後、層位や床面直上資料の抽出が必要となる。

2 寺沢 1987 以降、列島西部で出土する布留式土器、特に布留系甕については、「畿内系」土器とされ、畿内地域との政治的関係性を背景として各地へと展開したものとされた。畿内地域にも布留系甕が存在するが、本稿での検討からは、畿内地域の布留系甕と各地の布留系甕は同一のものではなく、製作技法も山陰系のものである。このため、その影響関係を常に解釈が付きまとう「畿内系」土器という呼称は適切ではないと考える。

3 2004 年 12 月に福岡市教育委員会、2005 年 3 月に福岡県教育委員会にて資料調査を実施し、断面実測を行った（2・5 次調査、12 次調査）。その他の資料（3・12・15・17・19・20・22 次調査）については、2023 年 5 月の九州歴史資料館における西新町遺跡出土品再整理事業検討会で実見した（以下、福岡県教育委員会が調査を実施した 12・15・17・20・22 次調査を「県調査」とする。）

4 口縁部 c～e はやや厚みをもって直線的に開き、口縁端部に 4～6 mm ほどの外傾する面をもっておわるもので、口縁部 c は外傾する面を作りおわるもの、口縁部 d は外傾する面を上下に拡張するもの、口縁部 e は外傾する面の下端を外側に引き出すものに、それぞれ口縁端部を分類できる。一括資料中では、口縁部 c～e は互いに共伴する事例が多く、後述するナデ調整の特徴を踏まえれば、口縁部 c～e の差異は端部ナデ調整時において最終的にナデを施す部位の差であると思われる。そのため、本稿では口縁部 c～e を、同一の系列内でのバリエーションとしてとらえる。

5 次山淳の分類に従い（次山 1995・1997）、吉備系列点文（米粒状）、山陰系列点文（刷毛目・雨粒状）とした。ただし、小口列点文については、次山は吉備系とするが、備中・備後地域では前段階からの系譜が追えず、山陰地域では少数であるが出土は認められる。また、刷毛目列点文と同様の施文方法であることから本論では山陰系文様

としてとらえる。

6 布留傾向形甕は、縦向遺跡で甕Cとして分類されたもののうち（関川 1976）、庄内形甕の製作技法に作られ、最終的に全面ハケを調整で仕上げた甕である。外面はタタキ目が観察できることから庄内形甕と同様にタタキ成形のち、体部はハケ調整によって成形時のタタキ目を消去し、肩部付近にはタテハケ、または断続的なナナメハケを巡らせることを特徴とする。また、口縁部内面にはナナメハケを残す点などで区別できる。布留傾向形甕は、製作技術体系としては厳密には庄内形甕であるが、全面ハケ調整による器面平滑化、底部の球形化を志向する点で、形式規範（器形概念）としては布留形甕との共通性をもつ（田中 2024）。

7 容量の計測については円柱集計算法により実施し、スキャニングした土器実測図を円柱状に分割してIllustrator(Adobe社)を用いて面積を計測し、さらに体積を算出した。容量の提示方法については小林 1997 などと同様に、容量区分を示すため、容量の小さいもの（原点側）から大きいものへと並べた容量グラフにおいて、分布の断絶からサイズクラスを設定する。なお、小林正史らとの研究成果の比較のため、2次調査の容量についても同様に計測し、小林正史らの計測結果との誤差が5%前後であることを検証した。

8 査振遺跡 SE03・SK03、小阪合遺跡小阪合遺跡落ち込み7（第1次 KS82-01）については、小林正史が公開している容量データ（土器容量データベース_小林正史作成 20240909<https://researchmap.jp/read0040693/published-works>）、を、小阪合遺跡 SD316（第3次 KS83-03）、小阪合遺跡 SD1（第4次 KS84-04）については筆者計測データを用いた。

9 比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群でもわずかに特大型のサイズは認められるが、管見では少ないとみている。地域性を示すかどうかについては今後の課題としたい。

10 造り付けカマド検出住居や韓半島系土器・甕出土住居においても、深鍋としては布留系甕が出土しており、住居単位での器種としての使い分けがなされていない点がすでに指摘されている（吉田 2009）。

11 博多湾沿岸地域では比恵・那珂遺跡群で庄内式併行期（庄内3式）にはすでに存在していることから、筑前型庄内形甕とはほぼ同時期の出現であり、布留系甕とは異なる時期である。博多湾沿岸地域においては布留系甕と精製器種B群を同一の系統とする意見があるが、土器製作技術やその系譜となる地域が異なる。この点は小型丸底甕や高坏などの同じ形式規範（器形概念）を異なる精製器種B群や布留系・山陰系の土器製作技術体系で製作している点からも明らかである。

12 小型丸底鉢aは重藤 2001 の外反口縁鉢Ⅱ式・Ⅲ式に、重藤 2009 の小型丸底鉢Ⅱ・Ⅲ式に対応する。小型丸底鉢bは重藤 2009 の畿内系小形二重口縁鉢に対応する。なお、大小の分類に関しては学史的な形式としては「小形・大形」を使うべきだが、学史的用語である「小型精製器種三種」を重視し、小型丸底甕・小型丸底鉢・小型器台を用いる。

13 直口鉢は重藤 2009 における小形精製直口鉢、小型甕は小型丸底甕Ⅰ式に対応する。

14 精製器種B群ではないが、精製器種A群（V様式）のものとしては厩原市和田庵寺下層 SD145 や田原本町保津宮古遺跡第3次 SD103・104、桜井市菅墓古墳周辺 SX01 下層などで類似が、布留系・山陰系と同様の精製器種C群（三好 2007）と同様のものが八尾市久宝寺遺跡（久宝寺南）K3 号墓周溝内下層、K-SX-3 から出土している。畿内地域に存在する器種ではあるが、精製器種B群の器種としては少ない点で、新たに西新町遺跡や博多湾沿岸地域で取り込まれ主流となった器種として考えられる。

15 2023年5月の九州歴史資料館における西新町遺跡出土品検討会の市村慎太郎による観察所見である。

16 日本列島西部の各地における布留系甕の主な分布は、前段階に「くの字状口縁部」をもち「厚甕」、または「タタキ成形の軽量薄甕（庄内形甕）」が分布する地域に集中し、吉備系や山陰系、讃岐系、阿波系など「器面平滑化」

された「軽量薄甕」が分布する範囲には分布は少ない。このことから布留形甕の展開は、「く」の字状口縁部」をもつ甕を用いる地域における「器面平滑化」と「軽量薄甕」への志向を示すと考えられる（田中 2014）。

17 新たな土器の出現と定着については、民族考古学でも検討されており、稲作農耕民の流動性の高い東北タイ・ラオスの民族事例では、土器製作技術の拡散は女性の婚姻よりも、集団的な移転によるものが多いという（徳澤 2018）。タイ北部では、良田を求めて移住する農耕民の土地獲得を伴うような集団移転や、専門的な土器作り村における生産・販路の新天地を求めた移住による技術伝播がある（北野 2014）。両者は個人の単発的、一時的な移住ではなく、土器製作者を含む一定の集団が計画的に移住するものであり、派生村の形成とそこを起点とした技術の拡大・拡散によって新たな土器製作のまとまりが形成される。いわば高い流動性の中、集団の移転・移住、定着により新たな土器の出現が起こるのである。当該時期の土器生産とは全く同じではないが、集団の移住に伴い土器作りが移動する例として紹介したい。

18 非市場経済社会における K・ボランニーの交易の意義・目的・動機の検討を踏まえ（K・ボランニー 1980）、日本古代の交易は外部から財を獲得することに主眼が置かれ、交易者の動機は自己の政治的権力のような社会的身分に基づく身分動機がほとんどであることを中村太一は指摘する（中村太一 2004）。一方、売買取引から生まれる利得のために行われる利潤動機による交易者は、零細で社会的地位も低く、交易量全体に占める割合も低いことを明らかにする。また、遠距離交易には高度な専門性を要しており、これらの交易には身分動機の「人」「使者」による交易従事者が介在するが、交易主体はあくまで「王臣家」であるとも指摘する。これらは、弥生時代から古墳時代における交流の実態について考える上で、示唆的である（中村太一 2024）。

【参考文献】

- 井上裕弘 1991「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集 同記念事業会
- K・ボランニー著、玉野井芳郎・栗本慎一郎訳 1980『人間の経済Ⅰ－市場社会の虚構性－』岩波現代選書
- 北野博司 2014「タイ北部における土器製作者の移住と技術伝播」『歴史遺産研究』No. 9 東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式期併行の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2004「古墳時代初頭前後の博多湾沿岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人三・四世紀の倭人社会』大阪府立弥生文化博物館
- 久住猛雄 2005「3世紀の筑紫の土器～北部九州・特に博多湾沿岸周辺における外来系土器の需要と展開～」『邪馬台国時代の筑紫と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム5 香芝市教育委員会
- 久住猛雄 2007「博多湾貿易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交渉機構『考古学研究』第53巻第4号 考古学研究会
- 久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土器器』発表要旨集・基本資料集 第19回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 小山田宏一 1982「布留式成立に関する覚書」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 同刊行会
- 小林正史 1997「弥生時代から古墳初期の甕の作り分け」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 鐘ヶ江賢二・小林正史 2011「スス・コゲからみた北部九州の弥生後期～古墳前期の深淵による調理方法」『土器使用痕研究－スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土器器による調理方法の復元－』
- 酒井龍一 1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕－造営キャンプの検証にむけて－」『考古学研究』第24巻2号

考古学研究会

関川高功 1976 『繩向遺跡の古式土師器』『繩向』 桜井市教育委員会

重藤輝行 2006 『西新町遺跡出土土師器の器種構成と製作技法について』『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書 第208集

重藤輝行 2009 『西新町遺跡出土の土師器の編年』『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第221集

田崎博之 1983 『古墳時代初頭前後の筑前地方』『史淵』第120集 九州大学文学部

田中元浩 2005 『畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開』『日本考古学』第20号 日本考古学協会

田中元浩 2014 『日本列島西部における布留形甕の分布とその背景』『古墳出現期土器研究』第2号 古墳出現期土器研究会

田中元浩 2024 『畿内地域における布留形甕の出現』『古墳出現期土器研究』第11号 古墳出現期土器研究会

檀佳克 2011 『土師器の編年 ①九州』『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1 同成社

次山淳 1993 『布留式土器における精製器種の製作技術』『考古学研究』第40巻4号 考古学研究会

次山淳 1995 『波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布』『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 同朋社出版

次山淳 1997 『初期布留式土器の西方展開』『古代』103 早稲田大学考古学会

次山淳 2006 『小型丸底土器の地域色—形態からみた大和と河内—』『古式土師器の年代学』『大阪府文化財センター』

次山淳 2014 『古墳出現期の社会と土器の移動』『史林』第97巻1号 史学研究会

次山淳 2017 『畿内・中国からみた九州の古式土師器』『九州島における古式土師器』発表要旨集・基本資料集 第19回九州前方後円墳研究会実行委員会

常松幹雄 1991 『伊都国の土器・奴国の土器』『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集 早稲田大学出版部

常松幹雄 1993 『庄内式土器の時代（玄界灘沿岸）』『月刊考古学ジャーナル』第363号 ニュー・サイエンス社

寺沢薫 1986 『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県教育委員会

寺沢薫 1987 『布留0式拡散論』『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

寺沢薫 2002 『布留0式土器の新・古相と二・三の問題』『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所

徳澤啓一 2018 『技術と土器の拡散』『やきもの・つくる・うごく・つかう』近代文藝社

中村太一 2004 『日本古代の交易者』『国立歴史民俗博物館研究報告』第113集 国立歴史民俗博物館

中村大介 2024 『青銅器が変えた弥生社会—東北アジアの交易ネットワーク—』吉川弘文館

西村歩 2011 『土師器の編年③近畿』『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1 同成社

福岡県教育委員会 2000 『西新町遺跡Ⅱ』—福岡県福岡市早良区西新町西新町遺跡第12次調査報告1—福岡県文化財調査報告書第154集

福岡県教育委員会 2001 『西新町遺跡Ⅲ』—福岡県福岡市早良区西新町西新町遺跡第12次調査報告2—福岡県文化財調査報告書第157集

福岡県教育委員会 2002 『西新町遺跡Ⅳ』—福岡県福岡市早良区西新町西新町遺跡第13次調査報告1—福岡県文化財調査報告書第168集

福岡県教育委員会 2003 『西新町遺跡Ⅴ』—福岡県福岡市早良区西新町西新町遺跡第13次調査報告2—福岡県文化財調査報告書第178集

- 福岡県教育委員会 2005『西新町遺跡VI』－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第 14・15 次調査報告書－福岡県文化財調査報告書第 200 集
- 福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡VII』－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第 17 次調査報告書－福岡県文化財調査報告書第 208 集
- 福岡県教育委員会 2008『西新町遺跡VIII』－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第 20 次調査報告書－福岡県文化財調査報告書第 218 集
- 福岡県教育委員会 2009『西新町遺跡IX』－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第 22 次調査報告書－福岡県文化財調査報告書第 221 集
- 福岡市教育委員会 1982『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 西新町遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 79 集
- 福岡市教育委員会 1994『西新町遺跡 3』福岡市埋蔵文化財調査報告書 375 集
- 溝口孝司 1988「古墳出現前後の土器相－筑前地方を素材として－」『考古学研究』第 35 巻 2 号 考古学研究会
- 三好玄 2007「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶ (Ⅲ)』同志社大学考古学シリーズⅨ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 森貞次郎 1966「九州」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 河出書房新社
- 森岡秀人 1985「土器の交流－西日本－」『月刊考古学ジャーナル』第 252 号 ニュー・サイエンス社
- 森岡秀人 1991「土師器の移動 Ⅰ 西日本」『土師器と須恵器 古墳時代の研究 6 雄山閣
- 森岡秀人 1993「土器移動の諸類型とその意味」『転機』第 4 号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第 8 回東海埋蔵文化財研究会 論考編
- 森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告』第 3 集 大阪府弥生文化博物館
- 吉田東明 2009「西新町遺跡の竪穴住居作りつけカマド」『西新町遺跡IX』福岡県文化財調査報告書第 221 集

【挿図出典】

第 18 図 福岡県教育委員会各報告書より引用して作成、第 19 図 筆者実測、第 20 図 筆者実測および報告書から引用 (模式図) して作成、第 21 図 グラフは筆者作成。図については、西新町遺跡：福岡県教育委員会報告書、畿内地域：大阪府教育委員会 1983『萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ』より引用、第 22 図 各報告書より引用、一部改変トレース、第 23 図 各報告書より引用して作成 畿内地域：各報告書より筆者トレース、西新町遺跡：福岡県教育委員会各報告書より作成、第 24 図 筆者作成、第 4 表・第 5 表・第 6 表 筆者作成、第 7 表 重藤 2009 で提示された一括資料をもとに筆者作成

田中元浩 (和歌山県立紀伊風土記の丘)

第3節 布留系小型精製器種の様相

1. はじめに

博多湾に面する砂丘上に営まれた西新町遺跡は、弥生時代終末期に集落規模が急激に拡大する。住居の中には、当時の日本列島ではほとんどないカマドを備えたものがあり、多くの朝鮮半島系土器が見られることから、半島との交流・交易の窓口であったと考えられている。また、工房跡はないもののガラス玉の鋳型など手工業生産にかかわる資料があり、最先端技術がこの遺跡を経由していったことがうかがえる。出土土器には、朝鮮半島だけでなく、畿内系や山陰系土器も多くみられ、朝鮮半島や列島各地との交易拠点となった貿易港的な遺跡と考えられている。

ここでは、筆者に与えられた課題である、西新町遺跡における小型精製器種と畿内との比較を通じ、西新町遺跡のものにどのような特徴があるのか、どう位置づけられるのかについての整理を試みる。ただし、あいにく西新町遺跡出土の関連土器を網羅することはできず、検討会時に対象となった土器を中心としたものになっている。なお、畿内の土器の時期表現については、事務局の方針に従い寺沢編年（寺沢 1986・2002）を用いるが理解が不十分なこともあり、適宜その他の編年も併記する。また、西新町遺跡をはじめ、福岡平野の各編年については不案内なので、在来の編年による位置づけよりも畿内における各器種の型式的観点からの評価を試みる。

2. 小型精製器種の種類と影響

小型精製器種については、まず小型丸底壺・小型器台で、畿内との影響が強い資料が確認できる。これら以外に有段口縁鉢¹⁾もあり、それらについて整理しておく。

(1) 小型丸底壺（第25図）

畿内における小型丸底壺の布留式初頭の形態とその変化が、大和と河内と異なることは、次山淳氏により指摘されている（次山 2006）。それによると、精製品ではない庄内式段階には両地域の形態差が明瞭ではないものの、精製品が出現する布留0式になると両地域の差が顕在化し、布留2式になり形態が類似するようになるとされている。なお、精製品の小型丸底壺の出現は、布留0式新相である。大和における布留0式から布留1式にかけての変化は大きく、急速に口縁が伸びる。一方、中河内は口縁の伸びが漸移的である。大和では、布留1式古相の纏向遺跡辻土塙⁷（関川 1976）ですでに器高に占める口縁部高の割合（口縁高／器高）が0.5以上を含む。同時期中河内は、その割合が0.2～0.4程度で、その割合が0.5以上のものが現れるのは布留1式新相以降である（第26図²⁾）。また、大和では口径が体部径を明瞭に上回る例が布留1式古相頃に出現する一方、中河内は、口径が体部径を大きく上回るようになるのは、布留1式新相頃である（第27図³⁾）。

西新町遺跡の小型丸底壺は、深めの体部から短めの口縁がやや内湾気味に立ち上がる形態から、それよりも体部が浅く、口縁が長めの形態までがあり（第28図⁴⁾）、畿内でも上記のように口縁部高が漸移的に伸びる中河内における型式変化と類似する。また、同時期のバリエーションとするには、中河内における器高に占める口縁部高の割合の幅が、布留1式だけに収まらないので考えにくい。ただし、12次23号竪穴住居跡出土例（福岡県教育委員会 2000：第59図8）のような、体部が壺形というより鉢形のため、頸部がすばまらず、口縁が広く、長く伸びる形状は、中河内では時期が下っても少ないため、大和の影響を考慮すべきと考える。なお、中河内の小型丸底壺は、体部



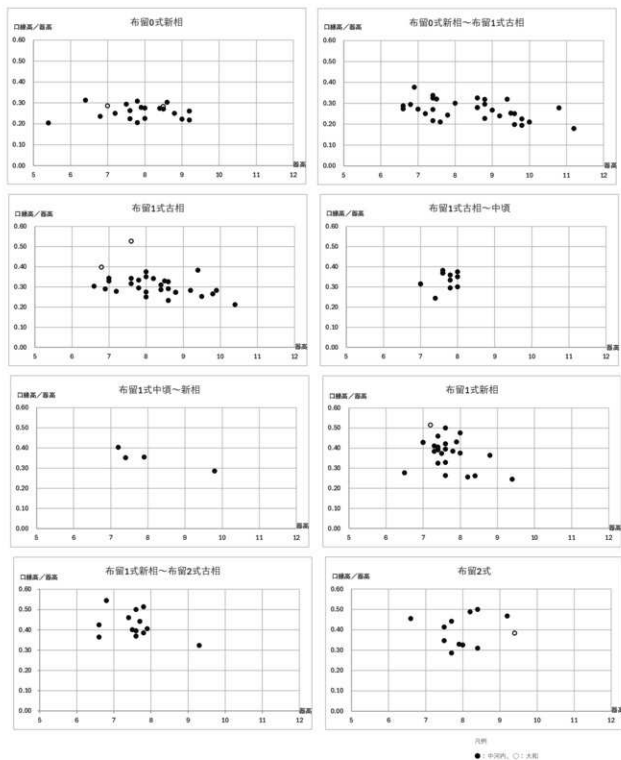
第25図 小型丸底壺 (1/6)

が壺形を呈することを基本とする。

出土品の中には、直接搬入はほとんどないと考えられるものの、見分けが付きにくいものがある。例えば、13次19号竪穴住居跡出土例（福岡県教育委員会2002：第47図3）は、中河内で布留1式古相頃（中河内の西村歩氏による編年（以下、西村編年。西村2008）で布留式古段階新相頃）に見られるもの（例えば、萱振遺跡SE03（大阪府教育委員会1983））に類似する。この点で、畿内からの継続的な製作技術の影響が考えにくい壺と異なり、長期にわたって継続的に技法が伝わっていると考えられる。また、技法の一部ともいえるかもしれないが、胎土についても選択的に同様の橙色系に発色するものを用い、そのような発色の焼成法を指向していたと考えられる。そのため、畿内との併行関係を推定する材料となり、布留0式新相から布留1式新相～2式古相（西村編年布留式古段階古相～中段階中相頃）の各時期の資料と考えられる。

なお、こういった精製器種に施されるヨコミガキなどの技法は、畿内においては吉備地域の土器製作技法の影響下に成立したものだが、吉備から北部九州への直接的な影響ではなく、畿内からの影響であることが、瀬戸内系土器についての検討会時にも言及されていたとのことだったが、それを再度確認したものといえる。

また、小型丸底壺の脚付き形態も、13次12号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2002：第31図3）や13次65号竪穴住居跡（同：第140図4）で見られる。脚付き形態は、畿内でも少数確認できるが、それとは体部形状が異なる。畿内で脚付き小型丸底壺は、布留0式新相頃（西村編年布留式古段階古相）の船橋遺跡468方形周溝墓（財団法人大阪府文化財センター2005）や布留0式古相とされる日向辻遺跡162次SP2126柱拔痕落込み（久住2016）、布留1式頃の日向辻遺跡138次溝3（桜井市教育委員会2004）、メスリ山古墳（奈良県立橿原考古学研究所1977、小池2008）などで見られる。前二者（船橋・日向辻遺跡例）は壺体部が幅広く、西新町遺跡例と似るが、同例のように体部最大径から頸部に少し締まるものではなく、精製度がやや低い。また、脚部形態の詳細がわかる資

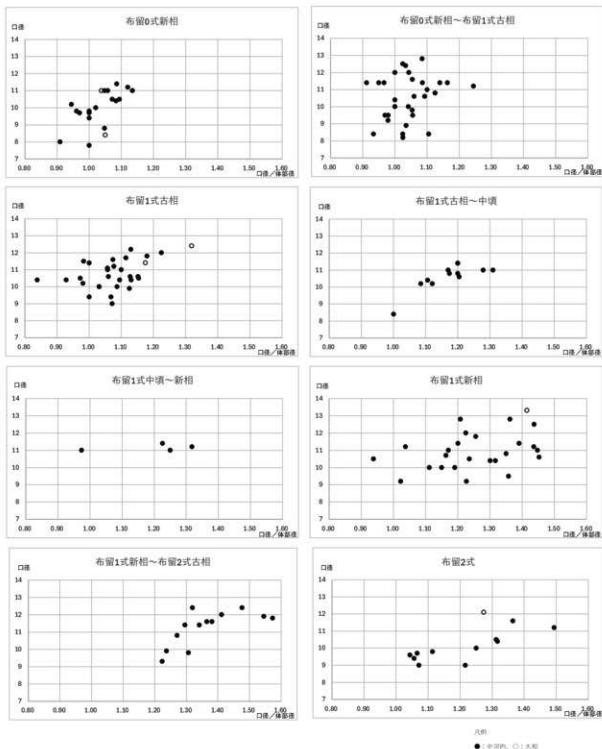


第 26 図 中河内・大和における小型丸底壺の法量の変遷 (1)

料は、西新町遺跡例で確認できてなく、畿内の例にも少ないのだが、西新町遺跡例は脚頂部の壺底部下が中実気味である。一方、畿内ではそのような例は確認できていない。このため、脚付き小型丸底壺そのものが波及したのではないと考えられる。

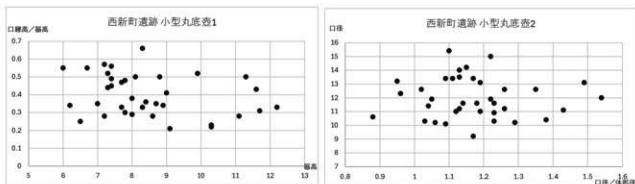
(2) 小型器台 (第 29 図)

小型器台の多くは、皿形の受部で明瞭な立ち上がりを持ち、内面に放射状暗文を施すものがあり、



第 27 図 中河内・大和における小型丸底壺の法量の変遷 (2)

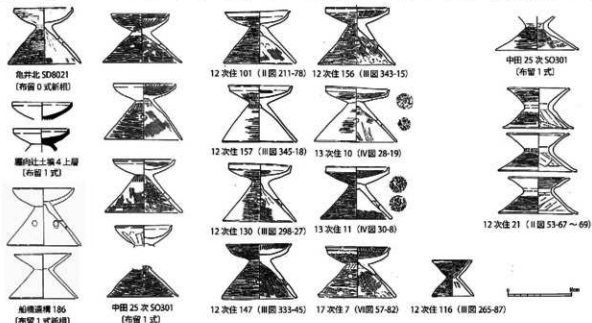
受部と脚部が貫通せず、脚部は直線的に広がり、細かいヘラミガキを多用するものである。以下では、このような特徴を持つ小型器台を、庄内系小型器台と称しておく。畿内において、受部の立ち上がりは新しい段階になるとより明瞭なものが出現し、これが庄内系小型器台の最新型式である。ただし、この庄内系小型器台の最新型式が布留 0 式に出現していても、受部のつまみ上げが弱いものや、つまみ上げがさほど明瞭ではないものが共伴することが一般的である。これに対し、西新町遺跡の庄内系小型器台は、受部の口縁部を明瞭につまみ上げるものばかりで、中河内で見られるよ



第 28 図 西新町遺跡における小型丸底壺の量量分布

うな同時期の庄内系小型器台のつまみ上げ度合いの異なるバリエーションがない点が大きな特徴と言える。なお、中河内では庄内系小型器台の下限に近い時期、布留 1 式新相頃（西村福年布留式中段階古相～中段階中相）でも、つまみ上げが明瞭でないものが見られることがある（例えば、船橋遺跡遺構 186（財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998））。一方、大和では、最新型式を含む一定量の小型器台が出土した例が十分に精査できていないものの、例えば布留 1 式の縦向遺跡辻土坑 4 上層（関川 1976）では、つまみ上げの度合いはやや異なり別型式とする意見もあり（寺沢 1986）、出土数は 2 点のみだが、つまみ上げるものに限定されている。

脚部に着目すると、スカシが畿内で一般的と考えられる 3 方向のものもあるが、スカシがないもの（例えば、12 次 101 号竪穴住居跡（福岡県教育委員会 2000：第 211 図 78）、12 次 157 号竪穴住居跡（福岡県教育委員会 2001：第 345 図 18））や、後述する高坏同様に 2 方向のもの（例えば、12 次 130 号竪穴住居跡（福岡県教育委員会 2001：第 298 図 27）、12 次 147 号竪穴住居跡（同：第 333 図 45）、12 次 156 号竪穴住居跡（同：第 343 図 15）、13 次 10 号竪穴住居跡（福岡県教育委員会 2002：第 28 図 19）、13 次 11 号竪穴住居跡（同：第 30 図 8））が相対的に多いことは異なる点といえる。スカシがないもの、2 方向のものは中河内ではごく少ない。また、脚部内面の上半



第 29 図 小型器台 (1 / 6)

にケズリが施されていないことも異なる⁵⁾。

一方、受部に着目すると、受部底部がやや分厚いもの（例えば、13次11号竪穴住居跡、17次7号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2006：第57図82））、受部口縁部内面の屈曲がやや鈍いもの（12次147号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2001：第333図45））、やや器高が低いもの（17次7号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2006：第57図82））、色調でやや赤味が薄く相対的に白っぽく見えるもの（13次10号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2002：第28図19））はあるが、畿内のものとの大きな違和感はないと考える。また畿内において、上記のような若干の違和感を持ったものが皆無ではないと考える。

このように、畿内における製作技法が強くもたらされていることがうかがえる。中河内では、庄内系小型器台の下限は、布留1式新相～布留2式古相頃（西村編年布留式中段階古相頃）までと考えられ、大和においても同様である。

なお、小型器台のうち、布留1式中頃～新相頃（布留式中段階古相）に出現する断面がX字状を呈する形態（以下、小型X器台と略）は、西新町遺跡においては上記の庄内系小型器台に比べると希少な資料といえるのではないだろうか。例えば、12次116号竪穴住居跡出土例（福岡県教育委員会2001、第265図87）は、ヨコミガキなど調整に違和感はないものの、大きさが畿内で通有のものとは大きく異なる極小型品である。このような例は、精製器種の製作技法は伝わっているものの、搬入品が伝わっているのではないことを補強する材料と評価できるかもしれない。

その他に、小型X器台とは異なるものの、断面形がX字状を呈し、畿内系とされることがある例⁶⁾がある。それは、小型X器台とは異なり、外面をヨコミガキするものの、筒部のしまりが悪く、受部が弱く外反するものである（例えば、12次21号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第53図67～69））。これは畿内の小型精製器種を起源とするのではなく、脚部内面のケズリ調整からも、形態の源は山陰の鼓形器台と考えられる。形態的には退化した鼓形器台とでもいえそうだが、調整は精製品であり、北部九州でアレンジされたものといえるかもしれない。なお、類似するものが、布留1式頃の中田遺跡25次SO301（財団法人八尾市文化財調査研究会1997b）に見られるが、例は少ないと思われる。この中田遺跡例は、脚部から受部下部の破片で、脚部外面はヨコミガキだが、内面はハケで小型X器台と類似するものの、それと異なる比較的明瞭な筒部がある。このため、畿内からの影響とは考えにくい。

（3）有段口縁鉢（第30図）

畿内の有段口縁鉢は、時期を下るごとに口径と器高が縮小したものがみられるようになる傾向がある（第31図⁷⁾）。併せて、口縁部の屈曲部より下の鉢体上部が屈曲部径と同様で体部に深みを有し、暗文を施すものから、皿状に浅く、暗文を省略するものが多くなり、口縁の屈曲が鈍くなる。ただし、あくまでも傾向であり、同時期にも口径や器高の大小のバリエーションがある。また、口縁の屈曲部の一次口縁が大和では長いものが目立つ点などが指摘されてきている。ただし、大和と中河内での形態差についてはそれ以上には十分に検討できていない。

西新町遺跡において、有段口縁鉢は小型X器台同様、例が少ないと思われる。12次97号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第194図95）、109号竪穴住居跡（同：第225図34）は、やや大振りな印象はあるがやはり大きな違和感がないものである。これらを含め、直接搬入品が皆無と



第30図 有段口縁鉢ほか(1/6)

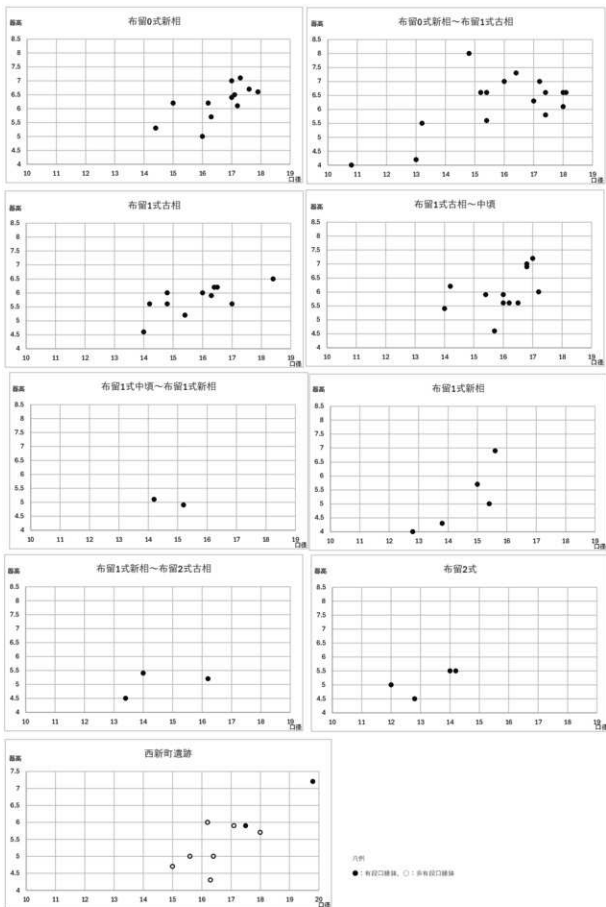
は言い切れないが、ごく少ないと考えられる。ただし、製作技法はかなり正確に伝わっており、上記の小型精製器種同様、工人の移動を推定するものかもしれない。

これらを畿内の編年に位置づけると、布留0式新相から布留1式古相頃(西村編年布留式古段階頃)だろうか。上記のように畿内における時期を下るごとの傾向を考えると、体部内面の暗文も明瞭で、体部から口縁が明瞭に張り出す形態などから、古い段階の形態と考えられる。

このような畿内で通有な有段口縁鉢以外に、有段口縁鉢のように口縁部が二重に屈曲せず、口縁部が直線的なものも見られる。それらの体部形態は、最大径が口縁部への屈曲部である頸部にあるもの(例えば、12次21号竪穴住居跡(福岡県教育委員会2000:第53図53))、体部上位の頸部のやや下に最大径があるもの(例えば、13次27号竪穴住居跡(福岡県教育委員会2002:第71図38))などがあり、このような形態が畿内で皆無ではないが、あまり多くないと考えられ、畿内系と言わないでもよいと考える。このような形態の素口縁鉢は、布留0式新相~布留1式古相頃(布留式古段階古相~古段階新相)の久宝寺遺跡(久宝寺南)K3号墓周溝内下層(大阪府教育委員会ほか1999)などで類似する形態が見られるが、調整にミガキは見られない。また、和田庵寺SD145(若杉・田中2015)にも見られ、ミガキ調整が施されるが、上記の小型精製器種のものとは異なる。この点で、相対的に丁寧な調整が施されている西新町遺跡例とは異なると思われる。

3. 小型品以外の精製土器(第32図)

次山氏による布留式の成立、展開の検討において精製器種が取り上げられ、同器種の製作技法の変化、技法の系譜が追われた(次山1993)。この中で、「精製小型土器三種」とそれ以外の「高坏・小型器台A・B・小型丸底鉢・有段口縁鉢および中型・小型の二重口縁壺・直口壺」にも、「器形のちがいを越えて、同一の技術基盤のもとに製作されている」(p55)ことが明らかにされるとともに、その精製器種の故地として吉備南部が示された(p61・62)。小稿は、小型品についての検討なので、検討対象外ではあるが、精製器種という括りの中で、若干整理を行う。



第 31 図 有段口縁鉢ほかの法量分布

(1) 高坏

畿内系として有稜高坏、有段高坏、腕形高坏が見られるが、それぞれ典型的な畿内系とは異なる点が見られる。まず、有稜高坏については、脚柱部の太さが太く、脚部のスカシの位置が脚裾部と低く、その数が2方向で、坏部形状は稜が鈍めである点などが同時期の畿内との大きな違いである。脚柱部の太い高坏は、布留0式新相頃に畿内においてもみられるので、その形状が維持されている可能性がある。12次91号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第175図26）や122号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2001：第280図32）のような形態が多いと思われ、有稜としない方がよいのかもしれない。また、17次31号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2006：第112図29）のように、脚部のスカシは3方だが、その位置は低めのものがある。ヨコミガキなどの精製器種の調整技法は採用しているものの、形態については採用していないと考えられる。

そのような有稜高坏以外に、庄内式以来見られる有稜高坏に近いと考えられるもの（例えば、12次119号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2001：第272図45））や、腕形高坏（例えば、12次101号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第210図74）の脚部や、17次14号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2006：第84図20）の坏部）、有段高坏（例えば、12次13号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第41図12）、20次47号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2008：第102図11）、20次113号竪穴住居跡（同：第110図7））がある。なお、12次13号竪穴住居跡の有段高坏は、脚部が太く、穿孔が2方向で、20次113号竪穴住居跡は、やはり脚部が太く、穿孔の位置が低い。畿内において、有段高坏や腕形高坏が見られるのは、大和でも中河内でも布留0式新相頃（西村編年布留式古段階古相）までである。壺における検討でも、布留式の最古段階の技法の強さが指摘されており、土器もしくは土器に関する情報がもたらされたと推定できる時期を推定する上で、興味深い点と考えられる。

また、布留0式新相～1式古相頃（西村編年布留式古段階頃）に見られるやや小形の有稜高坏⁸⁾に類似する例（13次77号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2002：第171図22））があり、この点も上記の推定を補強するものと思われる。

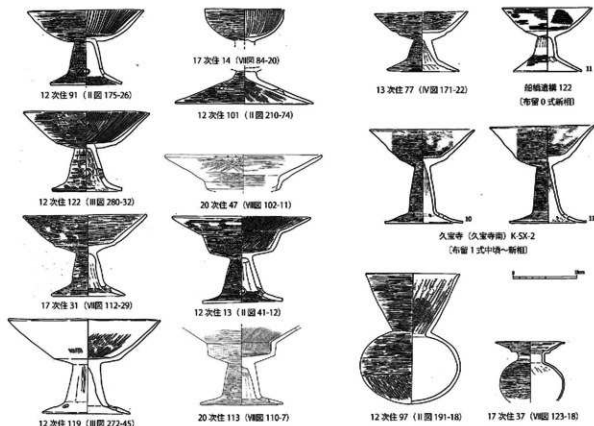
畿内においては布留1式中頃～新相（西村編年布留式中段階古相）に脚部が細身の高坏が出現、普及する（例えば、久宝寺遺跡（久宝寺南）K3号墓K-SX-2（大阪府教育委員会ほか1999））。そして、東日本へはこの脚部が細身の高坏が、それまでの東海伊勢湾系の高坏と入れ替わるように普及するが、そのような例は見られなかった。

(2) 直口壺

中型の直口壺（12次97号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2000：第191図18））は、調整技法、形態、法量などの特徴から、畿内からの直接的影響を強く感じさせる。

(3) 二重口縁壺

二重口縁壺については、大型品は畿内からの影響は推定しにくい一方、精製器種である小型品は畿内の製作技術との近しさを思わせるが、法量が著しく小さい点が異なる（17次37号竪穴住居跡（福岡県教育委員会2006：第123図18））。



第32図 他の精製土器 (1/6)

4. おわりに

以上のように、布留式の開始を特徴づける小型精製器種が、畿内からのそのものの搬入ではないものの、組み合わせとしてほぼ見られるという点が指摘できる。このような畿内からの影響については、すでに言及されていることなので(久住2016ほか)、さほど目新しいことはない。また、搬入品の是非が十分に検討できていないため、すべての故地が明らかにはできていないが、畿内における影響源として中河内が強いと思われる。また、小型丸底壺のような連続的に形態を受容しているもの、庄内系小型器台のような特定時期の形態を継続しているものがあるが、後者が多い。遑においても布留式最古段階の口縁形態が維持されている点は、従前から指摘されている⁹⁾。このように小型丸底壺を除き、特定時期の影響と考えられるものが多く、布留0式新相(西村編年布留式古段階古相)頃のインパクトが大きいと思われる。

また、精製器種をその当初から受容していることからヨコミガキを施すという点は、嚴重なルールであったように見え、新しい段階でもあまり粗雑になっていないようであるのは、当初の影響を維持しているためと思える。ただし、器形については高坏のように異なるもの、小型X器台や二重口緑壺のような小型品があり、ヨコミガキ調整ほど厳密ではない。この点で、旧来のいわゆる小型精製三種が、調整、器形とも畿内の精製品とよく似ることは、その枠組に何らかの意味があった可能性がある。ただし、中型直口壺も同様なので、さほどこだわる必要がないのかもしれない。とはいえ、小型丸底壺は継続的に畿内の器形を受容しており、この形式に対する他の形式とは異なる意図を読み取ることができそうに思える。小型丸底壺の受容が、それが波及した列島各地で同様な傾向ではないことから、受容する在来集団の意図が働いていると考えておきたい。つまり、土器の

受容は受容する側の意図によるところが大きいと考えられる。

なお、布留0式新相の畿内からの影響が強いと考えたが、小型丸底壺以外にもそれ以降の新たな影響が少ないながら見られる。小型X器台がその例で、布留1式中頃～新相頃に影響を受けたと考えられるが、限定的である。また、同時期に成立している脚部が細身の高杯は受容していない。

なお、畿内の各形式が見られるのではなく、例えば大型の壺は見られない。このように、西新町遺跡の在来集団の能動的な選択が、働いていると考えられる。

ちなみに、布留式当初の布留0式新相から布留形壺が在来形式として成立する地域として北陸南西部がある(田嶋 1986)。ここでは布留形壺は直接搬入ではないにしても、口縁部の肥厚傾向の類似性から技法を継統的に受容していると考えられる。ただし、徐々に口縁端部の肥厚度が強まる傾向は類似するものの、同じではない。また精製器種では、西新町遺跡のように、中河内の特徴を持つような小型丸底壺よりも、口縁部が長く伸びた大和の特徴を持つようなものが多いように思える(安中・林 2016)。このような点からも、同じ様式の土器受容における各々の在来集団の能動性がうかがうことができる。

【註】

1 小型丸底壺や小型器台に比べ、呼称のばらつきがあると考えられる有段口縁鉢について、小稿での呼称方針を簡単に整理しておく。1962年船橋遺跡報告において初めて呼称されたと考えられる「精製小型土器三種」の中では、「小型杯」(原口ほか1962, p66)とされている。前年の1961年に、坪井清足氏が「薄手に作られ、口縁が屈曲するものもある」「杯」(坪井1961, p190)とされたものがそれに相当すると考えられる。また、都出比呂志氏も「杯」(都出1974, p27)とされている。このように、学史的には「杯」「小型杯」と呼称すべきかもしれない。ただしその後、酒井龍一氏は「屈曲する口縁を持つ小型鉢」(酒井1975, p27)、西弘海氏は「二重口縁を持つ碗」(西1979, p156)とされ、重要な観察点と考えられる口縁形態が含まれた呼称がなされた。その後、精製器種という横断的観点から整理された次山淳氏が「器形のちがいを越えて、同一の技術基盤のもとに製作されている」(次山1993, p55)点を評価したことを重視し、かつ口縁の特徴からも、次山氏の呼称である「有段口縁鉢」と呼称しておく。ただし、鉢か杯か碗かの問題は残る。

2 第26図で法量を計測した各資料は、以下の通りである。なお、()内は、中河内の西村歩氏による編年(以下、西村編年。西村2008)である。

布留0式新相(西村編年布留式古段附古相):【中河内】亀井北遺跡SD8021(大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺1号墳(財)大阪府文化財センター2003)、船橋遺跡井戸4(柏原市教育委員会1994)、船橋遺跡468方形周溝墓(財)大阪府文化財センター2005)、船橋遺跡遺構307(財)大阪府文化財調査研究センター1998)、中田遺跡35次SD107(財)八尾市文化財調査研究会2009)。(大和)和田庵寺SD145(若杉・田中2015)、瀬川遺跡102次SK04(奈良県立橿原考古学研究所1998)。布留0式新相～布留1式古相(布留式古段附古相～古段附新相):【中河内】久宝寺遺跡(久宝寺南)K3号墓周溝内下層(大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺遺跡97-694 SW1(八尾市教育委員会1999)、中田遺跡16次SD207(財)八尾市文化財調査研究会1994)、中田遺跡25次SO301(同1997b)、久宝寺遺跡43号墳(財)大阪府文化財センター2007)、久宝寺遺跡724堤(財)大阪府文化財センター2004)、久宝寺遺跡(久宝寺南)K3号墓上層堆積(大阪府教育委員会ほか1999)。布留1式古相(布留式古段附新相):【中河内】葦振遺跡SEG(大阪府教育委員会1983)、船橋遺跡遺構122(財)大阪府文化財調査研究センター1998)、久宝寺遺跡22次SD1(財)八尾市文化財調査研究会2001)、跡部遺跡15次SK101(財)八尾市文化財調査研究会1997c)、亀井北遺跡土層群1(大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺遺跡1次3トレンチSW2(財)八尾市文化財調査研究会1993)、中田遺跡10次SD1(財)八尾市文化財調査研究会2004)。(大和)瀬川遺跡土坑7(関川1976)。布留1式古相～中頃(布留式古段附新相～中段附古相):【中河内】久宝寺遺跡1次2トレンチSW2(財)八尾市文化財調査研究会1993)、久宝寺遺跡(久宝寺南)SEG01(大阪

府教育委員会ほか1999)、船橋道跡遺構 123 (財)大阪府文化財調査研究センター1998)、布留1式中頃～新相(布留式中段階古相)：【中河内】中田道跡 14次 SE201 (財)八尾市文化財調査研究会1997b)、久宝寺道跡(久宝寺南) K4号墓(大阪府教育委員会ほか1999)、布留1式新相(布留式中段階古相～中段階中相)：【中河内】久宝寺道跡1次2トレンチ7層(財)八尾市文化財調査研究会1993)、久宝寺道跡(久宝寺南) K-SX-3 (大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺道跡(久宝寺北) SQ4001 (同)、中田道跡5次 SK1 (財)八尾市文化財調査研究会1995)、船橋道跡遺構 185 (財)大阪府文化財調査研究センター1998)、船橋道跡遺構 186 (同)、竹園道跡 94-478土器集積(八尾市教育委員会1997)、船橋道跡 440方形周溝墓(財)大阪府文化財センター2005)、【大和】坂田寺下層(安達・木下1974)、布留1式新相～布留2式古相(布留式中段階中相)：【中河内】中田道跡 14次 SK201 (財)八尾市文化財調査研究会1995)、久宝寺道跡 17次 SK103 (財)八尾市文化財調査研究会1997a)、久宝寺道跡 05391 竪溝溝(財)大阪府文化財センター2007)、久宝寺道跡(久宝寺南) SX303 (大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺道跡(久宝寺北) SD4004 (同)、久宝寺道跡(久宝寺南) SK60 (同)、布留2式(布留式中段階中相～中段階新相)：【中河内】久宝寺道跡 15号墳(財)大阪府文化財センター2007)、船橋道跡 469溝(財)大阪府文化財センター2005)、久宝寺道跡(久宝寺北) SD4029 (大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺道跡(久宝寺北) SK4011 (同)、【大和】龍向道跡土坑 14 (朝川1976)。

3 第27図で法量を計測した各資料は、第25図と同じである(註2参照)。

4 第28図で法量を計測した各資料は、以下の通りである。

【12次】21号堅穴住居跡(第51図18・19)、23号堅穴住居跡(第59図8)、81号堅穴住居跡(第152図29・30)、89号堅穴住居跡(第166図11・12・14)、97号堅穴住居跡(第191図24・25・26・27・90・91)、101号堅穴住居跡(第209図23)、109号堅穴住居跡(第224図8)(以上、福岡県教育委員会2000)、【12次】116号堅穴住居跡(第262図16)、157号堅穴住居跡(第345図14)、165号堅穴住居跡(第349図7)(以上、福岡県教育委員会2001)、【13次】19号堅穴住居跡(第47図3)、20号堅穴住居跡(第49図3)、27号堅穴住居跡(第69図14・15・16)、29号堅穴住居跡(第75図9)、67号堅穴住居跡(第144図3)(以上、福岡県教育委員会2002)、【14次】27号堅穴住居跡(福岡県教育委員会2005、第81図19)、【17次】5号堅穴住居跡(第37図15、第43図120)、9号堅穴住居跡(第64図22・33)、37号堅穴住居跡(第123図19・22、第124図35)(以上、福岡県教育委員会2006)、【20次】17号堅穴住居跡(第44図8)、46号堅穴住居跡(第101図6)(以上、福岡県教育委員会2008)。

5 2023年5月に行った令和5年度第1回西新町遺跡出土品再整理事業の検討会時に、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館の田中元浩氏が指摘された。

6 重藤2009で畿内系小形器台Ⅱ式とされているものの一部が該当すると思われる。

7 第31図で法量を計測した各資料は、以下の通りである。

【畿内】布留0式新相(西村編年布留式古段階古相)：亀井北道跡 SD8021 (大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺1号墳(財)大阪府文化財センター2003)、船橋道跡 468 方形周溝墓(財)大阪府文化財センター2005)、船橋道跡遺構 207 (財)大阪府文化財調査研究センター1998)、中田道跡 35次 SD107 (財)八尾市文化財調査研究会2009)、布留0式新相～布留1式古相(布留式古段階古相～古段階新相)：久宝寺道跡(久宝寺南) K 3号墓周溝内下層(大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺道跡 97-694 SW1 (八尾市教育委員会1999)、中田道跡 25次 SO001 (財)八尾市文化財調査研究会1997b)、船橋道跡井戸6(柏原市教育委員会1994)、久宝寺道跡 724 堤(財)大阪府文化財センター2004)、布留1式古相(布留式古段階新相)：船橋道跡遺構 122 (財)大阪府文化財調査研究センター1998)、久宝寺道跡 22次 SD1 (財)八尾市文化財調査研究会2001)、跡部道跡 15次 SK101 (財)八尾市文化財調査研究会1997c)、中田道跡 10次 SD1 (財)八尾市文化財調査研究会2004)、布留1式古相～中頃(布留式古段階新相～中段階古相)：久宝寺道跡 1次2トレンチ SW 2 (財)八尾市文化財調査研究会1993)、久宝寺道跡(久宝寺南) SE601 (大阪府教育委員会ほか1999)、船橋道跡遺構 123 (財)大阪府文化財調査研究センター1998)、布留1式中頃～新相(布留式中段階古相)：久宝寺道跡(久宝寺南) K4号墓(大阪府教育委員会ほか1999)、布留1式新相(布留式中段階古相～中段階中相)：久宝寺道跡 1次2トレンチ7層(財)八尾市文化財調査研究会1993)、久宝寺道跡(久宝寺南) K-SX-3 (大阪府教育委員会ほか1999)、久宝寺道跡(久宝寺北) SQ4001 (同)、布留1式新相～布留2式古相(布留式中段階中相)：久宝寺道跡(久宝寺南) SX303 (大阪府教育委員会ほか1999)、布留2式(布留式中段階中相～中段階新相)：船橋道跡 469溝(財)大阪府文化財センター2005)、久宝寺道跡(久宝寺北) SD4029 (大阪府教育委員会ほか1999)。

【西新町遺跡】非有段口縁鉢(Ⅱ中C印)：12次 21号堅穴住居跡(福岡県教育委員会2000、第53図53・54・55)、13次 27号堅穴住居跡(福岡県教育委員会2002、第71図38)、13次溝1(福岡県教育委員会2003、第16図25・26)、17次 37号堅穴住居跡(福岡県教育委員会2006、第129図107)、20次4

号型穴住居跡(福岡県教育委員会 2008、第 16 図 41)。有段口縁鉢(図中●印):12 次 97 号型穴住居跡(福岡県教育委員会 2000、第 194 図 95)、109 号型穴住居跡(同第 225 図 34)。

- 8 西村 2008 の「庄内系高杯 B」、三好 2013 で「高杯 D」に伴う小型高杯とされているものに相当する。
- 9 「筑前型庄内甕」からの型式変化やその中から「北部九州型布留甕」へ継承される要素があるとの評価(久住 2005 など)がある。

【参考文献】

- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-2 日本考古学会
- 大阪府教育委員会 1983 『豊振遺跡発掘調査概要・I』
- 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター 1999 『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』
- 大阪府文化財センター 2003 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』大阪府文化財センター調査報告書 第 103 集
- 大阪府文化財センター 2004 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』大阪府文化財センター調査報告書 第 118 集
- 大阪府文化財センター 2005 『船橋遺跡Ⅱ』大阪府文化財センター調査報告書第 128 集
- 大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』大阪府文化財センター調査報告書 第 156 集
- 大阪府文化財調査研究センター 1998 『船橋遺跡』大阪府文化財センター調査報告書第 29 集
- 柏原市教育委員会 1994 『船橋遺跡』柏原市文化財概報 1993-VI
- 久住猛雄 2005 「3 世紀の筑紫の土器～北部九州・特に博多湾周辺における外来系土器の需要と展開～」『邪馬台国時代の筑紫と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム 5 香芝市教育委員会
- 久住猛雄 2016 「『纏向』異論～纏向古墳群の検討序説～」『魂の考古学～豆谷和之さん追悼論文編』豆谷和之さん追悼事業会
- 久住猛雄 2017 「福岡県(糸島・早良・福岡平野)」『九州島における古式土師器 発表要旨集・基礎資料集』第 19 回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 小池香津江 2008 「メスリ山古墳出土土器の再検討」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第 3 冊
- 酒井龍一 1975 「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について 認識論的仮説として」『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会
- 桜井市教育委員会 2004 『桜井市平成 15 年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 25 集
- 重藤輝行 2006 「西新町遺跡出土土師器の器種構成と製作技法について」『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書 第 208 集
- 重藤輝行 2009 「西新町遺跡出土の土師器の編年」『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第 221 集
- 関川高功 1976 「纏向遺跡の古式土師器～纏向 1～4 式の設定～」『纏向』桜井市教育委員会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 次山淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-2 考古学研究会
- 次山淳 2006 「小型丸底土器の地域色～形態からみた大和と河内～」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前後の集団関係～淀川水系を中心に～」『考古学研究』20-4 考古学研究会

- 坪井清足 1961『弥生式土器と土師器』『世界陶磁全集』第1巻〈日本 古代篇〉河出書房新社
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会
- 寺沢薫 2002「布留0式土器の新・古相と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所
- 天理市教育委員会 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告7
- 奈良県立橿原考古学研究所 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 1998「勝山古墳第1次（縦向遺跡第102次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997年度（第2分冊）』
- 西弘海 1979「西日本の土師器」『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館
- 西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム8 香芝市教育委員会
- 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真 1962『河内船橋遺跡出土遺物の研究（2）』大阪府文化財調査報告書第11輯 大阪府教育委員会
- 福岡県教育委員会 2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集
- 福岡県教育委員会 2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
- 福岡県教育委員会 2002『西新町遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第168集
- 福岡県教育委員会 2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集
- 福岡県教育委員会 2005『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集
- 福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第208集
- 福岡県教育委員会 2008『西新町遺跡Ⅷ』福岡県文化財調査報告書第218集
- 三好玄 2013「高杯形土器における布留式土器定型化の様相」『古墳出現期土器研究』第1号 古墳出現期土器研究会
- 八尾市教育委員会 1997『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告37
- 八尾市教育委員会 1999『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1993『財団法人八尾市文化財調査研究会報告37』
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1994『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1995『中田遺跡』㈱八尾市文化財調査研究会報告49
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1997a『久宝寺遺跡』㈱八尾市文化財調査研究会報告55
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1997b『中田遺跡』㈱八尾市文化財調査研究会報告56
- ㈱八尾市文化財調査研究会 1997c『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
- ㈱八尾市文化財調査研究会 2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』㈱八尾市文化財調査研究会報告68
- ㈱八尾市文化財調査研究会 2004『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』
- ㈱八尾市文化財調査研究会 2009『財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』
- 安中哲徳・林大智 2016「北加賀・南加賀における小型丸底土器の様相」『東生』第5号 東日本古墳確立期土器検討会
- 若杉智宏・田中元浩 2015「和田庵寺SD145出土古式土師器について」『奈良文化財研究所紀要2015』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

市村慎太郎（公益財団法人大阪府文化財センター）

第4節 西新町遺跡出土の山陰系土器

1. 山陰系土器について

(1) 山陰系土器の研究状況

西新町遺跡からは、山陰系土器が多量に出土しており、これらの位置づけを行うにあたり、山陰地域における古式土器の研究状況についてみておくことにする。

山陰系土器については、これまでも多くの研究が積み重ねられてきた。島根県、鳥取県それぞれの地域で編年の構築がなされており、現在は島根県では草田編年（赤澤 1992）、鳥取県では天神川編年（牧本 1999）がそれぞれの地域の基軸となっている。

山陰両県それぞれの地域で編年の検討が積み重ねられてきたが、島根県側では古墳時代前期後半の資料が少なく、鳥取県側では前期前半の資料よりも後半の資料が長瀬高浜遺跡などで急増するといった状況で、時期による資料の濃淡に差があるため両県の資料を同時に扱うことで各時期の資料を十分に揃えることができる。

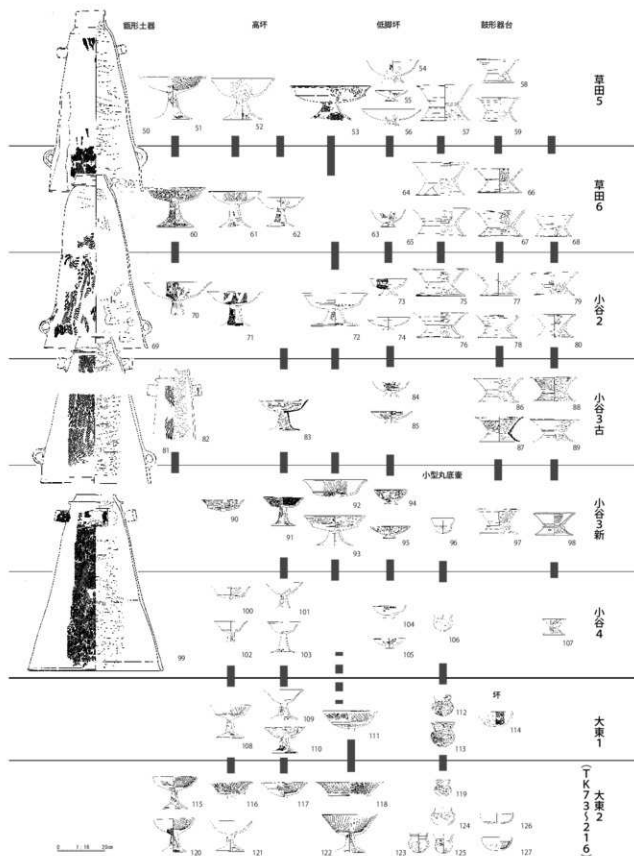
こうしたなかで渡邊誠は、山陰地域の資料を丁寧に属性分析を駆使して、弥生時代後期から古墳時代前期の間の編年を構築している（渡邊 2007）。両県の資料を同じ基準によって分類し位置づけたところに意義がある。筆者も、出雲地域の土器編年について取り組んでいたが、渡邊の研究を参照しつつ山陰地域の古墳時代前期から中期の土器編年について私案を提示している（松山 2015・2018）。

また、最近では式田洗により時期決定に有効な器種・型式を設定し、それらを含む一括性の高い資料群を整理し編年を再考している。製作技法から地域間の関係にも着目した研究もなされている（式田 2021）。

(2) 山陰系土器の特徴

山陰系土器についての明確な定義はこれまでできてこなかったが、二重口縁の壺・甕・鉢・直口壺、鼓形器台、低脚杯、高杯、注口付土器、甕形土器を主要器種とし、胎土は微砂粒を混和材として多く含み、胴部を3mm程度に薄く仕上げることを特徴とする。また、壺・甕類については羽状文・列点文・波状文・直線文を多用する傾向にある。調整技法では壺・甕の肩部に回転のかかった横刷毛が静止せずにかけられる。各器種の形態に共通する特徴として、各部位の境界（口縁と頸部や頸部と胴部など）が屈曲せずにスムーズな湾曲を呈する。また、高杯の特徴的な技法として円盤充填法が採用され、杯底部に棒状工具による刺突痕が見られる。こうした特徴を持つ土器群を山陰系土器としておきたい。

いわゆる薄甕とされ微砂粒のみを多く含むような個体を指標にすると、山陰系土器の出現は弥生時代後期後葉の的場式（草田 3期）とされるもので、出雲平野の山持遺跡など斐伊川流域の集落遺跡と大形の四隅突出型墳丘墓である西谷 3号墓などで確認できる。その他の地域では形態的には共通していても、胎土に粗い砂粒を含み器壁が厚くなるなど、技術的に旧来のままとなっていることから、山陰系土器の震源は出雲平野にあると見られる（池淵 2007）。草田 3期は過渡期にあり、新旧が混在するかたちになっている。こうした様相は草田 4期でも見られ、出雲平野のうち神戸川西岸の下古志遺跡（3次）SK102では、薄甕と同様の本体の注口付土器と粗製の鼓形器台が共伴し



第34図 出雲地域の弥生時代終末から古墳時代中期前葉の土器編年(2)(1/16)

第33・34 因遺跡・遺構名

下古志遺跡(1次)大溝-50 SK10-57 SI04-68 SD28-64, 下古志遺跡(2次)SD02-53, 古志本郷遺跡1次トレンチ3-52.59, 古志本郷遺跡I SD16-17.71.73.74.77.79 SD17-21.69.72, 古志本郷遺跡II SD58-28.84.85.86, 古志本郷遺跡III SD02-29, 古志本郷遺跡V SD41-83.87, 古志本郷遺跡VI SD03-44-3 SD07-15.18.20.22.23.27.34.35.88.97 SD21-4 SD23-9.14 SD31-7.8.25 SD38-6, 三田谷I (2) SI05-39.104.105, 矢野遺跡9次旧河道-99, 小山遺跡3地点4次SD03-32.89, 姫原西遺跡B・BW区10b層-1, 蔵小路西遺跡旧可道-31.96.98, 山持川川岸遺跡包含層-2.16 土器群3-55.56 土器群4-54, 山持遺跡Vol.3大溝-26.40.81.82, 山持遺跡Vol.6区⑤東土器群22-5 4区②土器群1-61, 山持遺跡Vol.8区⑥SD03-58 中野清水遺跡(1)II区3層-36 IV区3層-19 VII区-51, 中野清水遺跡(2)5区12号土器群-33 6区14層2号土坑-11.62.63 6区13層10号溝-43.109, 6区13層4号土器群-114, 中野清水遺跡(3)7区14層上面5号溝-12.13.24 7区14層2号竪穴住居-41, 草田遺跡F3区-70.76.78.80 D4区-75 SX03-65.66 CD4区-67, 釜代1号墳-102.103, 小屋谷3号墳-10, 茶山1号墳-30, 出雲国府下層2号土坑-45.115 ~ 119, 夫敷遺跡旧河道中層-44.46 ~ 49.120 ~ 127, 神田遺跡II区SD01-42.110.112.113, 大坪遺跡-107, 勝負遺跡SI06-100 SI08-101.106, 勝負遺跡SI05-108.111, 塩津山1号墳-93, 大原遺跡包含層-37, 陽徳遺跡II区1号墳-38, 博労町遺跡2区SI04-90.91.92.94.95 5区SK18-60

ており、急速な技法の広がりはない。

こうした状況が草田5期には一気に解消し、山陰地域全体で形態や製作技法が統一される。高坪の技法として特徴的な円盤充填粘土に残る軸痕はこの時期に発現するが、石見から因幡地域まで一斉に採用されており、形態・技法ともに共通した広域の土器圏が急速に形成される。主要器種のセット関係が安定するとともに、法量の差による形式のバリエーションや少数ながらも多様な器種・形式を拡大させる方向で推移していく。古墳時代に入ると畿内系土器の影響を受け、一部の器種については在地でも製作されるようになり、さらに豊富な内容を持つ土器相となる。前期中頃になると変化の方向性が変わり器種・バリエーションは減少することになる。この変化は急激には進まず、徐々に進行しながら中期的なシンプルな土器相へと移っていく。以上がおおまかな山陰系土器の変化として共通認識されるところである。

(3) 出雲平野における山陰系土器の変遷

西新町遺跡の山陰系土器の検討するにあたりその時期が問題となるので、弥生時代の最終末から古墳時代前期の土器編年を示しておく。筆者がフィールドとしていることもあり出雲地域の資料をもって行うが、土器の交流という点では弥生時代中期から終末までは、北部九州地域の土器が少なからず持ち込まれている地域であることから(中川 2023)、この地域と比較するのが有効と考えられる。

草田5期 壺類の底部はパーツとしては明確に残るものの、凸レンズ状になり自立することはできない。胴部の器壁は、3mm程度となり山陰系土器の中でも最も器壁が薄くなる時期である。草田4期に出現する頸部に羽状文を持つ壺(以下、頸部羽状文壺とする。)は、この時期に定型化する。鼓形器台の受け部径は大きくなるが、器高は低くなる方向で変化を始める。高坪は坏部の屈曲部のない無稜外形になり、坏底部は円盤を充填して作られ、この円盤には軸痕を施すようになる。鼓形器台・高坪は法量のバリエーションが見られるようになる。この時期までは注口付壺がある。全体としては、製作技法・器種構成などの基本形が定まり安定したものになる。

草田6期 煮沸用の中形の甕には、丸底になるものが現われるが、量的には多くない。注口付土器に入れ替わるように、この段階から二重口縁直口壺が出現する。畿内の影響を受けたものと推察される山陰系の二重口縁壺も出現し、小谷2段階以降は頸部に突帯が付くようになる。

小谷2段階 大形の土器をのぞき、壺甕は丸底になる。壺・甕類などは、早くも口縁部・胴部ともに器壁が厚くなり始め、同一の法量だと重量が重くなった感がある。口縁端部の外側が肥厚し、幅広の平坦面を持つようになるが、これは器壁が厚くなるのに伴う変化でもある。

小谷3古段階 高坏や鼓形器台では法量のバリエーションがなくなるなど、土器の構成の多様性が縮小する傾向も見られる。頸部羽状文壺は、頸部の羽状文は正面から見たときに上下の配置が等間隔になるよう施文されていたものが、上下幅が不均等な配置になるものがみられるようになる。甕の肩部施文では多条の波状文が篋書きの一条のものに変化する。小谷3段階は、多彩な器種構成を持っていた前段階から、バリエーションを減少さ

せ、施文の規則性も弛緩する傾向にあり、伝統的な様相に変化が起こる。その一方、大形品には竹管文を施すものがみられるようになる。竹管文は、弥生時代後期末から終末期に盛行したものが、一時的に復活する。また、これまで、取り上げられることがなかったが、小形の甕の中にやや口縁の長くなるタイプのものがある。小形の甕の胴部は、肩の張るものから、丸みを帯びようになり、小谷3古段階には円形の胴部になる。この胴部円形になる小形甕で口縁がやや長くなるタイプがあり、出雲市古志本郷遺跡II SD58 や米子市博労町遺跡2区 SI04 など小谷3古段階のほとんどの土器群の中で見られることから、小谷3古段階から見られる器種である（第35図）

小谷3古段階は、新たに加わる器種がある反面、法量のバリエーションが減少するなど多様性が縮小する面もあり過渡期になっている。

小谷3新段階 直口壺がほぼ見られなくなるなど、消失する器種も出てくる。鼓形器台も量が大きく減少している。甕や壺の口縁端部は内側に肥厚するものが増加する。甕の肩部施文では、米粒列点文が増加する。

小谷4段階 壺・甕は、細部の作りや施文などが弛緩した印象のものとなる。鼓形器台はほとんどなく、残存するものも形態や法量が個々に異なり規範が失われる。

以上が各期の概要である。大きく見れば草田5期から小谷3段階の間は、バリエーションを増加させるが、小谷3段階からは減少方向の変化も始まり、その後も段階的に縮小方向に向かう。このように小谷3段階は様式の方向性が変化する段階であるが、この後も段階的に変化が続くので、線引きについては異論のあるところである（岩本 2017、式田 2021）。今回は十分に再検討できていないので、今後の課題としたい。

古墳時代の開始と土器との対応は、四隅突出型墳丘墓が草田5期で終わり、草田6期には破鏡を副葬する方墳が出現し、土器の併行関係も布留0式（寺沢 1986）に併行することから、草田6期を古墳時代の開始期とする。



第35図 小形甕の変化（1/10）

(4) 山陰地域における地域差

山陰系土器圏は古墳時代前期には鳥取・島根両県の広範囲に及ぶので、他地域で出土した場合に、山陰のどこの地域と関係するものかということが課題となるが、草田5期以降古墳時代前期前半の間は、主要な器種については、考古学的にそれを分類することは今のところ難しい。いくつかの特徴のあるものについては、分布に偏りが見られるものがある。一つは、頸部羽状文壺である。このタイプの壺は、出雲から西伯耆では各集落で見ることができるが、東伯耆から因幡地域では少ないものである。また竹管文が施文された大形の壺は、集落遺跡では出雲平野に限られてくる。

伯耆東部から因幡の地域に分布の片寄りがあるものに、長脚で坏部の小さくなる高坏や筒部が省略され断面がくの字形になる開地谷型鼓形器台（山本 1989）がある。出雲地域の集落の衰退期にあたることもあるが、出雲平野でも多くは見られない。長脚の高坏は古墳時代前期後半の河内や大和でも高坏の主要なタイプになっている。伯耆東部・因幡地域と畿内中心地域に重心がある。山陰系長脚高坏と開地谷型器台は、西新町遺跡ではほぼ見られない状況である。

2. 西新町遺跡出土の山陰系土器

西新町遺跡の山陰系土器群について、一部ではあるが実現する機会をいただいたので、その特徴について考えてみたい。

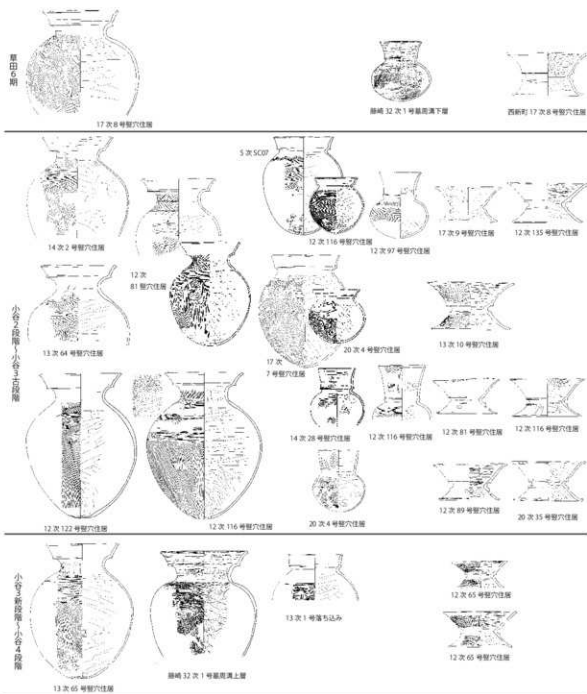
(1) 時期

西新町遺跡の山陰系土器群の時期については、全体のつくり、あるいは口縁端部などの細部のつくり山陰地域とはやや異なる部分があるので、山陰の編年観で時期比定を行うのが難しい面もある。山陰系土器の中でも壺はこの地域の様式に定着しているとされている（檀 2011、久住 2017）。在地化し独自の特徴を備えている可能性があるものを、山陰地域の編年観で位置づけることは正しい方法とは言えないが、時期を特定しやすい属性を持つものを中心に検討しておく。

現状は草田5期以前のものは確認されておらず、草田6期から小谷4段階までの間で概ね古墳時代前期に相当する時期のものが間断なく存在していると見られる（第36図）。遺跡の全盛期の西新町Ⅲ式新段階からⅣ式新段階（重藤 2009）には、8割ほどの竪穴住居に山陰系土器のいずれかの器種が伴う状況からもその定着度が分かる。ただし草田6期の土器はそれほど多くないようで、17次8号竪穴住居の筒部が幅広く受部の傾きが小さい鼓形器台や、西新町遺跡の墓域と見られる藤崎遺跡32次1号方形周溝墓の直口壺は口縁が短いことから草田6期の典型的な特徴をもつものである。

西新町遺跡では、小谷2～3古段階に相当するものが多いと見られる。小谷3古段階については、二重口縁直口壺が最も長くなるタイプや羽状文壺の羽状文の上下の間隔が不均等になるタイプなどわかりやすい特徴を持つタイプがあることから、抽出が可能である。小谷3古段階のものとしては12次81号竪穴住居があげられる。2個体ある頸部羽状文壺の一つは、羽状文の上下幅が不均等になるタイプである。鼓形器台も脚部が受け部に対し低いものがある。また、小形甕の口縁が長いタイプも見られることから、小谷3古段階の組み合わせとなっている。12次116号竪穴住居では、これらの器種に加え二重口縁直口壺が最も長くなるタイプでこの時期の典型的なセットを構成する。相伴の小形甕も小谷2から3古段階によく見られるプロポジションである。

小谷2段階については、この時期の分かりやすい属性が見出されていないので、典型資料を抜き



第36図 西新町遺跡出土の山陰系土器の主要器種 (1/10)

出すのは難しい。12次97号竪穴住居の壺や直口壺や、12次135号竪穴住居の鼓形器台や17次9号竪穴住居の壺・甕などが小谷2段階に相当する可能性がある。小谷3新から4段階については、遺跡自体の衰退期に入ることもあり、量的に少なくなっていると見られるが、13次65号竪穴住居の壺は胴部最大径が中央にあり正楕円形を呈することから小谷3新から4段階にあたる。

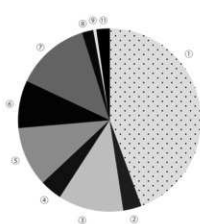
(2) 器種構成

ここでは出雲平野の集落遺跡と西新町遺跡の山陰系土器の器種の構成比率について見ていきたい。出雲平野の集落遺跡では、竪穴住居や井戸などの検出例が少ないが、大形の溝遺構でまとまりのある時期の土器が大量に廃棄されるものがあるので、各遺跡の溝遺構ごとに器種の比率をグラフにしてみた。

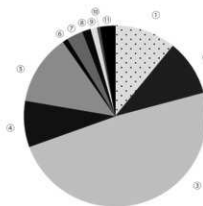
基本的な傾向としては、6～7割は甕が占めており、残りを壺・器台・高坏・低脚坏が同じような比率を占める傾向にある。また、ごくわずかではあるが多様な器種が存在する。

これに対して西新町遺跡では、甕の割合が25%、壺が50%となり、壺と甕の割合が逆転する。甕も大形甕が半分を占めることから、壺・甕など大形品で6割を占めていることになる。

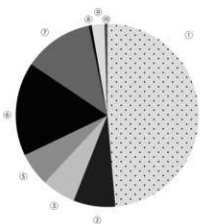
西新町遺跡では、山陰系土器が大形品を担うという点のはっきりとしている。山陰系の甕が少ないことから、煮炊きには布留系甕が使用されている。出雲平野でも草田6期には中国地方系の布留系甕(次山 1997)が見られ、その多くは在地産のものである。古志本郷遺跡では、草田6期の住居址(古志本郷Ⅱ SI01)で山陰系の二重口縁の土器を主体にしているが、煮炊き用の甕は在地産



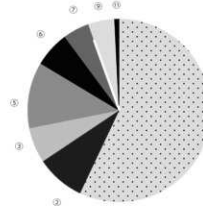
中野清水7区14層上面5号溝



西新町遺跡Ⅳ期古段階



古志本郷遺跡Ⅰ SD16・17



古志本郷遺跡Ⅲ SD02

- ① 甕
- ② 大形甕
- ③ 壺
- ④ 大形壺
- ⑤ 器台
- ⑥ 高坏
- ⑦ 低脚坏
- ⑧ 鉢
- ⑨ 直口壺
- ⑩ 甕形土器
- ⑪ その他

第37図 出雲平野の集落遺跡と西新町遺跡の山陰系土器の器種構成

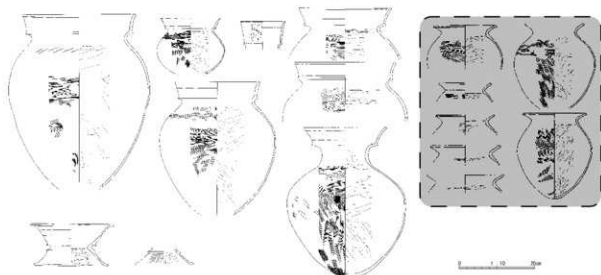
の布留系甕が主体となっているものがある。また、小谷3 古段階には松江市乃木西廻遺跡 SI10 で煮沸用甕の半数が布留系甕が占めており、古墳時代前期前半のうちには、布留系甕が定着している。山陰地域でも布留系甕の使用が急速に進んだとみられるが、やはり山陰系の甕が圧倒的に多い状況である。

また、山陰系土器の全体を見ると、山陰地域では、主要器種の壺・甕には法量や口縁形態や文様の有無などのバリエーションがあり、高環・鼓形器台・低脚環・鉢にも法量のバリエーションがある。甕形土器にも大形のものに連結させる小形のものなどもあり、各器種とも法量のバリエーションが豊富である。その他の器種には、小形二重口縁丸底壺・二重口縁壺や台付き甕などがあり、その他としたものにも多様な器種を見ることができる。また、一部の集落でも見られるが、墳墓の土器棺などにも使用される羽状文や竹管文などで飾られた大形の壺甕がある。これについては後にふれる。

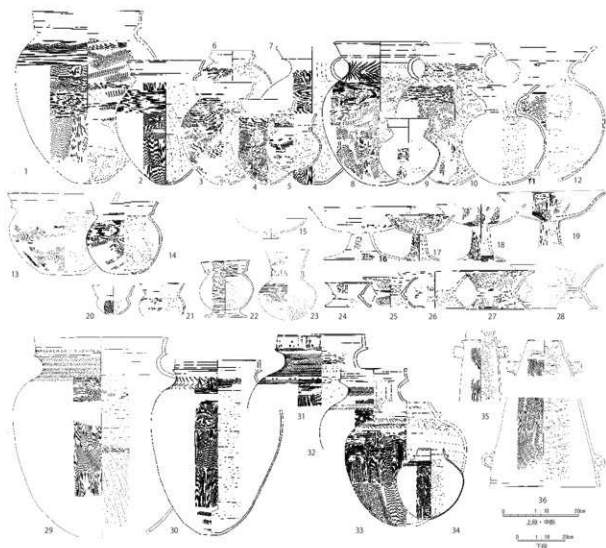
同様に西新町遺跡でも、山陰系と見られる土器を拾い上げていくと、やはり多種多様な器種が含まれていることが分かる（第 37 図）。おおよそ、出雲平野で確認できる器種や各器種の法量のバリエーションが揃っている状況である。台付きの小形甕や大形の壺甕類、羽状文や竹管文を持つ土器など山陰地域でも比率の少ない器種が見られることが特質される。

山陰系土器は各地で見られることから、比較のため岡山県の足守川流域の集落遺跡から出土する山陰系土器を見ると、主要な器種については確認できるが、法量のバリエーションや大形の土器などは見られない。山陰で比率の低い土器も見られない状況である。西新町遺跡と比べるとその量は歴然とした差があるものの、その内容も大きく異なる様相となっている。

ただし、吉備地域では壺・鉢といった器種の口縁部が山陰系土器と同じ二重口縁を呈する。また、数は少ないものの土器棺に使用される大形の甕も二重口縁のものがある。これらの土器は高橋編年 X a 期から X b 期（高橋 1998）に出現し前期前半の主要器種になるもので、製作技術は吉備地域のものであるが、口縁形態については山陰との関係が指摘されている（高橋 1991）。大形の土器については山陰地域の形態が取り入れられている可能性はあるが、山陰出身者がその製作に関係することはなかったようである。



第 38 図 出雲市古志本郷遺跡 SI01 出土土器（1/10）



1・16・古志本郷Ⅰ SD17 2・22・30・31・32・34・中野清水3 7区14層5号溝 3・5・8・23・27・古志本郷Ⅵ SD07 4・山持田 大溝
6・17・10・古志本郷Ⅵ SD23 7・20・24・25・29・中野清水3 4区14層 9・中野清水1 Ⅰ区 11・19・草田F3区 13・14・小山4次
SD03 12・15・18・21・26・古志本郷Ⅰ SD16 28・草田 SX03 33・土井・砂1号墳 35・36・山持田大溝

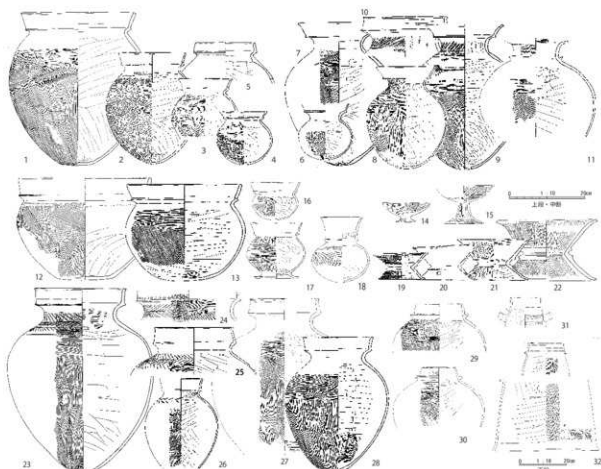
第39図 出雲平野の古墳時代前期前半の山陰系土器（1/10・1/16）

（3）施文

山陰系土器の特徴として壺甕類の文様がある。西新町遺跡の土器にも施文のあるものが少なからずあるので、これらについて見ておきたい。

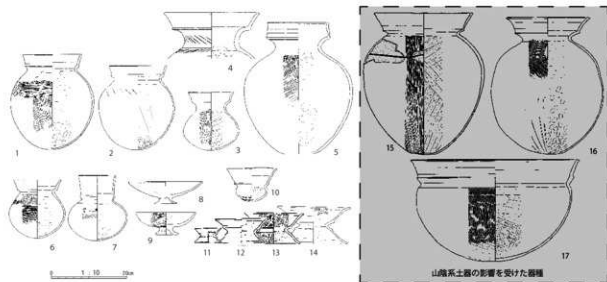
波状文・直線文

山陰地域の甕形土器には、肩部に列点文や波状文を施文することが一つの特徴である。このうち波状文は草田3期（的場式）に見られるようになり、草田4期まではピッチの細かいギザギザしたものであったが、草田5期にゆるやかなピッチの波状文になる。小谷2段階までは櫛書きないし刷毛原体による多条のものであったが、小谷3古段階には篋書き一条のものになる。また全周しないものもこのころから見られる。波状文は、モチーフを変えながら前期の間続くもので、おおまかな時期が想定できるほど変化のタイミングがはっきりした属性である。



1・7・14・12次122号住居 2・17次7号壺穴住居 3・17次9号壺穴住居 4・20次4号壺穴住居 5・12次147号壺穴住居 6・9・12次116号壺穴住居
8・20・12次81号壺穴住居 10・13次31号壺穴住居 11・13次44号壺穴住居 12・12次146号壺穴住居 13・19・28・12次65号壺穴住居 15・12次21号壺
穴住居 16・12次43号壺穴住居 17・20次45号壺穴住居 18・12次97号壺穴住居 21・12次4・5号壺穴住居 22・12次132号壺穴住居 23・12次105号壺
穴住居 24・12次63号壺穴住居 25・12次93号壺穴住居 26・12次119号壺穴住居 27・13次73号壺穴住居 29・12次89号壺穴住居 30・13次80号壺穴
住居 31・13次67号壺穴住居 32・12次26号壺穴住居

第40図 西新町遺跡の山陰系土器 (1/10・1/16)



1・津寺2壺穴住居 39・2・津寺4壺穴住居 155・3・5・津寺2溝 5・4・津寺2溝 3・6・津寺4土器置り 4・7・津寺4包倉庫 8・矢部南向壺穴住居 62
9・津寺2溝 4・10・津寺2壺穴住居 39・11・中瀬川溝 12・12・津寺4溝 101・13・14・16・17・定守川加茂A壺穴住居 21・15・矢部A58号墳

第41図 岡山県足守川下流域の山陰系土器 (1/10)

西新町遺跡の山陰系土器にも直線文・波状文・列点文が見られるが、特に壺の肩部に直線文・波状文を施すものも多く見られる。多条と篋書き一条の両者が存在するが篋書き直線文・波状文が多く、山陰地域より时期的に早く篋書きによる一条の施文が見られることが注意される。また、山陰地域では壺の肩部に施文するケースは少数であり、基本的には甕の肩部に見られる施文である。

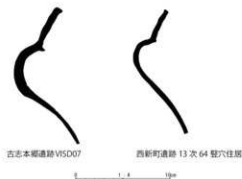
西新町遺跡では、山陰系壺の他、布留系の甕と直口壺の肩部にも篋書きの直線文・波状文が施されるものが見られる。布留系の甕の製作技法には山陰の技法が基層にある（久住 2017）とされている。また、直口壺も直口部と胴部の境が屈曲せず湾曲することから、作りとしては山陰系土器の特徴を持っている。山陰系壺と布留系甕・直口壺はいずれも製作技法は山陰系で篋書きの施文を持つことが共通している。また、山陰系壺の口縁部を見ると、山陰地域では小谷 2 段階までは端部に平坦面を持ち、その外側に肥厚するものがほとんどであるが、西新町遺跡では端部の外側は丸く収めて、内側に肥厚させるものも多く見られる。西新町遺跡の山陰系壺は、全体の形態は山陰地域のものとはあまり違和感がないほどに共通しているが、口縁端部の仕上げ処理の方法や施文は布留系甕と共通している。山陰系壺の多くは布留系甕や直口壺などとともに在地で製作されたものと考えておきたい。

羽状文

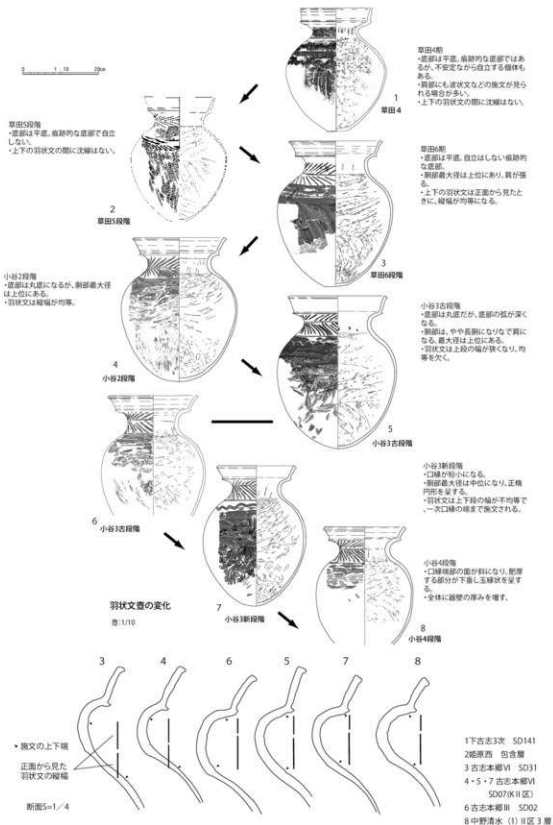
羽状文は、壺の頸部から肩部にかけて施文される。古墳時代においては 2 段から数段重ねるものがあり、各段は沈線で区切られものが多い。頸部に 2 段の羽状文とその間に 1 条の沈線を持つものは有軸羽状文とされ、古墳時代の頸部羽状文壺の主要なタイプである。このタイプは文様の割付に変化がみられることから、時期の変化が大雑把には捉えやすい。壺の頸部に収まるように施文されており、正面から見ると上段と下段の羽状文が均等な上下幅で配置されるものと、一次口縁から頸



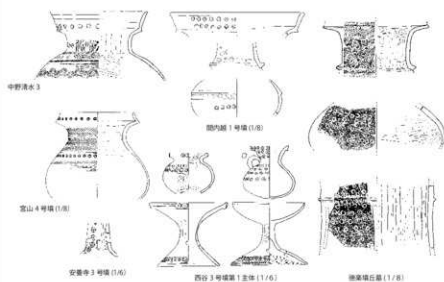
第 42 図 西新町遺跡の篋書き文（1 / 6）



第 43 図 壺形土器の断面比較（1 / 4）



第44図 羽状文壺の変化 (1/10・1/4)



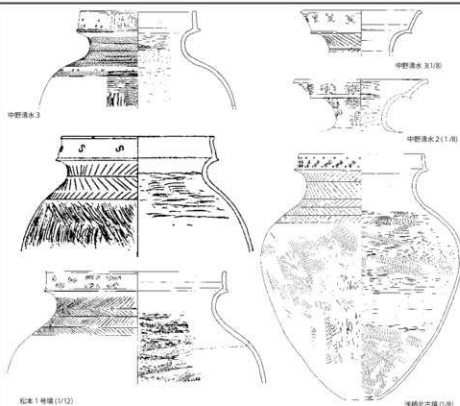
スタンプ

○・C

配列

- ・施文間隔が狭く密、
- ・等間隔に並ぶ単純な配置。

草田6期には、ほぼ消失する。桂見2号墳で1点あるのみ。
荒島墳墓群を除き小谷2段階の確実な例はない。



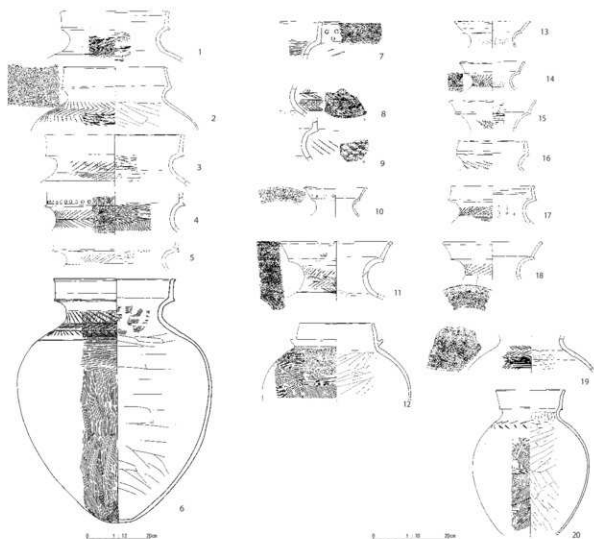
スタンプ

○・S

配列

- ・施文間隔が広い、
- ・企画的な配置。
- ・組み合わせて文様単位を作る。

第45図 山陰の竹管文を持つ土器（1/6・1/8・1/12）



1-12次3号壺穴住居 2-12次93号壺穴住居 3-12次27・28号壺穴住居 4-12次63号壺穴住居 5-13次67号壺穴住居 6-12次105号壺穴住居 7-12次91号壺穴住居 8・9-12次122号壺穴住居 10-12次77号壺穴住居 11-12次100号壺穴住居 12-12次89号壺穴住居 13-13次75号壺穴住居 14-12次139号壺穴住居 15-13次17号壺穴住居 16-13次18号壺穴住居 17-13次31号壺穴住居 18-13次8号壺穴住居 19-12次142号壺穴住居 20-12次119号壺穴住居

第46図 西新町遺跡の羽状文・竹管文を持つ土器（1/10・1/12）

部にかけて配置するものがある。この場合は正面から見た場合上下の幅が不均等になる。後者のような羽状文は小谷3古段階から見られる。西新町遺跡でも上下の幅が不均等になるものが散見されるので、山陰地域の羽状文の割り付け変化も反映されているといえる。また、頸部羽状文壺は山陰では出雲地域に量的な重心があるので、西新町遺跡と出雲地域との関係を示すものといえる。

竹管文

竹管文も山陰系土器に特徴的な施文である。西新町遺跡では竹管文を持つ土器も確認できる。

山陰における竹管文を持つ土器は、弥生時代後期後葉から終末期に四隅突出型埴塼墓などに伴い盛行した後に、古墳時代に入り方墳の時期には一旦は見られなくなり、前期の中頃に一時的に復古するかのように再度見られるようになる。弥生時代のものを古相竹管文、再度登場するものを新相竹管文とし整理したことがある（松山2018）。古相竹管文は器面全体に密に規則性なく施文されるものが多いのに対し、新相竹管文は複数の竹管文・半截竹管文で単位文様を作るものや、単純なも

のも全体に割付がなされ規格的に配置されている（第45図）。このように二つの竹管文は分別が可能である。新相竹管文は小谷3古段階にほぼ限られる。古相竹管文は島根県・鳥取県で広く分布しているが、新相竹管文については、出雲平野と周辺に限られている。安来平野の方墳での円筒土器には古相竹管文となっている。出雲平野以外では、西乙女塚古墳、東求女塚古墳、龍子三塚古墳などで見られることが注意される。西新町遺跡でもこの新相竹管文をもつものが、確認できる。大形の壺に羽状文とともに施文されているものが多いので、出雲地域と同様のものがある。小谷3古段階に併行する時期に、搬入または当地で製作されたものであろう。出雲地域の中でも出雲平野の地域との関係を示すものと考えられる。

（4）まとめ

西新町遺跡の山陰系土器にも器種によって意味合いの異なるものがある。一つは、壺や大形の甕は、量的にも多いことから在地化したもの。篋書き文様や口縁端部の特徴など山陰地域にはない特徴があることからその可能性が高いと見られる。型式変化も山陰とはやや異なる方向を持つものと考えられる。布留系甕が地域独自の特徴をもち北部九州型布留系甕とされるように、山陰地域に先行して見られる篋書き文を持つものと、これと共通するものは、北部九州型山陰系壺として抽出することも可能かと思う。

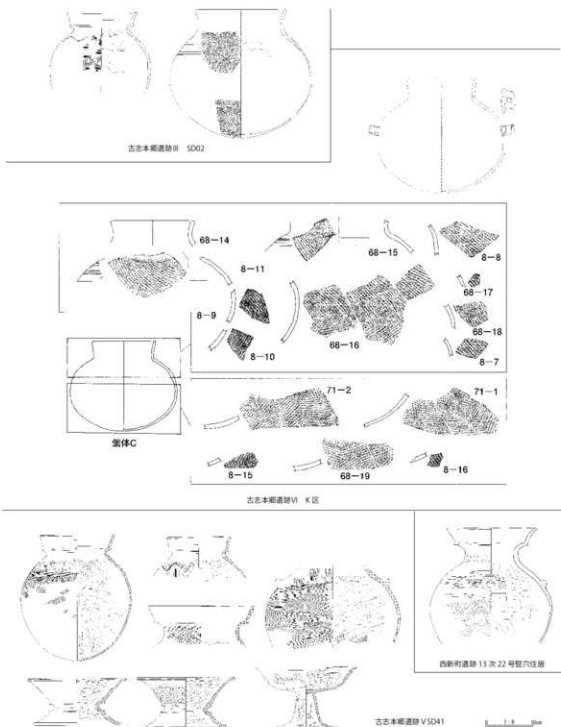
次に、各時期に量的には少ないが安定して存在する鼓形器台や直口壺は、その型式変化のあり方が山陰地域と同調している。これらの器種は在地産のものも含めて山陰地域の時々の情報が反映されていることから、山陰の往来者などが関係している可能性を考えたい。

三目として、竹管文を持つ大形壺など出雲平野の小谷3古段階に限って見られる土器である。小谷3古段階は久住猛雄が明らかにした後期博多湾貿易が運営される時期と重なり、出雲平野にも朝鮮半島系土器が搬入される時期であることから、他の山陰系土器とは性格を異にしている可能性がある。

3. 博多湾貿易と出雲地域

久住猛雄は、白井克也の交易機構の変遷論を発展させ、西新町遺跡を後期博多湾貿易の拠点として位置付けている。また、この時期の出雲地域では出雲平野の古志本郷遺跡を中心に北部九州以外では最も多くの三国土器が出土していること、山陰系土器群がほぼ全器種が在地で製作されていることから、出雲地域の交易者に対しては何らかの優遇措置が働いていた可能性を指摘している（久住2007）。

また、久住の論考以後も、出雲平野では斐伊川下流域の山持遺跡で朝鮮半島系の資料が新たに確認され、こうした新資料を踏まえて池淵俊一が交易機構と出雲地域の関係の整理を行っている（池淵2010）。それによると山持遺跡では弥生時代中期から終末期にかけて勒島式・楽浪・三韓の土器が搬入され北部九州地域の弥生土器も見られることから、久住の言うところの原の辻＝三雲貿易を介してこうした土器が持ち込まれたものとした。その後、山持遺跡は衰退をはじめ半島系の土器なども見られなくなるタイミング（草田6期）で、神戸川西岸の古志本郷遺跡では、古墳時代の遺構から半島系土器がまとまって出土するようになることから、古志本郷遺跡は博多湾貿易を介して対外交渉が行われたとした。この交易機構の変化が、出雲平野の交流拠点の移動を促し、西谷墳墓群に



第47図 出雲平野の半島系土器と共伴土器（1/8）

おける大型四隅突出型墳丘墓の築造停止などが重なることから地域の政治変動にも影響を与えたものと推察されている。

出雲地域における半島系土器の動向は池淵の示す通りであるが、西新町遺跡と関係するとされる古志本郷遺跡の状況について再度確認しておく。

古墳時代になると、神戸川西岸の古志本郷遺跡で半島系土器が確認できるようになる。この遺跡では、規模の比較的大きな溝遺構から大量の土師器が出土するが、この中に半島系土器が含まれる

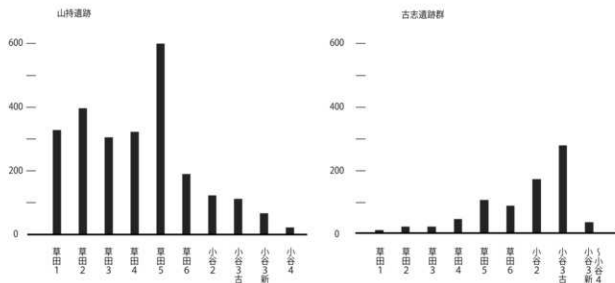
ことが報告されている。

この溝遺構は古志遺跡群で多数確認されているが、草田4期から溝の埋没が始まり、古墳時代前期のうちにすべての溝が埋没している。このうち半島系土器が伴うものは、古志本郷遺跡Ⅲ SD02のように小谷3古段階の土器を伴うもの、または、草田6期から小谷4段階までの時期幅のある土器を伴うものが出土している。草田6期から小谷2段階の間に埋没する溝もあるが、これらの遺構には半島系土器は伴っていない。また、古志本郷遺跡Ⅴ SD41では、半島系土器の影響を受けたと見られる肩部に瘤をもつ山陰系の壺は、小谷3古段階のものを伴って出土している。また、この模倣土器と同じものが西新町遺跡でも出土している（第47図）。このように、古志本郷遺跡における半島系土器は小谷3古段階との接点を確認できる。古志本郷遺跡においては、半島系土器が古墳時代前期でも中頃に近い限られた時期に流入している可能性が考えられる。

また、西新町遺跡では、山陰系土器において竹管文を施す土器の存在がある。すでに述べたようにこの土器は、山陰地域では小谷3古段階に出雲平野に集中して見られるもので、時期と地域を絞り込めるものである。小谷3古段階は、北部九州の土師器編年では、久住編年ⅡC期からⅢA期（久住1999）にあたり、西新町遺跡の最盛期にあたる段階とみられる。こうした両遺跡の状況と併行関係から、後期博多湾貿易を通じて、出雲平野の集団が西新町遺跡において積極的に交易を行っているものと見られる。また、この時期に山陰地域の甕の肩部の施文のうち直線文や波状文は、博多湾岸地域で先行して見られた筥書きの1条のものに変化することも注意される。

次に山持遺跡と古志本郷遺跡群の弥生時代後期から古墳時代前期の動向を確認しておく。両遺跡では竪穴住居などの遺構の検出数が少ないので、遺跡出土土器の点数を時期ごとに整理することで遺跡の動向を考えてみたい。山持遺跡では、楽浪・三韓土器が出土する弥生時代後期以降の土器出土量は安定しており最終末の草田5期には急増するものの、直後の草田6期には急降下し、その後も減少を続ける。古墳時代になるとともに急激な衰退をおこすことがわかる。

次に、古志本郷遺跡では、弥生終末の草田5期から増加傾向になり小谷3古段階に大幅に増加することがわかる。その後は直後から激減する。古志本郷遺跡でも半島系土器が出土する小谷3古段階



第48図 山持遺跡・古志本郷遺跡の出土土器量の変化

階にピークを迎えていることがわかる。

このように両遺跡とも半島系土器が出土する時期には、急激に土器量が上昇していることがわかる。こうした変化は、内的な要因による発展というよりも、交易を通じての外的な要因が大きく作用していると考えられることから、交易機構の変化が地域の政治・経済に大きな影響を与えたとする池淵の指摘を補うものである。

しかしながら、出雲平野においては、古墳時代開始期の草田6期には半島系土器が確認できていない。この時期は、山持遺跡は急激な衰退期、古志本郷遺跡は草田5期から6期にかけては大きな成長はまだ見て取れない時期である。松江市鹿島町草田遺跡では草田6期～小谷2段階に半島系土器や搬入品と見られる布留式土器などが見られることから、出雲平野以外の地域も交易を行っている可能性がある。草田6期は久住編年のⅡA期～ⅡB期（久住1999）に併行することから、前期博多湾貿易にあたる。前期博多湾貿易は交易拠点がやや分散的であると説明されており（久住2007）、そうした状況が出雲地域にも影響している可能性がある。

4. まとめ

西新町遺跡の山陰系土器は、量的に多く壺や大形の甕など定着し安定して製作されるもの。直口壺や鼓形器台など量的にはやや少なく、山陰地域の型式変化に同調した変化が見られるもの。竹管文を施す壺や台付き土器など山陰でも小谷3古段階にほぼ限られるような土器の3グループに分けることができると見られる。壺・大形の甕は西新町Ⅲ期新相には在地での製作が始まる。形態・製作技法など技術移転には山陰地域のいずれかの集団が関係していると思われるが、弥生終末期の半島系土器や北部九州地域の土器の分布からすれば、出雲地域のいずれかの集団である可能性が高い。しかしながら山陰地域にない特徴も見られるので、出雲地域の主体性は弱いものとする。いったん定着した後も鼓形器台や直口壺は山陰地域と同様の型式変化が見られるので、山陰地域と継続的に交渉があったものと考えられる。

こうしたなかで小谷3古段階の多様な器種がまとまって見られる状況は、出雲平野の集団がこれまでに積極的な交易を行ったことを示しており、後期博多湾貿易との関係を考えておきたい。この竹管文を施す土器は、出雲平野では神戸川下流域の古志本郷遺跡には見られず、斐伊川下流域の中野清水遺跡で見られることから、弥生時代には四隅突出型墳丘墓を築造していた中心エリアの集団も関係しているものと考えられる。

また、古墳時代の開始期に、山陰系土器のうち壺や大形の甕などが定着する要因については、検討することができなかったが、これについては博多湾岸の多くの遺跡で山陰系土器が出土していることから、これらとともに検討する必要があるが、筆者の力の及ぶところではないので、今後の課題にしたい。

【参考文献】

- 赤澤秀則 1992 「Ⅳ、小結 1. 出土遺物 時期」『南講武草田遺跡 鹿島町教育委員会』
池淵俊一 2007 『山持遺跡 Vol.2 - 国道 431 号道路改築事業「東林木バイパス」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県埋蔵文化財調査センター
池淵俊一 2010 「山陰における朝鮮半島系土器の様相 - 弥生時代後期を中心に -」『第 59 回埋蔵文化財研究集会』

- 日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に— 埋蔵文化財研究会
- 岩本崇 2017「西晋鏡と古墳時代前期の暦年代—鳥根県古城山古墳の鏡と土器をめぐって—」『鳥根考古学会誌第34集』鳥根考古学会
- 亀山行雄 1996「古墳時代初頭の土器」『津寺遺跡3岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会
- 君嶋俊行 2021「港湾集落青谷上寺地遺跡の終焉」『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会
- 河合忍 2021「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について—弥生時代後期中葉—古墳時代前期前葉土器の分析から—」『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2007「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53・4 考古学研究会
- 久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『第19回九州前方後円墳研究会長崎大会 九州島における古式土器 発表要旨集・基本資料集』九州前方後円墳研究会
- 式田洗 2021「山陰地域における古墳出現期土器の編年と製作技術」『考古学研究』第68巻第3号（271）考古学研究会
- 重藤輝行 2009「西新町遺跡出土の土器編年」『西新町遺跡IX』福岡県文化財調査報告書221集 福岡県教育委員会
- 高橋護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9号 岡山県立博物館
- 高橋護 1991「中国・四国」『古墳時代の研究6土器と須恵器』雄山閣
- 檀佳克 2011「土器の編年①九州」『古墳時代の考古学1古墳時代史の枠組み』同成社
- 次山淳 1995「波状文と列点文—布留形にみられる肩文様の分類・系譜・分布—」『文化財論叢Ⅱ—奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集—』奈良国立文化財研究所
- 次山淳 1997「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から—」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 次山淳 2017「畿内・中四国からみた九州の古式土器」『第19回九州前方後円墳研究会長崎大会 九州島における古式土器 発表要旨集・基本資料集』九州前方後円墳研究会
- 寺沢薫 1986「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49集 奈良県立橿原考古学研究所
- 中川寧 2023「北部九州と山陰の交流—土器と漆塗り木製品—」『古墳出現期土器研究』第10号 古墳出現期土器研究会
- 平井泰男 2010「吉備における古墳出現期の土器編年」『研究報告30』岡山県立博物館
- 牧本哲雄 1999「第9章遺構、遺物の検討 第1節古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ—一般国道9号（北条道路）関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、図第6遺跡—一般国道9号（青谷羽合道路）関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育文化財調査報告書61（財）鳥取県教育文化財団
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『鳥根考古学会誌』第17集 鳥根考古学会
- 松山智弘 2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 松山智弘 2015「山陰」『中四国前方後円墳研究会第18回研究集会 前期古墳編年を再考するⅡ—古墳出土土器をめぐって—発表要旨・資料集』中四国前方後円墳研究会第18回実行委員会
- 松山智弘 2018「山陰」『前期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会編 六一書房
- 松山智弘 2021「鳥根県」『中四国前方後円墳研究会第24回研究集会 中期古墳編年の現状と課題Ⅴ—古墳時代中期の土器・須恵器をめぐって—発表要旨・資料集』中四国前方後円墳研究会第24回実行委員会

松山智弘 2024「山陰中西部」『中期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会編 六一書房

山本清 1989「山陰の鼓形器台と当代の墓制」『出雲の古代文化』六興出版

渡邊誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『島根考古学会誌』第26集

島根考古学会

【遺跡文献】

島根県

古志本郷遺跡（1次）出雲市教育委員会 1998『古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』（斐伊川放水路事業）島根県教育委員会 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』・島根県教育委員会 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』・島根県教育委員会 2001『蟹谷遺跡 上沢Ⅲ遺跡 古志本郷遺跡Ⅲ』・島根県教育委員会 2003・『古志本郷遺跡Ⅴ』・島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅵ-K区の調査-』 下古志遺跡（1次）出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』・（2次）出雲市教育委員会 2002『古志本郷遺跡 下古志遺跡』・（3次）島根県教育委員会 2002『下古志遺跡（第3次調査）』 山持遺跡 出雲市教育委員会 1996『山持川川岸遺跡』・島根県教育委員会 2007『山持遺跡 vol.3』・島根県教育委員会 2010『山持遺跡 vol.6』 中野清水遺跡 島根県教育委員会 2004『大津町北遺跡 中野清水遺跡』・島根県教育委員会 2005『中野清水遺跡（2）』・島根県教育委員会 2006『中野清水遺跡（3）・白枝本郷遺跡 大津町北遺跡 島根県教育委員会 2004『大津町北遺跡 中野清水遺跡』 小山遺跡 出雲市教育委員会 2002『小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）』 矢野遺跡 出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡』出雲市の文化財報告 10 蔵小路遺跡 島根県教育委員会 1999『蔵小路西遺跡』 姫原西遺跡 島根県教育委員会 1999『姫原西遺跡』 三田谷遺跡 島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 2）』 草田遺跡 鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡』 釜代1号墳 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1994『釜代1号墳外発掘調査報告書』松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書第1集 茶山遺跡 松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団 2014『茶山遺跡』松江市文化財調査報告書161集 勝負遺跡 島根県教育委員会 2007『南外2号墳・勝負遺跡』 小屋谷3号墳 八雲村教育委員会 1981『御崎谷遺跡 小屋谷古墳群』 夫敷遺跡 島根県教育委員会 1989『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（夫敷遺跡）』 勝負遺跡 島根県教育委員会 1992『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』 出雲国府下層 島根県教育委員会 2003『史跡出雲国府跡1』 神田遺跡 島根県教育委員会 1987『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 大坪遺跡 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2002『市道眞井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第91集 塩津山1号墳 島根県教育委員会 1997『塩津山1号墳』 大原遺跡 島根県教育委員会 1994『白コクリ遺跡 大原遺跡』 陽徳遺跡Ⅱ区1号墳 島根県教育委員会 1995『陽徳遺跡・平らⅠ遺跡』 松江市 2021『乃木西廻遺跡』松江市文化財調査報告書 202集

鳥取県

博労町遺跡 米子市教育文化事業団 2011『博労町遺跡』米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 64

岡山県

津寺遺跡 岡山県教育委員会 1996『津寺遺跡 3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104 岡山県教育委員会 1995『津寺遺跡 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 98 中撫川遺跡 岡山県教育委員会 2004『新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 182 加茂A・B遺跡 岡山県教育委員会 1995『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 94 矢部古墳群B 岡山県教育委員会 1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82 矢部南向遺跡 岡山県

教育委員会 1995『足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 94

福岡県

藤崎 32 次 1 号墓 福岡市教育委員会 2004『藤崎遺跡 15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 824 集 西新町遺跡 (5 次)
福岡市教育委員会 1994『西新町遺跡 3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 375 集 (12 次) 福岡県教育委員会 2000『西
新町遺跡 II』福岡県文化財調査報告書 154 集・福岡県教育委員会 2001『西新町遺跡 III』福岡県文化財調査報告書
157 集 (13 次) 福岡県教育委員会 2002『西新町遺跡 IV』福岡県文化財調査報告書 168 集・福岡県教育委員会 2003『西
新町遺跡 V』福岡県文化財調査報告書 178 集 (14・15 次) 福岡県教育委員会 2005『西新町遺跡 VI』福岡県文化財
調査報告書 200 集 (17 次) 福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡 VII』福岡県文化財調査報告書 208 集 (20 次) 福
岡県教育委員会 2008『西新町遺跡 VIII』福岡県文化財調査報告書 218 集

松山智弘 (鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター)

第5節 吉備系土器の様相

1. はじめに

西新町遺跡から古墳時代初頭前後に吉備系土器が出土することは、古くから注目を集めてきた(田崎 1983、森岡 1991、次山 2007 など)。今回、第 49 図に示した吉備系土器について実見する機会を得たが、その全てが搬入品の可能性が高いと判断した。そこで、まずは主要な吉備系土器の所見を記し、時期や器種の特徴を抽出する。その上で博多湾を中心とする北部九州での類例の状況の確認を行い、西新町遺跡出土土器を含めた北部九州での吉備系土器の状況を整理する。最後に、瀬戸内海沿岸地域に展開する吉備系土器の分布状況を宇垣匡雅氏や次山淳氏の研究成果を基礎に確認しつつ(宇垣 1995、次山 2007・2014)、同時期に広域に展開する山陰系や畿内系などの他地域系土器の動向と比較する中で、吉備系土器の動態からうかがえる情報について簡単に取りまとめておきたい。なお、検討の基礎となる土器編年は筆者が検討してきたもの(河合 2015・2019・2021)を使用することとする(第 8 表)¹⁾。

2. 西新町遺跡出土の吉備系土器の概要

西新町遺跡ではこれまでに少なくとも 20 点を超える吉備系土器が確認されている。ここでは遺構出土の土器 11 点に絞り、その概要を確認したい(第 49 図)。

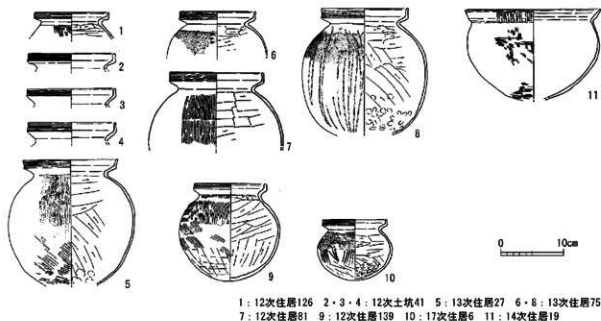
1～10 は吉備型甕である。1～8 が中型、9 が小型、10 が極小型である(器種分類は河合 2021 を参照)²⁾。1～10 に共通する特徴として、短く立ち上げる口縁部外面に櫛描沈線文を施し、胴部内面にはヘラケズリおよび底部付近の指頭圧痕が認められる。胴部外面には(タタキ調整後)タテまたはナナメハケを行い、胴部下半を中心にミガキ上げを行う、といった技法上の強い共通点が認められる。また、外面肩部付近に「米粒形列点文」(次山 1997) もいくつか認められる(5・6・10)。これらの特徴を有する土器は備前・備中(以下、「吉備(南部)」と呼称)に認められるものであり、搬入品と考えられる。

11 は大型の鉢である。胴部は上半部に最大径があり、丸底状を呈する。胴部外面の調整は、ヨコハケ後ミガキが認め

第 8 表 土器編年対照表

	備前・備中		近畿	出雲	北部九州
大別時期	河合 2015・2019・2021	高橋 1980・1986・1988	寺沢 1986	赤澤 1992・松山 2000	久住 1999
弥生時代 終末期	終末期 1	Ⅱa 期	庄内 0 式	草田 3 期	
	終末期 2	Ⅱb 期		草田 4 期	Ⅰ A 期
	終末期 3	Ⅱc 期	庄内 1 式		
古墳時代 前期前葉	古墳 1 期	Xa 期	庄内 2・3 式	草田 5 期	Ⅰ B 期
	古墳 2 期	Xb 期	布留 0 式(古)	草田 6 期古	Ⅱ A 期
	古墳 3 期	Xc 期	布留 0 式(新)	草田 6 期新	Ⅱ B 期
前期中葉	古墳 4 期	Xd・e 期	布留 1 式(古)	小谷 2 式	Ⅱ C 期
	古墳 5 期		布留 1 式(新)	小谷 3 式古	Ⅲ A 期古
前期後葉	古墳 6 期	Xf 期	布留 2 期	小谷 3 式新	Ⅲ A 期新
	古墳 7 期	Xfb 期	布留 3 期	小谷 4 式	Ⅲ B 期

含有物を含むなどの特



第49図 西新町遺跡におけるおもな吉備系土器（1/6）

微も吉備南部で認められるものであることから、吉備からの搬入品の可能性が高いと判断する³⁾。

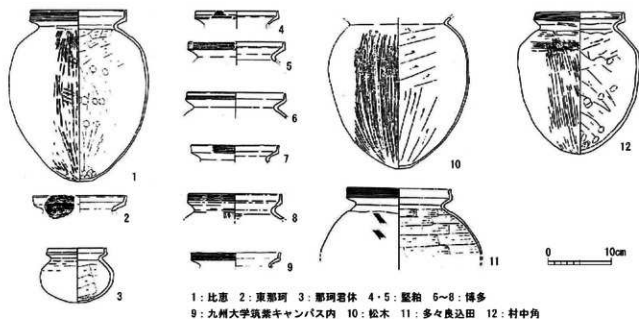
これらの土器の時期であるが、吉備型の中型甕は古墳時代前期前～中葉（1～5期）の間は口縁部形態に大きな変化が認められず、口縁部のみが出土した場合は時期の推定が難しい一方で、胴部最大径以下に時期の特徴が明瞭に現れるため、胴部の残りが良い場合は時期の推定がある程度可能となる。そこで、胴部最大径付近まで残る5～8を検討すると、5が3期、6・7は判断が難しいが3～4期、8は胴部の下ぶくれが進行しているため4期⁴⁾に比定できるものである。また、小型甕9も3～4期の範疇では理解が可能であり、極小型甕10についても3期以降出現し、4期に盛行するものである。以上をまとめると、西新町遺跡で検出される吉備系土器はおおむね3～4期（布留0式（新）～布留1式（古）併行期（寺沢1986））に絞られる傾向がある。

以上から、西新町遺跡出土の吉備系としては、①時期が3～4期（布留0式（新）～布留1式（古）併行期）に絞られること、②大半が甕であること（器種が限定されている）、③その甕については故地である吉備南部と同様に、用途による容量分化が認められること（ススの付き方を観察すると、中型がコメの炊飯用、小型・極小型はそれ以外のおかず用などの用途で使用されている可能性が高い（小林編2011））、④その全ての土器が搬入品の可能性が高い（模倣品は認めたい）、等の特徴が認められる。このうち、②～④の情報は、吉備南部から直接的に人が西新町遺跡に来ていたことを示すものとして注目できる⁵⁾。

3. 周辺地域での吉備系土器の出土状況

ここでは、西新町遺跡出土土器の位置づけを深めていく上で、周辺地域（博多湾を中心とする北部九州）での類例の状況の確認を行うこととした。なお、当該地域の類例については、久住猛雄氏の集成があるため（久住2005）、その成果を参考とすることとし、主要なものを地域ブロック毎にまとめ直した（第50図）。

1～3は比恵・那珂遺跡群から出土した吉備型甕である。1は肩が張り、胴部最大径が上半部に



第50図 北部九州（おもに博多湾岸東半地域）における吉備系土器（1/6）

あるが、胴下半部に膨らみが出ているため、1～2期に比定できる。3は極小型の甕にあたると考えられ⁶⁾、胴部最大径が中央にある特徴から4期前後に比定しておきたい。4・5は堅粕遺跡群、6～8は博多遺跡群（以上の遺跡はすべて福岡市内）、9は九州大学筑紫キャンパス内（春日市）、10は松木遺跡（那珂川市）から出土した吉備型甕である。10が1期に比定できるほかは年代の絞り込みが難しいが、西新町遺跡よりも古い1期の土器が目立つことに特徴がある。これらの古い時期の吉備型甕が出土する遺跡はともに御笠川・那珂川流域で博多湾東部にまとまる傾向があることは注意が必要である。

このほか、11はこの地域より東にあたる多々良川流域に所在する多々良込田遺跡（福岡市）出土の吉備型甕であり、胴部上半部に最大径があることから、1～2期に比定できる資料である。また、12は有明海に注ぐ筑後川下流域に所在する佐賀県村中角遺跡出土の吉備型甕であり、1期に属する資料である。現在知られる中で最も西にある資料としても著名であるが、吉備型土器の移動を考える上で重要な資料であるため、ここで挙げておきたい。

4. 小 結

以上、北部九州での吉備系土器の状況をみてきたが、古墳時代でも古い1～2期の土器が目立つ博多湾岸東半の御笠川・那珂川流域や多々良川流域の遺跡群と、それより新しい3～4期にほぼ絞り込まれる西新町遺跡という違いが抽出できた。なお、続く5期（布留1式（古）併行期）以降は現状では西新町遺跡では確実に吉備系土器が認められず、消滅している可能性が高い。これは後述するように、畿内系や山陰系土器との大きな違いでもあり、注意が必要である。

5. 考 察

本稿で取り上げている吉備系土器であるが、冒頭でも述べたように、古墳時代初頭前後には北部九州と畿内地域とを結ぶ瀬戸内海沿岸地域に広く分布することが知られている。宇垣匡雅氏は吉備

遺跡群ではⅠA期（＝吉備弥生終末期2・3にほぼ併行）からⅠB期にかけて「道路」が造営され、那珂八幡古墳が築造されるなど、「奴国」の政治中枢になったと評価するが、ⅠB期からⅡA期にかけて韓半島系土器が増加する傾向を認め、対楽浪・帯方郡交易を担うようになるなど、「前期」博多湾貿易（白井2001）の成立を示すとした。なお、比恵・那珂遺跡群においてもⅡA期には土器相が畿内系に転換することや外来系土器として韓半島系に加え、山陰系・吉備系・北四国系・防長系・豊前系・東海系などの幅広い地域からの土器が認められることも指摘している。

一方、西新町遺跡については、ⅠA期から集落が形成されるが、ⅡA期に大型化し、ⅡB期からⅡC期（＝おおよそ吉備3～4期併行期）にかけて最盛期を迎えることを指摘する。そのⅡB期には韓半島系土器が集中的に出土することから、交易拠点が移動したものと判断し、西新町遺跡の中心化をもって「後期」博多湾貿易の開始と評価した。ⅡA期の韓半島系のカマドの導入や山陰系土器の搬入と在地化をはじめとして、ⅡB期には「布留系」土器の受容と普及、山陰系・畿内系・西部瀬戸内系・吉備系・讃岐系・東海系土器などの幅広い地域からの土器が集中することも指摘している。

以上の研究を参考にすると、北部九州での吉備系土器の動向もこの交易拠点の変化の過程とおおむね一致したものであったと理解することができる。吉備1～2期段階は博多湾岸東半に広く分布するだけでなく、有明海側の佐賀県村中角遺跡などの他の拠点的な集落にも広がりを見せていたが、西新町遺跡が交易拠点化する吉備3～4期には吉備系土器も西新町遺跡に集約される傾向が認められるが、このことは、吉備型甕を携えてきた人々もその交通拠点の変化に対応していたことを示しており⁸⁾、当時の北部九州と遠隔地を結ぶ交流の内容を考える上でも重要である。なお、西新町遺跡は次のⅢA期古相（＝吉備5期にほぼ併行）までは多数の外来系土器がみられるが、遺構数自体は減少し始めており、ⅢA期新相（＝吉備6期にほぼ併行）の遺構はごくわずかとなり、その次段階に集落が断絶することも久住氏により指摘されている。吉備系土器は確実に5期のものは確認できず、集落の衰退の始まりとともに姿を消していることも、西新町遺跡の集落消長と関連性がある可能性もある⁹⁾。

以上で吉備系土器の消長とその背景を考えてきたが、次に西新町遺跡で共存する他地域系の中でも出土量が多い畿内系（布留系）・山陰系との違いも簡単に触れておきたい。この両者については、第2章第1～3節で詳述されているためそちらを参照いただきたいが、簡単にまとめると、甕の搬入品に偏り、出土量も相対的に少ない吉備系と比較して、①多器種でかつ多量に受容されている点、②在地の土器様式への影響・折衷が認められる点、の観点で根本的に異なっていることが理解できる。その消長も久住氏の研究を参考にすると（久住2004）、③ⅡA期に在地生産が始まっているようであり、存続時期も集落の衰退期にあたるⅢA期古相までは少なくとも認められるなど、吉備系の消長よりも前後に長い点も異なっている。このことから、同じ外来系土器とはいえども、その果たした役割や目的が異なっている可能性は高く、吉備系集団が在地の土器生産に与えた影響は相対的に低いことが理解できる。

それでは吉備系土器の存在は何を物語っているのだろうか。すでに確認してきたように、吉備から搬出された土器は、博多湾沿岸の西新町遺跡と大和川下流域の遺跡群、および薩向遺跡を結ぶ瀬戸内海沿岸部に位置する各地域の交流拠点での出土が多い特徴をもっている。吉備の内部でも、備中南部に所在し、当時の臨海部に位置する上東遺跡（倉敷市）やそこから約4km内陸に所在する

津寺遺跡(岡山市)では、畿内系・播磨系・四国系・備後系・山陰系・東海系・北陸系などの多様な外来系土器が出土しており、吉備における交流の拠点であったことが指摘されている(亀山 1996・2006)。その消長は、弥生時代終末期から増加し始め、古墳時代前期前葉(1～3期)にピークに達し、前期中葉に(4・5期)に減少し、前期後葉の6期に収束する状況であるが(河合 2022)、厳密に言えば4期までは継続し、5期に急減する状況である。これは近畿での吉備系土器の出土数を分析した秋山浩三氏の分析結果ともおおそ一致する状況であり(秋山 2006)、吉備への外来系土器の搬入と吉備からの搬出の傾向に相関関係があることを示している。西新町遺跡における吉備系土器の消長も概ねこの傾向に沿ったものであることから、5期に吉備系土器が消失する背景には吉備内部も含んだより広域の動きと連動したものであったことが理解できる。

瀬戸内海沿岸地域に広く分布する吉備系土器であるが、以東(特に河内・大和)と以西では出土傾向に大きな違いがあることも従来から指摘されている(宇垣 1995、秋山 2006、亀山 2006 など)。宇垣氏は河内中部・大和川下流域には1遺跡で10個体以上かつ甕以外に高杯や鉢なども搬入されており、また、人々の移動も長期間にわたっていることから、単なる交流だけでなく移住という形も含まれていたことを想定している。秋山氏は近畿における吉備型甕の分布や出土量、時期的変遷を詳細に分析する中で、特に吉備南部と中河内との直接・相互的な関係を評価しており、亀山行雄氏も吉備南部の搬入土器を分析する中で特に河内地域の土器の搬入が多いことを指摘し、両者の関係の深さに言及している。さらに、両地域は当該期に様式の一部として組み込まれる精製器種群の成立過程においても関係の深さが指摘されており(次山 1995、田中 2005、河合 2021 など)、双方の土器様式への影響・折衷などの強い影響関係も認められるなど、客体的な存在である西新町遺跡での吉備系土器のあり方との違いが明瞭である。

以上、事実関係を確認してきたが、次山氏が瀬戸内海沿岸地域の長距離の移動について、北部九州から中河内までの区間の移動を、この地域に土器が分布する吉備系の集団が主に担った可能性があることを指摘していることについては、吉備以東と以西では吉備系土器のあり方が大きく異なるため、その内容については慎重に検討を進めていく必要がある。ただし、この間をつなぐように所在する地域拠点がほぼ同時期に衰退した可能性の高いと指摘されていることは重要であり(山田 1994、久住 2004・2007、次山 2007)、例えば吉備系土器が西新町遺跡で衰退する5期は吉備南部の足守川下流域の集落でも衰退期に相当するように(亀山 1998、河合 2016 など)¹⁰⁾、他地域でも5～6期併行期を境に西新町遺跡をはじめとする博多湾から瀬戸内海沿岸地域をつなぐように形成された交易拠点的な役割を担った諸集落が衰退することについて、広域をつなぐネットワーク自体が衰亡したこととの因果関係で理解できるのであるならば(久住 2004・2007)、消長が一致する吉備系土器が担った役割の一端を理解できる可能性がある。

6. おわりに

今回、西新町遺跡における吉備系土器を分析した成果、古墳時代3～4期(布留0式(新)～布留1式(古))にほぼ限定できることを確認した。この情報を起点として、その意義を既存の研究に求めた結果、瀬戸内海沿岸諸地域の交易拠点における諸変化と密接に関わっている可能性が高いことを確認した。また、吉備系は搬入土器が大半を占め、甕の容量分化や使用痕のあり方等も吉備との共通性が高いことから、吉備の人々が直接西新町遺跡まで往来していた可能性が高いことを、

これまでとは違う視点から指摘した。ただし、直接出向いていたとしても地元の土器様式に影響を与えるようなものではなく、その点では畿内系や山陰系の集団と比べて関わり方が大きく異なることが推察され、外来系土器の移動にも複雑で重層的なあり方があることが理解できる。今後は分析の基礎となる土器編年の併行関係の検討を進めつつ、古墳出現期の限られた時期になぜ各地域の土器が他地域に移動するのかという課題や吉備系土器が広範に広がる意味について、詳細に各事例を検討しながら検証していく必要がある。こうした研究を深めていく際に、交通の結節点となり、多地域土器が混在して出土する西新町遺跡の土器の分析は欠かせないものであると考える。

【註】

- 1 土器編年の併行関係については、各地域の各段階が揃うかどうかについては厳密な検証は必要であるが（特に北部九州とそれ以東の地域）、議論を進める上での目安が必要だと考えるため、本稿では筆者が考えるおおまかな併行関係を第8表のようにまとめている。北部九州では久住氏（久住 1999）と重藤輝行氏（重藤 2001）をはじめとする多くの編年が示されている状況であるが、筆者の理解が及ばないため、かつて筆者が併行関係を検討した久住氏の編年案を参考とした。なお、西新町遺跡からも近畿から九州の間の土器編年の併行関係を求める上で完形に近い吉備型甕が出土しており（13次調査 75号竪穴住居（4期）など）、今後の基礎資料としての価値も高い。
- 2 10を鉢とする見解もあるが、多くの土器にスガが認められること、吉備型甕と同様の口縁部や技法を共有することなどから甕の範疇で理解している。
- 3 西新町遺跡では他に多くの大型鉢が確認されているが、そのほとんどが山陰系のものと考えられる中でこの資料のみは異質である。
- 4 この甕の類例としては大阪府萱振遺跡 SE03 などでも検出されており、地域間の土器編年をつなぐ上でも貴重な事例である。
- 5 器種が限られ、個体数も少ないことは、土器自体が交易の対象ではなく、吉備から人々が交易や交渉などに訪れた足跡と考えるほうが自然である（後述する宇垣氏の指摘も同様）。
- 6 久住氏は壺とするが、註2で指摘したように、甕の範疇で考えられる器種である。
- 7 次山氏は「吉備形甕」と表記されるが、本稿では岡山県の研究者の多くが使用する「吉備型甕」として表記を統一する。
- 8 確かに3～4期併行期の西新町遺跡に交流の比重は高まっているが、第50図3のように比恵・那珂遺跡群でも確実に当該期の吉備系土器が出土していることには注意が必要である。
- 9 5期の土器は認められないのは事実であるが、現状で山陰系や畿内系と比べて1段階早く消滅しているように見えるのは実態を示すのか、それとも編年精度（併行関係のズレ）に起因するのかは重要な問題ではあるが、本稿では前者の立場で論を進めることとする。
- 10 当該期の足守川下流域で確認できる集落の衰退のおもな要因として、大洪水の影響が一義的に考えられるが、広域の拠点をつなぐネットワークが衰亡したことも、要因の一つとして十分に可能性があるものと考えている。

【引用・参考文献】

- 赤澤秀則 1992 「IV. 小結 1. 出土遺物 時期」『南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会
秋山浩三 2006 「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』 韓大阪府文化財センター
宇垣匡雅 1995 「大和王権と吉備地域」『瀬戸内海地域における交流の展開』 古代王権と交流 6 名著出版

- 亀山行雄 1996「第5章結語 第4節古墳時代初頭の土器」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104 岡山県教育委員会
- 亀山行雄 1998「第5章津寺遺跡のまとめ 第2節古墳時代前期の津寺遺跡」『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 127 岡山県教育委員会
- 亀山行雄 2006「吉備地域の古式土師器」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 河合忍 2015「中国・四国」『弥生土器』ニューサイエンス社
- 河合忍 2016「吉備地域」『集落動向からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 河合忍 2019「備中南部における古墳時代前期から中期の土器編年」『神明遺跡・刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 249
- 河合忍 2021「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について」『古墳出現期土器研究』8 古墳出現期土器研究会
- 河合忍 2022「備前国の地理的環境、拠点集落と国府の位置」『ヒトとモノ、ワザが動く〜拠点をつなぐ道・国府所在地の源流〜』小松市
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館
- 久住猛雄 2005「3世紀の筑紫の土器〜北部九州・特に博多湾岸周辺における外来系土器の受容と展開〜」『邪馬台国時代の筑紫と大和』香芝市教育委員会 香芝市二上山博物館
- 久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』53-4 考古学研究会
- 小林正史編 2011『土器使用痕研究一ス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元〜』（科学費報告書）
- 白井克也 2001「勒島貿易と原ノ辻貿易」『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究会
- 重藤輝行 2001「第5章 考察」『西新町遺跡III』福岡県文化財調査報告書第157集 福岡県教育委員会
- 高橋護 1986「上東式土器の細分編年基準」『研究報告』7 岡山県立博物館
- 高橋護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館
- 高橋護 1991「中国・四国」『古墳時代の研究』6 須恵器と土師器 雄山閣
- 田崎博之 1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120 九州大学文学部
- 田中元浩 2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』20 日本考古学協会
- 次山淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-2 考古学研究会
- 次山淳 2007「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器交流」『考古学研究』54-3 考古学研究会
- 次山淳 2014「古墳出現期の社会と土器の移動」『史林』97-1 史学研究会
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県橿原考古学研究所
- 松山智弘 2000「小谷式再検討―出雲平野における新資料から」『鳥根考古学会誌』17 鳥根考古学会
- 森岡秀人 1991「土師器の移動 1 西日本」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域―旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて―」『弥生文化博物館研究報告』3 大阪府立弥生文化博物館

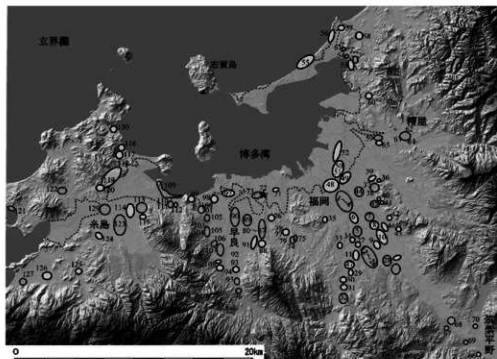
河合 忍（岡山県教育庁文化財課）

第3章 九州内での西新町遺跡

第1節 玄界灘沿岸地域における西新町遺跡集落の特徴

1. はじめに

博多湾沿岸では、縄文海進のピークが過ぎてから砂丘の形成がはじまり、箱崎砂層と呼ばれる堆積層を基盤とする砂丘の各所に、弥生時代の集落や墓が分布する。西新町遺跡もそのような遺跡の一つとして、博多湾沿岸の中央、早良平野の北部に成立する（第52図72）。ここでは西新町遺跡の集落の成立と発展の過程を整理し、博多湾沿岸や玄界灘沿岸地域における古墳時代集落としての位置づけを行う。



- 【福岡平野】1～4. 比恵・由王・那珂遺跡群、東部河遺跡 5. 井尻B遺跡 6. 五十川遺跡 7. 板村遺跡 8. 高塚遺跡 9. 雨八幡遺跡 10. 支野C・A遺跡 11. 弥永原遺跡 12～26. 須玖遺跡群 27. 御院遺跡 28. 駿河遺跡 29. 門田・辻田遺跡 30. 松木遺跡 31. 神遺跡群 32. 安徳台遺跡 33. 野多H遺跡 34. 寺尾遺跡 35. 中村遺跡 36. 中尾遺跡 37. 久保原遺跡 38. 高田大谷遺跡 39. 高田青木遺跡 40. 下月原B遺跡 41. 上月原遺跡 42. 立花寺遺跡 43. 影ヶ池遺跡 44. 高尾遺跡 45. 下月原C遺跡 46. 井田川・D遺跡・仲島遺跡 47. 警太郎遺跡 48. 博多遺跡群 49. 青原遺跡 50. 吉塚本町遺跡 51. 照柏遺跡 52. 箱崎遺跡 53. 唐ノ原遺跡 54. 梅ヶ崎遺跡 55. 奈多砂丘B遺跡 56. 三苦遺跡 57. 永浦遺跡 58. 夜白三代地区遺跡群 59. 多々良込田遺跡 60. 雪性A遺跡 61. 下和白遺跡 62. 福岡水ヶ元遺跡 63. 藤田部本原遺跡 64. 部本原遺跡 65. 内郷坪見遺跡
- 【筑紫平野北部】66. 以東尺遺跡 67. 貝元遺跡 68. 立明寺遺跡 69. 促原南遺跡 70. 永岡岸元遺跡
- 【早良平野西部】71. 島側遺跡 72. 西新町遺跡 73. 藤崎遺跡 74. 長尾遺跡・宝台遺跡 75. 福井川A遺跡 76. 沢野遺跡・田島A遺跡・田島B遺跡 77. 浄泉寺遺跡 78. 神松寺遺跡 79. 片江B遺跡 80～87. 飯倉A～H遺跡 88. クエゾノ遺跡 89. 原遺跡 90. 有田遺跡群 91. 野芥遺跡 92. 田村遺跡・西原遺跡 93. 西原船石遺跡 94. 岩木遺跡 95. 東入部遺跡 96. 岸田遺跡・松木田遺跡
- 【早良平野西部】97. 経浜遺跡 98. 生ノ松原遺跡 99. 長重大谷遺跡 100. 湯納遺跡 101. 宮の前遺跡 102. コノリC遺跡 103. 野方村東限遺跡 104. 野方中原遺跡 105. 野方久保遺跡 106. 羽根戸原B・C遺跡 107. 古武遺跡群・太田遺跡 108. 瀬江遺跡・瀬江谷遺跡・金武城田遺跡
- 【糸島平野】109. 今山遺跡・今宿遺跡 110. 今宿五郎江遺跡 111. 大塚遺跡 112. 青木遺跡 113. 飯氏遺跡・重町遺跡 114. 千里遺跡 115. 千里久保遺跡 116. 大塚A遺跡 117. 大塚B遺跡 118. 桑原遺跡 119. 元岡堂原遺跡群 120. 治杣木遺跡・治リムクキ遺跡 121. 御珠松原遺跡 122. 一の町遺跡 123. 三雲遺跡群 124. 上郷子遺跡 125. 本田幸田遺跡 126. 森戸田遺跡 127. 深江井幸田・深江城崎・二太中学校内遺跡群 128. 吉井水村遺跡 129. 調地原崎・志登遺跡群 130. 小川C遺跡

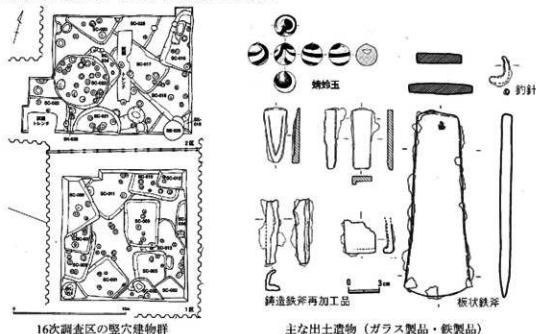
第52図 弥生時代後半から古墳時代前期の主な遺跡

2. 弥生時代中期の西新町遺跡

西新町遺跡の成立は弥生時代中期後葉である。近接する藤崎遺跡は弥生時代初期からの墓地遺跡であるが、その一連の砂丘上（標高3～4 m前後）の東側に成立する集落で、藤崎遺跡からは独立した墓地も付随する。西新町遺跡全体の中ではその南西部の東西約250m、南北約80mの範囲に限定され、西に集落、東に墓地が分布する構成である（第53図、第9表、森本 2013a・2022）。



西新町遺跡の各調査区と 弥生時代中期後半の遺構分布



第53図 弥生時代中期後半の西新町遺跡

16次調査区は古墳時代以降の遺構がほとんどなく、弥生時代中期後葉から後期前葉の竪穴建物群がよく遺存している。建物は小型方形竪穴建物が多い。9次調査区では大型円形建物が分布する。

出土遺物では、未成品を含む多量の滑石製石鍾が出土しているほか、板状鉄斧（鉄素材）や鋳造鉄斧片再加工作品、ガラス製蜻蛉玉といった舶載遺物も少なくない。青色と白色のガラスを巻き付け成形した蜻蛉玉は16次調査区竪穴建物内の弥生時代中期の土器の下から出土したもので、材質分析の結果、インド・東南アジア産のソーダー石灰ガラス製とされる。朝鮮半島北部の楽浪郡には南海ルートを通じた文物も入っているため、このガラス玉も入手先は楽浪郡であった可能性が高い。

壺棺墓群は二列埋葬状の集団墓であるが、諸岡型貝輪副葬や人体に嵌入した可能性のある銅剣切先がみられる。同時期の墓に副葬品がみられない藤崎遺跡よりもランクの高い墓地とみるが、大型壺棺を二個合わせた埋葬は少なく、玄界灘沿岸域の壺棺墓制の中でみれば、あまり高いランクではない。一方、首と胴体を別々に埋葬した壺棺墓や、首だけを埋葬した土器棺など、特異な断体埋葬の事例が目立ち、集団としての特殊性を物語るものかもしれない。

石鍾は博多湾東部圏の構成であり（森本 2015b）、鉄製釣針などの漁労具も出土している。一方、石包丁の出土は極少量である。漁労と交易活動を生業の主体とする「海村」（武末 2009）の典型に該当するであろう。弥生時代後半期から対外交渉が活発化する博多湾沿岸地域の窓口であり、外港として成立した集落と考えられる。集落は後期前葉までは連続的に存続するが、後期中葉～後葉は遺構遺物が激減している。

東約5kmには、弥生時代中期前葉に集落が形成され、古墳時代前期まで存続する博多遺跡群があるが、西新町遺跡のピークである弥生時代中期後葉の遺構は希薄である。西新町遺跡と博多遺跡群間で集落居住集団の移動があった可能性が考えられる。西新町遺跡は早良平野だけでなく、福岡平野側の外港も担うために形成されたのであろう。

西新町遺跡が後期前葉まで一度衰退するのは早良平野の全体的な傾向でもあるが、博多湾沿岸地域における対外交渉の窓口が後期のなかで糸島平野（「伊都国」）と福岡平野（「奴国」）に二極化していく動向とも関連して（森本 2011、2013a）、前述のような遺跡の消長からみて、博多遺跡群等へ集落居住集団が移動した可能性を考える。

3. 古墳時代の西新町遺跡

（1）集落の消長

弥生時代終末期から古墳時代前期の西新町遺跡は集落が再形成され第二のピークを迎えるが、土器編年の先行研究（久住 1999・2017、重藤 2009）などから、以下のような時期区分の理解で、西新町遺跡集落の様相を整理したい。

- ・弥生時代終末期：集落としての再形成期
- ・古墳時代初頭：土器様相は弥生時代終末期から連続的。カマド付建物の出現（5次SC9）
- ・古墳時代前期前葉古段階：布留式系土器の普及期で、朝鮮半島系を含む外来系土器が増加
- ・古墳時代前期前葉新段階：おおむね久住氏のⅡC期、重藤氏の西新Ⅳ式古段階
- ・古墳時代前期中葉：集落としての終盤期

＊古墳時代前期前葉は布留Ⅰ式併行、古墳時代前期中葉は布留Ⅱ式併行期と考えられる。

(2) 集落域の拡大と集約化

弥生時代終末期の建物数は少ないが、古墳時代初頭にかけて、古墳時代集落域の全域に分布する。弥生時代中期集落よりも東・北に拡大しており、東西約450m、南北約250mの範囲である(第54図)。西の藤崎遺跡でも弥生時代終末期の集落形成がみられるが、古墳時代初頭からは方墳群などの墓域が形成され、西新町遺跡の墓地とみる見解が多い¹⁾。

古墳時代前期前葉古段階もおおむね同じ分布域であるが、2次調査区以北の密度が高くなり、各種のカマド付建物も増加する。第55図は古墳時代前期中葉までを含むが、カマド付建物の分布が遺跡内でも限定された区域であることが分かる。西新町遺跡のカマドはⅠ～Ⅲ類に大別され、それぞれ煙道の構造等により細分することができる(吉田2009)。本稿の集落分析では以下のような大別分類で整理することとする。

- ・カマドⅠ類：燃焼部・煙道を建物の隅角付近に配置
- ・カマドⅡ類：煙道の長いオンドル状構造で、燃焼部を壁または建物の中央付近に配置
- ・カマドⅢ類：燃焼部・煙道を建物壁中央付近に配置

初期はⅠ類のみであるが、前期前葉にはⅠ～Ⅲ類の複数種となり、小型建物にも伴う(第55図に図示したカマド付建物の代表事例はいずれも古墳時代前期前葉新段階)²⁾。

古墳時代前期前葉新段階は遺構数、遺物量ともに西新町遺跡のピークであるが、分布域は古段階よりも狭くなっており、集約化と捉えることができる(第54図の東北部、実線範囲)。

(3) 全盛期の古墳時代前期前葉新段階の集落構成

古墳時代を通じて、建物の主体は竪穴建物であり、掘立柱建物は不明である。建物以外では、廃棄穴とみられる土坑や井戸とみられる大型土坑などがあり、集落域東部の13次調査区東部や4次調査区では溝状遺構もみられる。

古墳時代前期前葉新段階の集落構造(建物構成)をもう少し詳細に検討し、ピーク時の同時併存建物と集落規模を推定してみたい(第56図)。

当該期の竪穴建物は128棟抽出することができ、面積を推定できるものは、72棟である。

【10㎡未満】5棟、【10㎡以上15㎡未満】28棟、【15㎡以上20㎡未満】17棟、

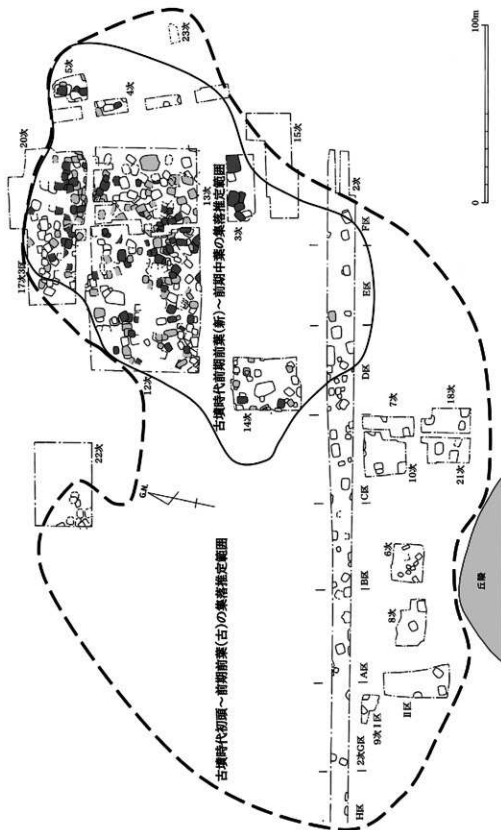
【20㎡以上25㎡未満】13棟、【25㎡以上】9棟である。

15㎡未満の小型建物が45.8%と、半分近くを占めている。

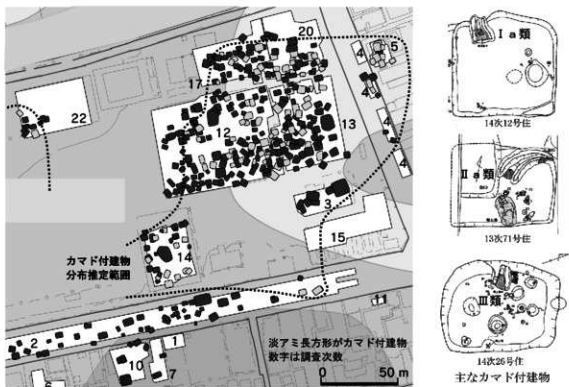
竪穴建物は伏屋式または定型的な支柱構成をとらない長方形建物が主体であり、小型建物の比率の高さからみて、テント構造も少なくなかったかもしれない。

カマド付建物は45棟あり、型式が特定できるものは【Ⅰ類】17棟、【Ⅱ類】19棟、【Ⅲ類】8棟の44棟である。建物全体に占めるカマド付建物の比率は35%であるが、部分的検出の建物も少ないので、さらに比率は高くなるであろう。

第56図では当該期の建物を長方形で囲み、その中で同時併存を推定できる建物にアミ掛けしている。カマドの表示はこの抽出した同時併存建物を対象とし、その配置場所を模式的に示した。また、当該期の主な朝鮮半島系土器と舶載鉄器を掲載している。図中の建物に付した番号は、それらの遺物が出土した建物や第55図に実測図を示したカマド付建物の遺構番号と対応している(調査次数の番号については省略しているので、第54図または第55図と合わせて参照されたい)。



第54図 西新町遺跡における古墳時代の竪穴建物分布 (下原 2009 加筆)



第55図 西新町遺跡東部の古墳時代建物とカマドの分布

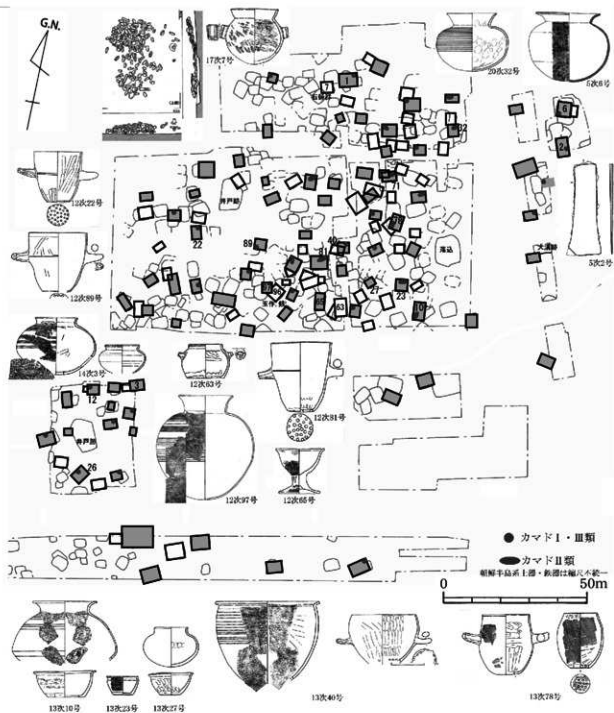
同時併存建物は、主要なカマドや出土遺物のある建物を中心に、重複関係や主軸方向などを考慮して抽出している³⁾。竪穴間の間隔は、弥生時代後期の八尾南遺跡（大阪府）例などを参考として、3 mを超えるものとする。抽出した同時併存建物は83棟、うちカマド付建物36棟（43%、Ⅰ類19棟、Ⅱ類11棟、Ⅲ類6棟）である。実態はもう少し、建物密度やカマド付建物の比率が低かった可能性がある。

12～14・17・20次調査区の建物群は高密度で群集するが、井戸跡（当該期はおおむね埋設している）の周囲は空閑地となっており、広場であったとみられる。井戸が機能した時期も含め、特別な広場として古墳時代集落のレイアウトを規定する空間であったとみられる（祭祀や交易の場であったと考えられるが機能の特定は難しい）。また、当エリアには、漁労具を管理した建物（17次7号：漁網を構成する石鍾群一式の出土）や玉作工房（12次96号）なども分布している⁴⁾。

一方、2～5次調査区の建物群は一定間隔で分布し、前述の調査区よりも密度が低い。当該期集落範囲の東・南限に近いとみられる。このように、集落全体の構成は、小単位群の集合ではない面的な分布であり、特に、港の存在を想定する集落西北側の密度が高くなる建物配置となっている。

また、西新町遺跡の前後の段階でカマドが北部九州に定着していないことから、カマド付建物の多くは朝鮮半島から渡来した人々の居住を想定するが、使用土器には韓・倭の各系譜が混在している⁵⁾。山陰、瀬戸内、近畿地方などを含む豊富な外来系土器全体の分布的傾向からみても、朝鮮半島各地に加え、日本列島内各地からの外来者が、出身地域ごとにエリア分けされることはなく、混在して居住するマチの姿が想定されるであろう。

当該期の遺構が分布するエリアは、発掘調査面積にして14,983 m²であるが、集落推定域（第54図実線範囲）は南西・北東方向に広がる長さ約200 m、幅約150 mの約30,000 m²である。集落域



第56図 古墳時代前期前葉(新)の同時併存建物の推定

内でも緑辺に近いほど建物密度が低くなる傾向があり、かなりの誤差を含む数字ではあるが、150棟前後という建物数が西新町遺跡・古墳時代集落のMaxに近いと推定する。

後続する古墳時代前期中葉は、やや建物数の減少と分布域の縮小がみられるが、発掘調査で検出された竪穴建物は58棟(切り合いあり)、うちカマド付建物18棟(Ⅰ～Ⅲ類)で、ピークは続いている。高比率な朝鮮半島系土器をはじめとする外来系土器(12次21号建物等)や舶載遺物(17次5号建物の鉛片)の出土もみられ、交易拠点としての機能は維持されている。

4. 交易と漁労の新たな拠点形成

古墳時代前期の西新町遺跡における朝鮮半島系土器の集中的出土は「博多湾貿易」提唱の指標となっている（白井2001、久住2007）。筆者の理解では、西新町遺跡をとりまく、玄界灘沿岸地域の対外交流の様相変化は次のとおりである（森本2010・2015a・2018b・2020b・2023b）。

【弥生時代中期後葉から後期前葉】

棄浪系土器をはじめとする新たな外来系土器の分布拡大が、対馬と杵岐を通じて、博多湾沿岸や出雲に及ぶ。糸島平野（伊都国）と福岡平野（奴国）の長距離交易システムの形成期である。当該期の西新町遺跡において朝鮮半島系土器の出土はないが、船載鉄器やガラス製品の出土から、早良平野とおそらく福岡平野側の外港を担っていたとみられる。

【弥生時代後期中葉から終末期前葉】

糸島平野を中心に朝鮮半島系土器の増加がみられ、糸島・福岡の各平野では、対外交流におけるネットワーク形成や集落ごとの役割分化が顕著となる。杵岐・カラカミ遺跡の活性なども糸島平野と福岡平野の各々で進む交易システムの確立に大きな作用を及ぼしたであろう。

【弥生時代終末期後半から古墳時代初頭】

福岡平野における朝鮮半島系土器の増加は、主導権を握ろうとする糸島平野に対抗する動態として捉えることができる。

【古墳時代前期前葉～前期中葉】

糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡において朝鮮半島系土器の出土が集中する。帯方郡の衰退期であり、中国と朝鮮半島南部を結ぶ要衝の半島西南部地域からの渡来が活発となるが、渡来人の滞在と交易の場が西新町遺跡に集約される段階である。当該期における杵岐・原の辻遺跡や対馬の三韓系土器・三国系土器の様相変化とも相関性があり、両島が中継して、西新町遺跡に集約されるネットワークが想定される。また、西新町遺跡が古墳時代前期における対外交易の一大拠点となっていくなか、博多湾沿岸と出雲平野や畿内地域などを結ぶ、汎列島の新しい交流ネットワークも成立し、それは古墳時代前期前半の広域的な社会変化をリードする役割も担ったと考えられる。

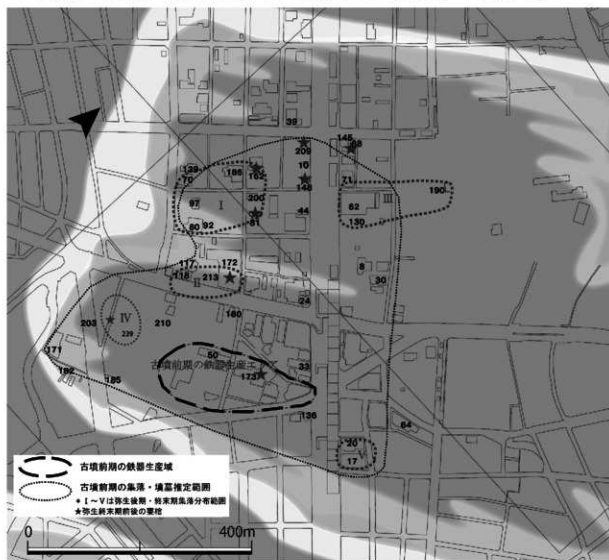
集落の消長などからみて、少なくとも古墳時代前期までは弥生時代的な伊都国、奴国といった枠組みが存続すると考えるが、古墳時代前期前葉に、糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が対外交易の新しい中心地となる背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいるのであろう⁶⁾。

また、西新町遺跡は古墳時代の博多湾沿岸における漁労の新たな拠点としての機能も担っていた。古墳時代前期には、大阪湾・瀬戸内に由来する、飯蛸壺、管状土鍾等を用いる漁労技術や土器製塩と複合した海産物加工技術が博多湾沿岸一帯にひろがるとともに、博多湾西部圏の漁労具が東部圏へ浸透するようになる。東西の地域差は依然として小さくはないが、西新町遺跡を結節点として、在来の海人集団も再編され、博多湾の東西をつなぐネットワークがより強固になるとみている（森本2015b）。その背景には、交易を前提とした水産資源の拡大需要があったのであろう（大庭2023）。

5. 玄界灘沿岸西部の古墳時代前期集落と西新町遺跡

西新町遺跡のある博多湾沿岸地域は、玄界灘沿岸の中央にあって、西から糸島、早良、福岡の各平野の大地域単位に区分され、さらに東に糟屋平野がある。福岡平野の南東部は二日市地峡帯を通じて筑紫平野につながっている（第52図）。

福岡平野と糸島平野には首都としての位置づけができる中核的な集落が存在し、「大規模拠点集落」と呼ぶことにする。50～100haを越える遺跡範囲のほぼ全域に及ぶ面的な遺構分布に加え、出土遺物の量と内容（広域ネットワークと物流を示唆する外来系遺物の比率の高さ）等から総合的に卓越した集落遺跡で、福岡平野北部の比恵・山王・那珂遺跡群、糸島平野の三雲・井原遺跡群がこれに該当する。いずれも弥生時代後半期からの大規模拠点集落である。比恵中央には首長居館の区画溝とみられる方形環溝群があり、弥生時代中期後葉ないしは後期前葉から古墳時代前期にかけて、連続的かつ大型化の発展的変遷をみせる（久住2008）。最大規模の2号環溝（辺70m）が西



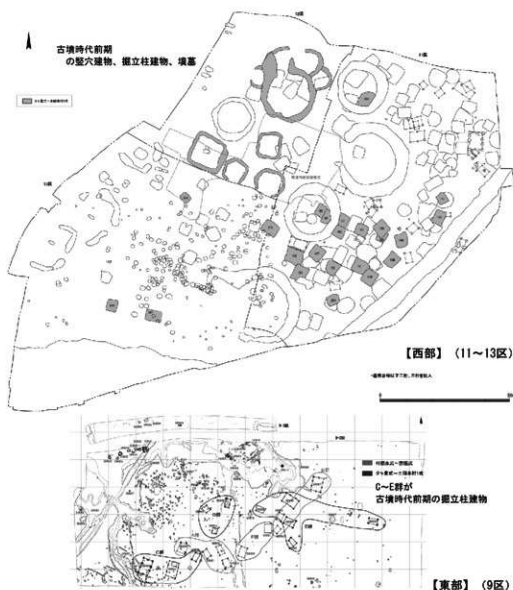
第57図 博多遺跡群

新町遺跡の古墳時代集落と同時期の方形環溝である。一方、福岡平野南部の須玖遺跡群も古墳時代まで継続するが、生産（青銅器・鉄器・ガラス）も含めて拠点ではなくなる。

そして、博多遺跡群における鉄器生産、今山・今宿遺跡の土器製塩、潤地頭給遺跡の玉作など、当該期には博多湾沿岸の広域で相互補完的な分業体制が成立しており、西新町遺跡も対外交渉の拠点等として、博多湾沿岸の分業体制を担う集落の一つとみることができる（吉留 2004、久住 2007）。特に海浜砂丘上や河口に分布する湾岸立地の集落が重要な役割を担っていた（第 9 表）⁷⁾。

（1）湾岸立地集落の中での対比

博多遺跡群の古墳時代前期はフイゴ使用の精錬鍛冶技術を有する遺跡としてよく知られる。その鉄器生産拠点は弥生時代の集落がほぼ分布しないエリアに形成されるが（第 57 図）、博多湾沿岸地域の弥生時代鍛冶遺跡の多くが終末期までに操業を終えることから、広域の鍛冶集団を再編し、



第 58 図 中原遺跡

流通の拠点である博多に新たな鉄器生産センターが形成されたと考える（森本 2020a・2023a）。西新町遺跡を含め、博多湾沿岸の特定集落ごとに個別の機能を集中させる分業体制がとられるのである。

一方、玄界灘のさらに西に位置する唐津湾沿岸では、砂丘上の中原遺跡が弥生時代後期後葉から平野の中核を担うとともに、鉄器生産や対外交渉等の拠点でもあることから、集約化や分業体制には、平野の規模等の自然環境も関係する地域差がうかがえる。中原遺跡の古墳時代前期前半は竪穴建物 28 棟以上が集中するエリアの北西に、前方後円形を含む古墳群が分布し、東部には倉庫域とみられる掘立柱建物群が分布している（第 58 図）。鉄器生産においてはフイゴ使用の精錬鍛冶技術も導入されている⁸⁾。

また、外来系土器の様相から、博多湾東部の福岡平野から糟屋平野では、西新町遺跡に先行する弥生時代終末期前後に対外交渉の拠点として形成される集落の増加が顕著である。湾岸部では唐原遺跡（日本海沿岸系）、多々良込田遺跡（近畿系ほか）、奈多砂丘 B 遺跡（朝鮮半島系ほか）などがあり、内陸部では松木遺跡（近畿系）などがある（久住 2005、森本 2013b、2015a、2018a）。いずれも古墳時代前期前葉（以降）まで集落は存続するが、外来系土器の出土はピークを過ぎており、これらの集落が担っていた対外交渉の拠点としての機能は、西新町遺跡に集約されるようにみえる。

一方、外来系土器の中でも東海系土器については、西新町遺跡からほとんど出土していない。博多遺跡群周辺に多く、また、有明海沿岸・佐賀平野の諸富遺跡群のような多く出土する遺跡がある（久住 2005、2007、森本 2013b）。ただし、北部九州への東海系土器の流入は古墳時代初頭頃までが主体であり、西新町遺跡に外来系土器が集中する前期前葉段階は少ない（早野 2020）。この東海系土器の出土が目立つ博多遺跡群やその東の砂丘上に連なる、堅粕遺跡、箱崎遺跡などは、古墳時代前期前半を通じて、外来系土器の出土は多く、集落の拡大もみられる。また、いずれも遺跡内に墓域（古墳群）をもつ構成となっている。

対外交渉の拠点としての機能が西新町遺跡に集約される中でも、博多遺跡群周辺ではそれに準じる機能が維持されたと考えられる⁹⁾。

（2）段丘や沖積地立地集落との対比

平野側では大規模拠点集落をはじめ、弥生時代後期・終末期から古墳時代前期前半にかけて継続する遺跡は多いが、その中でも古墳時代前期前半に遺構・遺物の数が顕著に急増する遺跡（竪穴建物数が 5 倍超などを指標とする）や、弥生時代中・後期集落との間に一定の空白期がある古墳時代集落は、西新町遺跡の消長とも連動している可能性がある。そのような集落を古墳時代前期の再開発集落として主なものピックアップする（第 10 表、大規模拠点集落は除く）。

早良平野中央北部の段丘上に立地する有田遺跡群は弥生時代後期前葉まで一度、衰退するが、古墳時代前期初頭から竪穴建物が急増する。前期前半の建物数は 76 棟以上を数えるが、段丘上の南北 900m、東西 500m ほどの範囲の西北部と中南部を中心に分布する。細別時期ごとにみると、建物が散在する分布であり、密度は高くない。遺跡の北東部には古墳群が分布するが、古墳時代中期以降が主体であり、前期前半集落の墓域ではない。藤崎遺跡は西新町遺跡だけでなく、有田遺跡群集落居住集団の墓域も含んでいる可能性がある。

第9表 主な湾岸立地集落の消長（弥生時代後半期～古墳時代前期）

番号	遺跡名	立地	遺構	弥生後期				終末	古墳 前期前半	地図 番号	地域
				後半	前葉	中葉	後葉				
1	西新町遺跡 (南部) 調査次数: 2,6,11,14,16, 18,19,21	砂丘	竪穴建物	39	3			7	96	72	早良平野
			土坑など	○	○			○	○		
			包含層	○	○						
			築構	◎	○				△		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長					1~	362		
2	西新町遺跡 (北部) 調査次数: 3,5,12,13,15, 17,20,22,23	砂丘	竪穴建物			○		○	○	73	
			土坑など					○	○		
			包含層			○	△				
			製塩						△		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長					5	2		
3	藤崎遺跡 (調査次数(実施): 1,9,27)	砂丘	竪穴建物						○	97	
			土坑など								
			包含層		△		△				
			竪穴・墳墓	◎	○				◎		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長						5		
4	姪浜遺跡 (調査次数: 1~6)	砂丘	竪穴建物	4	2					98	
			土坑など	○	○						
			谷部の包含層	○	○						
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長						2		
5	生ノ松原遺跡	砂丘	竪穴建物				○			99	
			土坑など								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
	博多遺跡群 (弥生後期前半) 調査次数: 3,27,33,36,45, 50,59,63,66, 69,133,138, 142,147,156, 166,169/170, 171,173,175等	砂丘	竪穴建物	1	7	1	7	23	34	48	
			掘立柱建物						3		
			土坑など	○	○		○	○	○		
			道路・墳墓						○		
			鉄器生産						○		
			谷部の包含層	○	○	○	○	○	○		
6	博多遺跡群 (弥生後期後半) 調査次数: 3,27,33,36,45, 50,59,63,66, 69,133,138, 142,147,156, 166,169/170, 171,173,175等	砂丘	竪穴建物						72	50	
			竪穴・墳墓					○	○		
			井戸						○		
			土坑など						○		
			鉄器生産						◎		
			遺跡の消長								
	福岡平野・ 糟屋平野	鉾崎遺跡 (東部)	砂丘	竪穴建物						7	52
				土坑など	○	○				○	
				墳墓						○	
				谷部の包含層	○	○	△		○	○	
				遺跡の消長							
				遺跡の消長							
7	鹿ノ原遺跡	砂丘	竪穴建物			2	21	23	8	53	
			土坑など		○	○	○	○	○		
			谷部の包含層			○	○	○	○		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
8	奈多砂丘B 遺跡 (調査次数: 1,2)	砂丘	竪穴建物						2	55	
			土坑など					○	○		
			谷部の包含層					○	○		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
9	多々良込田 遺跡 (調査次数: 1,6,7)	沖積	竪穴建物					4	14	59	
			掘立柱建物				○		○		
			谷部の包含層				○	○	○		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長						5		
10	今宿遺跡 (調査次数: 1~5) 今山遺跡 (東部)	砂丘	竪穴建物			○		○		109	
			土坑など					○			
			墓	○	○	○		○			
			谷部の包含層	△	△	△	△	○	○		
			製塩					○	◎		
			遺跡の消長								
11	御床松原遺跡	砂丘	竪穴建物	10	3	2	4	6	30	121	
			谷部の包含層	○	○	○	○	○	○		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								

第10表 古墳時代前期の主な再開発集落遺跡

番号	遺跡名	立地	遺構	中期 後半	弥生後期			終末	古墳 前期前半	地図 番号	地域
					前期	中葉	後葉				
12	有田遺跡群 調査次数: 6,15,29,35,52, 64,81,107,133, 142,149,168, 238,250ほか	段丘	竪穴建物	32	2			1	76	90	早良平野
			竪立柱建物	21	1				不明		
			井戸	3	3				3		
			大溝						○		
			谷部の包含層	○	○			△	○		
13	野芥遺跡 調査次数: 4,12,23 野芥大敷遺跡	段丘 → 沖積	竪穴建物	3	1				1	91	
			土坑など						○		
			大溝(水路)					○	◎		
			遺跡の消長								
			遺跡の消長								
14	岩本遺跡 調査次数:2	沖積	竪穴建物	2					15	94	
			(大型建物)						1		
			竪立柱建物	1							
15	東入部遺跡 調査次数: 2,4,5,8,9,11	沖積	遺跡の消長							95	
			竪穴建物	21	6				12		
			竪立柱建物	6					1		
			土坑など	○	○		○		○		
			谷部の包含層	○	○						
16	岸田遺跡 松木田遺跡 調査次数: 1-4	段丘	遺跡の消長							96	
			竪穴建物	20			2	7	21		
			(大型建物)	4			1	1	3		
			竪立柱建物	1				1	3		
			谷部の包含層	○	○						
17	田島A遺跡 調査次数:1-3 田島B遺跡	段丘	遺跡の消長							76	
			竪穴建物						6		
			土坑など						○		
			墳墓						○		
			遺跡の消長								
18	五十川遺跡 調査次数: 1-21	段丘	遺跡の消長							6	
			竪穴建物					1	11		
			竪立柱建物						1		
			井戸	1					12		
			墳墓						○		
19	雀居遺跡 (南部) 調査次数:4,5 雀居遺跡 (北部) 調査次数:7-20	沖積	谷部の包含層	○				○	○	44	
			遺跡の消長					○	○		
			竪立柱建物			2	14	16	2		
			塚遺		○	◎	◎	○			
			遺跡の消長								
20	仲遺跡群 調査次数:1-6	段丘	竪穴建物						24	31	
			竪立柱建物						13		
			井戸					1	3		
			谷部の包含層	△				△	◎		
			遺跡の消長								
20	仲遺跡群 調査次数:1-6	段丘	竪穴建物					3	32	31	
			竪立柱建物					?	約30		
			井戸						1		
			土坑、溝など				△	△	○		
			遺跡の消長								

早良平野東部の野芥遺跡群や田島A・B遺跡も古墳前期前半の再開発集落に該当し、田島A遺跡では石蓋土壇墓を埋葬主体とする古墳をともなっている。

弥生時代後期の集落が希薄な室見川の中上流域・早良平野南部でも古墳時代前期再開発集落が点在している(第10表-14~16)。

福岡平野の五十川遺跡は北の那珂遺跡群と南の井尻B遺跡に挟まれた段丘上に立地するが、古墳群をともなう集落は、近隣遺跡群の集落域の拡大とみなすことができるであろう。雀居遺跡でも、北部に古墳時代の集落域が拡大する。平野南部では弥生後期後葉から集落形成がはじまる仲遺跡群の拡大が顕著である。

早良平野の中南部や福岡平野の南部で、古墳時代前期の新たな集落形成または拡大がみられるが、いずれも博多湾沿岸と佐賀平野を結ぶ山越えルート上の要衝に位置する。弥生時代からこのルートを通じた交流は想定できるが、古墳時代前期に博多湾沿岸と佐賀平野を結ぶ山越えルートによる交通関係の重要性が増すと考えられる（森本 2013b）。また、森林資源の開発の拡大についても、今後の検討課題となるであろう。

（３）西新町遺跡の母体について

砂丘上の西新町遺跡は南の祖原山丘陵と接しており、土器素材の粘土採掘も可能ではあるが、古墳時代集落のピークでは丘陵地から離れて、海側に拡大している点などからも、集落内での土器生産はほとんどなかったと考えられる。多種多量の土器は各地域の外來系搬入土器を含むが、主体をなす、北部九州で生産された土器（近畿系、山陰系等を含む）も博多湾沿岸の別の遺跡から供給されている可能性が高い。

古墳時代前期前葉は北部九州独特の布留式系土器様式が山陰系土器と組み合わせられて確立し、分布が広がる段階であるが（久住 1999）、西新町・藤崎遺跡を除く、早良平野の布留式系土器は甕を中心としたものであり、高坏や小型丸底土器などの精製土器はあまり振るわない傾向にある。山陰系土器も、鼓形器台は比較的浸透しているが、全体的に出土比率は低い。西新町遺跡の土器は北部九州の中でも布留式・山陰系の器種が豊富で、特に布留式系土器の様相は、博多湾沿岸地域の中で福岡平野の様相に近いといえる（久住 2005、森本 2013b）。西新町遺跡へは、早良平野の有田遺跡群などからも土器が供給されていたであろうが、質・量ともに、早良平野内の近隣集落からの供給だけでは不足であり、福岡平野などからの供給量は多かったと考えられるのである。農耕関連の遺物もほとんどないので、コメなどの食糧も平野側から多くの供給があったと考えられる。

集落構成でみると、西新町遺跡は早良平野の中で、最も建物密度が高い遺跡であり、段丘上の有田遺跡群や飯倉遺跡群などを凌ぐ、中核的な集落としての位置づけが可能である。

建物密度や遺跡規模で西新町遺跡を凌駕またはこれに匹敵する古墳時代前期集落は、大規模拠点集落の三雲・井原遺跡群や比恵・那珂遺跡群（さらに南の五十川遺跡、井尻 B 遺跡までを一連の遺跡群として捉えることができる）や、湾岸集落の博多遺跡群など、限られた集落しかない。

土器供給の視点からは、福岡平野の大規模拠点集落を母体とする西新町遺跡集落の成立が推定されるところではあるが、4 でみた対外交渉・交易における拠点変遷の動態において、糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が古墳時代前期前葉の新たな拠点として形成され、ここにその機能が集約されていく背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいると考えられるのである。

6. 小 結

西新町遺跡は、漁労と交易活動を生業の主体とする「海村」として、弥生時代中期後葉に成立する。弥生時代後中期から対外交渉が活発化する博多湾沿岸地域の窓口の一つとみられる。集落は後期前葉までは連続的に存続するが、後期中葉～後葉は遺構遺物が激減している。福岡平野側の砂丘上の博多遺跡群とは弥生時代中期から後期の消長がずれており、西新町遺跡と博多遺跡群間で集落居住集団の移動があった可能性も考えられる。西新町遺跡は早良平野だけでなく、福岡平野側の外

港も担っていたのであろう。

弥生時代終末期から古墳時代前期には集落が再形成され、第二の盛行期を迎える。弥生時代中期集落よりも東・北に拡大しており、古墳前期前葉古段階には、各類型のカマド付建物や、朝鮮半島系土器の著しい増加がみられる。当該期は帯方郡の衰退期であり、中国と朝鮮半島南部を結ぶ要衝の半島西南部地域からの渡来が活発となるが、渡来人の滞在と交易の場が西新町遺跡に集約される。

さらに、古墳時代前期前葉新段階は遺構数、遺物量ともに西新町遺跡のピークであるが、分布域は古段階よりも狭くなっており、集約化と捉えることができる。南西・北東方向に広がる長さ約200 m、幅約150 mの3 haの集落域に対して、最大で150棟前後の建物数と推定した。そのうち、カマド付建物の比率は35～40%前後とみられる。

西新町遺跡の前後の段階ではカマドが北部九州に定着していないことから、カマド付建物の多くは朝鮮半島から渡来した人々の居住を想定するが、使用土器には韓・倭の各系譜が混在している。山陰、瀬戸内、近畿地方などを含む豊富な外來系土器全体の分布的傾向からみても、朝鮮半島各地に加え、日本列島各地からの外來者が、出身地域ごとにエリア分けされることはなく、混在して居住するマチの姿が想定される。

また、古墳時代の博多湾沿岸における漁労の新たな拠点としての機能も担っていた。大阪湾・瀬戸内に由来する漁労技術や土器製塩と複合した海産物加工技術が博多湾沿岸一帯にひろがるなか、西新町遺跡を結節点として、在来の海人集団も再編され、博多湾の東西をつなぐネットワークがより強固になったと考えられる。

古墳時代前期の博多湾沿岸では、福岡平野と糸島平野の大規模拠点集落を中核とした、広域で相互補完的な分業システムがとられ、弥生時代後期の枠組みを継承しているが、対外交易や鉄器生産の機能が特定集落の弥生時代とは不連続なエリアに集約されるなど、古墳時代前期の変化は大きい。特に海浜砂丘上や河口に分布する湾岸立地の集落が重要な機能を担っていた。西新町遺跡は早良平野の中で最も建物密度が高い遺跡であり、平野の中核的な集落としての位置づけも可能である。早良平野や福岡平野における古墳時代前期の再開集落は、西新町遺跡の消長と連動している可能性があり、湾岸立地集落の後方支援（土器や食糧の供給）、森林資源の開発拡大、交通ルートの変化などが考えられる。

糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が古墳時代前期前葉の対外交易の新たな拠点として形成され、ここにその機能が集約されていく背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいると考えられる。倭王権が外交・交易の一元的な掌握をめざした萌芽ともみるが、西新町遺跡は古墳時代前期後葉には衰退しており、その実現には、7世紀後半の筑紫館（後の大宰府鴻臚館）成立まで300年以上を要することとなる。

【註】

1 藤崎遺跡は弥生時代前期から後期も墓域であったが、対応する集落は不明確であり、早良平野の近隣複数集落の共同墓地であったと考えている。古墳時代の墓域も、西新町遺跡集落だけではなく、複数集落の墓地であった可能性がある。

2 煙道が直線的で長いタイプのⅠ類とⅡ類には連続性があり、分類が難しいものもある。例えば、17次Ⅰ号建物のカマドは、報告書でⅡa類とされるが、相対的に大型な建物の隅角付近にカマドがおさまっている点から、Ⅰ類

の範疇とみている。

3 各建物の築造から廃絶までの一定期間の中で、一時期、併存していた想定である。

4 古墳時代前期を通じ、西新町遺跡の港は石鍾の一括出土がある 17 次調査区よりも北の、遺構が希薄になるエリアと推定される。荷揚げなどもそこで行われたと考えられる。交易品等を保管する倉庫については不明であるが、掘立柱建物群が集中する倉庫域のようなエリアは遺跡内で確認されておらず、形成されなかった可能性が高いのであろう。遺構としては認識が難しい簡易な構造の倉庫または竪穴建物を倉庫として利用することがあったのであろうか。後述する中原遺跡（唐津平野）では竪穴建物とはエリアを別にする掘立柱建物倉庫群がみつかったているが、博多湾沿岸の海浜砂丘上の集落では今のところそのような事例がみられない。

5 朝鮮半島系土器は古墳時代前期前葉から中葉を通じて 12・13 次調査区周辺を中心としたエリアからの出土であり、半島南東部産とみられる大型板状鉄斧（5 次 2 号建物）なども出土している。古墳時代前期前葉以降の朝鮮半島系土器は楽浪系土器に代わり、半島西南部系諸の土器が増加する（寺井 2006）。当該期も西南部系の各器種を主体として、南東部系の広口壺（5 次 6 号）、同小型壺（13 次 27 号、14 次 3 号）や、半島産とみられる倭系土器（17 次 7 号）などを含む構成である（第 56 図）。概も半島西南部系が多く、南東部系や模倣品（13 次 78 号・40 号）を含むが、セットとなる甕は朝鮮半島系でなく、土師器と考えられている。

6 西新町遺跡は糸島平野と福岡平野の中間に位置する「出島」状の砂丘上に立地することから、孤立的な特定の場所での交易の集約化と情報の統制が指摘されている（久住 2007、寺井 2009）。久住氏は西新町遺跡を「伊都国」と「奴国」の中間とみて、古代社会の貿易港は中立地に成立するというボランニエの論とも対比している（久住 2007）。

7 様相が不明確なため表には掲載していないが、博多遺跡群の東には同時期の集落である吉塚遺跡や堅粕遺跡が分布する。また、近年の調査であるため未報告であるが、糸島平野北東部の今津 A 遺跡で古墳時代前期を含む製塩炉が検出されている。

8 西新町遺跡でもフィゴの羽口とされる土製品が出土しているが（古墳時代前期中葉の 12 次 64 号住居）、鍛冶にともなう鉄片や鉄滓の出土はなく、鉄器生産遺跡とは考え難い。断面形等は博多遺跡群のそれとは異なり、中原遺跡に近いタイプ（村上 2021）である。

9 古代の鴻臚館（筑紫館）と博多の関係に通じるものがある。

【参考文献】

- 石井陽子 2009「博多湾岸地域における古墳時代の集落動態」『九州考古学』第 84 号 九州考古学会
- 磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次 1998「博多遺跡群をめぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
- 大庭孝夫 2023「古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究」九州歴史資料館
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』X I X 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館
- 久住猛雄 2005「3 世紀の筑紫の土器～北部九州・特に博多湾沿岸周辺における外来系土器の受容と展開～」『邪馬台国時代の筑紫と大和』香芝市二上山博物館
- 久住猛雄 2006「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
- 久住猛雄 2007「博多湾貿易の成立と解体」『考古学研究』53-4
- 久住猛雄 2008「福岡平野比恵・那珂遺跡群」『弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会』同成社
- 久住猛雄 2012「奴国とその周辺」『季刊考古学別冊 18 邪馬台国をめぐる国々』雄山閣

- 久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会
実行委員会
- 久住猛雄 2019「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅰ弥生時代終末期～古墳時代前期』
第21回九州前方後円墳研究会佐賀大会実行委員会
- 小松譲 2013「中原遺跡の弥生時代～古墳時代集落構造の変遷」『中原遺跡Ⅶ』佐賀県教育委員会
- 小松譲 2014「中原遺跡の弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落と墳墓」『中原遺跡Ⅷ』佐賀県教育委員会
- 重藤輝行 2009「西新町遺跡出土の土師器の編年」『西新町遺跡Ⅸ』福岡県教育委員会
- 重藤輝行 2018「4～5世紀の九州地域の土器と渡来人集落・馬韓・百濟系を中心として」『日韓交渉の考古学－古
墳時代（最終報告書論考編）日韓交渉の考古学・古墳時代研究会 韓日交渉の考古学・三国時代研究会
下原幸裕・重藤輝行 2009「古墳時代集落の展開」『西新町遺跡Ⅸ』福岡県教育委員会
- 白井克也 2001「動島貿易と原の辻貿易－粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易－」『弥生時代
の交易』第49回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 武末純一 2009「三韓と倭の交流－海村の視点から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』151
- 武末純一 2010「集落からみた渡来人」『古文文化子談義』第63集 九州古文化研究会
- 辻田淳一郎 2013「古墳時代の集落と郡津官家」『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡
市
- 寺井誠 2006「古墳出現後における朝鮮半島系土器の故地とその流入背景」『日本考古学協会第72回総会研究発
表要旨』
- 寺井誠 2009「一の町遺跡および糸島地域出土の朝鮮半島系土器」『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町教育委員会
- 寺井誠 2016「日本列島における出現期の瓶の故地に関する基礎的研究」（公財）大阪市博物館協会 大阪歴史博物
館
- 早野浩二 2020「古墳時代前期の都市的な遺跡と東海系土器－土器編年の併行関係の問題を中心として」『世界と日
本の考古学』常木晃先生退職記念論文編集委員会
- 村上恭通 2021「古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景」『嚮学への最前線 嚮学研究第10号
- 平尾和久 2006「生産と流通からみた伊都国と奴国」『伊都国歴史博物館紀要』創刊号
- 平尾和久・上田龍児・小嶋篤 2024「筑前における集落と古墳の動態」『集落と古墳の動態Ⅴ総括』第25回九州前
方後円墳研究会佐賀大会実行委員会
- 福岡市 2016『新修福岡市史 考古資料編1 遺跡からみた福岡の歴史－西部編－』
- 福岡市博物館 2015『新・奴国展 ふくおか創世記』
- 森本幹彦 2010「玄界灘沿岸地域における朝鮮半島系土器の様相2」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討－弥生時
代を中心に－』第59回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 森本幹彦 2011「集落空間の変化、集落フォーメーションの展開」『古墳時代への胎動 弥生時代の考古学4』同成
社
- 森本幹彦 2013a「樋井川流域周辺の弥生時代遺跡」『七隈史学』15
- 森本幹彦 2013b「北部九州の古式土師器からみた地域間交流の様相」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』第16回九州前方
後円墳研究会
- 森本幹彦 2015a「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』66-4

- 森本幹彦 2015b「海人集団の東西」『みずは別冊2 弥生研究の交差点 池田保信さん還暦記念』大和弥生文化の会
- 森本幹彦 2018a「奈多砂丘出土の朝鮮半島系土器」『福岡市博物館研究紀要』第27号
- 森本幹彦 2018b「弥生時代後期の対馬の埋葬儀礼からみた日韓交流」『海峡を通じた文化交流』（第13回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会資料集）九州考古学会
- 森本幹彦 2019「元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流」『元岡・桑原遺跡群34』福岡市教育委員会
- 森本幹彦 2020a「弥生時代の博多」『福岡市博物館研究紀要』第29号
- 森本幹彦 2020b「玄界灘沿岸域周辺の中国系・楽浪系土器と瓦質土器」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告書論考編）』新・日韓交渉の考古学—弥生時代—研究会・同—青銅器—原三国時代—研究会編
- 森本幹彦 2022「古代博多湾の交易特区？西新町遺跡からみた弥生時代の海人」『西日本文化』502号 西日本文化協会
- 森本幹彦 2023a「考古学からみた新技術」『考古学研究』69-4
- 森本幹彦 2023b「楽浪系・三韓系土器からみた弥生時代の北部九州」『季刊考古学別冊九州1』雄山閣
- 森本幹彦 2025（刊行予定）「筑前地域（西部）の弥生時代後期集落」『弥生後期社会の実像—集落構造と地域社会—』六一書房
- 柳本照男 2024『日韓古墳時代研究』同成社
- 吉田東明 2009「西新町遺跡の竪穴住居作りつけカマド」『西新町遺跡IX』福岡県教育委員会
- 吉留秀敏 2004「集落・居館・都市的遺跡と生活用具—九州」『考古資料大観 10』小学館
- 李暎澈 2018「3～4世紀の土器資料からみた梁山江流域と日本列島」『日韓交渉の考古学—古墳時代（最終報告書論考編）日韓交渉の考古学・古墳時代研究会 韓日交渉の考古学・三国時代研究会』

【挿図出典】

- 第52図 福岡市史編さん室提供の地形図（宗建郎氏作成）に筆者加筆
- 第53図 森本 2022 図1、西新町遺跡8・9・16次調査報告実測図面より構成
- 第54図 下原・重藤 2009 第80図に加筆
- 第55図 福岡市博物館 2015 図版403、西新町遺跡13・14次報告実測図面より構成
- 第56図 下原・重藤 2009 第80図改変図と5・12・13・14・17・20次調査報告実測図面より構成
- 第57図 森本 2025 図6に加筆
- 第58図 小松 2013 図240、小松 2014 図208より構成

森本幹彦（福岡市経済観光文化局文化財活用部文化財活用課）

第2節 九州内における布留式系土器の影響と西新町遺跡

1. はじめに—九州古式土器研究の現状と到達点—

弥生時代／古墳時代移行期（北部九州の「西新町式土器」併行期から古式土器の成立にかけての時期）は、九州でも近畿地方の土器の影響を受けて土器様式が大きく変化する時期である。弥生時代から古墳時代へ移行する画期の追及や土器の成立等にも関連し、多くの先行研究の蓄積がある。その中でも研究史上の画期としては、①1970年末から1980年代前半にかけて福岡平野のみならず九州各地で、発掘調査件数の増加に伴う膨大な資料に裏付けられた土器編年案が複数提示されたこと（福岡：武末1977・1979、田崎1982、柳田1982・1991、熊本：野田1982ほか）により、弥生時代—古墳時代移行期の土器変化が時期を通して把握され、1990年代にかけて県単位での土器編年案が概ね整備されたこと（鹿児島：中村1987、佐賀：蒲原1991ほか）が挙げられる。続いて、②1999年に久住猛雄により、西新町式土器から庄内式土器・布留式土器に代表される近畿地方の古式土器へと単純変化するのではなく、土器製作技術伝播の遺跡間「破行性」も持ちつつ、北部九州では複数の「系統」が同時存在する時期があり、系統ごとに整理がなされた点や、九州の弥生時代以来の在来系の土器製作技術が古墳時代前期にかけて残存する実態について指摘があった点（久住1999）である。それを受けて各地での古式土器編年の再検討がなされ（九州前方後円墳研究会2017）、さらに小地域単位での土器編年の構築と編年案同士の併行関係の追及の必要性が確認された点が挙げられる。現在は上記を受け、九州での古式土器研究は、九州各地の小地域編年とその併行関係の整理・検証を行う段階にあると言えるだろう。

地域間の編年を検証するにあたり、地域を越えて移動する搬入土器（土器製作人の移動も含む）や、他地域から影響を受けた土器の把握が、地域間の編年の時間軸を横に繋ぐ鍵となる。その中で、古式土器製作技術を受け入れるにあたり、より近畿地方の原型に近い「畿内系土器」が出土している西新町遺跡を含む福岡平野周辺は、九州各地域への古式土器製作技術の受容と伝播にも大きな影響を与えている点からも、九州各地域での土器の理解には西新町遺跡はじめ、福岡平野の土器と周辺地域との土器の比較検討は極めて重要である。

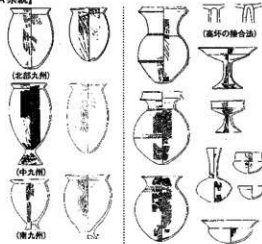
そこで本稿では、福岡平野と九州各地域出土土器との比較から、一例として甕形土器に着目し、伝播／受容の実態について、九州全体の大局的な視点を示すこととしたい。また併せて、西新町遺跡出土土器のうち他地域と共通する器形や、明らかに胎土が異なり西新町遺跡への搬入と思われる土器を示すことにより、西新町遺跡と他地域との関連を探る一助としたい。

2. 九州各地での古式土器製作技術の伝播／受容と西新町遺跡

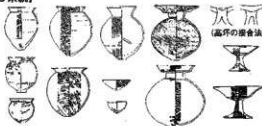
（1）甕形土器の伝播／受容

九州における弥生時代後期の甕形土器では、北部九州では長胴で平底の形態、熊本県・宮崎県以南の中・南九州では長胴で脚台が付く形態であることが知られており、南下するにつれ器壁が厚くなる傾向があることが知られている（檀2005）。弥生時代～古墳時代移行期になると、畿内系（畿内第Ⅴ様式変容系や庄内式系・布留式系）の土器群の影響のもと、北・中九州の甕形土器は丸底化が進行し、弥生時代以来の形態も残存しながら徐々に「布留式土器と似た形態」へと変化し、九州の古式土器が成立する（檀2011：第59図）。これに加え、以下では九州各地域と西新町遺跡と

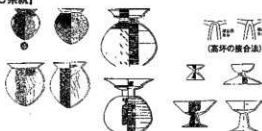
[A系統]



[B系統]



[C系統]



[D系統]



※その他、近江系・東海系・東播磨・東戸内系など、上記以外の系統の土器も少数ながら存在する。また、各系統の代表形態（一部に低系統の製作技術を採用）も多数存在する。

[A系統（九州在来系土器群）]九州の母土土器に根拠を拂つた土器群。

釜は板状平底あるいは浅形脚付型。肩部は丸腹に変化し、粗粒化していく。1号層部は基本的に内部の形状で、外部ではほぼ滑面を行なっているものが多い（口縁部を除く）。投光を帯びない。タタキが残存する場合は、垂直として肩と上り方向である。高杯の基部はラッパ状に閉鎖するものが多い。杯部と脚部の接合は付加法による場合が多い。

[B系統（近畿・畿内V様式系土器群）]近畿地方のV様式土器からの系譜を引く土器群。

釜は口縁部を丸くおさめるものが多く、口縁部は外反するが、中位に変化点を持つ場合が多い（1号層部を除く）。投光の採用。底部は突出する丸底であり、肩部は付加法の接合が確認される（「底層接合技法」の採用、藤田 1974）。タタキ目が確認できる場合、原則として肩と上り方向である。肩に上半部では、軸土接合痕が多く確認され、軸土層目が浅いことが多い。一足、布留式と類似の底型（外翼ハケ・内翼ケズリ・丸底）に見えても、上記の造形が確認される。高杯は脚部が中央である場合が多く、B系統判定の指標となる。

鉢は主要の下半部製作技法と関係するものが存在する。肩面右上がり方向のタタキや底部内面に放射状のハケ調整が確認されることが多い。

[C系統（庄内式系土器群）]庄内式土器およびその影響を受けて成立した土器群。

釜はいわゆる庄内型。外周は縦帯タタキが基本であるが、九州南部では太めのタタキ目を有する釜も見られる（C系統の限定・前置型）。1号層部はつまみ上げがなされていることが多いが、新地では内面調整する場合もある。口縁部は直線的に作る場合が多い。高杯の杯部と脚部の接合は、付加法（浅田 1983）であることが多い（脚部基部凸面付加法）。

[D系統（布留式系土器群）]布留式土器およびその影響を受けた土器群。

釜はいわゆる布留型。口縁部は内面に凹入するものが多い。底部内面に指掘下痕が確認される場合がある。底型丸底土器が確認される（溝部小型3容群）。高杯の杯部と脚部の接合はC系統と同であるが、陶質が下ると完成後の全体も増加する。杯部が丸みを帯び、口部はエンタンス状になる。

[E系統（山陰系土器群）]山陰地方の土器と密着がみられる土器群。

一足1口の壺や甕、灰貯器、灰貯器などがある。壺や甕の頸部内面に横や斜なカーブを築くことが多い。

第 61 図 九州古式土器の系統分類（檀 2011 より転載）

法に差異が生じたものと思われる。

福岡平野から筑紫野地峡帯を南下した筑後川以北の地域までは、器厚 3 mm 程度の薄手の形態がみられるが、筑後川以南～熊本県地域でみられる庄内式系・布留式系の土器群は器厚が 4～5 mm 程度のものが主体である。九州全体の傾向として、南下するにつれ形態や仕上げ調整は「北部九州型布留甕」（久住 1999）に類似するが、器厚が厚く重量が増す傾向がある（第 60 図）。

第11表 九州出土甕形土器各系統の属性別諸特徴（古墳時代前期）

器形	甕形土器							
系統	A系統九州在来系			B～D：近畿地方系（畿内系）			E：山陰系	
	A3：南九州系 （宮崎・鹿児島）	A2：中九州系 （鹿座除く熊本）	A1：北部九州系 （福岡・大分）	B系：近畿第Ⅴ 様式変容系統	C系：庄内式系	D系：布留式系		
底部形態	脚台有		平底	平底（時期が 下がるにつれ 丸底化）	丸底 （平底の名残 有）	丸底	脚台有 （古墳時代に 丸底化）	
器壁	厚手	薄手 （3～5mm）			薄手 （1～3mm）		薄手 （1～3mm）	
※九州では南部になるほど厚手にある傾向がある（タタキ技法内面ケズリの度合いに由来）。								
タタキ技法	タタキ技法無	タタキ技法有 （ハケメで消えていても器壁にタタキ痕跡が確認できる）						
	－	左上がりタタキ目主体		右上がりタタキ目主体	右上がり／左上がり双方有だが 右上がりが多い			
内面ケズリ	（もともと無。庄内式・布留式系の影響のもと、時期が下がるにつれ内面ケズリを採用するようになる）					有り		
体部形態	倒卵形		長胴楕円形 （ラグビーボール形）			倒卵形	球形	倒卵形～球形
口縁部 形態	外反	外反	外反	外反	外反ないし直線的にのびる	内湾	二重口縁	
口縁端部 形態	断面四角（端部に面を持つ）か、丸く収めるものが大半。			丸く収める	上にとがる （積み上げ）	内面肥厚	断面四角が多い	
※九州では系統を超えて各種バリエーションが有ることが多く、一定しない。								
備考	古墳時代前期では、近畿の古式土器の影響は少なめ（布留式系土器群も出土は確認される）		脚台はなくなり丸底化するが、古墳時代前期を通じて残存		遺跡間の「破行性」はあるが、布留式系土器群の影響を受けつつ、古墳時代前期を通じて残存		九州では山陰系とともに伝播／受容	布留式系土器群とともに伝播／受容

※上記は典型的な資料の特徴を抽出したものである。実態は各系統同士の要素が折衷形として混在することも多い。

※分類のアルファベットは（久住1999）の系統分類による。

ただし、九州各地域の中でも、その地域内他遺跡と比して薄手（器壁が3mm以下）の土器が出土する遺跡が確認される場合があり、古式土器製作技術の伝播／受容にあたってその地域の核となる拠点集落である可能性が想定される。実態としては、筑後地域以南では多くの場合、薄手の甕形土器が厚手の甕形土器の中にまれに確認される程度という状況から、筑後川以南地域での薄手の土器に関しては、福岡平野や本州など他地域からの搬入、もしくはその土地での製作（福岡平野等からの土器製作者の来訪）が想定される。

以上のように、福岡県地域での弥生時代から古墳時代にかけての土器の変化は、各地域で拠点となる遺跡に、まず西新町遺跡をはじめ福岡平野周辺を介して「畿内系土器」の製作技術が伝播／受容され、それらの模倣形態（オリジナルからは若干異なる形態）が九州各地の拠点集落に伝播し、各地域で拠点集落を核として製作技術が伝播／受容されていく状況が読み取れる。

また、土器の器形の他にも、胎土に含まれる砂礫に着目することで、土器の搬入（移動）も読み取れる。脊振山系付近は花崗岩地帯となっており、特に脊振山地南麓の佐賀平野では胎土に金色の砂粒の混入が認められることが多いが、筑後川以南の地域や熊本県地域では角閃石が多く混入する状況が認められ、概ね筑後川の南北で砂礫構成が異なる（阿蘇山火山灰起源）。特に白川流域では1mm×2mm大の角閃石に加え、暗赤褐色の砂粒が多く入る点が特徴的である。これらの特徴は西新

町遺跡の在地生産の土器胎土とは異なるため、西新町遺跡付近での製作か、他地域製作土器の搬入品かの弁別が可能となり、遺跡間の交流を探るうえで重要な視点と言える²⁾。

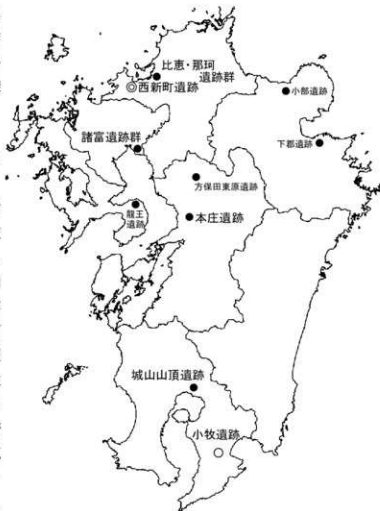
(2) 福岡平野周辺から九州各地への土器の伝播 / 受容

前段のとおり、古墳時代移行期前後に西新町遺跡を含む福岡平野周辺地域では薄手の甕形土器が成立し、九州での近畿Ⅴ様式変容系・庄内式土器・布留式土器製作技術の受容に際し、福岡平野周辺(比恵・那珂遺跡群、西新町遺跡等)で「筑前型庄内甕」「北部九州型布留甕」(久住1999)などに代表される九州独自の範囲が出現する。それらが福岡平野周辺を核として伝播するなかで、筑後地域や熊本県地域でも庄内式土器・布留式土器に似た土器が成立し³⁾、古墳時代前期の古式土師器が成立している(檀2005)。対して、古墳時代

前期では宮崎県・鹿児島県地域では弥生時代以来の在地様式が根強く残るものの、布留式系土器群に代表される「畿内系土器」が出土する遺跡も知られている。以下、数例の事例に触れ、西新町遺跡を含む福岡平野周辺から九州各地への古式土師器の伝播/受容状況について概観したい。

各地域の中で明らかに薄手で、福岡平野からの搬入と考えられる土器が出土する遺跡が存在する。明確に把握できる例として鹿児島県地域を例に挙げると、南九州特有のいわゆる「成川式土器」が主体となる地域(第59図参照)の中で、城山山頂遺跡(平田ほか編1985)や鹿屋市小牧遺跡(大保・永瀬・北園編2022)など、布留式系土器群に代表される古式土師器が出土する遺跡が点在する状況がみられ、西新町遺跡を含む福岡平野周辺地域からの古式土師器製作技術の九州南部への点的な伝播もしくは移住者の存在が想定される。

また、九州の各地域で、その地域の中でも薄手・精良な古式土師器が出土する遺跡も散見される。その一例として、中九州(熊本県地域)の熊本市本庄遺跡(小畑ほか編2010)が挙げられる。本庄遺跡は熊本大学医学部周辺に展開する遺跡で、熊本市内を流れる白川の自然堤防上に位置し、有明海から熊本平野へ上がる交通上の結節点になるような場所に立地している。本庄遺跡では熊本平野部周辺の中でも特に薄手・精良な土器が多く出土し、福岡平野周辺(比恵・那珂、博多の各遺跡群や西新町遺跡)や筑後川河口の佐賀市諸富遺跡群⁴⁾(種浦1985・1987・1989)などの他地域か



第62図 土器交流拠点の候補となる遺跡
(抜粋：本稿に関わる遺跡のみ)

ら直接に近い土器伝播／受容があった可能性が高い。なお、本庄遺跡で古式土師器の出土数が最も多いのは古墳時代前期後半（久住Ⅲ期併行）以降であり、古墳時代前期初頭～前半（久住Ⅰ～Ⅱ期併行）の資料は少ない。この点は、古式土師器が増加する時期も西新町遺跡では久住Ⅲ期併行以降の資料数が多く、西新町遺跡の様相とも重なる点で、本庄遺跡での古式土師器の伝播／受容に際し、西新町遺跡と関連する可能性も十分に考えられる。また、本庄遺跡以外の熊本平野の古式土師器出土遺跡では、本庄遺跡と比較するとやや厚手となる特徴があり、時おり薄手の少数の甕形土器が出土している状況が確認できる。この状況からも、古墳時代前期後半の熊本平野部の古式土師器製作技術の伝播／受容にあたって、福岡平野周辺からの土器製作に関わる情報が本庄遺跡を介して熊本平野部に伝わっている状況も垣間見える。

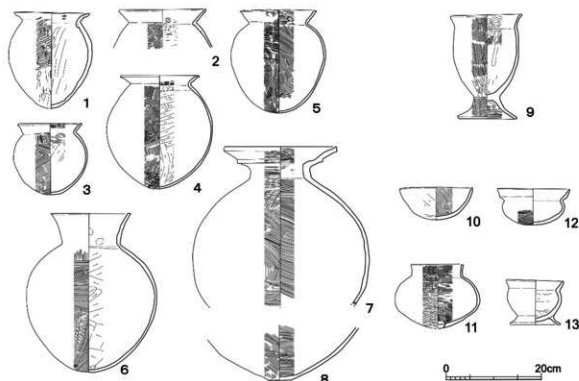
同様の状況は九州北半部の他地域でも確認され、精良・薄手の甕形土器が多く出土する拠点的な遺跡が各地域内で確認され、その遺跡の周辺でやや厚手であったり土器製作法が原型と異なるものや、本来の九州在来系の製作技術が融合する等の変容が起きている状況がみられる。この状況を各地域で整理するなかで、より地域間交流の実態に迫ることが可能となることが期待される。

（３）西新町遺跡出土土器に見る他地域系統と思われる土器とその意味

以下では、西新町遺跡の土器実見に伴い確認された、九州他地域からの影響があると思われる土器を例示的に示し、その意味について記したい。着眼点としては、器形・形態的特徴や製作技術の差異に加えて、胎土中に含まれる砂礫の差異にも着目した。西新町遺跡出土土器資料全点を点検できていないため、ここに挙げる土器以外にも該当資料が存在する可能性は高いが、いくつかの事例を示す（第63図）。

第63図1～5には、一見は近畿第Ⅴ様式・庄内式土器・布留式土器に似る形態のもののうち、1個体に複数系統の特徴が入り混じる甕形土器を示す。古墳時代前期後半の西新町遺跡においても、土器に九州在来系を含め、古い時期の要素が残存する状況を確認したい。第63図1（12次住105）の器形は九州在来の弥生後期土器からの系譜を残すが、タタキ目方向は九州在来系に多い左上がり方向ではなく右上がり方向で、口縁部・口縁端部の形態は近畿第Ⅴ様式の甕形土器と共通している。九州在来系の技術と近畿第Ⅴ様式の技術が混在しており、西新町遺跡で近畿第Ⅴ様式の製作技術の受容過程を示す土器と言える。第63図2（12次住42）は庄内式系の土器であるが、胎土は西新町遺跡の在来系土器と差がなく九州での製作と思われる。口縁部が長く延びている等、時間的には古墳時代前期後半に下る資料と思われるが、九州で独自変容をした土器である。第63図3（12次住119）は、外面に細筋のタタキ目を残す等、庄内式系の特徴を有するが体部形態や上半をハケメで消す等の調整は布留式系土器群の要素を残し、口縁部形態は近畿第Ⅴ様式変容系統の特徴を有する。第63図4（20次住47）は、体部のタタキ目をハケメで消す等、布留式系土器群の特徴に近いが、口縁部形態や体部形態に近畿第Ⅴ様式変容系の名残を残している。第63図5（12次住5）は一見北部九州型布留甕に似るが、体部上半に九州在来系に多く見られる左上がり方向のタタキ目を残し、口縁端部の形態も九州の在来系土器に多い四角に角張る形態をしていることから、九州の弥生時代以来の土器製作技術で布留系の甕形土器を製作したものと思われ、九州在来系土器の最終形態に近い土器と思われる。

第63図6～8は壺形土器を挙げる。第63図6（14次住4）は直口壺で布留式系の技法で体部



第 63 図 西新町遺跡出土土器の事例（1 / 8）

が製作されているが、口縁部は九州在来系に多く見られる形態となっている。第 63 図 8（20 次住 4）は壺形土器の底部で、第 63 図 7（17 次住 7）のような上半部が付く形態であると思われるが、胎土に角閃石や石英が多く混入し、西新町遺跡周辺の胎土とは明らかに異なることから搬入土器と判断される。ただし、現状ではどの地域からの搬入かの特定は困難であるが、背振山地周辺の福岡平野や佐賀平野は流紋岩地帯であり、それよりも外の地域からの搬入が想定される。筑後川以南の地域からの搬入を、ひとつの候補として挙げておきたい。

第 63 図 9～13 は、九州各地からの搬入土器と思われるものと、第 63 図 9（14 次土 10）は、一見すると九州中部（熊本県地域及び島原半島）の形態をしている脚付の小型の甕形土器であり、もともと福岡平野部には無い形態をしている。この脚付の甕形土器は熊本県地域と島原半島で差異があり、最もわかりやすい指標は熊本県地域の土器は口縁部が外反し、島原半島の土器は口縁部が内湾する土器が大多数であるという点で（檀 2012・2015）、この視点からは熊本県地域の特徴を有している。ただし、熊本県地域の甕形土器と比して、この土器は脚部が高く、脚部の途中で屈曲がみられる点に違和感がある。この脚部の特徴は、熊本県地域からの影響でみられる南筑後地域の小型脚付の甕形土器に最も近いことから、筑後地方からの搬入土器と思われる。胎土に着目すると、熊本県地域の土器に多い角閃石の混入はほとんど認められず、砂礫にメノウ質の石や片岩の粒が多く入ることから、南筑後（矢部川流域）からの搬入土器である可能性が高い⁵⁾。

第 63 図 10（14 次土 1）は、一見は在来系の鉢形土器であるが、製作技法に近畿第 V 様式と共通する底部輪台技法や、内面にらせん状のハケメ調整を採用し、近畿第 V 様式変容系の甕形土器の下半部と同じ製作法で作られる点で、製作技術に近畿地方の古式土器製作法が取り入れられており、在来系土器の製作者も外来系土器製作技術についての認知があることがわかる資料である。

第 63 図 11 (20 次住 17) は、福岡平野周辺の在来系土器からの系譜と思われる鉢形土器であるが、布留式系土器群の影響がある個体と同様に胎土は精選されている。この器形が祖型となって小型丸底土器になった土器も存在しているが、古墳時代前期に九州の弥生時代からの在来系土器が残存する事の証左となる資料のひとつである。第 63 図 12 (12 次住 96) は、福岡平野周辺の在来系土器からの系譜と思われる鉢形土器の口縁部に二重口縁を追加しているもので、山陰系土器の影響と思われる土器であるが、九州でかなり変容している様相が捉えられる。第 63 図 13 (12 次住 101) は、脚台付の鉢形土器で、福岡平野では出土数が少ない器形である。同様の器形は熊本県北部(菊池川中流域の菊池市・山鹿市付近)の弥生時代後期土器に系譜が求められ、弥生時代後期では鉢形土器の最下半に突帯を 1 条巡らせる器形をしており、その突帯が脚台へと形式変化していくことも知られている。胎土には角閃石の混入は少なく熊本県北部地域からの搬入とするにはやや根拠を欠くが、メノウ質の砂礫が確認される等、南筑後～熊本県北部の胎土砂礫と共通する要素も確認されることから、熊本県北部(菊池川流域)付近から搬入された土器である可能性が高いと思われる。

以上、西新町遺跡出土土器の一部について事例を示したが、①西新町遺跡でも近畿第 V 様式系土器→庄内式系土器→布留式系土器と変化していくのではなく、古墳時代前期後半段階においても古い形態・製作技術が残存し、バリエーションが有ること(さらにその模倣形態の伝播/受容となる九州各地の拠点集落においては、さらに様相のバリエーションは多くなること)、②筑後地域や熊本県北部などから西新町遺跡への土器の搬入が確認され、さらに土器様式の異なる南九州(鹿児島県地域)でも福岡平野周辺からの搬入の可能性が高い器壁の薄い甕形土器の搬入が確認されることなど、土器からも西新町遺跡と九州各地の遺跡との間に人の移動を伴う交流が存在する状況が確認される。

以上のように、西新町遺跡出土土器の一部の資料に着目するだけでも、その土器製作の多くの他地域が関連している状況が読み解ける。ただしその様相を読み解くにあたっては、九州各地での他遺跡出土資料との詳細な比較検討はもちろんのこと、西新町遺跡出土土器を含め、古式土師器導入期の九州の土器様相は極めて複雑ではあるが、その反面、その複雑な様相のなかに弥生時代—古墳時代移行期の地域間交流を探る手掛かりが多く含まれているということでもあり、今後、その様相の把握に期待されることも多い。今後の九州地方の古式土師器研究の深化により、当時のより細かな地域間交流の実態が解明されることが期待される。

【註】

- 1 厳密には、筑後以南の地域では近畿第 V 様式変容系統の技術が根強く残存する。実態としては、近畿第 V 様式の技術をベースとして、庄内式系に特徴的な細筋タタキ・内面ケズリや、布留式系土器群に特徴的な体部上半のハケメ/ナデによる横方向の丁寧な成型や波状文の施文等を加え、「庄内式土器」「布留式土器(北部九州型布留甕)」に外見を似せている形態のものが多いなか、各所の調整に近畿第 V 様式変容系統の特徴がみられるものが多い。この点は(久住 1999)に詳しい。
- 2 土器の搬入や人の移動については、岩永省三氏による整理があり(岩永 1989)、胎土に着目することで土器が搬入されたのか人が移動したのかを推定する手がかりとなる。
- 3 註 1 と同様、近畿第 V 様式変容系統の影響が多く残存している。これは土器製作者にどの程度近畿第 V 様式

土器・庄内式土器・布留式土器の製作技術が伝播／受容されたかによって差異が生じているものと考えられ、福岡平野周辺地域から離れるほど本来の形態が崩れ、複数系統の要素が1点の土器の中で混在する状況が確認される。なお、福岡平野周辺地域でも、那珂川市松木遺跡や福岡市多々良込田遺跡など、近畿第Ⅴ様式の製作技術を根強く保持する集落遺跡もあり、地域内でも遺跡間の「破行性」も確かに存在する（久住 1999）。

4 佐賀市諸富遺跡群では、吉備系・東海系を含め、本州からの搬入土器も出土していることが知られており、西新町遺跡と同様に交易拠点的な性格が想定される遺跡である。筑後河川口という立地からも、有明海を通した交流の核となる拠点であった可能性が高く、九州南部への古式土師器伝播／受容に際しても重要な位置にあったことが想定される。

5 南筑後地域の甕形土器は基本的には平底で脚台が付かず、脚台付きの甕形土器は第59図のとおり客体的で、脚台付きの甕形土器の祖型は熊本県地域に求められる。しかし、通常サイズより小型の甕形土器に限っては、南筑後地域の土器様式の中に一定量の出土が認められ、脚台の特徴等で熊本県地域と似てはいるものの明らかな差異も認められる。この状況も含め、西新町遺跡出土例は南筑後地域からの搬入の可能性が極めて高いと判断した。

なお、南筑後地域で通常サイズの脚台付きの甕形土器も散見はされるが、みやま市大江南遺跡竪穴遺構出土土器のように脚台付甕のみで占められており、熊本県地域からの移住等が示唆されるような出土状態も含め、極めて客体的である。

【参考文献】

- 岩永省三 1989「土器からみた弥生時代社会の動態－北部九州地方の後期を中心として－」『生産と流通の考古学 横山浩一先生退官記念論文集』横山浩一先生退官記念事業会
- 大保秀樹・永瀬功治・北園和代編 2022『小牧遺跡3（弥生時代～古墳時代編）』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 小畑己己・大坪志子・村田知聖編 2010『熊本大学埋蔵文化財調査報告書6』熊本大学埋蔵文化財調査室
- ※その他、本庄遺跡は、熊本大学埋蔵文化財調査室・熊本大学埋蔵文化財調査センターより調査報告多数。
- 蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『調査研究書』第16集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
- 九州前方後円墳研究会 2017『九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式土器併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会
- 武末純一 1977「Ⅶ. 考察 3. 遺物の検討（2）土師器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX』福岡県教育委員会
- 武末純一 1979「福岡県・早良平野の古式土師器」『古文化談義』第5集 九州古文化研究会
- 田崎博之 1982「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120輯 九州大学文学部
- 種浦修 1985『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第2集 諸富町教育委員会
- 種浦修 1987「小結」『唐人廟遺跡』諸富町文化財調査報告書第3集 諸富町教育委員会
- 種浦修 1989「Ⅴ諸富地域（筑後川下流域）の土器編年」『土師本村遺跡』諸富町文化財調査報告書第7集 諸富町教育委員会
- 檀佳克 2005「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』第80号 九州考古学会
- 檀佳克 2011「土師器の編年①九州」『古墳時代の考古学1』同成社

檀佳克 2012「南筑後・肥後地域と島原半島との交流」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』 長崎県考古学会・肥後考古学会 pp74-79

檀佳克 2015「甕形土器と器台からみた熊本と周辺地域との交流」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』 長崎県考古学会・肥後考古学会合同研究大会資料集 pp15-58

中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室

野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開－特に中部九州における編年試案－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

平田信芳ほか編 1985『城山山頂遺跡』国分市埋蔵文化財調査報告書2 国分市教育委員会

眞邊彩・浦博司・小田裕人・百枝勇一編 2021『六反ヶ丸遺跡2－B地点－』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

柳田康雄 1982「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

柳田康雄 1991「土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣

【挿図出典】

第59図 (檀2011) より転載。

第60図 筆者作図。

第61図 (檀2011) より転載。

第62図 筆者作図。

第63図 各発掘調査報告書より再トレースし作図。

檀 佳克 (八女市教育委員会)

第4章 西新町遺跡出土品の特徴

第1節 西新町遺跡出土金属製品の特徴

1. はじめに

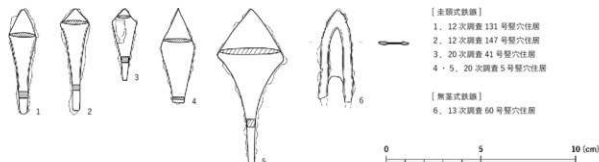
博多湾に面した砂丘上に展開する西新町遺跡では、鍛冶遺構の存在は確認されていないものの、板状素材や鑄羽口など鍛冶関連遺物が確認されている。また、堅穴住居跡などから農具をはじめとする多様な鉄製品が出土しており、本遺跡から多量に出土する朝鮮半島系土器と併せて、朝鮮半島との関係や鍛冶工人の存在が示唆されてきた。

そこで本稿では、本遺跡から出土する金属製品を取り上げ、その特徴と金属製品からみた本遺跡の特色について検討したい。

2. 鉄製品について

(1) 鉄鏃

本遺跡から出土している鉄鏃は、その多くが鏃身部の先端を山形に切断し、成型する圭頭式（第64図1～5）と呼ばれる一群であるが、茎を持たない無茎式（第64図6）も含む。無茎式の鉄鏃は、鏃身部の先端と逆刺を欠損しており、鏃身部の中央に挟み部を設ける。本来は、有機質製の根挟みを用いて矢柄と接続していた（川畑 2013）ものと考えられ、有機質の痕跡が確認される。



第64図 西新町遺跡出土の鉄鏃（1/2）

(2) 鉄製農具

本遺跡から出土している鉄製農具には、刀子、鑿、鋳、手鎌、鉄鎌、袋状鉄斧がある。ここでは各器種について、その内容を整理していきたい。



第65図 西新町遺跡出土の刀子（1/2）

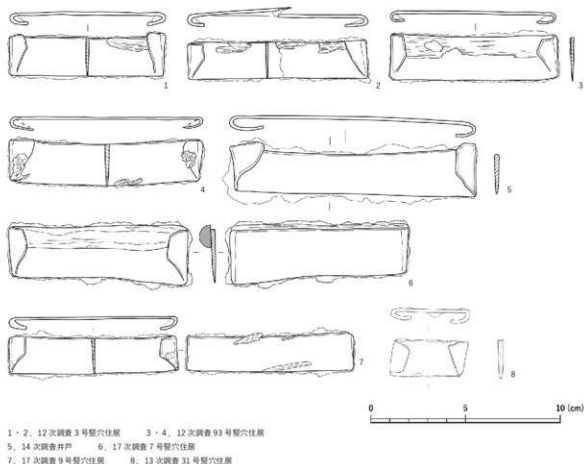
刀子（第65図1～6）

本遺跡から出土した刀子は形態のバリエーションが豊富である。1は、両関で関付近に有機質の巻き付け痕や木質が遺存している。2は、刃部側のみに関を持つ片関のもので、全体的に木質が付着している。3は、関が不明瞭で切先が上部に反る。4は、茎部が大きく屈曲し、茎端部が細く尖るもので、素環頭の形成が意識された可能性が高い。5は、全長4.3cmと、1～4の刀子に比べて小ぶりで、刃部を作り出さず、関が不明瞭である。6も、全長4.5cmと小型の刀子であるが、刃部側に明瞭な関を形成し、刃部と茎部の境がはっきりしている。

手鎌（第66図1～8）

本遺跡において、出土している鉄製農具の中でも特に出土数が多く、竪穴住居跡や井戸跡などから出土している。形態は横長の長方形を呈し、全長が8～10cm程度となるものがほとんどであるが、8のように全長4cm程度の小型品も出土している。

刃部形態を見ると、直線状になるものが多いが、6の手鎌は刃部が窪み、左側に向かうにつれ細くなっている。『西新町Ⅶ』内でも言及されているように、研ぎ減りによる形態の変化と想定され、実際に使用された可能性が高い。また、袋部には木質が良好に遺存しており、鉄板の端を左右に折り曲げ、木柄を装着するという手鎌の構造が観察できる貴重な資料である。



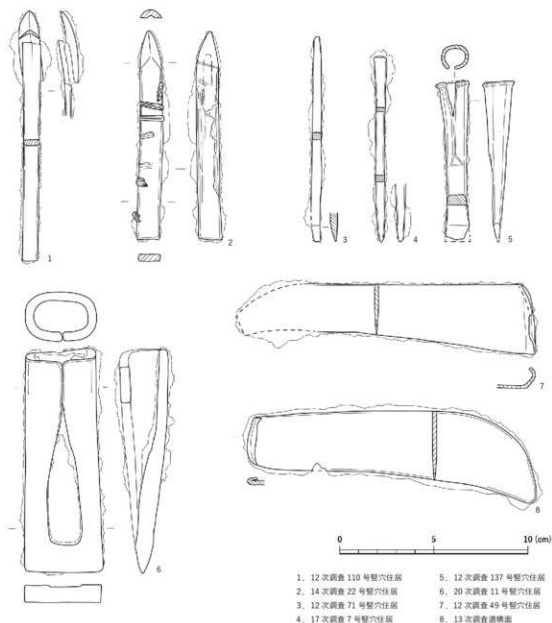
第66図 西新町遺跡出土の手鎌（1/2）

鉋（第67図1・2）

木材の表面を加工するための鉄製木工具で、いずれも竪穴住居内から出土している。いずれも刃部の先端が反り上がり、身部の断面は長方形を呈する。2の鉋は、柄にあたる部分に木質や樹皮巻きの痕跡が確認され、木製の柄を樹皮で固定した状態であったことがうかがえる。

鑿（第67図3～5）

先端に刃部を持ち、木材を様々に加工するために用いられた鉄製木工具である。3・4は、全体に細身で、基部は棒状になり、類似した形態を持つ。一方、5の鑿は、3・4に比べ、刃部が幅広で、基部も袋状を呈していることから、袋部に木製の柄を装着して使用されたと想定される。こうした形態の違いは、用途や加工部位の違いによると考えられる。



第67図 西新町遺跡出土の鉄製農工具（1/2）

袋状鉄斧（第 67 図 6）

木製の柄を装着するための袋部を持つ鉄斧である。袋部幅よりも刃部幅の方がやや広く、袋部の断面形は楕円形を呈する。

鉄鎌（第 67 図 7・8）

7・8ともに、刃部が湾曲する曲刃鎌と呼ばれる鉄鎌で端部全体を折り返すが、折り返しを上に向けた際に、折り返しが右側になる乙技法（7）のものと折り返しが左側になる甲技法（8）のものに分かれる（都出 1967）。これらの違いは、製作工人の系統の違いに起因する可能性（河野 2014）が指摘されている。

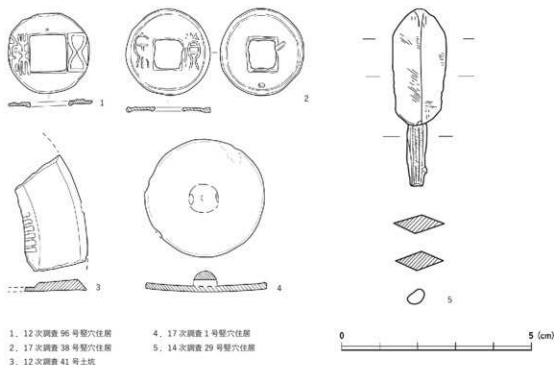
3. 青銅製品について

（1）銭貨（第 68 図 1・2）

1 は、五銖銭である。周縁の隆起帯（周郭）からその内側の銭体を意図的に削った「剪輪銭」と呼ばれるもので、「五」の右側や「銖」の金偏が欠けている。穿（中央の方孔）の上に突出した円点があり、いわゆる「穿上半星」となる。2 は、貨泉である。面（表面）には郭がなく、孔辺に接するように右に「貨」、左に「泉」の字を篆書体で鋳出するが、不明瞭である。背（裏面）には明瞭な郭があり、郭の右角近くに棒状の突出を鋳出している。

（2）青銅鏡（第 68 図 3・4）

3 は、銅鏡片である。縁部付近の破片で、縁の形態は平縁である。縁の形態、櫛歯文の存在、銅質などから後漢鏡であると想定される。4 は、小形仿製鏡である。面径は 3.15cm と小形で、鏡背に文様を施さない素文鏡であると考えられる。鈕は背面の中心にあり、鏡面はやや湾曲する。



第 68 図 西新町遺跡出土の青銅器（実大）

(3) 銅鍬 (第 68 図 5)

逆刺がない柳葉形の鍬身であり、篋被ももたない。鋳造時のズレが基部付近で顕著に確認され、鍬身部の鋳もやや中心から外れる。鍬身部は全体によく研磨される。

4. 西新町遺跡出土金属製品の特徴

(1) 鉄鍬の特徴

本遺跡で確認された鉄鍬の大半が刃部を山形に成型する主頭式鉄鍬である。同じ博多湾沿岸地域に所在する博多遺跡群でも主頭式鉄鍬が主体となるが、博多遺跡群では全国の有功古墳に副葬される定角式鉄鍬及びその未成品が確認されており、定角式鉄鍬の有無という点において違いがみられる。博多遺跡群が鉄器生産の拠点であり、西新町遺跡が対外交流の拠点であったことを踏まえれば、遺跡内における鉄鍬組成の違いについては、それぞれが担った役割の違いに起因している可能性がある。

(2) 鉄製農具の特徴

本遺跡では、刀子、鑿、鋳、手鎌、鉄鎌、袋状鉄斧といった多種多様な鉄製農具が出土しているが、特に注目されるのは、手鎌の出土量の多さと刀子の形態的バリエーションの豊富さであろう。

手鎌に関しては、鉄製穂摘具としての使用が想定されることが多いが、本遺跡は博多湾に面した砂丘上に展開する集落であり、石鍾や飯蛸壺などの漁撈具が多く出土していることから、農耕ではなく、漁撈活動が主体であったもの（重藤 2024）と考えられ、穂摘具以外の用途についても考える必要がある。穂摘具以外の手鎌の使用法については、麻やカラムシの皮から布や漁網に使用される繊維を取り出す作業である「苧引き」に使用された可能性（菱田 2002）が指摘されているが、研ぎ減りの痕跡が確認され、実際に使用された可能性が高い第 66 図 6 の手鎌は、多量の石鍾がまとまって出土した 17 次調査 7 号竪穴住居跡（『西新町Ⅶ』）から出土しており、先行研究で指摘されているような苧引き具としての使用が想起される。しかし、魚津知克が指摘しているように、古代における苧引き具（山下 1992）との関連や朝鮮半島における類例（村上 2001、西嶋 2014）との比較検討が必要である（魚津 2009）ため、ここでは可能性の指摘にとどめておきたい。

刀子に関しては、形態バリエーションの豊富さから用途に応じた使い分けが行われた可能性が考えられる。熊本県・津留遺跡では、蛇紋岩や滑石製の玉類の加工に刀子のような小形の金属製工具の使用が想定されている（大坪 2019）が、本遺跡でも蛇紋岩製勾玉の未成品や滑石製石鍾などが出土しており、面取りなど大まかな加工について、刀子が使用された可能性がある。また、大庭孝夫が民俗例における「マキリ庖丁」との比較から海産物の加工に刀子が使用された可能性（大庭 2023）について言及しており、豊富な漁撈具の存在や本遺跡の立地などと併せて考えても、その可能性は十分に考えられる。

(3) 青銅器の特徴

本遺跡では五銖銭や貨泉、後漢鏡の破片といった大陸との交流を示す青銅器が出土しているほか、小形仿製鏡（素文鏡）や銅鍬といった列島内で生産・流通した青銅器も出土している。古墳時代前期段階における素文鏡は、集落内・祭祀遺構での出土例が多いこと（林 2005、小野本 2013）が指

摘されており、祭祀用の儀鏡として使用された（高倉 1995）と考えられている。本遺跡と同様に、海に面した砂丘上に展開する大規模な交易拠点として知られる鳥取県長瀬高浜遺跡では、祭祀遺構から3面の素文鏡が出土（清水 1999）しており、海上交通などに関連する祭祀行為が行われたことが想定されている（河野 2014）。本遺跡では確実な祭祀遺構が未確認であるが、竪穴住居内から出土したことを考慮すると、集落内で使用されたのちに廃棄されたと考えられ、集落内で儀鏡として使用された可能性もある。

5. まとめ

今回、本遺跡で出土した金属製品について内容の整理を行い、出土鉄器の組成や特徴的な青銅器に着目して、その用途や意義について検討を行った。本遺跡の特色をより具体的に論じるためには、同時期における他の拠点集落間での比較や朝鮮半島との比較など、より詳細な検討が必要である。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 魚津知克 2009「弥生・古墳時代の手鑑—全形復元と用途の推定—」『木・ひと・文化』出土器物研究会 pp163-180
- 大坪志子 2019「幅・津留遺跡の玉類とその製作技術」『幅・津留遺跡第2分冊』熊本県文化財調査報告第336集 熊本県教育委員会 pp305-316
- 小野本政 2013「素文鏡考—二宮神社境内出土鏡をめぐる—」『技術と交流の考古学』同成社 pp223-234
- 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 河野正訓 2014「古墳時代の農具研究：鉄製刃先の基礎的検討をもとに」雄山閣
- 川畑純 2013「古墳時代の矢の構造」『考古学研究』第60巻第1号 考古学研究会 pp13-33
- 清水真一 1999「鳥取県羽合町・長瀬高浜遺跡の祭祀遺構と儀鏡」『考古学ジャーナル』No.446 ニュー・サイエンス社 pp21-24
- 高倉洋彰 1995「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会 pp147-163
- 都出比呂志 1967「農業鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-3 考古学研究会 pp166-181
- 西嶋剛広 2014「凹字形鉄器の検討—古墳時代、三国時代資料について—」『先史学・考古学論究VI』龍田考古会 pp211-220
- 林正憲 2005「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室 pp267-290
- 菱田淳子 2002「第5章 遺構・遺物の検討 鎌と徳嶺み具」『梅田古墳群Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第240冊 兵庫県教育委員会 pp70-71
- 水野敏典 2023「博多遺跡群にみる古墳時代前期の鉄器生産の—様相—」『古墳文化基礎論集』pp303-312
- 村上恭通 2001「朝鮮半島における凹字形鉄器—おひきがね（字引金）との関連で—」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会 pp219-226
- 山下孝司 1992「「字引金」覚書」『山梨県考古学協会誌』5 山梨県考古学協会 pp135-139

出見優人（九州歴史資料館）

第2節 西新町遺跡における玉関連資料の特徴

1. はじめに

既往の西新町遺跡の調査では、複数の回数において玉製品、未製品、その他玉製作関連遺物が出土している。ガラス製の玉関連資料として、製品ではガラス小玉、製作資料では小玉鋳型、勾玉鋳型が出土する。石製については蛇紋岩・滑石等による製品・未製品、他に土製勾玉が1点出土している。ここではそれらを整理し、本遺跡の古墳時代前期の玉関連資料の意義についてまとめる。

2. ガラス小玉（第69図）

ガラス小玉は12次調査で3点、14次調査で282点出土しており、特に14次調査の全点は18号住居跡からの出土である。これらの小玉は、大きく青色系（青紺色196点・淡青色1点）と赤色系（赤褐色85点）の2系統に分類される。青色系については、直径約5～6mm、最大高約2～6mmにほぼ取まり、赤色系では直径約2～3mm、最大高1～3mmにほぼ取まるため、全体的に丸みのある青色系に対して薄く小さい赤色系という形状の特徴が当てはまる。

『西新町VI』における蛍光X線分析による材質の分類によって、赤色系はソーダ石灰ガラス製に限られる。一方で青色系については、ソーダ石灰ガラス製が最多で、不明瞭なものを含め162点、カリガラス製は明らかなものだけで24点、不明瞭なものを含めて34点からなり、鉛バリウムガラス製が1点のみ含まれる（比佐2005）。なお、谷澤亜里は、材質を8類型に分け、本遺跡出土例をIPB⑦（プロト高Alソーダ石灰ガラスに着色剤Cuコロイド）とIPB③（中Alカリガラスに着色剤Co（Mn++））と分類している（谷澤2020）。

小玉の製作技法に関しては、青色系小玉の気泡の流れが長軸方向に連続して認められることや、赤色系に見られる黒色の筋が長軸方向に確認できること、さらに外面の滑らかさや角がない形状等から、そのほとんどが鋳型を用いない「引き伸ばし技法」（大賀2002）により製作されたものと指摘されている（比佐2005）。「引き伸ばし技法」による日本での小玉生産の痕跡はなく（大賀2002）、これらの小玉は、中国・朝鮮半島で製作されて、本遺跡にもたらされたと考えられる。

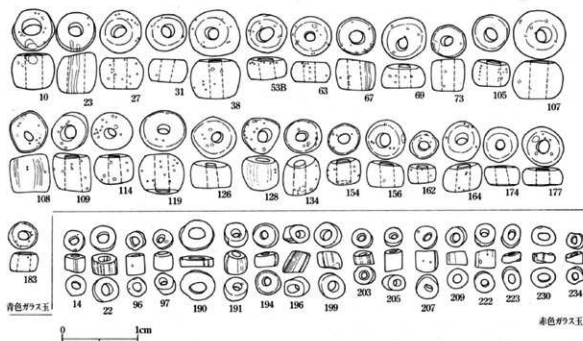
本遺跡に対応する墓域として認識される、藤崎遺跡3次の1・3号方形周溝墓から出土するガラス小玉は、この時期の単体でまとまったセットとしては稀な分類（IPB③、BSⅢ型）である。本遺跡14次調査出土例とも共通し、特に大型の前方後円墳での出土が現状で確認できない点が言及されている（谷澤2020）。

なお、282点中、出土位置を確認して取り上げることができた100点程度は、覆土中の50cm四方内に集中しており、連になっていたか、もしくは何らかの容器に入っていたかは定かではないが、少なくとも広い散布を意図したとは想定しにくい出土状況である。

3. ガラス小玉・勾玉鋳型（第70図1～6）

ガラス小玉の鋳型は、12・13次調査で計5点出土し、ガラス勾玉の鋳型は12次調査で完形の1点が出土する。いずれも土製である。

ガラス小玉の鋳型5点の内、3点（3・4・5）で2側縁とその角部が残り、1点（1）で一側縁が残ることから、平面形状は方形か、ほぼそれに近いものと考えられる。裏面・外縁部のヘラケ



第 69 図 14 次調査出土ガラス小玉実測図 (2 / 1)

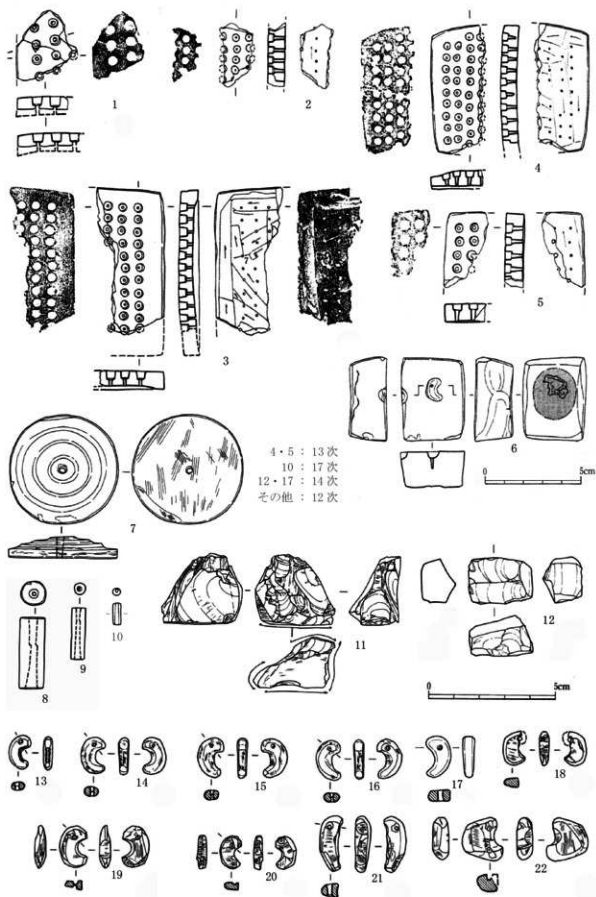
(番号は『西新町遺跡VI』155～160 頁 計測・分析表に対応)

ズリによる調整、型穴中心の芯持ち穴が裏面まで貫通している点、また中央部に向かって隆起する断面形などから、朝鮮半島の出土例（京畿道河内市漢沙里遺跡、全羅南道海南郡郡谷里貝塚等）との類似性があり、朝鮮半島の製作技術と関連すると考えられる。5 点の全てで、くぼみや芯持ち穴に黒変、赤変等が見られる。国内における古墳時代前期の本遺跡の類例は、東京都北区豊島馬場遺跡、茨城県四街道市川戸下遺跡、千葉県木更津市鶴ヶ丘 1 号墳に限られる。古墳時代中期後葉に近畿地方で奈良県天理市布留遺跡をはじめとして出土例が増加するが、平面形が前期と異なり側縁が弧状のものが多く、中期後葉の渡来要素として新たに導入されたものと捉えられている（田中 2007）。

ガラス勾玉鋳型表面にある勾玉形の窪みは全長 1.2cm、幅 0.5cm、深さ 0.35cm と小型品の生産用である。勾玉形直下の裏面の一部は薄く剥離し、熱変する。北部九州では春日市須玖五反田遺跡（吉田 1994）など弥生時代後期の福岡平野を中心に、勾玉鋳型が確認されている。それらの勾玉状の窪みは全長 2.5～4 cm が主体となるもので、古墳時代前期の資料に限られる中で、京都府向日市芝ヶ本遺跡出土例の窪みは小型であるものの、全長は 2 cm 以上ある。したがって、当該鋳型で生産できる勾玉の小ささは異質なものと言え、胎土から見ても半島からの搬入品と考えられる。

4. 碧玉（緑色凝灰岩）関連遺物（第 70 図 7～12）

碧玉（緑色凝灰岩）の関連遺物として、12 次調査の管玉 2 点（8・9）、紡錘車形石製品 1 点（7）、未成品 1 点（11）、14 次調査の未製品 1 点（12）、17 次調査の管玉 1 点（10）が出土している。その中で良質な深緑色であるのは、12 次調査出土の未製品（11）のみであるが、それにも淡緑色部分も見られ、岩質の差異か、もしくは風化のためかは判然としなない。一方 14 次調査出土の未製品は、全体的に淡緑色であり、研磨工程前の角柱状の整形段階であると考えられる。これらの未製品は、本遺跡で管玉生産が行われていたことを示す資料と考えられる。



第70図 鋳型及び石製玉類製品・未成品（1～6は1/2、その他2/3）

12次調査出土の管玉2点は、石材の色調や法量を参考にすると、硬質緑色凝灰岩を用いた北陸西部系（「領域F」）、17次調査出土管玉は北陸西部系（「領域Se」）（大賀 2006・2013、谷澤 2020）の可能性が高いと考えられる。ただし、少なくとも12次調査出土例は石針による穿孔とみられ、北陸西部系では鉄錐による穿孔が主体である点とは異なる様相と言える。碧玉（緑色凝灰岩）製管玉の九州での墳墓からの出土数は、古墳時代前期前半では北陸西部系「領域Se」が最も多く、前期後半の北陸西部系「領域Se」は、この時期激増する「半島系」に次いで多い（谷澤 2020）。西新町遺跡での出土例は、列島全体の流通傾向に概ね沿った様相を示すものと言える。また、北陸で多数の生産遺跡が確認されている石製品の1つである紡錘車形石製品が出土している点とも関連するとみられる。

なお、藤崎遺跡3次1号・4次10号方形周溝墓から1点ずつ出土する碧玉製管玉は、ともに山陰系（谷澤 2020）で、これらが集落内で多量に出土する山陰系土器から想定される広域流通ネットワークの中でもたらされたとするならば、遺跡内の出土例が北陸西部系に限られているとは言え、より多様な流通実態があったと想定できる。

5. 石製勾玉関連遺物（第70・71図13～37）

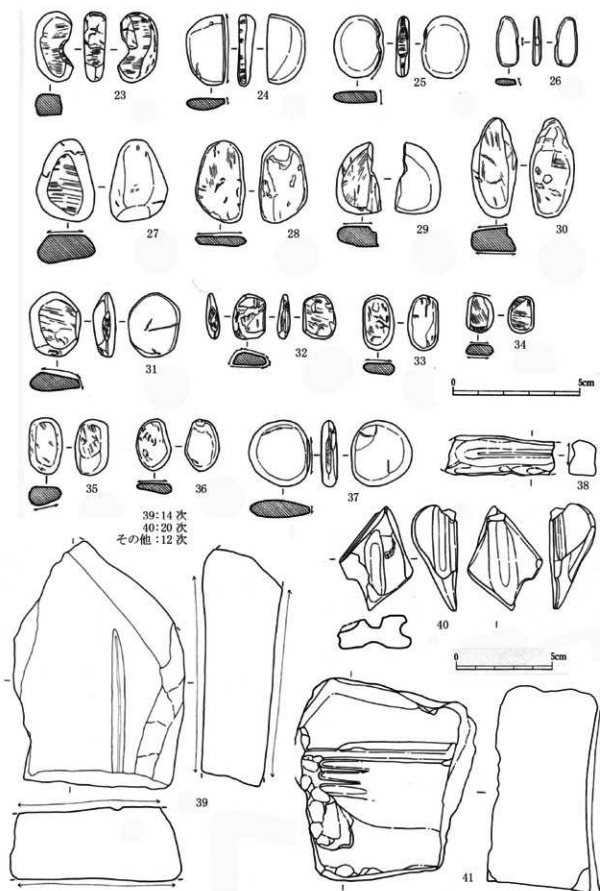
蛇紋岩製勾玉については、12次調査3号住居跡から1点（13）、39号住居跡から3点（14～16）の計4点の製品が出土している。また、13次調査86号住居跡の未製品（26）、14次調査の12号土坑出土例（17）はいずれも小形の淡緑色で蛇紋岩製の可能性がある。なお、弥生時代には「北部九州タイプ」（大賀 2009）とされる緑色透明で黒色の鉄鉱物を特徴的に含む蛇紋岩を素材とする勾玉があり、春日市駿河A遺跡でその生産が確認され、糸島市調地頭輪遺跡では未製品の可能性のあるものが出土しているが、本遺跡出土例には、この石材の関連性は認められない。

凝灰岩質泥岩製とした勾玉と関連して、12次調査96号住居跡から11点の未製品（21・23・24・27～34）と玉原石256点（35～37他）がまとまって出土し、他の遺構等からも9点の未製品と18点の原石が出土している。96号住居跡の出土品は、2点を除き床面P3中の一括埋納であり、当該住居跡は玉製作工房であった可能性が高い。『西新町II』では、これらの整形の手順や整形と穿孔の先後関係などが多様で、確立した製作技法の欠如に言及されている。また、多数の未製品や原石の中で、未製品は黄白色、黄緑色、緑色、緑白色で特に黄緑色が多い。一方で、白系は脆く、黒系は硬すぎて加工に適さないため、この2色はかなりの出土数がありながらも加工の痕跡がないとの指摘がある。この状況について、周辺で無作為に採取した原材料を工房で選択するという非効性と製作工程の斉一性の欠如から、短期的な製作行為という想定が報告の中でなされている。

6. その他の関連遺物（第71図38～41）

玉の製品・未製品以外では、複数の玉砥石（筋砥石）が出土しており、集落での玉作を証左するものである。12次調査で2点（38・41）、14次調査で1点（39）、20次調査で1点（40）、それ以外にも可能性のある資料があり、また4次調査でも出土例がある。

参考として、本遺跡からは一定数の鉄器が出土しており、その中には刀子7点（鏃形と思しき小形品含む）、鑿3点が出土している。玉の材質によって製作方法が異なり、用いる道具や使い方を画一的には捉えられないが、玉生産遺跡からは鑿、錐、針、刀子といった鉄器が出土する。また、



他にも玉生産遺跡の出土品として挙げられる叩石も、少なからず遺跡から出土している。これらの鉄器・石器は、古墳時代集落遺跡において、玉作のみに関係する特殊遺物ではないため、おしなべて過度の評価はできないが、玉作に用いられたものが含まれる可能性がある。

なお、土製勾玉は、12次調査116号住居跡から1点のみが出土する。土製勾玉は、九州、特に福岡県下は弥生・古墳時代を通じて、関東を除き全国的にも出土量が多く、出土遺構も住居跡が最も一般的である（瀧音 2019）。したがって、本遺跡に表れる在地的な一様相との見方ができる。

7. 西新町遺跡における玉生産と流通について

上記で整理したように、複数の要素からなる本遺跡出土の玉製品および生産関連の資料から、本遺跡における玉類の生産と流通に言及したい。

被熱・黒変のある勾玉・小玉鋳型、凝灰岩質泥岩の未製品・原石、碧玉（緑色凝灰岩）の未製品、玉砥石という多様な資料から、集落内での画一的ではない玉作の様相を知ることができる。ただ一方で、以下の点から、これら全ての玉作が、計画的な生産行為として集落で展開されたとは考えにくい。まず、古墳時代前期の鋳型により生産された勾玉、小玉の製品の出土例がほとんどないことから、生産・流通の規模が限定的であったと考えざるを得ない。特にガラス勾玉自体の副葬例が極めて限定的である（谷澤 2020）。また、当該期の本遺跡以外での同様の鋳型の出土は、勾玉で芝ヶ本遺跡例、小玉では関東の3例に限られている。福岡平野周辺では弥生時代後期に複数の勾玉鋳型が出土しており、地域的に既存の技術体系がありながら継承されず、廃絶していく状況である。小玉鋳型例は少なく、地域的な偏りが特徴的である。良質な舶載小玉が入手可能な北部九州においては、ガラスの鋳造技術は定着せず、地域によってガラス素材のリサイクル手段等として限定的な受容に止まったと考えられる。

12次調査96号住居跡一括出土の未製品・原石に見られる凝灰岩質泥岩製の勾玉生産は、原材料獲得の非効率性や技法の非確立性を示す。完成例が乏しく、他遺構からの関連遺物の出土例はわずかで、集落内での計画的かつ継続的な生産体制をうかがうことはできない。

碧玉（緑色凝灰岩）の未製品と製品（管玉、紡錘車形石製品）の出土は、装飾品・副葬品として定型的な要素であるものが遠隔から持ち込まれ、一部集落内で生産された可能性も示す。紡錘車形石製品は、同様に14次調査で出土例のある柳葉形銅鏃とともに、慶尚南道金海市大成洞古墳群の出土例があり、西新町の集落を介して朝鮮半島へと搬出された可能性がある。

以上のように玉作の痕跡が窺えるものとしては、碧玉（緑色凝灰岩）関連では国内外他地域との関連性を示すが、他の玉作による周辺・他地域への影響は限定的と言える。複数の玉作の痕跡を残す本遺跡ではあるが、集落内の玉作が広域交易の中で果たした役割は、主体的、複合的ではなく限られた要素であろう。なお、近郊で弥生時代終末から古墳時代前期前半の玉作工房がまとまって確認された潤地頭給遺跡では、碧玉のみならず、水晶、瑪瑙、鉄石英、蛇紋岩など多様な原材が出土し、特に碧玉、水晶は製作工程を示す資料の出土量も多く、様相は大きく異なっている。

また、14次調査出土のガラス小玉が、上記のように古墳時代前期の各地の主要古墳の副葬例としてほとんど確認できない類型であるという指摘（谷澤 2020）については、西新町の集落を介しての流通が、畿内のみならず各地の有力者層の交易網に果たした役割には疑問の余地がある。一方で、大型であるIPB③が含まれる稀少品を輸入窓口として優先入手した、または小型の小玉の希

求が一般的で、それに外れたものを祭祀で使用または廃棄した等々の多様な解釈の余地がある。

滑石・蛇紋岩製勾玉と関連し、北部九州で古墳時代前期前半では朝倉市外之隈1号墳から、前期後半では福岡市老司古墳、福岡市鋤崎古墳から滑石製の勾玉が出土しており、本遺跡で在地有力層の交換財獲得流通も考えるが、釜山広域市福泉洞古墳群38号墳で滑石製勾玉の出土例があり(朴2016)、朝鮮半島へ搬出のための交換財である可能性は十分にある。

以上のように、本遺跡出土の玉類関連の遺物は、朝鮮半島との搬出入の関係が濃厚な特殊資料が非常に多い。ただ、確実に搬入品とみなされる鋳型やガラス小玉の多くは、広域的な出土例から見た列島内の流通実態を示してはいない。多様なモノ・技術が半島からもたらされる中で、取捨選択を経て、流通の管理主体から希求されたものほど遺跡内に残存せず、列島内の流通網に載っていったと想定される。一方で、遺跡内で確認された列島産の玉類(未成品含む)について、碧玉(緑色凝灰岩)管玉、蛇紋岩・滑石製勾玉は、多寡の差はありつつ半島での副葬例があり、玉類以外の副葬品も遺跡内で出土した点を併せて、搬出用の交換財が集められたと言える。本遺跡を拠点とした「後期博多湾貿易」(久住2007)において、専門特化した拠点集落間での分業・交換による「博多湾岸経済」ネットワークの中で、先述の潤地頭給遺跡が搬出用玉作の主体を担ったとされる。それに対し、未成品の数が限られる本遺跡での玉作は、補足的・一時的な位置付けと考えられ、時に凝灰岩質泥岩製に見られる不確かな技法での生産によって交換財を確保することもあったと想定される。朝鮮半島への最終搬出口である本遺跡での生産活動について、交易の場での商品量最終調整としての側面が、出土した玉類関連遺物に表れていると言える。

【参考文献】

- 大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群 清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 福井県清水町教育委員会』
- 大賀克彦 2006 「碧玉」製玉類の生産と流通『季刊考古学』第94号 雄山閣
- 大賀克彦 2009 「弥生時代後期の玉作」『山展還暦記念論集刊行会編『考古学と地域文化——山展還暦記念論集——』山展還暦記念論集刊行会』
- 大賀克彦 2013 「玉類」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『副葬品の形式と編年』古墳時代の考古学4 同成社
- 久住猛雄 2007 「博多湾貿易」の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交渉機構—『考古学研究』第53巻4号 考古学研究会
- 瀧音大 2019 「原始・古代日本における勾玉の研究」 雄山閣
- 田中清美 2007 「たこ焼き型鋳型」によるガラス小玉の生産『大阪歴史博物館研究紀要』6巻 発行機関
- 谷澤亜里 2020 「玉からみた古墳時代の開始と社会変革」 同成社
- 朴天秀 2016 「古代韓半島における硬玉製勾玉の移入とその歴史的背景」『玉から古代日韓交流を探る』古代歴史文化協議会
- 比佐陽一郎 2005 「西新町遺跡14次調査出土ガラス小玉の調査」『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集 福岡県教育委員会
- 吉田佳広編 1994 「須玖五反田遺跡」春日市文化財調査報告書第22集 春日市教育委員会

坂元雄紀(九州歴史資料館)

第3節 九州型石鍾からみた西新町遺跡

1. はじめに

九州型石鍾は、弥生～古墳時代前期、玄界灘沿岸の海人が用いた特徴的な石鍾で、ごく限られた地域に分布することから、広域交流の直接的な担い手である海人の動きを具体的に把握できる資料である。本章第5章の日本海沿岸の九州型石鍾についての検討の結果、主に弥生時代中期後半～後期前半に博多湾岸から日本海沿岸に点的に分布し、その後一部の限定された地域で定着、在地化・変容するが、同様の状況は規模は小さいながら瀬戸内地域でも認められる（大庭 2025）。これは、弥生時代中期後半～後期前半に朝鮮半島から北部九州、日本列島東西を繋ぐ長距離交易ルートが整備され、その交易・運搬の直接の担い手として海人の活動範囲が広がったと理解される。

続く後期後半以降、九州型石鍾をはじめ、飯蛸壺及び製塩土器（本章第4節）、管状土鍾C・棒状土鍾の動きは、博多湾に集中する日本列島各地域に由来する土器の動きとも重なっており、定型化した前方後円墳成立の基盤となった、広域交流の基層に海人集団の関与を想定することができる。

ここでは、西新町遺跡（以下「本遺跡」）が盛行する古墳時代初頭前後における、九州型石鍾の様相を簡単ながらもまとめることで、一大交流拠点である本遺跡の在り方の一端を明らかにしたい。

なお、以下に示した考え方は、以前に提示している（大庭 2023）。

2. 西新町遺跡における九州型石鍾の特徴と海人の活動範囲

森本幹彦氏は、博多湾における九州型石鍾を検討する中で、湾の東西で九州型石鍾を含む在来系漁具の構成に差がみられることから、古墳時代前期前半に飯蛸壺・管状土鍾C・製塩土器など畿内・瀬戸内系諸の外来系漁具と在来系漁具を融合・再編にあたっての、本遺跡の重要性を指摘している（森本 2015）。筆者は湾東西の漁具の様相が異なることについて、海域環境や集団の規模・在り方等の各々の条件に応じて、志向性の異なる生産経済システム、小地域圏を構築したことがあらわれていると理解している。その後の本遺跡の盛行にあたっては、政治勢力が関与したことは想像できるものの、漁労活動が主要な生業として成立するためには、イカやタイのような利用価値の高い水産物を選択、資源調達の方法を多角化し、加工技術の発達による海産物の商品化を図り、発展させることが必要であることを指摘した（大庭 2023、p121）。

本遺跡出土の九州型石鍾の特徴をみると、出土総数では後期後半前後の今宿五郎江遺跡や元岡・桑原遺跡群の方が多い。ただし、両遺跡はⅠ類石鍾が目立つが、本遺跡はⅡ～Ⅴ類石鍾、Ⅱ・Ⅲ類石鍾の小型石鍾、棒状のⅤ類石鍾、打欠石鍾まで大小かつ多種多様である。加えて特有の石鍾（西新町型石鍾）と自然石石鍾を組み合わせたまき網漁（大庭 2023、p117）など、半球状有孔滑石製品（Ⅵ類）以外ほぼ揃っているが、一度に大量に捕獲できる漁網用の鍾は少なく、多種多様な釣漁用の鍾で主に構成される。ちなみに、筆者は以前、Ⅰ類石鍾についてはイカ釣具の可能性を示したが（大庭 2023、p76）、本遺跡ではⅠ類石鍾の出土割合が低く、博多遺跡群出土の長さ 15.7 cm の大型の鉄製釣針の存在から、スルメ加工に加え、大型魚を対象とした釣漁が主な漁法と考えており、捕獲したイカは釣針に付け、釣りの餌として使用した可能性もありうると現在考えている。

また刺網漁の大型石鍾である半球状有孔滑石製品（Ⅵ類）が湾東西の地域性を越えて湾全域で展開することについて、弥生時代中期後半以降、定型化した刺網による網漁業がシステム化され、湾

全域で展開したと考えたが(大庭 2023, p106)、古墳時代前期前半の本遺跡では認められない。一方、西新町型石鍾という在来系石鍾を改良した新たな石鍾の創出から、漁労活動の再編にあたり、備讃瀬戸や大阪湾沿岸などの外来系の漁具・漁法の中でも飯蛸壺延縄漁と土器製塩、管状土鍾Cを用いた曳網漁を選択的に受容(棒状土鍾を用いた刺網漁は未受容)と同時に、在地系漁具も取捨選択し、一部を発達させより交換価値の高い特定の魚類を対象にした漁法等を創出することで、特産物的な商品化を図ったと考えた(大庭 2023, p120)。

これは、本遺跡の海人が在来の漁具・漁法の改良及び新たに導入した漁具・漁法による漁獲方法と対象範囲の拡大を図ることで、季節的な振幅を低く抑え、捕獲の効率化と捕獲量の拡大、ある程度の自然の摂理を乗り越えた資源利用システムを構築した可能性がある。さらに、弥生時代中期後半～後期前半、Ⅱ類石鍾を中心とする九州型石鍾が日本海沿岸や西部瀬戸内、西南四国まで広がるが、これらの地域では後期後半以降、玄界灘の九州型石鍾の継続的な影響はほぼみられない。また九州東部では、石材・製作技法から博多湾西部(今宿)産の石鍾が後期後半～古墳時代前期前半の行橋市延永ヤヨミ園遺跡で2点確認されるが、ごく少数である。

古墳時代初頭前後、日本列島各地域で地域間交流拠点と考えられる大規模集落遺跡が形成され、ヒト・モノの移動が活発化するが、博多湾から東への漁具・漁法の展開の痕跡はほぼない。延永ヤヨミ園遺跡では古墳時代前期初頭前後、本遺跡を含む博多湾西部の海人が直接往来した可能性が高いものの、石鍾の使用痕は博多湾とは異なり、使い方までは伝わっていないと判断される(大庭 2025)。よって、体系的な漁法の技術伝播はなく、交易のための船の装備品ないしは一時的な滞在による生じた程度の交流内容であったと推測している。これは日本列島各地域に由来する土器が本遺跡に集中する事象と調和的で、古墳時代初頭前後、本遺跡を中心とする博多湾岸に集積した大陸からの最先端文物・技術・情報を求めて、日本列島各地域の集団が博多湾に一方的に赴いたことを示し、日本列島各地域間の交流については基本的に博多湾の海人が直接運搬の担い手にはならなかった可能性を示す。

本遺跡の存在価値はやはり対外交易にあったことは間違いなく、本遺跡の海人の活動内容を示す考古資料として、朝鮮半島南部での九州型石鍾とみられる事例の存在は注目される。この事例については、下條信行氏(下條 1989)や武末純一氏(武末 2013, p21)によって示されており、特にⅠ類石鍾が目立つ。Ⅰ類石鍾は船の装備品の可能性があるのであれば、博多湾の海人が操船する船が朝鮮半島南部まで往来した可能性を示す(船を交換財として朝鮮半島に持っていった可能性有)。ただし、このⅠ類石鍾はいずれも全長が短く、後期終末以降の全長が長くなったものは認められない。壱岐でも基本的に全長が長いものはごく少数であり、後期前半までの古い様相を示す。今後、朝鮮半島事例の石材や使用痕の観察、時期の検討を行うことで、当時の対外交易の痕跡、具体相を見いだすことが必要である。

3. 海産物の商品化

本遺跡において、多種多様な漁具から漁労活動の多角化という面がみえるが、集落の維持や交易を前提とした生産活動が漁労活動にも要求され、その結果として特定の水産物の漁獲や加工が発達したとも考えることもできる。杉山浩平氏のモデル(杉山 2019)に基づき、本遺跡の海人は、イカやタイをはじめとする特定水産物を加工することで特産物化した商品と、国内外交易で獲得した

国内外の特産物を、いわゆる行商的な在り方で持参し、主に農業生産に従事した内陸部と往来するという集落間ネットワークの一部も担っており、本遺跡の集団は様々な物資の流通の結節点として、地域社会を維持するためのシステムのひとつとなった可能性がある（大庭 2023、p155）。なお、冬場など波が荒い時に頻繁に出漁したとは考えにくく、漁労活動自体が集落経営の多角化を進めるため、冬場の生業のセーフティネットとして、集落間流通を担ったことも要因の一つと考えている。

ただし、タイなどの交換価値の高い白身魚の塩蔵加工（製塩土器が少ないため、貴重な結晶塩ではなく、高濃度食塩水での漬け込みも含む）が想定される一方、博多湾の特産のブリやサワラなどの青魚は脂が多いため、劣化が早く、捕獲後早急に加工する必要がある、網漁等で短時間に一定量の個体が漁獲されても、素早く安定した加工処理するのは難しい作業となる。また干す作業のため一定期間の晴れ間が必要で、季節的に限定され、干物加工は一部はあるにせよ、基本的に捕獲した青魚などの生鮮水産物の多くは自家消費ないしはごく近隣の集落に流通させた程度と考えている。

4. 小 結

先行研究では、主に特定型式の石鍾の分布や変遷について議論されてきたが、用途や漁法に関する議論は未だ低調で、イカ釣具としてのⅠ類石鍾、まき網漁のⅡB類石鍾という推定も、その理由が主に民俗資料によるものである。今後どのように検証を行い、補強するかにかかっている。

しかし、弥生時代中期後半～古墳時代前期前半の九州型石鍾及び飯蛸蛸等の漁具は、その前後の時期に比べ異様ともいえる規模と量、種類を誇り、古墳時代中期以降の漁具の質量と比べると格段の差がある。これは当該期に水産物の高い需要があり、それに応じて石鍾の形態も多様化したことを示しており、それが対外交易の拠点である博多湾を中心に集中することは、地域内消費だけではなく、対外交易の交換財として、固形塩を含む水産物加工品も想定しなければ説明が難しいと考えている。また、本遺跡における飯蛸蛸延縄漁の異常な盛行とその後の急激な衰退を考えると、多く出土する畿内系土器などから、移動してきた集団の嗜好に合わせた視点も考えるべきであろう。

商品内容や嗜好などは考古資料ではわからず、あくまでも推測の域を出ないが、多種多様な漁具が存在する本遺跡出土品のさらなる検討によって、生産量や専業度合いの問題、往来規模や滞在が移住などの問題を解決する糸口となると考えている。今後もさらなる検討を進めていきたい。

【参考文献】

- 大庭孝夫 2023『玄界灘沿岸地域における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館
大庭孝夫 2025『漁具からみた北部九州と四国の広域交流に関する一試論～いわゆる「九州型石鍾」を中心に～』九州歴史資料館研究論集 50 九州歴史資料館
下條信行 1989『弥生時代の玄界灘海人の動向』『横山浩一先生退官記念論集Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会下
杉山浩平 2019『「海」からみる東日本の弥生文化』『再考「弥生時代」農耕・海・集落』雄山閣
武末純一 2013『弥生時代の権一 青谷上寺地遺跡例を中心に』『福岡大学考古学論集2』福岡大学考古学研究室
森本幹彦 2015『海人集団の東西—九州型石鍾の再検討—』『弥生研究の交差点—池田保信さん還暦記念—』みずほ別冊2 大和弥生文化の会
山中英彦 2007『「博多湾貿易」を支えた古代海人』『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会

大庭孝夫（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

第4節 漁具からみた西新町遺跡の地域間交流の様相 —製塩土器と飯蛸壺を中心に—

1. はじめに

西新町遺跡（以下、「本遺跡」と略）では、古墳時代前期前半の朝鮮半島系諸の竪穴住居カマドや土器、畿内・山陰・吉備系土器など、日本列島内外各地域に由来する多数の遺構・遺物が認められるが、その中には多種多様な漁具が含まれる。この漁具の内容は、在地系の九州型石鍾を用いた網漁具及び釣漁具等と、大阪湾岸系諸の飯蛸壺延縄漁、瀬戸内系諸の管状土鍾Cを用いた網漁や土器製塩等、在地系と他地域に由来する漁具・漁法が併存する。これらは、漁労活動とそれを担った集団の在り方だけでなく、地域間関係を考察する上で重要な資料である。

今回出土品検討会において、柴田昌児氏から本遺跡と芸予諸島の脚台式製塩土器の製作技法の共通性、田中元浩氏から畿内系土器群と飯蛸壺の動態の関連についての指摘があった。この両者については、既に平尾和久氏に取り上げ、変遷や遠隔地の地域間関係等について整理しているが（平尾2009他）、この動態は庄内系・布留系土器などの技術体系が広域的に拡散する状況と整合し、生産活動という面で土器と同じくその動態を具体的に示す。よって、両者を再整理し、背景まで把握することで、本遺跡の特質を詳細に読み取ることが可能と思われる。

そのため、今回、本遺跡を核とする博多湾岸出土製塩土器と飯蛸壺について、形態、製作技法、使用痕跡を中心とする検討を基礎に、地域動向の把握、生産・流通領域・仕組みの在り方などを議論の中心に据えて、本遺跡の特質について検討してみたい。

2. 博多湾沿岸地域の土器製塩

(1) 検討にあたって

博多湾岸で出土する当該期の製塩土器のほとんどが備讃瀬戸系の脚台式製塩土器の脚台部で、それにごく少数、大阪湾系の鉢状の体部やハの字状に開く脚台部を持つ製塩土器がある。その出土分布は海岸部の特定の遺跡から発見され、その量も備讃瀬戸や大阪湾と比較するとかなり少ない。

一大交易拠点である本遺跡の在り方を踏まえると、集約的な塩生産による固形塩の広域流通や塩生産の背景として塩が日本列島内外の各地域との交易の交換財になっていた可能性、さらに交換財としての塩の価値はどうだったのかなどで論点が広がる。

そのため、ここでは本遺跡での製塩土器の存在理由の追究を第一に、博多湾岸を含む北部九州と、芸予諸島及び大阪湾岸の製塩土器の資料観察を通じて、特に製作技法と形態、使用痕跡の比較、それを踏まえた生産、流通、消費、交換、価値の在り方について検討する。

(2) 既往の研究

博多湾岸の土器製塩に係る既往の研究については、頁数の関係からここで詳細に取り上げないが、主なものでも、山崎純男氏（山崎1994・2007）、平尾和久氏（平尾2003・2007・2009・2014）、山中英彦氏（山中2007）、藤本貴仁氏（藤本2007・2019）、積山洋氏（積山2012）らによって精力的に行われている。

本格的な専用土器による土器製塩は、弥生時代中期後半に備讃瀬戸で開発され、後期初頭前後に大阪湾の和泉地域、古墳時代前期前半前後にはその他の瀬戸内沿岸地域や北部九州（玄界灘、響灘、

初頭では北部九州最大の製塩遺跡である（米倉編 2005）。

製塩土器は今宿遺跡5次と同様、備讃瀬戸系の脚台式が多数を占め、大阪湾系（1）は少数で、海の中道遺跡と同様の長脚化した脚部（6）もある。脚台部をしっかりと製作しているのが目立つことから、相対的に脚台部分がやや大型になる傾向があり（第79図）、これは芸予諸島の製塩土器変遷からみると（柴田 1994, p180）、今宿遺跡5次より時期的に古相を示しており、伴伴土器の大まかな傾向と一致する。

脚台式製塩土器のうち、2～5は体部底面に後栓状の粘土を充填する円盤充填技法で成形し（以下「円盤充填」と略）、体部と脚台部を連続で一体成形（以下「一体成形」と略）したもので、脚台部端部をナデで面取りするものが目立ち、今宿遺跡5次例とは違いが認められる。なお、脚台部端部のナデによる面取りは、芸予諸島の多々羅製塩遺跡でみられる。胎土は複数のものが用いられており、脚台部端部の特徴から、遺跡内で製塩土器を生産したと考えられる。また脚台部内面まで被熱が目立つ状況は、他の博多湾岸の製塩土器にはない様相で、今宿遺跡5次例のように煎熬時に脚台部全体を灰で埋めた状態ではなく、少し浮いた状態で煎熬作業を行ったためと判断される。これも多々羅製塩遺跡と共通し（第84図）、先の脚台部端部の調整、脚台端部径も含めて芸予諸島の影響が強く認められる。ただし、資料調査した範囲では、多々羅製塩遺跡の製塩土器とは胎土が明確に異なる。

体部が鉢状のものは（1）、一体成形、円盤充填と思われるが、やや脚部が厚く、体部内外面はヨコナデを施す。今宿遺跡5次（14・15）と比べ、鉢部が深く、タタキの痕跡がなく、さらに被熱痕がない。これは、形態的には大阪府脇浜遺跡例に類似し（第77図5）、大阪湾岸のものと近い特徴を有する。

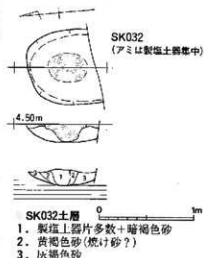
さらに、中実で長脚の脚部は（6）は、脚裾部を薄く延ばしており、その他の製塩土器とは型式的な飛躍がある。6は博多湾岸では時期的に古い様相を示す製塩土器から構成される海の中道遺跡の27と類似し、博多湾東西の製塩土器の技術交流の存在が窺える。

②今宿遺跡5次（第78図7～15）

後述する飯蛸壺の他、九州型石鍾、棒状土鍾などの漁具と製塩土器が伴伴する。また遺跡南側には糸島平野と早良平野を画する長垂山塊が広がり、燃料となる薪や炭の確保という点で、土器製塩にあたっての立地条件の良さが指摘できる。

製塩炉とされる5次SK032は、約0.8m程度の楕円形を呈し、内部には焼土が広がり（第74図）、製塩土器が集中して出土した（久住 2000）。SK032は壁面に粘土を貼っておらず、素掘りの土坑であることから、短期間で炉の造り替えが必要とみられる。また遺構自体にも顕著な被熱がなく、製塩土器の脚台部も外面のみの被熱で、かつ被熱も少ないものが目立つことから、土坑内には灰を多く充填し、操業していた可能性があり、炉内の温度が低かったことが予測される。これは、炉が比較的簡易な構造であったことと調和的である。

出土した製塩土器は、備讃瀬戸系の脚台式製塩土器（7～11）



第74図 今宿遺跡5次SK032
(1/40)（久住 2000）

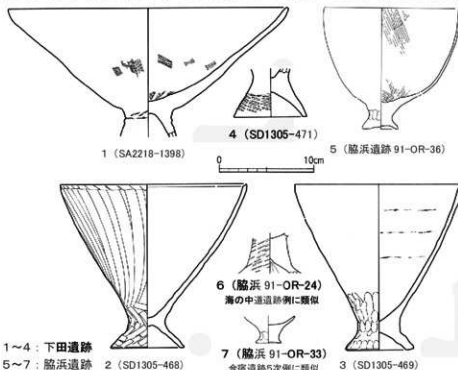


第75図 今宿遺跡5次脚台式脚
台部内面に施された丁
寧なナデ（報41-25）



第76図 今宿遺跡5次の一体成形
と円盤充填（報42-47）

体部が鉢状の製塩土器は、口縁部が大きく内湾しつつ広がり、外面はタタキ後ナデ調整を施す（14）。成形は脚台式と同様、一体成形、円盤充填であるが、体部の深さが浅く、脚のくびれ部の径が大きい。これは大阪府下田遺跡出土品（第77図1）と類似するが、下田遺跡例とは脚部の形態が異なり、今宿遺跡5次の方が鉢部の深さも総じて浅く、内外面の調整など、大阪湾岸の製塩土



第77図 大阪湾系製塩土器（1/4）

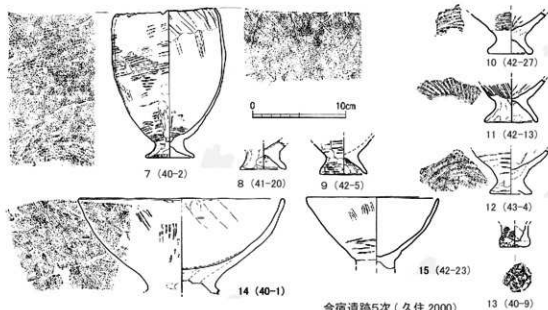
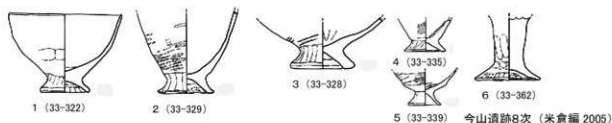
と大阪湾系の体部が鉢状を呈するもの（12・14・15）の2者に分かれるが、出土割合では前者が圧倒的に多い。

脚台式製塩土器は、コップ形の体部で底部は強く開き、体部外面は平行タタキ調整で薄く仕上げ、体部内面は基本的にナデ調整である。脚台部は脚裾が開き、脚台部外面は粗いナデで、指頭圧痕が明瞭に残るものが多い。今宿遺跡5次のものは脚裾部をつまみ出すものが主体であるが、今山遺跡8次の脚裾部はナデで面取るものが主体で（2・3）、かつナデ前のタタキの有無等から、両遺跡は近接するものの、製塩土器は遺跡ごとに製作している証拠となる。体部は深さがあるため、体部内面底部は指圧が弱くなりナデが粗い一方、脚台部内面に丁寧なナデを施すことで漏水等を防いでいるとみられる（第75図）。

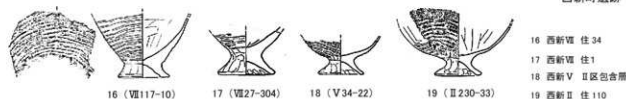
成形は一体成形・円盤充填が大半を占めるが（第76図）、11のように後で脚台部を貼り付けたもの（「以下「分割成形」と略」）も少数認められる。円盤充填は上から粘土を充填するものがほとんどである。体部内面底部は円盤充填した際、多めに付加した粘土をそのままですべて器表を仕上げているものが多い。

器そのものではない。このように、体部が鉢状の製塩土器は、脚台式と比べ、変容度が高く、脚台式とは異なる波及・受容形態の違いを示していることが想定される。

また今山遺跡8次（1）は全く被熱していないのに対し、今宿遺跡5次の鉢状の体部は脚台式より顕著に被熱する。これは、鉢状のものは水分が蒸発しやすい形状、形状が運搬に適さないこと、脚



西新町遺跡



※は報告書図面を反転

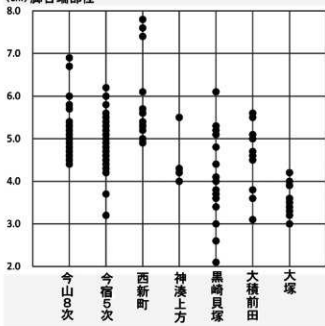


第 78 図 博多湾沿岸の遺跡出土製塩土器 (1 / 4)

台式と比べ出土量がかなり少ないことから、別系統の技術でそれぞれ塩を生産したというよりも、使用痕と形態からにがり分を除去するための焼塩工程で主に使用した可能性を考えている。

また 12 は脚台部端部径 4.6 cm と小型、かつ中実の厚みのある脚台部で、一体成形、円盤充填で製作している。脚部までタタキを施すことは下田遺跡例 (第 77 図 4)、形態は脇浜遺跡例 (第 77

(cm)脚台端部径



第 79 図 玄界灘の製塩土器脚台端部径比較

本例は古墳時代前期前半の今山遺跡 8 次や今宿遺跡 5 次とは時期的に連続しておらず、現状では地域内でそれに繋がるものではないため、中期前半に黒崎貝塚等の響灘沿岸地域から製塩技術が伝播したのか、製塩土器のみ搬入されたのか、現時点では評価が難しい。

④西新町遺跡 (第 78 図 16 ~ 19)

本遺跡における製塩土器は、遺跡東側を中心に出土する。出土量は少なく、平尾和久氏は今山・今宿遺跡などで生産した塩を土器ごと搬入し、消費した消費遺跡に位置づけている (平尾 2004)。

製塩土器は脚台式のみで、成形は一体成形、円盤充填のものが主体であるが、17 次 34 号竪穴住居跡出土製塩土器 (16) は、分割成形と想定される。今宿遺跡 5 次と同様、脚台部内面に丁寧なナデを施すことで漏水等を防いでいるとみられる。

12 次 110 号竪穴住居跡出土製塩土器 (19) は、体部が強く開き、体部は鉢状になるが、外面のタタキや器壁の薄さ、脚台部の製作技法と形態から、芸予諸島系である。なお、今宿・今山遺跡で示した大阪湾系の体部が鉢状の製塩土器が「焼塩」工程専用土器であったとすると、本遺跡でも固形塩を生産するため、19 のような形状の製塩土器で「焼塩」工程を行っていた可能性がある。

加えて、本遺跡と今山・今宿遺跡出土製塩土器は、管見の限りでは同じ胎土のものはなく、脚台部端部の調整も異なり、両遺跡から搬入されたものではなく、遺跡周辺で生産された可能性がある。

さらに、本遺跡では製塩関連遺構は検出されていないが、製塩土器の出土量から製塩活動は小規模であるものの、遺跡内で製塩活動を行っていた蓋然性が高い。だが、胎土や被熱の少ない状況から、製塩技術がさほど高いとは思われない。

なお、下田遺跡では被熱や白色付着物の痕跡を積極的に取り上げ、一部の甕を製塩土器として認定するが (河田 1996)、本遺跡においても類似した甕があるため (第 80 図)、鹹水の製作や煎熬作業等にあたり、日常用の甕も補助的に用いた可能性がある。下田遺跡例のように使用痕跡から製塩土器として認定し、議論を進める必要があり、本遺跡で甕形の製塩土器として指摘されるものは 1

図 7) に類似し、今山遺跡 8 次や海の中道遺跡の長脚化した脚部への型式変化の過程を示す資料と捉えられる。

③大塚遺跡 (第 78 図 28 ~ 30)

大塚遺跡は、弥生時代中期後半～後期の環濠集落である今宿五郎江遺跡の西に立地する。古墳時代中期前半の SC008、SC011・013・014、SK100 から脚台式製塩土器が出土し、竪穴住居の造り付けカマドや格子目タタキの朝鮮半島系軟質土器の甕・甔・鉢が共伴することから、渡来系集団の存在が予測される (森本編 2011)。実見はできていないため、胎土や被熱状況は確認できていないが、成形は一体成形、円盤充填両方ありそうである。脚台端部径は 3.0 ~ 4.2 cm と小さく、古墳時代中期前半という共伴土器の年代と調和的である。

点で評価が難しい。本稿ではあくまでも補助用に用いられた壺とし、今回検討の対象とはしていない¹⁾。

⑤海の中道遺跡(第78図20～27)

海の中道遺跡は、博多湾と玄界灘とを隔てる大規模砂州の中央部に位置する(山崎1982)。遺跡は8～9世紀を最盛期とし、海水を得やすい砂丘上が土器製塩の煎熬作業場所と想定される。

古墳時代前期とみられる製塩土器の体部と脚部は付加法で(第81図)、外面にタタキを施す中実・長脚の脚部(21・22)は大阪湾系の系譜を引く。また型式的には外面にタタキを有し、脚部がハの字状に開くものから(21)、次第に脚部の中実部分が厚く、長脚化し(22)、外面はナデになり(23)一脚柱部が直線的で、裾部が広がらなくなり(24)、円柱状の脚柱部(25・26)から、中実の長脚で、脚裾部が開く(27)という長脚化過程を読み取ることができる(山崎2007、p93・藤本2007、p320)。なお、大阪湾系と同様、脚台部端部径の縮小化の傾向は調和的であるが、長脚化という変化の方向性は異なる。椀状の体部(20)は、27の脚部とともに、古墳時代中期以降に熊本県天草地方で盛行する天草式製塩土器の祖型となると考えられるものであるが、これも大阪湾岸の系譜を引く可能性があるものの、博多湾沿岸地域で大阪湾系の動向から考えると、型式的に飛躍がある。

なお、先述したように、27は今山遺跡8次の6と同様の形態で、出土量の比較から、今山遺跡例は海の中道遺跡の製塩土器の影響を受けた可能性がある。

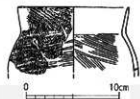
このように、海の中道遺跡出土の製塩土器は、弥生時代後期後半～庄内併行期の大阪湾岸の製塩土器の系譜を引き、布留系土器の出現とほぼ同時と想定される脚台式製塩土器の導入より一段階古い様相であること、長脚化という過程において東海西部の製塩土器の型式変化(積山2012)と類似することなど、広域的に展開する各地域の土器製塩技術の一部を取り込んだ特徴を有する。だが、共伴土器や古墳時代初頭の製塩遺構の実態が不明であることから、評価が難しい。

⑥神湊上方遺跡(第83図1・2)

神湊上方遺跡は、玄界灘に面した砂丘上に位置する(宗像市史1997)。表採資料であるため、存続時期や実態は不明である。

製塩土器はいずれも脚台式で、一体成形、円盤充填で成形するが、つくりは悪い。円盤充填は下方から施し、脚台端部は粘土充填後にきれいに成形しており、一体成形と円盤充填がそのまま連続して施されている。また脚台端部径は平均4.4cmと小さく(第79図)、厚く中実であることは、今宿遺跡5次(第78図12)の厚底の脚台部と類似する。また体部外面にタタキ痕跡はなく、器壁は厚い。脚台部外面は顕著に焼けたものが多いが、内面は被熱していない。1のように厚底でタタキがないことから、備讃瀬戸よりも大阪湾の影響の方が強いと考えられる。

なお、未報告の表採資料では、脚台部外面に強い縦ナデを施し成形したものがあるが、これは愛媛県松木広田遺跡出土製塩土器に類例がある。



第80図 西新町遺跡

12次105号竪穴住居
跡出土壺(1/4)



第81図 海の中道遺跡脚部との
接合(付加法報53-3)



第 82 図 大槓前田遺跡脚台部接合痕（円盤充填上下から 報 28-74）

⑦黒崎貝塚（第 83 図 3～9）

黒崎貝塚は、洞海湾に流下する撥川に接する丘陵先端部に立地する。5 次調査では、多数の薄手の椀状タイプの小型丸底製塩土器と、少数の脚台式製塩土器が出土した（宇野 2002）。

脚台式製塩土器は一体成形・円盤充填もあるが、分割成形のものが目立つ。また脚台端部径は平均 4.2 cm と径が小さいものが多く（第 79 図）、かつ製塩土器が出土した包含層で布留系土器最新相の土器があることから、4 世紀末～5 世紀前半に属する

可能性がある。なお、脚台部内外面とも被熱するものが目立つことは、多々羅製塩遺跡と共通する。

小型丸底製塩土器は、備讃瀬戸や大阪湾と比べ口径が大きく、口縁部が内湾する器形は天草式製塩土器の椀状の体部と類似するが、長く延びた脚柱部の出土がなく、体部内面の二枚貝条痕による調整を含めて大阪湾 H 1 類（積山 2012）の影響を受けた可能性がある。

このように、包含層ではあるが脚台式製塩土器と小型丸底製塩土器の共伴は、古墳時代中期前後の大阪湾系の製塩土器の変遷と連動することから、連続した技術移入により土器製塩が一定期間行われていたことを示している。ただし、海の生産活動の痕跡は製塩土器のみで、古墳時代前期、多様な生産活動の一環として土器製塩が行われた博多湾岸とは様相が大きく異なる。

⑧大槓前田遺跡（第 83 図 10～17）

大槓前田遺跡は、関門海峡に突き出した企鵝半島の北東部、三方を丘陵に囲まれ、東は周防灘に面した小規模な沖積平野内の、山中川と奥畑川に挟まれた沖積微高地に位置する（山手 1997）。海、川及び燃料の確保が可能な丘陵に近いという立地は、良質な塩が取れる条件に整合する。

古墳時代前期後半の 3 区 3 号土壌は、焼土と炭が混じる土の下で検出した大型土坑で、規模から多々羅製塩遺跡のような製塩土器廃棄遺構の可能性があるが、製塩炉自体は検出されていない。

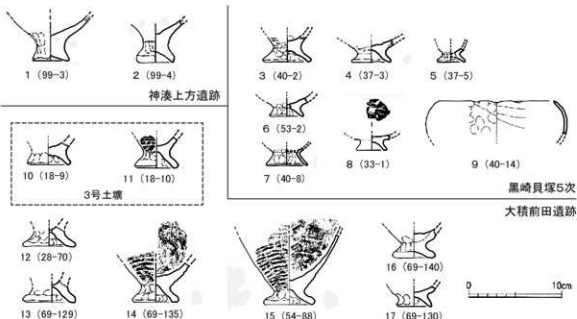
出土した製塩土器はすべて体部外面にタタキを有する脚台式製塩土器である。脚台部外面は指押さえ痕が顕著でなく、最終的に比較的丁寧な横ナデ調整を行うなど、多々羅製塩遺跡や博多湾岸のものとの違いも認められる一方、一体成形、円盤充填で（12・13）、上下両方から粘土を充填（16、第 82 図）したものもあるなど、多々羅製塩遺跡と同様の製作技法も見受けられる。ちなみに、胎土や焼成の面からいずれも在地産である。

また脚台端部径の平均 4.7 cm と時期が下る様相を示すことは（第 79 図）、芸予諸島の製塩土器の変遷と調和的で、黒崎貝塚のように後続する小型丸底製塩土器の共伴もないため、古墳時代前期後半の一時期のみ営まれたと想定される。

以上、本遺跡の製塩土器は、芸予諸島から土器製塩技術がダイレクトに伝播した事例とみられるが、存続時期が古墳時代前期後半と博多湾岸とは差があり、先の黒崎貝塚とともに、博多湾岸と周防灘・響灘の土器製塩の様相は異なる点が多い。

（3）博多湾沿岸地域出土製塩土器の様相

今回の検討の結果、博多湾を含む北部九州では古墳時代初頭の芸予諸島や大阪湾岸という複数系列の土器製塩技術を受容し、両地域と共通する製作技術・使用方法がみられるなど、複数系統の製塩土器が共存する在り方を示す。一方、大阪湾岸系は脚台部の著しい長脚化など、その後の型式変



第83図 博多湾以外の製塩土器 (1/4)

化においては北部九州独自の地域色も認められる。そこで、ここでは製塩土器の系譜と変遷、生産、流通という点について注目し、整理してみたい。

①系譜と変遷

形態及び一体成形、円盤充填などの製作技法から、博多湾岸の脚台式製塩土器は大久保徹也氏の備讃瀬戸IV式古段階（大久保 2007）が主体となる。その故地については検討会での柴田氏の指摘の通り、芸予諸島の製塩土器の製作技術と共通する部分が多く、基本的に博多湾岸の土器製塩は芸予諸島の土器製塩技術をほぼそのまま導入・受容したものが主体となる。その後の脚台式の変遷については、海の中道遺跡や今山遺跡では脚部の縮小化とともに最終的には脚部の長脚化を指向する系統と、大塚遺跡第14・15次の脚部の縮小化を指向した備讃瀬戸と連動する系統の2者が認められる。後者については、今宿遺跡5次や今山遺跡8次の製塩土器とは、現状ではスムーズに繋がるものではなく、古墳時代初頭の技術伝播の在り方とは別のスキームで考える必要がある。よって、大阪湾系や芸予諸島の土器製塩技術情報を絶えず受け入れ連動させたのではないことも特徴で、基本的に古墳時代初頭の一過性の伝播・受容と捉えられる。

さらに、当初は博多湾岸の脚台式製塩土器の一部は芸予諸島から搬入された可能性も含めて考えたが、多々羅製塩遺跡の製塩土器の胎土は細長い長石をかなり多く含むものが多いが、博多湾岸の製塩土器には長石はほとんど含まず、加えて色調、被熱状況、乾燥・焼成状況から、博多湾岸で多々羅製塩遺跡からの確実な搬入品は確認できなかった。

今宿遺跡5次や今山遺跡8次でみられる体部が鉢状を呈する製塩土器は、下田遺跡などの大阪湾AID類（積山 2012）の影響を受けている可能性があるが、かなり変容したもので、芸予諸島の土器製塩技術をほぼそのまま導入した脚台式製塩土器の様相とは異なる。また博多湾で主体を占める芸予諸島系の土器製塩技術との機能分担も不明確であるが、脚台式よりも被熱度が高い。実証は難しいものの、固形塩にする焼塩工程で使用したものではないかと想定している。

そうであるならば、今宿遺跡5次や今山遺跡8次では保存及び運搬に便利な固形塩を生産した可



第 84 図 多々羅製塩遺跡製塩土器脚部内面の被熱痕
(愛媛県教育委員会所蔵)

能性があり、脚台式と鉢状の製塩土器の機能分化を実証することができれば、煎熬と焼塩が明確に分化した、他地域に先駆けた焼塩専用土器の出現を示すことができる可能性がある。このように、出土割合は少ないが、大阪湾系製塩土器のその後の博多湾岸の製塩土器への影響は大きい。

また海の中道遺跡出土のハの字状に開く脚部は、芸予諸島系譜の脚台式や大阪湾岸系譜の鉢状の体部の製塩土器より一段階時期が古い弥生時代後期後半～庄内式併行期の大阪湾岸の製塩土器の影響が看取できる。よって、大阪湾系土器製塩技術は、海の中道遺跡ではある程度故地の製塩技術に沿った形で行われるが、今山・今宿遺跡では当初から変容度が高く、海の中道遺跡の集団を介して土器製塩技術を改良・移行する形で若干受け入れたというのが実態ではなかったかと推測される。

宗像の神湊上方 B 遺跡、響灘の黒崎貝塚、周防灘の大積前田遺跡は博多湾から畿内まで至る海上交易ルートである瀬戸内ルート上に立地するが、製塩土器は古墳時代前期でも後半期の特徴を有し、博多湾の大塚遺跡 14・15 次の製塩土器もこの流れに運動している可能性がある。

このように、各製塩遺跡で組成偏差が認められることから、土器製塩技術は東北部九州から博多湾岸とヘリレー方式で伝わったというよりも、各遺跡の集団が個別に瀬戸内の土器製塩集団との繋がりを確保し、必要とする技術取得などを直接図っていた可能性がある。

さらに、脚部の長脚化傾向は、今宿遺跡 5 次（第 78 図 12）→今山遺跡 8 次・海の中道遺跡（第 78 図 6・27）と型式変化したとみられるが長脚化の要因は現状では不明である。加えて、脚部の長脚化は、煎熬工程で脚部を床に突き刺すように据えて製塩するため、芸予諸島系の製塩炉とは炉の構造が変化する。博多湾岸で長脚化した製塩土器が発生したとみられるが、博多湾岸で大きく発達することなく、製塩土器もみられなくなり、それに代わるように古墳時代中期後半に有明海南部で天草式製塩土器が成立し、塩生産は博多湾岸から天草諸島に生産拠点が移動したとみられる（山崎 2007、p94）。

②生産

本来、塩生産は沿岸部で自給目的の固形塩を製造する必然性は乏しく、内陸部を含むより広域的な需要に対応するため、集約的な塩生産である土器製塩が導入されたと考えられる。

今宿遺跡 5 次 SK032（第 74 図）は製塩炉の可能性があり、今山遺跡 8 次では製塩作業時に生じた灰の集積や焼土（第 73 図）以外、博多湾岸では鹹水を貯蔵する容器・施設などを含む製塩に関わる遺構はなく、大半が芸予諸島系の脚台式製塩土器の脚台部のみ発見される。これは、煎熬・焼塩工程は基本的に芸予諸島系の土器製塩技術で行っていることを示すが、出土量から想定される各遺跡の土器製塩の操業規模から、博多湾岸全体の受容を満たすほどの塩生産の想定は難しいと考えている。

また、製塩遺跡では後述する飯蛸壺をはじめとする、その他の漁具及び朝鮮半島系土器が概ね出土することから、漁労活動や交易活動を行いつつ、土器製塩を手掛けていたと想定される。ただし、脚台式製塩土器の容積は均一であることから、流通や交換についてはある程度整備されたことがみえるが、生産工程の分化や専門化までは至っていないと判断される。

ちなみに、塩生産はいかに塩分濃度の高い鹹水を効率的にえるかということが最も重要で、各生産段階は、太陽熱が利用でき、降雨日数が少なく、日照時間の長い、夏を中心とする季節が中心で季節労働の要素が強いことも、専門化の難しさを示していると考えている。

さらに、多々羅製塩遺跡の製塩土器は外面がボロボロになるまで強く被熱したものが多く、脚台部内面まで被熱したものもある（第84図）。今宿遺跡5次や本遺跡では外面の被熱のみで、脚台部から体部下位まで残る破片も少なくないことから、製塩炉の底に灰を多く充填し、脚台部分を灰に埋めて煎熬を行っていたとみられる。一方、今山遺跡8次では、脚台部内面まで被熱したものが多く、多々羅製塩遺跡と同様、下から火を当てて、煎熬する方法をとっていたと考えられる。ということは、今宿遺跡と今山遺跡では製塩方法が若干異なっているとみられるが、この要因として時間的差とともに、燃料の材質や塩の品質とも関係する可能性がある。加えて、先述したように大阪湾系の鉢状の製塩土器との併存は焼塩工程の一部は鉢状の製塩土器で行っていた可能性がある。

本遺跡では、ある程度土器製塩を自給生産で行ったとみられるが、操業場所が集落外であったにせよ、出土量は限定的で、安定的・恒常的な操業は難しい。

土器製塩実験によると、煎熬工程の粗塩づくりは薪や炭が多く必要で、それに比べると焼塩工程は比較的薪や炭が少量でできるとされる。煎熬工程においては、少々樹木では燃料不足となるので、土器製塩を行う場所は周辺に樹木が豊富で、海水を容易に確保できることが必要条件となる。本遺跡周辺は砂丘で樹木が少なく、製塩活動を行う際、大量使用する薪は周辺の山からの供給が求められ、薪・炭の確保等まで含めた生産計画が必要である。弥生時代前期後半の比恵遺跡・板付遺跡で藻灰とみられる灰層の出土から、藻灰自体が持ち込まれた可能性があり（山崎2007、p92）、あくまでも推測ではあるが、本遺跡における製塩は集落外ないしは他遺跡（今宿遺跡周辺か）で生産した濃い鹹水が付着した海藻を焼いた藻灰を用いて、気象条件が整えば固形塩を生産する構造であったことも想定できるのではなかろうか。

なお、本遺跡のカマド構築材として、製塩活動の際に生じた「にがり」を凝固剤として用いた可能性もあることも（大庭2023、p17）、遺跡内での藻灰以降の工程の存在を補強すると考えている。

③流通・消費

脚台式製塩土器の盛行は、集約的な塩生産であること、その形態が運搬にも適し、生産地から離れた地域でも出土することから、製塩土器は交易物資としての塩の流通領域やその仕組みを示す資料である。資料調査の結果、博多湾岸では遺跡内で製塩土器を製作していたとみられ、芸予諸島等の他地域からの搬入品は確認できなかった。

博多湾岸における製塩土器出土遺跡は、多くが旧海岸線から1～2km以内の海浜部の遺跡で発見され、海岸部から離れた内陸部の集落からの出土は非常に少なく、塩の流通網はあまりみえない。これは、籠や俵などの植物質の包装形態で固形塩が持ち運ばれたことを反映している可能性もあるが、博多湾西部に製塩遺跡が集中することは、博多湾岸での生産体制の分業化指向を示している。

土器製塩で生産された固形化した塩は自家消費が目的ではなく、特に交換・流通やそれに向けた備蓄等の特殊な用途で用いられたため、広く流通することはなかったとみている。つまり、博多湾岸の地域勢力が自ら戦略物資である土器製塩技術の獲得に乗り出したことと各地域から博多湾岸にダイレクトに伝播する在り方が整合すると考えている。

一方、芸予諸島等の流通の在り方は、拠点集落が塩を含む物資を一元的に統括するような生産体

制を構築していた可能性が指摘されており（柴田 2017、p20）、土器製塩に関わる地域勢力の関与については差が認められる。

④交換・価値

本遺跡における製塩土器出土の意義を考える上では重要な問題であるが、今後朝鮮半島においておそらく備讃瀬戸系を中心とする製塩土器の発見を期待するほか、現状で交換財としての塩の在り方を検討する材料はほとんどない。ただし、博多湾岸において製塩土器と朝鮮半島系遺物が共存することが多いことは、塩が交換財となっていた可能性があると考えている。

加えて、古墳時代前期前半に博多湾で導入した芸予諸島系の脚台式製塩土器は、ある程度の規模で分業化、組織化された集約的な塩生産体制、土器製塩システムとみられるが、内陸部まで流通していないことが、それが朝鮮半島南部から鉄素材を入手するための交換財（他に米や玉、木材等）の一つとなっていたと想定している。

3. 博多湾沿岸地域における飯蛸壺延縄漁について

（1）飯蛸壺延縄漁と既往研究

北部九州における飯蛸壺の本格的な研究は、本遺跡で大量の飯蛸壺が出土したことに始まる。平尾和久氏は、本遺跡の成果をもとに、北部九州の弥生時代～古代の飯蛸壺を分類し、その分布と変遷から飯蛸壺の出現及び展開、伝播、地域性などの基礎的な研究を行った（平尾 2003）。その内容は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の飯蛸壺の分布が本遺跡を核とする博多湾岸と周防灘沿岸地域の2地域に偏在するが、形態が大きく異なることから、導入期の飯蛸壺の故地が異なる可能性があること、伝播にあたっては弥生時代後期後半以降、大阪湾・播磨灘沿岸地域から飯蛸壺延縄漁を伝える程度の規模の人々の移住・定着があったと指摘した。

平尾氏の研究を受けて、山中英彦氏は底部穿孔の有無と割合から、博多湾沿岸では遺跡ごとに本質地が異なっていた可能性を指摘した（山中 2007）。平川敬治氏は、遺跡立地、考古学、民俗学・民族学、民具的な視点で飯蛸壺の分類、変遷、分布などの検討を行っている（平川 2012）。

松岡宏一氏は、大阪湾、播磨灘、周防灘、博多湾各地域出土飯蛸壺の主に重量と容量の比較検討を行い、博多湾の飯蛸壺は容量が 100ml 未満のものはなく、他地域に比べ大型で、特に重量が 400 g 超のものがあることが特徴であるとした（松岡 2004、p107）。

以上、博多湾岸の古墳時代初頭前後の飯蛸壺については、平尾氏・山中氏・平川氏による形態的な検討、平川氏による形態と環境の相関関係、容量は松岡氏、平尾氏・平川氏による一括遺物からの使用形態の復元などの先行研究があり、飯蛸壺延縄漁の博多湾岸への展開については、その当時の海人の活発な活動が反映しているとされている。

しかし、製作技法、胎土、使用痕などの観点での研究はほぼ行われておらず、ここでは古墳時代初頭前後の博多湾岸を核とした北部九州と大阪府下田遺跡、兵庫県大中遺跡の飯蛸壺の資料観察に基づき、主に製作技法からみた関係性と使用状況の復元を中心に比較検討することで、本遺跡における飯蛸壺延縄漁の異常な盛行の要因について検討してみたい。なお、飯蛸壺の流通・消費・交換に関しては、内陸部での飯蛸壺の出土はほとんどなく、イイダコを入れたまま流通することはないと考えられることから、考古学的な検討は不可能という前提に立っている。

(2) 飯蛸壺の分類

平川敬治氏は、形態分類に加え、砂地・泥地という海底の環境や孔の位置と傾斜など、飯蛸壺の水中での姿勢の復元まで含め、イイダコの生態や環境、使用場面、機能を考慮した優れた分類を行った(平川 2012)。本稿でも平川氏の分類に従って、博多湾岸の飯蛸壺の特徴をみている。

平川氏の分類では、円筒形をⅠ類、鉢形をⅡ類、釣り鐘型をⅢ類、瓶形をⅣ類とし、小分類として民俗例における使用場所の環境の差を考慮し、砂地で使用されたと想定されるスリムな形の「A」、泥の中に入らないように膨らみを持ち、泥地で使用されたと想定される「B」に分けた。

その結果、玄界灘沿岸地域では、古墳時代前期まではⅠ類A・B両方がみられ、使い分けは顕著でないとする(第86図)。また底部が丸みを持つものは海底が泥でもめり込みにくいことから泥地用、平坦なものは砂地用の可能性を指摘し、釣り鐘型と底部穿孔があるものは、海底が砂地であれば砂抜きに適していたとする(平川 2012、p74)。

なお、底部形態分類は、考古学的手法としては適切であるが、実際資料観察すると丸底と平底の分類は非常に難しい。筆者は平川氏の理解に加え、尖底のものは砂地でも海底に少し固定できることがメリットの一つとして考えているが、各遺跡の様相をみると、一概には言えない。ここでは最も重視する分類要素としては、砂地に適した口縁部が直立する「A」、中に泥が入り込みにくい丸味を持つ「B」という視点を重視し、みている。

(3) 西新町遺跡出土飯蛸壺の観察(第86図1～8)

①形態

本遺跡の飯蛸壺の器形は、口縁部が直立する「A」が主体で、やや丸味を帯びた「B」も認められる。底部形態は丸底が主体であるが、尖底気味や平底気味のものも含まれる。これは海底の底質が砂地で主に用いられたことを示している。

本遺跡の飯蛸壺の紐孔角度は水平が80%、外傾が16%、内傾が4%と水平方向に穿孔されたものが大半である(平尾 2009、p123)。紐孔角度が水平のものは、延縄を装着した状態では開口方向は上向きで、海底に至ると横倒しになる。引き上げて回収する時は、海中で斜め横気味となるためそこから水を出することができるが、潮流の激しい場所では水の抵抗を受ける。外傾のものは海底では横倒しになるが、引き上げる際は開口が斜め下向きになり、水が抜けやすくなり、水の抵抗も小さい。紐孔角度は水平が主体という状況は、潮流が比較的少ない波の穏やかな場所で使用したことが想定される。

また器壁は厚く、底部をしつかり作っているものが多いが、底部が薄く軽いと潮流によって崩れるので、バランスをとるため、底部と器壁を厚くしたと想定しうる。

このように紐孔角度と底部・器壁の厚さは一見矛盾しているようにみえるが、故地に関係する形態や海域環境に加え、一つの延縄に何個飯蛸壺を付けたかという作業規模や引き揚げ間隔の問題など、いくつかの要因によって製作方法や形態が選択された可能性がある。

なお、少数の底部穿孔の底部の孔に紐を通した痕跡はなく、釣り鐘のように底部を上、口縁部を下に使用したものはないと判断される。

加えて、飯蛸壺の紐孔周囲は強度が必要なため、器壁の厚みも重要である。12次30号竪穴住居跡には穿孔時に器壁の厚みが足りないため、未貫通のままのものや最初の穿孔部分の器壁が薄かつ



第 85 図 西新町遺跡 20 次 47 号
 竪穴住居跡飯蛸壺の底部
 (報 103-27)

ため穿孔し直したと思われるものがある。

②製作技法

飯蛸壺の製作技法の面からの検討はほとんどないため、本遺跡出土飯蛸壺から製作技法的な特徴について少しみてみたい。

製作技法から蛸壺の検討を行っているのは、管見では篠宮正氏のみである(篠宮 2012)。篠宮氏は大阪湾岸の真蛸壺の製作技法について、粘土紐の巻き上げ痕跡が確認できないこと、内面に成形時のヒビの痕跡が認められること、内面は縦方向のナ

デ調整が多いことから、粘土塊からそのまま上方に広げながら成形した、ないしは内型に粘土板を貼り付け成形したとし、この技法は飯蛸壺にも共通すると指摘した(篠宮 2012, p315)。

その観点で本遺跡出土飯蛸壺を観察すると、明確な粘土紐痕跡、水平方向のヒビ、粘土紐継ぎ目痕、凹凸痕跡等の粘土紐巻き上げ成形は確認できず、内面の顕著な縦ナデ痕から手びねり成形が多いが、内面のナデ痕が顕著でないものは粘土板成形(7)と判断される。なお、手びねり成形といっても粘土塊からある程度板状に粘土を切り出し、成形したと想定される。粘土板成形では内面のナデ痕と底部の厚み、底部を絞って成形する(第 85 図)等の違いがある。一方、17 次 2 号竪穴住居跡出土飯蛸壺(3)は深さがあるため、手びねりでは最後まで指が届かない。断面では粘土紐継ぎ目痕は確認できていないものの、内面の調整は下から 2/3 程度で縦ナデから横ナデに変化する。このことから、この付近で粘土を継いでいる可能性があり、一部は上部に粘土を足して成形したものもあると考えられる。口縁部と体部との厚みの差や調整の変化で口縁部付近のみ粘土を継ぎ足したものの認められるが、本遺跡ではごく少数である。

また、内面からの押圧により外面の粘土皺状があるものが多いが、これは粘土が乾いていない状態で内面から押圧した痕跡と考えられ、先の大坂湾岸のように内型を当てたものはないと予測される。17 次 1 号竪穴住居跡出土飯蛸壺(2)は外面のタタキが面をなすが、内面は縦方向のナデのみ見られ、内面の当て具的行為は指を用いている。タタキを用いているため器壁は薄い、粘土紐痕跡は確認できない。12 次 30 号竪穴住居跡出土飯蛸壺は内面下位にハケを施すが(8)、断面・調整でも粘土紐巻き上げ痕跡は確認できない。さらに、20 次 47 号竪穴住居跡は粘土板成形で、底部に成形時の紋が残りが残り、大きなヒビが入るが(第 85 図)、出来が悪くても使用している。

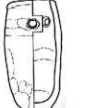
このように、共伴する布留系甕や精製器種の製作技術に比べると、手びねり成形が主体で、成形や調整も雑なまま使用するなど、製作技法や意識に大きな違いが認められる。一方、布留系甕の淡黄褐色系の土や精製器種の橙色系の精選土という 2 種類の胎土を用いており、かつ焼成が良好であることから、飯蛸壺の製作に土器工人の関与が予測される。ただし、布留系土器群と飯蛸壺とでは製作技術レベルが異なるため、土器工人が飯蛸壺を用いた集団に粘土のみを供給した可能性もある。

(4) その他の博多湾沿岸地域の飯蛸壺

①今山遺跡 8 次(第 86 図 9～13)

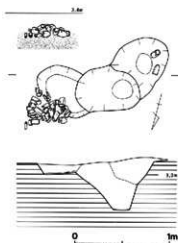
今山遺跡 8 次では、古墳時代前期初頭前後のほぼ完形の飯蛸壺が 31 個まとまって出土し、紐で繋がつた状態で廃棄されたとみられる(米倉編 2005)。

飯蛸壺は口縁部がすばまり、胴部は膨らみ気味で、深さがあり、底部は尖底気味の巾着型の特徴

	西新町遺跡	今山遺跡8次	堅粕遺跡	箱崎遺跡8次
I A 類 尖底	 1 (VII-31-34)	 9 (32-320)	 14 (13-41)	 18 (36-189)
I A 類 丸底	 3 (VII-31-35)	 10 (31-309)	 15 (12-1)	 19 (41-202)
I A 類 平底	 5 (VII-101-30)	 11 (31-310)		
I B 類 尖底	 6 (VII-31-36)	 12 (31-278)	 16 (12-6)	 20 (20-218)
I B 類 丸底	 7 (VII-40-168)	 13 (31-279)	 17 (14-47)	 21 (41-198)

0 10cm

第 86 図 博多湾沿岸地域の飯蛸壺 (1 / 4)



第87図 堅粕遺跡 10号土
坑横土坑 (1/40)

的な器形が多く(12)、「B」に分類される。紐孔角度は外傾の割合が82%を占め、引き上げ時に口縁部が下を向くため、中に入った海水や泥は出やすくなる。これらは海底の底質が強い泥地で使用された特徴を示し、立地環境から内湾の今津湾の干潟で主に使用されたと想定され、海底の底質という環境要因により、特徴的な形態に変化した事例と考えられる。

加えて、器壁が薄く、内面の縦ナデが目立たず、粘土のひび割れが少ないこと、内面底部には粘土の絞り痕がみられることから、主に粘土板成形でくびれ部に粘土を継いで成形したとみられる。また、深さがあり内面底まで指が届かないこと、内面はくびれ部付近で横ナデに変化すること、一部の器壁に粘土継ぎ目痕がみえる。平底のものはないため、成形台は使用していない。なお、外面に残る顕著なナデと器形から内型は使用していないと考えられる。外面は摩滅するものが多いが、これは使用によるものではなく、焼成温度が低かったことによると考えられる。ちなみに、口縁部がくびれることで、器壁が薄くても、孔周囲に紐を巻くことで延縄の際の引っ張りに対応できる強度を持つことができたと推測される。9は外面底部にタタキが残るが、その上位は面をなしていないことから、底部のみタタキを施したと考えられる。

②堅粕遺跡 (第86図14～17)

堅粕遺跡は、博多湾の海岸線に平行して形成された砂丘上に立地する(池邊編1997)。古墳時代前期前半に属する可能性がある7次調査10号土坑横からは、飯蛸壺32個と管状土鍾Cが11個がまとまって出土し(第87図)、紐で繋がったまま廃棄されたものと想定できることから、堅粕遺跡の飯蛸壺延縄漁では管状土鍾Cを鍾として利用したとみられる。

器形はやや内湾気味の「A」ないしは「B」で、底部は丸底のものが多数で、本遺跡の傾向と類似する状況は、砂地という同じ海域環境によると考えられる。また、手びねり成形が基本で本遺跡出土飯蛸壺と共通する。一方、孔径も大きく、焼成は甘めで、胎土も砂粒を含むものが多く、口縁部内外面に横ナデを施すものが目立ち、本遺跡のような精製器種と同様の橙色の精製土を使用したものは確認できない。加えて、焼成が甘めであることに起因する可能性もあるが、外面が摩滅したものが多く、器壁が薄く少し重量が軽めであることから、堅粕遺跡の飯蛸壺は海底で少し動くことを想定していたとすれば、重量と使用痕の相関関係が理解できる。

さらに、15は古墳時代所蔵前後の博多湾沿岸の飯蛸壺で最大級の大きさであるが、このサイズで手びねり成形だと、内面底部までナデが及ばないこと、孔下1cm程度の両面調整がナデから横ナデに変わること、そこで器壁も薄くなること、底部は小さな平底で、底部外面に板状圧痕状のものが残ることから(第88図)、成形台上載せて成形したとみられる。以上のことから、体部上面に粘土紐を継ぐ必要があったため、成形台上載せて成形した可能性があり、口縁部以下は手びねり成形で、口縁部付近のみ粘土を継いだ可能性がある。

③箱崎遺跡 (第86図18～21)

箱崎遺跡は、多々良川河口部の南北に延びる砂丘上に位置する。古墳時代前期の遺構は、砂丘背後の東側斜面に展開し、季節風を避けるように集落が営まれる。箱崎遺跡では石鍾や飯蛸壺等の漁

具が多く認められるが、そのうち古墳時代前期前半と考えられる第8次SK44から飯蛸壺24点が一括で廃棄された状態で確認された(田上編1999)。

器形は、「A」「B」も両方みられる。底部は丸底が主体で、紐孔角度は水平が主体であることから、海底が砂地の博多湾側で主に使用されたと想定される。

なお、紐孔は2孔の割合が半分程度と高く、直角・2孔のものは2孔に紐を通すと、引き上げの際に口縁部が横を向くことから、水や砂が出やすくなったと予測される。また底部穿孔の割合が65%と高いが、第89図は底部穿孔の際に生じた粘土がつまっており、紐は通らない。このことから、底部穿孔は水や砂を抜くためのもので、潮流や海底の底質の関係で砂が入りやすかったことに加え、引き揚げる際に中に入った砂や水が軽減されることから、操業人数が少なくて済むないしは一つの延縄に多くの飯蛸壺を装着することができたなどの利点があり、底部穿孔されたと判断される。

ちなみに、外面にはナデ凹凸が認められ、器壁が薄いことから、内型なしの粘土板づくりが多いが、器壁が厚く、内面に縦ナデが顕著に残るものもあり、手びねり成形(21)もみられる。

④那珂遺跡(第90図)

那珂遺跡は、那珂川と御笠川に挟まれた台地上に展開する北の比恵遺跡、東の山王遺跡、南の五十川遺跡と一連の比恵・那珂遺跡群内にあり、弥生時代中期～古墳時代前期の大規模拠点集落遺跡である。内陸部ではあるが遺跡北部を中心に九州型石鍾を含む漁具が多く出土し、河川を通じた博多湾での漁労活動が生業の一つであるとみられるが、飯蛸壺自体の出土は少ない。

18次第1号溝から飯蛸壺1点が出土し(山口1992)、平尾氏は相伴土器から弥生時代後期後半に飯蛸壺延縄漁が大阪湾・播磨灘から伝播した根拠資料とする(平尾2003他)。しかし、第1号溝出土土器の中にはほぼ丸底に近い甕や壺があり、下限は後期終末まで下る。加えて1点のみの出土であることから、体系的に伝播し、定着したことを示す資料となるかは評価が難しい。

器形は「A」・丸底・紐孔角度が水平で、口縁部がややすばまることから、海底が泥地で用いられた可能性がある。底部や器壁が薄く、縦にヒビがあることから、粘土板成形とみられる。器形や胎土、製作技法は下流に位置する堅粕遺跡とは異なる。



第90図
那珂遺跡
18次飯蛸
壺(1/4)

(5) 形態と製作技法

博多湾岸出土飯蛸壺は、バリエーションが豊かで、西新町遺跡では「A」、今山遺跡では「B」、それ以外は「A」・「B」両方が主体となるが、形態や紐孔角度、底部穿孔などの形態的属性は、砂地や泥地という遺跡周辺の海域環境が影響したとする平川氏の見解(平川2012)は支持できる。一方、大阪湾岸出土飯蛸壺ではコップ形・紐孔角度は水平という要素は共通することから(積山2012)、遺跡ごとの形態や製作技法の違



第88図 堅粕遺跡飯蛸壺の底部
の板状圧痕



第89図 箱崎遺跡8次飯蛸
壺の底部穿孔(報42-217)

いは博多湾岸の大きな特徴でもあり、故地や地域内での型式変遷を追うことを難しくしている。

その中でも、今回取り上げた製作技法は各遺跡間での飯蛸壺の関係性を追求することができる数少ない検討材料となりうる。本遺跡出土飯蛸壺は手びねり成形が多く、底部は厚く、口縁部内外面にナデを施し、外面底部には工具痕、内面には縦ナデ痕が顕著で、淡黄褐色系と橙色系という布留系甕・精製器種と同様の2種類の胎土を用いてしっかり焼成しており、外面に縦方向の黒斑がみられるものが少なくない。一方、今山遺跡や箱崎遺跡の飯蛸壺は器壁が薄く、粘土板成形が主体であるのに対し、堅粕遺跡は本遺跡と同様の手びねり成形が目立つ。

土製の飯蛸壺は、簡単な製作技法と形態から、必ずしも土器工人が行ったとはいえないが、本遺跡では布留系甕や小型精製土器群と同じ2種類の粘土を用いて製作していること、布留系甕と小型精製器種の土器工人は、同一工人ではない可能性を考えているため、粘土のみを供給を受けた可能性もあるものの、本遺跡出土飯蛸壺は、飯蛸壺実際に使用した生産集団からの依頼・要請を受け、それぞれの土器工人が製作したとみている。

積山洋氏は、博多湾岸の飯蛸壺は紐孔角度の外傾などから、最初に飯蛸壺を伝えた漁民の移住は少数とするが（積山 2012、p51）、今回の検討においても、兵庫県大中遺跡や下田遺跡出土飯蛸壺との共通する属性は少なく、直接的な故地は不明であり、今回の検討結果から筆者も積山氏の見解を支持できる。

古墳時代前期における博多湾岸の飯蛸壺延縄漁の異常な盛行については、博多湾が浅い砂地が主体であるという条件と、飯蛸壺のサイズから大型の冬ダコ用と想定され（松岡 2007）、年間通しての生業とは考えにくいこと、冬ダコの漁期が農繁期とぶつからないこと、海中に一定期間沈めてからの引き上げという、農業と並行して行うことができること、また飯蛸壺延縄漁は1～2人程度で可能な小規模な労働編成で可能で、兼業可能な比較的簡単な生業であったことも一因と想定される。加えて飯蛸壺延縄漁を受容、積極的に展開した理由として、弥生時代中期後半以降開始される在来の九州型石鍾を用いたイカ釣漁で捕獲したイカと似た魚種であることが（大庭 2021）、飯蛸壺漁の受容とその後の盛行をもたらしたと考えている。

また平尾氏は那珂遺跡 18 次 1 号溝出土飯蛸壺から、弥生時代後期後半に大阪湾沿岸地域から博多湾岸に飯蛸壺延縄漁が伝播したとするが（平尾 2003）、粘土板成形の1点のみの出土であること、その後盛行する本遺跡や堅粕遺跡では手びねり成形が主体である。西新町遺跡ではタタキを有する飯蛸壺が少数認められ、これは下田遺跡出土飯蛸壺でも認められる要素である。しかし、下田遺跡の飯蛸壺は粘土板成形で、大きさも小さいものが主体で、タタキという要素以外共通性は乏しく、下田遺跡とは直接的な系譜を追うことができない。

このように遺跡間で製作技法に違いが認められることから、後期後半に飯蛸壺延縄漁が博多湾岸に伝播し、定着、体系的に広がったかどうかは、現時点では評価が難しく、筆者は現状で古墳時代前期前半に大阪湾岸・播磨灘の飯蛸壺延縄漁を遺跡ごとに個別に受容し、盛行したと理解している。

古墳時代前期後半になると、本遺跡の衰退に連動するように飯蛸壺の出土が激減し、大阪湾周辺も同様の傾向を示す。一方、周防灘沿岸地域では中期から飯蛸壺が出土する遺跡が増加する。

なお、平尾和久氏は、玄界灘における古墳時代中期の土製飯蛸壺の激減について、人の移動か、アカニシなどの巻貝や二枚貝を用いた漁、手釣り漁へ移行した可能性を指摘する（平尾 2016、

p2)。一部は漁法が移行した可能性はあるが、後期後半には再び盛行することから、寒冷化に伴う砂丘形成の活発化等の要因も考える必要がある。

(6) 飯蛸壺の漁法について

アカニシ等貝殻を用いた飯蛸壺は、土製のものと比べると壊れにくく、古くなくても殻の内側に貝殻が付かないという利点があるが(松岡 2003、p41)、海上がりの土製飯蛸壺には顕著な貝殻の付着が認められる。本遺跡の集落域から多数出土する飯蛸壺は、付着したカキ殻等を除去するなどのメンテナンスのために集落に持ち帰ったものも少なくないと予想したが(大庭 2023、p40)、兵庫県大中遺跡 SH2202 では一連の延縄に繋がれたまま屋根裏に吊り下げるなどして保管されており(篠宮 2007)、飯蛸壺は延縄ごと集落に持ち帰っていたと想定できる。

さらに飯蛸壺の体部外面には摩滅がほとんどないことから、ほぼ海底を曳きずっていないと判断され、かつその使用場所も岩礁帯ではなく、砂泥地で用いたことを示している。加えて、顕著な紐ずれはないため、孔と縄をしっかりと固定して用いたとみられる。

また飯蛸壺には、内外面とも付着した貝殻等の掃除や工具等の中に入ったイダコを取り出した明確なキズ等の痕跡はない。このため、貝殻等が付着しにくい、短い網揚げ間隔で漁を行っていた可能性を示している。加えて、飯蛸壺からイダコを取り出す際、現在では塩や灰、空気を入れたりするが(平川 2012)、使用痕等から工具などで無理やり取り出した可能性は低く、灰などを使って飯蛸壺から出したと考えられる(大庭 2023、p44)。

操業規模については、博多湾岸における古墳時代初頭前後の飯蛸壺がまとまって出土した事例を挙げると、今山遺跡 8 次 D-11 区包含層(31 個)、堅粕遺跡 10 号土坑横土器群(32 個)(第 87 図)や箱崎遺跡 8 次 58 号住居跡(17 個)・44 号土坑(23 個)がある。平尾和久氏は弥生時代後期後半～古墳時代前期の飯蛸壺延縄漁では一つの幹縄に結び付けた飯蛸壺が 15 個程度が一単位として想定するが(平尾 2003、p48)、筆者は先の数量や大中遺跡の事例ももう少し多い、20～30 個が一単位であったと考えている。大阪湾岸の数百個単位での飯蛸壺の出土例は博多湾岸にはなく、平尾氏は操業規模は故地とそのままだどうかは検討すべきとの指摘は(平尾 2016、p8)、妥当である。

ちなみに、堅粕遺跡の 32 個が一本の延縄で、先の民俗例から装着間隔が 1.5 m とすると、約 50 m 程度の長さの延縄になる。この約 50 m という延縄の長さは、西新町型石鍾と自然石石鍾を用いたまき網の長さ(52.5 m 程度と想定)と同規模(大庭 2022、p11)であることは注目できる。

4. まとめ

今回、製塩土器と飯蛸壺延縄漁という先行研究での評価を再度、地域的枠組みでとらえなおし、当時の生産流通構造の実態について検討を行った。

その結果、博多沿岸における古墳時代初頭前後の土器製塩は、備讃瀬戸系と大阪湾岸系の 2 つの製塩土器・技術が確認できた。脚台式製塩土器は、備讃瀬戸 IV 式古段階(大久保 2007)の芸予諸島系の外面タタキ、一体成形、円盤充填などが主体を占め、塩の受容の拡大に伴い、集約的な塩生産を行っていた芸予諸島周辺の土器製塩技術を導入したと想定される。なお、芸予諸島では高縄半島より西側の西予地域では確実な製塩土器はなく(柴田 1994、p193)、博多湾岸には芸予諸島からほぼダイレクトに土器製塩技術が伝播したとみられる(第 91 図)。これは、周防灘を介した北

部九州との地域間交流という伝統的な交流スキームではなく、古墳時代初頭前後、土器製塩技術が直接博多湾岸に伝播したと捉えられる。

また東海、北陸でも備讃瀬戸IV式古段階の脚台式製塩土器が展開することから、備讃瀬戸の土器製塩技術が畿内を経由せず、日本列島の東西に広域的に展開し、かつ連鎖的・相関的に推移する（大久保 2017, p65）という、畿内を経由しない広域的なネットワークの存在を示す。だが、博多湾岸では土器製塩技術を導入するが、その後の製塩土器の変遷は故地と必ずしも連動せず、基本的に一過性の受容形態である。

また博多湾岸では、比較的大規模な今宿遺跡・今山遺跡、小規模な西新町遺跡、実態不明な海の中道遺跡などが重層的に複合して展開するが、大阪湾・備讃瀬戸・芸予諸島と比べると、製塩遺跡及び製塩土器の出土量も少ない。製塩土器以外の芸予諸島と共通する遺構・遺物土器が明確に確認できないことから、一時的・短期的な移動であったと考えられる。

一方、博多湾沿岸の古墳時代初頭前後の飯蛸壺は、コップ形の器形と製作技術から、大阪湾岸の飯蛸壺延縄漁が瀬戸内を飛び越してダイレクトに伝播し、博多湾岸に展開する（第92図）。また形態は遺跡ごとに個性が豊かで、製作技法の特徴も多様で、詳細な故地等の系譜関係については地域を絞ることは難しい。なお、これまで底部穿孔の有無以外、飯蛸壺という現象面での関係性が強調されてきた面があるが、伝播形態、年代、その後の展開にあたって、使用環境による在り方を評価した。博多湾岸の飯蛸壺延縄漁は大阪湾岸から、当初から遺跡ごとの個別かつ小規模な受容であったものが、遺跡周辺の漁場環境に合わせて形態変化しながら複雑に展開したと理解される。なお、本遺跡で飯蛸壺を製作した集団は土器工人と想定している。

この製塩土器と飯蛸壺の盛行の背景として、基幹物資である塩（製塩土器）はその伝播当初からその後の有明海への移動も含めて、政治的な要素が強く窺える一方、飯蛸壺延縄漁は生業内での位置づけが異なる可能性がある。一方、同一に比較検討できないものの、飯蛸壺や製塩土器の製作技術、それを用いた漁法情報を受容し、博多湾の一部で共有されるものの、一過性の受容で、本遺跡の衰退と同時に博多湾岸では両者とも衰退する。これは、古墳時代前期前半における博多湾岸の集団が海、海産物を資源として利用するため、集落ごとに新たな海の生業・生産技術の導入を選択的に図り、かつリノベーションを図った結果が製塩土器・飯蛸壺の様相にもあらわれたとみられる。

さらに、筆者は製塩土器や飯蛸壺等の漁法の伝播にあたっては、それを用いた集団・ヒトと直接接触しないと伝わらないと考えており、製塩土器、飯蛸壺もそれぞれ芸予諸島、大阪湾の集団と博多湾岸の集団が直接的に接触した。つまり、瀬戸内等の中継地を経ての伝播ではなく、土器製塩、飯蛸壺それぞれダイレクトに伝播した、つまり集団間関係や内容によりルートが異なった、物的証拠となるとみている。

加えて、それぞれ遺跡単位の一過性の受容形態であることから、生産物の安定確保のため、外洋航行を含む幅広い海上活動を基盤に、土器製塩と飯蛸壺延縄漁という生産技術を持続した芸予諸島と大阪湾の人々を博多湾岸に少数招聘した可能性がある。

当該期の九州～畿内の広域的な交流・交易は、各地域・集落を個別に結び付けた複数の系列・領域が存在し、それが朝鮮半島の諸勢力との関係にまで及んでいた可能性がある。そのため、楽浪郡の滅亡等、朝鮮半島の諸勢力との間で力関係の組み替えが生じると、日本列島各地域にも直接的な変動を引き起こすことになり、本遺跡を中心とした対外交渉ルートもすぐに衰退する。この構造は、



第 91 図 列島西部における脚台式製塩土器出土遺跡（縮尺任意）



第 92 図 列島西部における飯蛸壺出土遺跡（古墳時代前期前半、縮尺任意）

それまでの各地域主体の広域的な交流・交易と捉えられ、古墳時代初頭の日本列島の社会経済構造の特徴を示している。

今回、検討した製塩土器・飯蛸壺により、当時の生産流通の一端が直接的に把握できた。この成果を軸の一つとして、様々な生産分野を比較する視点に立つことにより、政治的關係による儀礼的な交換や交換価値の高い奢侈品生産を含むハイレベルのモノの動きではなく、様々なローレベル、その他の様々な生産分野の動向についての理解を進める一助になったと考えている。

さらに、糸島市御床松原遺跡や本遺跡でみられる弥生時代中期～古墳時代前期に属する博多湾西部の多様な漁具は、細かな違いはあるものの、ある程度の画一化された漁労活動内容であることに比べ、古墳時代中期以降、遺跡において確認される漁労活動の痕跡が乏しくなることから、弥生時代中期以来の伝統的な漁労活動に変化が生じたことを示すと同時に、古墳時代中期以降の漁労活動はそれ以前の様相から断絶する内容が多く、かつ限定的・小規模な活動にとどまり、弥生以来の伝統的な思想や規範まで変化が及んだようにみえる。一方、沖ノ島祭祀遺跡や文献では海人集団の活発な活動が想定されており、考古資料と文字資料から導きだされた漁労活動のイメージには大きな違いがあるがこれらはお互いに議論が交わされてきたとは言い難い。

遺跡単位や時期単位での総合的な魚類利用や遺跡間の比較研究、流通機構の具体的な解明の必要性を痛感した。今後の調査研究のさらなる発展を期待したい。

【謝辞】

本稿を草するにあたり、以下の機関・個人の協力を得た。記して謝意を表したい。

愛媛県教育委員会文化財保護課 愛媛県埋蔵文化財調査センター 大阪府教育庁文化財保護課文化財事務所(公財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 兵庫県立考古博物館 福岡市埋蔵文化財センター 宗像市教育委員会 石貫弘恭 榎本義嗣 太田智 上角智希 久住猛雄 小浜成 篠宮正 柴田昌晃 竹原伸次 田中元浩 中村利至久 西依由里香 乗松真也 松崎友里 持永壮志朗 山口裕子

【註】

1 大久保徹也氏は日常用土器を補助的に転用した可能性があること、この段階の製塩土器は集約的な塩生産のため、特化した専用土器を用いることが特徴であり、煎熬専用器具に特化したと認めるような型式学的特徴を指摘できなければ、製塩土器の一種とすべきではないとする(大久保 2017, p77)。在地系長胴甕を製塩土器とする明確な判断基準は難しく、製塩遺跡であっても安定的に出土するものではないことから、筆者も大久保徹也氏の意見に賛同し、長胴甕は製塩土器に含めていない。

【引用・参考文献】

池邊元明 1997『堅粕遺跡群 千代1丁目遺跡』福岡県文化財調査報告書第130集 福岡県教育委員会
宇野橋敏 2002『黒崎貝塚第5次』北九州市埋蔵文化財調査報告書第275集 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
大庭孝夫 2009『西新町遺跡出土石鍾について』『西新町遺跡IX』福岡県文化財調査報告書第221集 福岡県教育委員会
大庭孝夫 2021『九州型石鍾の機能に関する一試論—福岡市西新町遺跡出土石鍾を中心に—』『九州歴史資料館研究』

論集』 46 九州歴史資料館

大庭孝夫 2022『漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質—西新町型石鍾を素材として—』『九州歴史資料館研究論集』

47 九州歴史資料館

大庭孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館

大久保徹也 2007『塩生産・流通の古墳時代後期の特質について—とくに備讃瀬戸海域の生産再開と畿内における塩運方式—』『古墳時代の海人集団を再検討する—「海の生産用具」から 20 年—』発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第 56 回埋蔵文化財研究会実行委員会

大久保徹也 2017『古墳時代の集約塩生産の動向』『古代武器研究』Vol.13 古代武器研究会 山口大学人文学部考古学研究室

河田泰之 1996『大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開』『下田遺跡』(財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 18 集 財大阪府文化財調査研究センター)

久住猛雄 2000『今宿遺跡 5 次調査』『J R 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 654 集 福岡市教育委員会

久住猛雄 2007『「博多湾貿易」の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交易機構』『考古学研究』第 53 巻第 4 号 考古学研究会

篠宮正 2007『堅穴住居 SH2202 の構造復原と空間復原』『大中遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告書第 319 冊 兵庫県教育委員会

篠宮正 2012『マダコ壺漁の開始と展開』『莚原Ⅱ』莚原刊行会

柴田昌児 1994『第Ⅶ章考察』『多々羅製塩遺跡』多々羅大橋関連埋蔵文化財発掘調査報告書 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

柴田昌児 2007『西部瀬戸内と芸予諸島周辺域における海人集団の動向』『古墳時代の海人集団を再検討する—「海の生産用具」から 20 年—』発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第 56 回埋蔵文化財研究会実行委員会

柴田昌児 2015『瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題』『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 17-26 頁

横山洋 2012『塩業と漁業』『講座日本の考古学』8 古墳時代(下)

田上勇一郎編 1999『箱崎 7』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 591 集 福岡市教育委員会

田中裕介 2024『九州島東海岸における古墳時代小型丸底製塩土器』『九州前方後円墳研究会論集』九州前方後円墳研究会

西村歩編 1996『下田遺跡』(財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 18 集 財大阪府文化財調査研究センター) 乗松真也 2010『博多湾岸における備讃瀬戸系漁具の受容と背景』『九州考古学』85 九州考古学会

平尾和久 2003『福岡県における飯鍋型土器の受容と展開—西新町遺跡を中心に—』『古文化談叢』第 50 集上 九州古文化研究会

平尾和久 2004『北部九州の脚付製塩土器』『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会

平尾和久 2007『北部九州における飯鍋壺と製塩土器の受容と展開』『古墳時代の海人集団を再検討する』発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第 56 回埋蔵文化財研究会実行委員会

平尾和久 2009『西新町遺跡の飯鍋壺と製塩土器』『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第 221 集 福岡県教育委員会

- 平尾和久 2016「九州出土の飯蛸壺とその特徴」『寒暖流の考古学Ⅳ』海洋考古学会第7回研究会資料集 海洋考古学会
- 平尾和久 2017「北部九州の土器製塩研究」『土器製塩の諸問題』海洋考古学会第8回研究会資料集 海洋考古学会
- 平川敬治 2012『タコと日本人』 弦書房
- 藤田憲司編 1986『脇浜遺跡』熊本県埋蔵文化財調査報告書 6 集 熊本県埋蔵文化財協会
- 藤本貴仁 2007「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 藤本貴仁 2019「肥後地域における土器製塩の波及」『熊本古墳研究』第7号 p43-59
埋蔵文化財研究会 第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会 2007『古墳時代の海人集団を再検討する』
- 松岡宏一 2003「古代の飯蛸壺縄漁に関する一考察（上）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第16号 瀬戸内海歴史民俗資料館 p41-72
- 松岡宏一 2004「古代の飯蛸壺縄漁に関する一考察（下）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第17号 瀬戸内海歴史民俗資料館 p101-120
- 真鍋篤行 1995「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 宗像市史編纂委員会編 1997『宗像市史 通史編』第1巻（自然・考古） 宗像市
- 森本幹彦編 2011『大塚遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1111集 福岡市教育委員会
- 山口譲治 1992「第1章第18次調査報告」『那珂6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編 1982『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編 1993『海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社 海の中道遺跡発掘調査実行委員会
- 山崎純男 1994「福岡県」『日本土器製塩研究』 青木書店
- 山崎純男 2007「九州における海人集団の成立と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 山田隆一 2006「西三河の土器製塩と交易拠点」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』109-124頁
- 山手誠治 1997『大積前田遺跡』北九州市文化財調査報告書第201集 熊本県九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 山中英彦 2007「『博多湾貿易』を支えた古代海人」『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会
- 米倉秀紀編 2005『今山遺跡第8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集 福岡市教育委員会

大庭孝夫（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

第5節 九州型石鍾からみた北部九州と日本海沿岸地域の地域間交流の様相

1. はじめに

玄界灘から北陸にかけての日本海沿岸地域は、河川が運ぶ土砂や干満差が大きくなく、西からの強い季節風により、砂州や砂丘が発達しやすく、その背後には潟湖が形成される。潟湖は、外海との間の砂州が波風を防ぎ、水深も浅いことから、喫水が浅い丸木船や準構造船の運用と調和的である。さらに、潟湖に流れ込む河川を通じ、内陸部との交通も可能になる。

港津となる潟湖が点在する日本海沿岸地域は、古くから潟湖を航路の拠点として、日本列島東西の人、モノ、技術、情報等の交流において重要な役割を果たしてきた。特に弥生時代、ヒスイや碧玉の玉製品、木製品、鉄器、墓制など、瀬戸内や太平洋沿岸地域に比較して、北部九州との関係性を示す資料が量的に豊富で、直接的な交流があったことが多くの先行研究において指摘されてきた。

弥生時代中期以降、玄界灘沿岸地域では、鉄製工具の導入による加工技術の発達により、軟質で加工しやすい滑石を、削りと研磨によって円錐形や分銅形、紡錘形という手の込んだ成形を行い、加えて釣糸等を結びつけるための孔・溝を施した、多種多様な石鍾が出現し、古墳時代前期にかけて盛行することで漁具・漁法が大きく発展した。

この特徴的な沈子群を九州型石鍾として定義した下條信行氏は、日本海沿岸地域において九州型石鍾に類似する有孔・有溝石鍾が出雲～若狭にかけて分布するため、鉄器の流通等、地域間交流の活発化に伴う博多湾海人の活動を示す根拠資料と位置づけた（下條 1984・1989a・b 他）。これ以降、九州型石鍾は日本海と九州との広域的な地域間交流を示す根拠として取り上げられてきた。

その後、大規模な発掘調査の進展により、山陰地域（乗松 2007・2013）、北陸地域（久田 2020、次山 2022）における九州型石鍾の基礎的把握が進み、1遺跡あたりの出土量は少ないものの、その変遷や地域的な特徴などがある程度明確になっている。

筆者はこれまで玄界灘の九州型石鍾について、石材、色調、製作・加工技術や使用痕からの機能の復元など、実物観察を通した実証的な研究を行ってきたが（大庭 2023 他）、今回筆者が取り組んできた石鍾の観察方法に基づき、北部九州との関係をもとに成立したと理解される日本海沿岸地域出土の九州型石鍾の資料調査を実施し、製作技法や使用痕、石材、分量、年代観等の考古学的な



第93図 日本海沿岸の本稿関係遺跡分布図（縮尺任意）（国土地理院国土電子Webより作成）

基礎情報を整理した。ただし、日本海沿岸地域は細長く広大で、大きくは山陰・畿内北部・北陸各地域で独自の文化圏を形成するため、まずは九州型石鍾の様相を遺跡ごとに把握し、玄界灘の九州型石鍾との関連性を把握する。続いて日本海沿岸地域全体を対象に、九州型石鍾と土器・玉等の動態と、その背景まで合わせて検討することで、日本海を通じた広域的なヒト・モノ・技術・情報等の往来や地域間交流、社会変化の具体相の一端について明らかにしたい。

なお、本書で対象とする西新町遺跡の盛行時期・内容とは直接に重ならない部分があるが、古墳時代初期の博多湾沿岸地域と日本海沿岸地域との地域間交流を考える上では、それ以前の歴史的・環境的前提を考慮する必要があるため、ここで取り上げることとした。

2. 九州型石鍾の分類について（第94図）

本稿における九州型石鍾の分類は、筆者が別稿にて既に示しているものを用いるが（大庭2023）、下條信行氏の分類（下條1984）との対照しながら、以下でその分類概要を示す。

I類は底部が幅広い水滴形を呈し、底部形態により細分される。底部が丸みを持つものをI A類（下條の大形A I型：第94図1～4）、底部に面を持ち、かつ水平であるものをI B類（下條の大形A II型：第94図5～7）、底部がとがるものをI C類とする（第94図8・9）。加えて、溝と孔の位置、数については、後述するII・III・V類石鍾と同様、1孔のものを「あ」、2孔のものを「い」、それに加え上溝のものを「1」、全溝のものを「2」、長軸溝と短軸溝を併用するものを「3」とした。

II類は長楕円形の上下左右対称的な紡錘形をなすもので、長軸に溝を施すものを基本とする（下條の大形B型：第94図10～15）。II類ではその重量で概ねその用途を分けることが可能で、特に50g以下の小型品の多くは釣用鍾とみられることから、重量が50g以下の小型のものをii類とする。また体部断面が円形に近いものを「A」、体部断面が矩形に近い扁平なものを「B」とした。

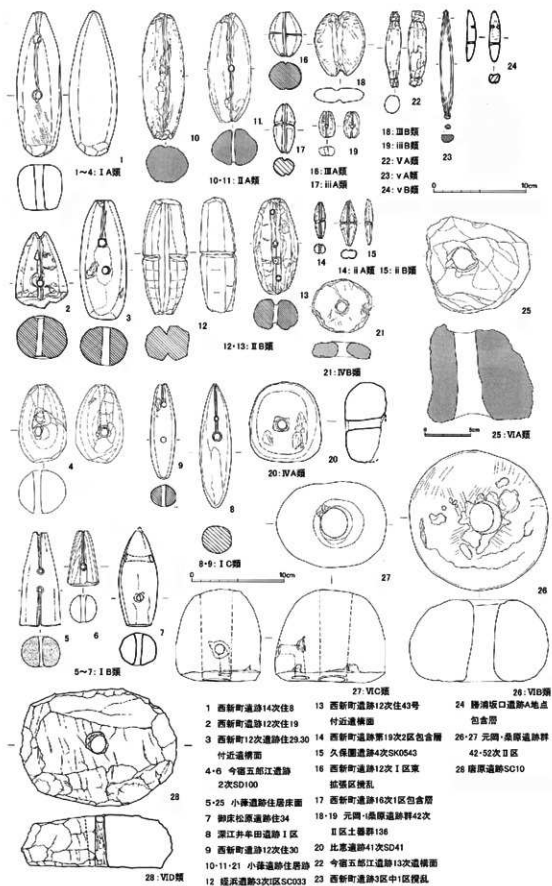
III類は体部が丸い紡錘形で、体部断面は円形である（第94図16～19）。IV類は紡錘車状をなすものである（第94図20・21）。V類は細長い棒状で両端に突起や溝、孔を持つもので、細長い体部の両端に紐掛け用の突起を作り出す、ないしは溝を作り出すものをV A類（第94図22・23）、端部以外の体部に溝を持つものをV B類（第94図24）、両端に孔を持つものをV C類とした。VI類は中央に円形孔を持つ半球形または環状の超大型品で（第94図25～28）、VII類は打欠石鍾である。

なお、下條氏が九州型石鍾として規定したものは、I～V類にあたる（下條1984）。

3. 山陰地域における九州型石鍾

（1）先行研究

下條信行氏は、氏分類の九州型石鍾大形B型（本稿ではII類）が鳥根県西川津遺跡、鳥取県青木遺跡で出土することから、九州型石鍾を弥生時代後期～古墳時代前期における北部九州と山陰地域との広域的な地域間交流を示す物的証拠と位置づけた（下條1989a・b）。その後、鳥取県妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡出土石鍾を中心に検討を行った乗松真也氏は、弥生時代中期後半に多様な漁具が発達する中で、沖合での操業をある程度可能とする釣漁がメインとなる九州型石鍾（乗松氏は「山陰系有溝石鍾」と命名、乗松2013）が玄界灘の影響で出現したとする。後期以降、九州型石鍾は継続的に一定量分布するが（乗松2007）、後期のものは左右対称が意識されなくなることに加え、丁寧に整形されなくなる。よって、後期以降の山陰地域の九州型石鍾は北部九州との継続的な関係



第94図 玄界灘における九州型石錘分類図(1/4)(大庭2023より引用)

よりも、在地での展開の流れで理解した方が良いとした(乗松 2013, p50)。この乗松氏の指摘は、これまで玄界灘との関係に目を向けるあまり、山陰地域における漁労活動内容について十分な議論がされてこなかったことを取り上げた点が注目される。

(2) 西川津遺跡における九州型石鍾

島根県松江市西川津遺跡は松江平野北部の朝酌川沿いの沖積微高地及び低地に位置する大規模拠点集落で、弥生時代前期・中期を盛期とする大量の木製品、磨製石器類、骨角器や動物・植物遺存体が出土している(内田他 1989 他)。先の下條氏の論考によって、九州型石鍾の存在が古くから知られている(下條 1989b)。西川津遺跡海崎地区ⅡA類2点について資料調査を行った。

弥生時代後期の海崎A-2区第2砂礫層出土のⅡA-3類は(第95図1)、長さ9cm、幅5.3cm、厚さ4.7cm、重量は192.5g、石材は砂岩で、色調は黄褐色～灰白色を呈する。断面V字形を呈する溝幅は長軸4mm、短軸3.5mm、上下端部は紐ずれによる摩滅が顕著で、確実に使用されている。体部は風化ないしはローリングが顕著で加工痕は確認できないが、断面をみると多角形(12角形)の面加工の痕跡から、面ごとに研磨し、その後倣をとるように丸く丁寧に研磨したと考えられる。

海崎J-4B最下層出土のⅡA-1類(第95図2)は裏面が欠損するため、現状長さ10.6cm、幅4.6cm、厚さ2.6cm、重量117.2gで、本来の重量は200gを超える。石材はややピンク色掛かった片岩系であるが、博多湾周辺で産出する滑石ではない。断面V字形を呈する溝幅は6mm程度で、1より使用感は少ないが、上下端部の欠損は使用痕の可能性はある。体部は若干ローリングを受け摩滅する。表面は被熱して荒れており、研磨痕は確認できないものの、丁寧に研磨したと思われる。

以上、西川津遺跡出土ⅡA類石鍾は、溝は鉄製工具によりV字形に彫り、面加工のち丁寧に研磨していること、色調も黄褐色～灰色系とピンク色系を呈するなど、玄界灘のⅡA類石鍾と共通する要素が複数認められる。玄界灘の弥生時代中期後半～古墳時代前期の糸島市の町道跡遺物包含層最下位出土のⅡ-B類(第95図3)、弥生時代後期前半の福岡市姪浜遺跡第4次SK04出土Ⅱ

A類石鍾(第95図4)と比べ、本例は大型で重量があること、断面が丸く、胴部がかなり張る形状であること、両端が尖ったラグビーボール形を呈するなど、管見の限りでは玄界灘では全く類似する形態のものはないが、近い形態のものは存在する。

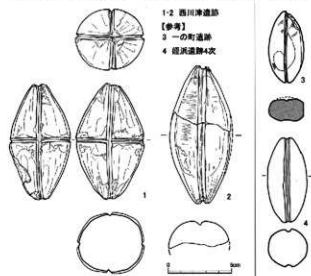
このことから、いずれも玄界灘のⅡA類石鍾の影響を受けたと捉えられるが、ただし、玄界灘のⅡA類石鍾は時期が新しくなると石鍾の全長が延びる傾向にあるが、いずれも長さが短く、比較的古い時期の玄界灘の石鍾の特徴が見受けられる。

第95図 西川津遺跡出土石鍾と関連資料(1/3)

(1・2は筆者実測、3は河合 2009、4は長家 1996)

(1・2の実物は島根県埋蔵文化財調査センター提供)

用途としては、乗松氏は釣漁や延縄漁での使用を想定するが(乗松 2013, p45)、単体での出土や溝幅も5mm程度であり細い糸を緊縛して



使用したとみられること、顕著な曳きずられ痕跡はないこと、整った紡錘形の形状から海中の目的とする場所に素早く到達できること、丁寧に研磨することによって錘自体が海中で目立ち、疑似餌の機能を有した可能性があること、色調も魚の眼につきやすい色など、玄界灘と同じ機能を果たした釣用錘の役割が想定される。

しかし、本例のような重量 200 g を超える石鍾は、径 5 mm 程度の釣糸ではかなり重すぎる印象がある。1 の十字溝は釣糸と鍾との緊縛度を高めるために施された可能性があり、強い力で曳かれても鍾が外れないように工夫して使用したとすると、大型の外洋魚を釣漁で捕獲するために使用された可能性が考えられよう。

ちなみに、弥生～古墳時代の石鍾は魚種に応じた分化が十分でなく、一つの石鍾が様々な機能・用途を有していた可能性はあるが、鳥取県青谷上寺地遺跡や兵庫県袴狭遺跡出土木板にはサメが線刻されており、そのような大型魚に効果を発揮し、それを捕獲するために用いられた可能性がある。



第96圖
青木遺跡出土
石錘（1/3）
（筆者実測）

(3) 青木遺跡における九州型石鍾

鳥取県米子市青木遺跡は、標高 40 m の丘陵上に位置する、弥生時代中期中葉～後期の大規模集落遺跡である（青木遺跡発掘調査団 1976）。弥生時代後期後半の F 区 SI29 竪穴住居からⅡ A-3 類石鍾が 1 点出土した（第 96 図）。本例について、乗松氏は鉄製工具による加工工程であるハツリ工程を経て、丁寧に研磨されていることから、北部九州の影響を受け山陰で在地生産されたものの可能性を指摘する（乗松 2013、p50）。

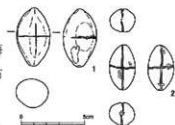
本例は両端部も含めて全面丁寧に研磨し、体部には一部研磨の際に生じた縦方向の稜が弱く残るものの、面加工の痕跡とまでは言えない。石材は巣がよく入る凝灰岩で、体部の丁寧な研磨を行っており、乗松氏が指摘した切削痕（ハツリ工程）については確認できなかった。V字形を呈する溝は長軸3条、短軸1条であるが、粒度選では長軸1条が基本である。溝内には工具痕がなく、かつV字溝の稜もにぶいため、ある程度使用されたものと判断されるが、体部には海底を曳きずった痕跡はない。法量は長さ13.2 cm、幅4.5 cm、厚さ4.6 cm、重量278.5 g、色調はぶい黄褐色である。

以上、青木遺跡出土石鍾は、形態的には弥生時代後期終末の福岡市宮の前遺跡や古墳時代前期前半の姪浜遺跡などの玄界灘のⅡA-3類石鍾の系譜を引くが、施溝の数、製作技法、石材の質、色調が異なるため、九州型石鍾の直接的な影響は見受けられない。よって、山陰地域で独自に展開した石鍾の様相を持つとの乗松氏の見解（乗松 2013、p50）は支持できる。

(4) 博労町遺跡における九州型石鍾

鳥取県米子市博労町遺跡は、青木遺跡北西約2 km、潟湖である中海と日本海を隔てる砂丘上に立地し、古墳時代前期の集落内区画溝や布掘り掘立柱建物跡などが検出されている(濱野編 2011)。

このうち、古墳時代前期中葉～末の5区SI08 堅穴住居(第97図1)、弥生時代後期後葉～終末の5区SI10(第97図2)はラグビーボール状を呈するII A-3 類石鍾である。研磨はいずれも表面を平滑にするためのものではなく、ラグビーボール状に整形するための研磨がメイ



第97図 博勞町遺跡出土石錘(1/3)(濱野編2011)

ンである。色調も SI08 が暗緑灰色、SI10 は灰白色で、水中で目立つとはいえない。

(5) 妻木晩田遺跡における九州型石鍾

鳥取県大山町及び米子市の妻木晩田遺跡は、古代の潟湖である淀江潟を望む標高 90 ～ 150 m の晩田山丘陵上に位置する、大規模集落遺跡である（松本編 2000）。丘陵上からは平野と海を一望でき、日本海の海上交通に際しては、ランドマークにもなったと推測される。標高のある集落立地を示すにも関わらず、弥生時代後期後半～古墳時代前期末・中期の石鍾がまとまって出土している。

① 観察結果

遺跡では II A・ii A・iii B 類石鍾が確認できた。弥生時代後期後半の松尾頭地区 45・46 堅穴住居跡出土の II A-3 類は（第 98 図 1）、左右対称の整った紡錘形に成形したもので、重量は 149.1 g を測る大型品である。体部には長さ 1.2 cm、幅 5 mm 程度の切削痕が連続してみられるが（第 99 図）、玄界灘のような縦方向の短い切削痕ではない。体部には曳きずられた痕跡はないこと、長軸 1 条、短軸 3 条の溝を刻み、石鍾にしっかりと固定できること、長軸溝の幅は 3 mm と太めで、釣用鍾かつ太めの釣糸を石鍾にしっかりと固定できるため、大型魚を対象とした釣用鍾と推測される。なお、本例のような多条の短軸溝を施すものは、福岡市箱崎遺跡にあるが、紡錘形ではない。

弥生時代後期後半の妻木新山 1S 区第 9 堅穴住居跡の iii B-3 類石鍾は（第 98 図 2）、形態は玄界灘にもあるが、素材がデイサイトで、観察したところ面を形成した研磨も雑で、左右対称の整った形ではないことから、玄界灘のものとは大きく異なる。

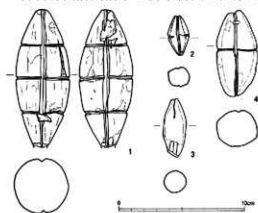
古墳時代前期前半の妻木新山 2 区第 38 堅穴住居跡の ii A 類石鍾（第 98 図 3）は未製品で、玄界灘のように全面ケズリ成形で形を整えるのではなく、最終的な形に近い素材を選んで採集し、必要な部分のみ加工することで加工の手間を省力化している。

その他、重量 50.8 g を測る比較的大きな II A-3 類石鍾でも（松尾頭地区第 32 号堅穴住居跡、第 98 図 4）、元々の自然石にほぼ溝を刻んだだけであり、小型の ii A 類の多くもそれに近いものが目立つ。

② 妻木晩田遺跡出土石鍾の位置づけ

妻木晩田遺跡の石鍾は、広い調査面積に比べ、出土量や器種・サイズのバラエティーが少ない。形態は左右対称に整っていないものが多く、施溝は鉄製工具で刻んでいるものの、多くがフリーハンドによる刻みである。これは博労町遺跡（第 97 図）や妻木晩田遺跡下の沖積地の井出股遺跡の石鍾と共通する。

体部調整は、3・4 では紡錘形に整形するために上部・下部にのみ、おそらく刀子状の鉄製工具で施しているが、玄界灘の切削痕のような（第 94 図 12）、縦方向に細かく連続して施すことで、丁寧に成形し、バランスを取ったものではない。また 3 から、丘陵上で石鍾を製作していることに加え、作りたい形に



第 98 図 妻木晩田遺跡出土石鍾（1/3）
（松本編 2000 に筆者加筆）



第 99 図 切削技法（第 98 図 1）
（鳥取県立むきばんだ史跡公園で筆者撮影）

見合った自然石を若干加工し省力化を図っており、整った形よりもバランスが取ればよいという意識が見受けられる。

以上、一言でいえば妻木晩田遺跡出土石鍾は雑な印象で、玄界灘の九州型石鍾の技法や意識が体系的に伝播したものではないと思われる。乗松氏は妻木晩田遺跡の石鍾を在地の山陰系有溝石鍾に位置づけているが(乗松 2013、p50)、その指摘は支持できる。

加えて、妻木晩田遺跡出土の多数の石鍾は、妻木晩田遺跡の集団が丘陵を降りて淀江湾周辺で釣漁を行ったという、日常の生産活動の一つに漁労活動が存在したことを示す。さらに石鍾のサイズは小さいものがほとんどであり、石鍾を含む釣漁具を集落まで持ち帰っていること、製塩土器の出土もないことから、集団が日常で食する新鮮な魚を捕獲するための漁労活動、つまり自給自足的な漁労内容が想定される。これらの内容は、妻木晩田遺跡の生産活動において、低地部や潟湖への日常的なアプローチを具体的に示しているが、玄界灘の漁労活動における水産加工品生産まで行う流れ(大庭 2023)とは一致しない。なお、妻木晩田遺跡の集団が低地部の生産域をどの程度開発、領域としていたか、低地部の集落・集団との関係については今後の課題であるが、石鍾の出土は使用した集団自体の低地から高所への集落の進出に伴ったことを示している可能性がある。

ちなみに、妻木晩田遺跡において鉄器出土数の増加と連動して石鍾も増加することから、鉄器との相関関係を見いだしたくなるが、石鍾の観察結果からは玄界灘との直接的な関係を見いだせる要素は少なく、山陰地域の石鍾の展開の中で考えるべき資料群と判断される。

(6) 青谷上寺地遺跡における九州型石鍾

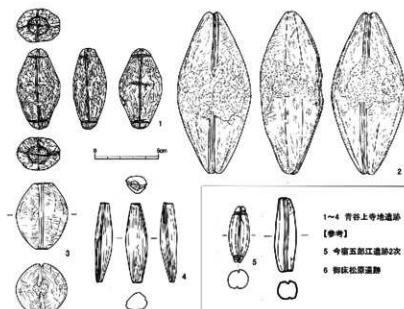
青谷上寺地遺跡は、日本海に突き出た長尾鼻という岬の西側、旧潟湖である青谷平野の微高地上に位置する。集落は弥生時代前期後葉～古墳時代前期初頭まで営まれるが、玉生産や木器容器類、約 50 点にものぼる船の部材、畿内・吉備・北陸など他地域に由来する土器などから、日本海に留まらない広域的な交易・流通の拠点として機能したと評価されている。

青谷上寺地遺跡では、II A 類、II B 類、III A 類、III B 類、iii A 類、iii B 類、v B 類という多種多様の九州型石鍾が出土し(河合 2015)、骨角製釣針やヤス・離頭鉋、アワビオコシ等の漁具、魚介類の動物遺存体から、漁労活動が主要な生産活動の一つとして位置づけられる。

①観察結果

石鍾は、長楕円形の短めの II 類石鍾や III A 類石鍾が多くを占める。このうち、弥生時代中期後葉に比定される県道 7 区 H 層出土の長軸 1 条・短軸 2 条の II B-3 類は(第 100 図 1)、表面を幅 3mm、長さ 1cm 前後の鉄製工具による連続切削痕を施していること(第 101 図)、色調はやや黒い黄灰色～灰白色、溝幅はいずれも 1mm と細く、玄界灘で多くみられる溝の彫り直しが認められる。玄界灘の類例としては、重量 14.5 g と小さいが、弥生時代中期後半～後期後半の今宿五郎江遺跡 2 次 SD100 出土 ii A-3 類(第 100 図 5)があり、玄界灘の II 類石鍾の影響を受けたと考えられる¹⁾。

弥生時代後期に比定される県道 7 区 H 層出土の長軸 1 条の II A-1 類石鍾は(第 100 図 2)、縦方向の幅 5cm 前後の面調整のち、丁寧に研磨し、色調も赤味を帯びた灰赤色、溝幅は 3.5mm で断面 V 字溝であることなど、先の県道 7 区 H 層の石鍾と同様、玄界灘の II A 類石鍾と共通する要素が複数認められる。また西川津遺跡出土 II A 類(第 95 図 2)と近似し、出雲西部を中継地として伝播した可能性もあるが、色調については玄界灘の直接的な影響をより強く感じさせる。



第100図 青谷上寺地遺跡出土石鍾遺跡と関連資料 (1/3)
(1~4は河合2015、5は二宮編1991、6は井上編1983)



第101図 青谷上寺地遺跡
石鍾(第100図1)の切削技法
(鳥取県立青谷かみじち史跡公園で筆者撮影)

詳細な時期は不明であるが、7区1層出土のⅢA・1石鍾(第100図3)は、形態、V字溝の両端部が繋がっていないことなど、材質が滑石であれば、今宿五郎江遺跡や御床松原遺跡など玄界灘の石鍾にも同様のものがある。なお、ⅢA類石鍾については、先の博多町遺跡出土ⅡA・ⅡA類石鍾(第97図)の成果も含めて考えると、球形の形態に溝1条というシンプルな形状から、玄界灘からの影響度の判断については、特徴的な要素が少ないため難しい。

弥生時代後期初頭～後葉に比定される国道2区SK220出土のⅤB・1類(第100図4)は、青谷上寺地遺跡唯一のⅤ類で、幅1.5mm、長さ1.5cm前後の鉄製工具による連続した切削痕が認められること、側面に1条の溝が巡る点は一致しないが、頁岩という材質、灰オリーブ色という色調、製作技法など、糸島市御床松原遺跡(第100図6)等で類例があり、玄界灘の直接的な影響が想定される。

②青谷上寺地遺跡出土石鍾の位置づけ

石材については、肉眼観察では博多湾沿岸産のものはないが、片岩系をはじめ、細粒砂岩や粘板岩、頁岩など博多湾沿岸と類似する石材を用いている。色調は玄界灘では赤味・ピンク色気味の滑石を意図的に用いることで、水中で目立たせたと考えているが(大庭2023)、青谷上寺地遺跡ではピンク色気味の石材を使用した石鍾が一定の割合を占める。色調などは石材の産地、対象魚種や周辺環境などにより変わることは当然で一概には言えないものの、玄界灘からの直接的な影響の存在を強く感じさせる。また形態的には、玄界灘でも博多湾西部の今宿五郎江遺跡周辺から糸島半島にかけての石鍾と類似する傾向にある。

このように、青谷上寺地遺跡出土石鍾は、玄界灘の九州型石鍾の形態、製作技術、色調が類似する一群が存在し、それは弥生時代中期後葉～後期でもやや古い時期にまとまる傾向にある。これは古い時期ほど、玄界灘の九州型石鍾の直接的な影響を受けていることを示している²⁾。なお、玄界灘のものの方が法量的に小さく、青谷上寺地遺跡出土石鍾の方が法量が大きくなっており、後期に入ると地域内で独自に展開するとした乗松氏の分析結果(乗松2013)は追認できる。

加えて、青谷上寺地遺跡の動物遺存体を分析した井上貴史氏は、弥生時代前期～中期にはクロダイがほとんどを占めるが、後期になるとマダイやマグロなどの外洋性のものが増えることから、後期に漁法や航海技術の発達により、より外洋魚が捕獲できるようになったと指摘する(井上2006、

p40)。この状況は先の九州型石鍾の在り方と時期的に調和することは注目できる。

以上、九州型石鍾の導入に際し、水中で目立ちにくいかつ切れにくい釣糸、強固な釣竿、大型魚の捕獲ではヤス・モリの併用など、玄界灘で発達した漁法がセットで導入されたと推測される。周辺環境にあわせて骨角製漁具を補完または機能を継承・発展した結果、独自に改良した九州型石鍾（山陰系有溝石鍾）が展開するなど、漁場の拡大に合わせて多種多様な漁具を揃えたと考えられる。

4. 北陸地域における九州型石鍾

(1) 先行研究

北陸地域における九州型石鍾に関する研究は、下條信行氏（下條 1984・1989a）と久田正弘氏（久田 2020）、次山淳氏（次山 2022）の研究がある。下條氏は京都府函石浜、福井県岡津及び食見など、九州型石鍾（Ⅰ類石鍾）に類似する石鍾について、形態の類似から弥生～古墳時代の玄界灘との関係性を導き出し、若狭湾まで至る博多湾の海人の行動範囲、集団間の交流関係を復元した（下條 1984・1989a）。また久田正弘氏は、北陸出土の九州型石鍾を含む石鍾を集成し、玄界灘の九州型石鍾との石材、形態との違いを指摘した（久田 2020）。さらに次山淳氏は、近年の九州型石鍾の研究動向を踏まえ、研究史を整理し、共伴資料に基づく所属時期、玄界灘の使用石材と大きさの違い、地域間の比較検討の必要性を指摘した（次山 2022）。

その後、筆者も日本海のⅠ類石鍾は、共伴遺物から玄界灘で盛行する弥生～古墳時代前期に属するものはないこと、一回り大きいこと、材質も滑石製ではないことなど、異なる点も多く認められ、弥生・古墳時代の玄界灘の石鍾とは系譜的に繋がらない可能性を指摘した（大庭 2023）。

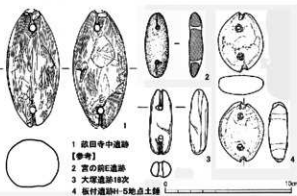
(2) 畝田・寺中遺跡における九州型石鍾

畝田・寺中遺跡は河北潟と海を繋ぐ犀川・大野川沿いの沖積微高地上に立地する。

古墳時代前期の99年C1区DS6からⅡA-1-い類が1点出土した（第102図1）。両端部に径5cmの穿孔を施し、両端部まで幅2.5cm前後のV字溝を繋げる。両端部には力が加わったことによる欠損があり、使用品と判断される。体部加工はまずは面加工を行い、その後一部には長さ2.5mm、幅2.5mm前後の連続した鉄製工具による切削を行う（第103図）。最終的にやや粗目の砥石で面の角を取るように研磨するが、水中で輝く、目立つような丁寧なものではない。法量は長さ9.3cm、幅4.15cm、厚さ3.7cm、重さ203.4g、石材は蛇紋岩で、本来の色調は明緑灰色である。

日本海の九州型石鍾は基本的に施溝のみであるが、本例は既に搬入品の可能性が指摘されている通り（立原 2006, p228）、孔と溝がセットとなっていること、紡錘形、面加工、切削加工など、玄界灘の石鍾の製作技法と共通点が認められる。体部裏面には少し曳ぎずった痕跡があるが、1点のみの出土のため、大型の釣用鍾と判断される。

このような形態や孔を有するものは、北陸地域はもとより山陰地域でもなく、同様の形態のもの



第102図 畝田寺中遺跡出土石鍾と関連資料
(1/3) (1は筆者実測、2は酒井1970、3は榎本2015、4は沢他1977)



第103図 畝田寺中遺跡石鍾
(第102図1)の切削技法

(石川県埋蔵文化財センターで筆者撮影)

は法量が小さいものの、ii A・3類石鍾が福岡市宮の前E遺跡(重量14.1g、弥生時代後期後半)(第102図2)、福岡市大塚遺跡18次SX011(重量19.5g、弥生時代後期終末)(第102図3)がある。土鍾ではあるが、本例と最も形態に近いものとしては弥生時代中期中頃～後期前半の福岡市板付遺跡H・5地点第1号溝出土土鍾がある(第102図4)。この土鍾は長さ4.9cm、幅3.5cm、厚さ1.5cm、重さ26.1gと、大きさは畝田・寺中例の約半分、断面は扁平で、孔径4mm、溝幅4mmとほぼ同様の数値を示す。なお、板付遺跡例も1点のみの出土で、釣用鍾と判断される。このことから古墳時代前期、玄界灘とは大きさや素材など異なる点はあるものの、畝田・寺中遺跡出土II A類石鍾は、形態・製作技術的に玄界灘の直接的な影響を受けた可能性がある³⁾。

5. 日本海沿岸地域の九州型石鍾の特徴とその在り方

これまで、日本海では弥生時代中期後半に九州型石鍾が出現し、古墳時代前期にかけて点的に展開することが確認できた(第104図)。型式としてはII A類のほか、II B類、ii A類、III A類、iii A類、v B類が認められ、弥生時代後期でも早い時期ほど、玄界灘の九州型石鍾と形態・製作技法、色調等との類似度が高く、特にII A類は大型化が顕著であることが整理できた。

石鍾の石材傾向をみると、西川津遺跡は片岩系と砂岩、青谷上寺地遺跡は砂粒砂岩3割、片岩・玄武岩2割、妻木晩田遺跡では安山岩7割、デイサイト2割、博労町遺跡では安山岩・砂岩・凝灰岩と、西川津遺跡や青谷上寺地遺跡では博多湾沿岸と近い石材傾向を示す一方、妻木晩田遺跡では地元産の安山岩・デイサイトにほぼ集約され、石材傾向と先の形態・製作技法・色調等との検討結果と調和的である。ただし、資料調査した限りでは、博多湾沿岸産の滑石製の石材で製作された石鍾はみられず、基本的に在産石材で在地で製作したものと思われる。

ちなみに、漁法は漁具のみでは取得できないものであり、実際に作業に立ち会って技術指導を受けないと正確には伝わらないことを前提とすれば、博多湾・糸島半島の人と日本海の人とが直接接触し伝わったと考えられる。西川津・青谷上寺地・畝田・寺中遺跡例は形態とともに製作技法や色調という意識も伝わったとみられ、人の移動など直接的なインパクトが想定できる。

特に九州型石鍾の中でもII A類石鍾は、弥生時代中期後半～後期に島根県西川津遺跡、鳥取県梅田萱峯遺跡、青谷上寺地遺跡と点的に認められることから、まずはII A類石鍾を主に用いる釣漁を受容し、定着したと考えられる。

また、日本海のII A類石鍾は鉄器で加工されており、弥生時代中期後半の九州型石鍾が出土する遺跡では、鉄器を保有していることなど(高尾2015、p91)、弥生時代中期後半に北部九州から鉄器と鉄器製作技術が東方へ伝播し、海人による長距離の地域間交流が活発化したことが、鉄器と九州型石鍾の相関関係に現れているとみている。ただし、石鍾の大きさと形態、限定された器種など、在地の海人の趣向や技術的な工夫に基づいたとみられるものが目立ち、山陰の海人が博多湾の海人から漁具・漁法の直接技術指導を受けたにしても、その内容をそのまま厳密に維持することができず、海域環境や自らの趣向を反映させた、または複雑ではない、分かりやすい、すぐに使える漁具を好んだなどという、在地の集団の主体性が窺える。特に丘陵上の妻木晩田遺跡におけるII A

また、山陰地域では弥生時代後期～古墳時代前期、備讃瀬戸地域由来の製塩土器を本格的に導入していないこと、古墳時代前期の鳥取県長瀬高浜遺跡では九州型石鍾を含む石鍾はなく、大型魚を捕獲したとされる多量の鉄製釣針（河野 2014, p190）や有溝土鍾が出土する。日本海沿岸地域は、弥生中期後半以降の博多湾や備讃瀬戸地域のような大量に水産物を捕獲できた網漁による水産物加工・流通システム（特産品生産）を必要とした社会構造ではなかったといえる。

6. 玄界灘沿岸地域と日本海沿岸地域との地域間交流について

以上、日本海沿岸地域における九州型石鍾を用いた玄界灘沿岸地域の漁具・漁法の直接的な接触は弥生時代中期後半がメインで、出土地域も時間的にも空間的にも限定的な在り方を示し、受け手側が新たな漁具・漁法を主体的に選択して受容したことが明らかになった。これまで日本海を通じた広域的な地域間交流の在り方にまで視野を広げ検討を進めてきたが、まとめの前に北部九州系土器や鉄器という地域の特徴を捉えやすく、地域間交流を把握しやすいモノの動態から、地域間交流の時期的変遷や内容について考えてみたい。

山陰地域における弥生時代中期末～後期の北部九州系土器は、出雲平野の下古志遺跡、古志本郷遺跡、天神遺跡など出雲西部にほぼまとまり、後期中葉～後半は山持遺跡等で増加するが、古墳時代以降はほぼみられない。北陸地域の鉄器の様相は山陰地域と類似することから、鉄器や鍛冶技術は西側からリレー方式でもたらされた可能性がある。このことから、出雲西部が弥生時代～古墳時代前期を通して北部九州系要素の直接的な受容の窓口・中継地であることを示している。また出雲西部では西部瀬戸内系土器も認められことから、物資流通は北部九州→出雲西部→北陸と日本海沿岸の潟湖に存在した港津集落が連携するリレー式交易が中心であったとみられる。なお、出雲東部より東では土器・鉄器・九州型石鍾以外の北部九州系遺物はほぼみられず、簡単に山陰系と東との直接的な交易には至らず、無制限に日本海を移動するわけではないことがわかる。ただし、交流ルートや在り方も時代により波があり、変化があることは留意する必要がある。

さらに、日本海沿岸地域で出土した北部九州系土器は、煮沸用の甕はごく少量で、長期的な滞在は考えにくい。また内容物が外にこぼれ難い、移動に適した大型複合口縁壺や大型甕などは、航海に必要な物資や交易を納めた容器、運搬用コンテナとして用いられたと想定され（常松 2001）、北部九州系土器と人の動きは単純に相関するわけではない。

博多湾沿岸地域においては、山陰系・北近畿系土器が主体となる日本海沿岸系土器が弥生時代中期後半～後期初頭から少数みられるが、弥生時代後期以降、出土数が増加する。その出土遺跡は、元岡・桑原遺跡群などの糸島地域東部から、次第に博多遺跡群や唐原遺跡など博多湾東部が増える傾向にある（久住 2021）。特に唐原遺跡では後期後半以降の煮沸用の甕が主体とする山陰系土器と北近畿系土器が竪穴住居跡からまとまって出土しており、日本海沿岸地域からの日常生活容器を伴った小規模な集団の移動・一時滞在の痕跡を示していると理解される（森本 2013, p61）。これは、推測とはなるが、鍛冶技術等の新技術の取得や素材の入手のため、日本海沿岸地域の集団が博多湾岸に一時的に移動・一時滞在したことを示している可能性がある。博多湾では古墳時代初頭以降、北近畿系土器に変わり、出雲西部系の山陰系土器の出土遺跡・量が急増し、布留系土器と模倣・融合し、土器様式の一組成をなすようになる。加えて、弥生時代後期終末を前後する時期には、花仙山産碧玉の搬入と山陰系玉生産技術の移植による一時的な管玉や水晶玉生産が糸島市潤地頭給遺跡

や北九州市城野遺跡など、局所的に確認されている（谷澤 2019）。

これらは、博多湾沿岸地域の朝鮮半島系土器の出土の在り方と共通点が多いことから、対外交流を含めた広域的な流通の活発化と連動している可能性が高く、山陰からのモノからみえるヒトの動きは大陸との交易がその目的の主体であったと理解されている（森本 2013、p61）。

以上、弥生時代中期後半以降、玄界灘から技術導入した鉄素材や鉄製品などの新技術や情報などの外部依存の高まりにより、日本海沿岸地域では地域間交流が活発化するが、この段階では両地域における九州型石鍾や土器の在り方から頻度は低いものの漁法の伝達や内容がある程度維持されているなど、双方向的な交流で、かつその内容も一時滞在もあるうものであったと予想される。

しかし、弥生時代後期後半以降博多湾における一定量の山陰系土器の搬入事例などから、山陰地域の諸集団は北部九州の諸集団との関係をさらに深め、鉄器を中心とする交易ネットワークを基盤とした日本海沿岸の広域的な地域圏を確立したとみられるが、壺を中心とするコンテナとしての九州系土器や九州型石鍾の在地化など、人の動きは弥生時代後期以降、徐々に山陰→北部九州への動きが増していくと同時に、北部九州からは往来を中心とした交流内容が薄いものになる。古墳時代初頭にはその傾向が増し、一方的に近い、博多湾沿岸地域に集う交易内容に変化した可能性が考えられる。

池淵俊一氏は鉄素材や九州型石鍾については山陰各遺跡でかなりの組成偏差が認められることから、山陰各地域の有力集団が個別に北部九州との繋がりを確保し、交易を行っていたと指摘したが（池淵 2012）、博多湾沿岸地域でも先の日本海沿岸系土器や山陰系玉生産の関連遺跡には偏りが認められる。このことから、山陰地域と北部九州との交易は集落・集団ごとにそれぞれ独自の外部交渉ルートを持ち、その地域間、集落間の結合度の具合や必要とする財の種類や技術取得等により、それぞれ異なっていた可能性がある。

7. まとめ

今回検討した九州型石鍾の動向は、玉生産と鉄器生産のように緊密に連動する内容ではないが、北部九州系土器や鉄器生産技術の伝播、鉄器保有状況とある程度相関する傾向が見受けられた。よって、ヒスイから始まる玉という北部九州の諸集団の必需品であった交換財を通じた交易環境を基盤として、いち早く先進技術を安定的に入手するルートを開発した日本海と玄界灘の海人とのネットワークは、鉄器をはじめとするモノ・技術、情報を入手するための基軸の一つで、その交流を通して多様なモノ、情報がもたらされたと理解できる。

弥生時代中期後半の日本海における九州型石鍾の動きは、玄界灘の海人と日本海の海人が直接に接触したとみられ、長距離の地域間交流は両地域の海人が直接的な担い手として関与した可能性がある。両地域の交易形態は、伝統的に出雲を核とする日本海沿岸諸地域の連携を基づくリレー方式を基盤とするが、九州型石鍾の動きは、直接的なアクセス、一時滞在も考えうる交易形態も存在した証拠の一つとなりうるのではないかと考えている。日本海沿岸地域の人々は漁具だけではなく、漁法も直接みて効果を感じたからこそ九州型石鍾を導入したとみており、リレー方式ではそうはならなかったのではなかろうか。弥生時代中期後半、鉄器や鍛冶技術等の先進的な技術の取得など、遠隔地である玄界灘沿岸地域の諸集団との交流の強化と安定化のため、玄界灘の海人と直接接触する必要が生じたことが、この背景にあるとみている。

その後、弥生時代後期後半以降、日本海の九州型石鍾は局所的な分布や地域内の展開にとどまり、玄界灘との継続的な漁労技術の交流やシステム化の導入までは原則には至っていない。また弥生時代後期初頭の紀元前後、急激な降水量の増大による環境変化により（中塚他編 2021）、中期後半以降、山陰地域では沖積地から丘陵部へ集落が進出し大規模化する（高田 2009）ことなど、環境的・社会的な要因、集団の移動や再編成に基づく地域社会の多様性、さらに各集団の嗜好など、複合的に連動したことがあらわれていると考えている。さらに、鉄器・青銅器の運搬の直接的な担い手として、海人を想定するのであれば、九州型石鍾を用いた漁法まで正しく伝わっていないことが大半であることから、基本的に物資の運搬のみという往来レベルでとどまり、鉄器生産など高度な技術伝達などで移住や滞在が必要なものは、海人の往来とは別スキームで考える必要があることを示していると考えている。

加えて、古墳時代前期初頭、出雲平野の山持遺跡から古志本郷遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡から長瀬高浜遺跡への交流拠点の移動は、博多湾貿易成立に端を発する広域的な地域間ネットワークの再編との関係性を指摘する意見や（君嶋 2021、p40）、古志本郷遺跡では博多遺跡群と同様の蒲鉾形籾羽口、鳥取県長瀬高浜遺跡では鉄製釣針も多く出土し、鉄器に関わる交易に海人集団が密接に関与したなど（池淵 2008、p21）、玄界灘と山陰両地域は各集団の人的交流や交換財を含めてより緊密な繋がりが想定できるものの、九州型石鍾等から両地域の海人の動きはみえにくくなる。

今回の検討により、日本海沿岸地域の地域集団にとって、玄界灘沿岸地域を経由した大陸系文物・技術や情報は、地域社会を安定に運営するためには欠かすことができないものであり、日本海ルートへの担い手となった両地域の海人が直接的に接触することで九州型石鍾が当初伝播したと結論付けた。従来の検討では「モノ」の動きをとらえていたが、九州型石鍾の検討からは「モノ・情報」を伝えた「ヒト」の動きの具体相の一部をとらえることができたと考えている。

なお、日本海における九州型石鍾自体の資料数が少ないことや詳細な時期決定が難しい資料も少なくない。よって、集落内でも時期ごとに安定して存在するかという問題や時期的な変遷、現状の集落研究との整合や遺跡における生業、環境・景観などとの関係性については十分検討することができなかった。今後日本海沿岸地域において、発掘調査で大量の九州型石鍾が発見され、本稿の前提条件が大きく変わることも十分予想される。特に北部九州と出雲間の現在空白地となっている長門・石見地域で九州型石鍾等の発見により、今回の検討結果が大きく変わる可能性がある。今後の調査に期待したい。

【註】

- 1 青谷上寺地遺跡で弥生時代前期後半～中期前半の包含層からⅡ A・2 類石鍾 1 点が出土するが（河合 2015）、当該期は玄界灘沿岸地域においても九州型石鍾の出現期にあたるため、九州型石鍾の影響を受けたのかは不明である。
- 2 青谷上寺地遺跡では朝鮮半島系土器は出土していないが、玄界灘を介さない朝鮮半島との独自交易ルートが存在した可能性が示されている。ただし、鳥取県東部から朝鮮半島へ直接至る航海ルートは対馬暖流を逆流、寄港地もなく、当時の航海技術からみても難しい。一方、出雲西部で朝鮮半島系土器が一定量出土していることから朝鮮半島から山陰地域へのルートは存在する可能性もあるが、言葉や物々交換の仲介者などの問題が残る。
- 3 その他、石川県小松市八日市地方遺跡で、弥生時代中期中葉のⅡ B・3 類石鍾 1 点が出土するが（福海他

2003)、特徴は山陰系有溝石鍾に近いが、山陰地域よりも時期的に先行する。また同市平面梯川遺跡で弥生時代後期前半～後半のⅡA・3類の有溝石鍾が出土する(垣内他2000)。さらに、新潟県長岡市五千石遺跡において、古墳時代前期中頃～後半のⅡA・2類石鍾、ⅤA類石鍾が各1点が出土する。それに短軸溝を施した類似例は西川津遺跡にある(第95図1)。なお、これらは玄界灘との直接的な系譜関係よりも山陰地域との関係で考える必要がある。

【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費 J P18K01085、令和5年度日本海学研究グループ支援事業助成金の助成を受けた成果の一部を含む。本稿を草するにあたり、以下の機関・個人に御協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

石川県埋蔵文化財センター 糸島市立伊都国歴史博物館 小松市埋蔵文化財センター 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 鳥取県青谷かみじも史跡公園準備室 鳥取県立むきばんだ史跡公園 長岡市立科学博物館 福岡市埋蔵文化財センター 米子市文化財団米子市埋蔵文化財センター 池淵俊一 大川泰弘 小椋京子 小原貴樹 加藤由美子 上角智希 河合修 河合章行 久住猛雄 立原秀明 玉木秀幸 端猛 林大智 久田正弘 松山智弘 真木大空 岡野大丞 湯村功 横幕真

【引用・参考文献】

青木遺跡発掘調査団1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

池淵俊一2008「出雲・石見・隠岐の鉄器」『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会
第36回山陰考古学研究集会事務局

池淵俊一2010「山陰における朝鮮半島系土器の様相―弥生時代後期を中心に」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討―弥生時代を中心に―』第59回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第59回埋蔵文化財研究集会実行委員会

池淵俊一2012「山陰の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会

井上貴央2006『青谷上寺地遺跡の弥生人と動物たち』鳥取県教育委員会

井上裕弘編1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会

内田律雄・江川幸子1989『西川津発掘調査報告書Ⅴ』島根県土木部河川課 島根県教育委員会

内田律雄2013「九州における日本海の九州型石・土鍾」『寒暖流の考古学Ⅰ』第4回海洋考古学会資料集 海洋考古学会・瀬戸内海考古学研究会

榎本義嗣2015『大塚遺跡8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1255集 福岡市教育委員会

二宮忠司編1991『今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集 福岡市教育委員会

大庭孝夫2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館

垣内光次郎・川畑誠・布尾幸恵・鈴木三男・能城修一2000『小松市平面梯川遺跡 第2・3次発掘調査報告書』
徳石川埋蔵文化財センター

加藤由美子・竹部祐介・南波守・松井奈緒子編2011『五千石遺跡1区・3区・4区東地区・5区』長岡市教育委員会

河合修2009『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町文化財調査報告書第30集 志摩町教育委員会

河合章行2015『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告10 石器(1)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告60 鳥取県埋蔵文化財センター

- 君嶋俊行 2021『港湾集落・青谷上寺地遺跡の終焉』『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会
- 久住猛雄 2007『博多湾貿易の成立と解体ー古墳時代初頭前後の対外交渉機構ー』『考古学研究』53-4
- 久住猛雄 2021『博多湾岸地域における山陰系土器の動向（予察）』『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会
- 河野正訓 2014『地域からみた鉄の管理体制ー事例研究③鳥取県長瀬高浜遺跡ー』『古墳時代の農具研究ー鉄製刀先の基礎的検討をもとにー』雄山閣
- 酒井仁夫 1970『宮の前遺跡E地点』『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集』福岡県教育委員会
- 沢臣臣・山口譲治・原俊一 1977『板付周辺遺跡調査報告書（4）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 福岡市教育委員会
- 下條信行 1984『弥生・古墳時代の九州型石鍾についてー玄界灘海人の動向ー』『九州文化史研究所紀要』29 九州文化史研究所
- 下條信行 1989a『弥生時代の玄界灘海人の動向』『横山浩一先生退官記念論集Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会
- 下條信行 1989b『鳥根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地域と北部九州』『西川津発掘調査報告書Ⅴ』鳥根県土木部河川課 鳥根県教育委員会
- 高尾浩司 2015『鉄器の流通・保有状況からみた山陰弥生集落』『古代文化』67 公益財団法人古代学協会
- 高田健一 2009『鳥取県における弥生時代後期の社会変化』『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会
- 立原秀明編 2006『畠田西遺跡群Ⅲ』石川県教育委員会 御石川県埋蔵文化財センター
- 谷澤亜里 2019『古墳時代の山陰系玉類ー出雲地域、北部九州地域の様相からー』『古墳時代の玉類の研究』鳥根県古代文化センター研究論集第21集 鳥根県古代文化センター
- 次山淳 2022『研究史からみた本州中部日本海岸の「九州型石鍾」』『高山流水ー赤澤徳明氏退職記念論集ー』『高山流水ー赤澤徳明氏退職記念論集ー』制作委員会 p95-105
- 常松幹雄 2001『土器からみた弥生時代の交易』『弥生時代の交易ーモノの動きとその担い手ー』第49回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 常松幹雄 2013『弥生土器の東漸』『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集 雄山閣
- 中塚武他 2021『新しい気候観と日本史の新たな可能性』気候変動から読みなおす日本史Ⅰ 臨川書店
- 長家伸 1996『姪浜遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集 福岡市教育委員会
- 乗松真也 2007『弥生時代の漁労』『海と弥生人』第8回弥生文化シンポジウム 鳥根県教育委員会
- 乗松真也 2013『山陰系有溝石鍾からみた弥生時代後期の妻木晩田遺跡』『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2013』
- 瀬野浩美編 2011『博多町遺跡』御米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書64 米子市教育文化事業団
- 久田正弘 2020『北陸地域の九州型石鍾と山陰系壺形土器について』『石川県埋蔵文化財情報』第43号 石川県埋蔵文化財センター
- 福岡貴子・橋本正博・宮田明 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
- 松本哲編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅳ 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 森本幹彦 2013『博多湾岸域出土の日本海沿岸系土器ー土器からみた弥生時代後期における日本海交流の様相ー』『みづほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会

大庭孝夫（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

第5章 総括

第2～4章までの各論者による西新町遺跡出土品に係る精緻な分析から、本遺跡をめぐる国内外のヒト・モノの動きが明らかになった。ただし、今回取り上げた朝鮮半島系・畿内系・山陰系・吉備系・肥後系土器以外にも、西部瀬戸内系土器、東部瀬戸内系土器、豊前系土器、日向系土器等の存在が久住猛雄氏により指摘されている（久住2017）。今回の検討の中では抽出が難しかった資料もあり、検討対象外の土器の様相については今後の課題である。

また、畿内・山陰・吉備・北部九州等の広域的な土器の併行関係については、多くの議論がある。布留0式新相～布留1式に本遺跡の広域交流の接点の盛期が絞られることで概ね一致をみるが、本書でも執筆者間で若干ズレが認められる。これは広域交流の変遷過程を検討する上で問題となるため、本書では日本列島内外の広域交流の変遷過程の検討はできておらず、今後の課題である。

よって、ここでは各執筆者による本遺跡の評価に基づき、朝鮮半島・日本列島諸地域との関係、生産活動、交易の実態、政治勢力との関係、本遺跡での位置づけというテーマを絞ってまとめる。

なお、本総括で、前章までの評価を十分汲み取っていない点については、執筆者の責任に帰する。

○ 朝鮮半島諸地域との関係

本遺跡で出土した多種多様な朝鮮半島系土器は、古墳時代前期の日本列島内においては断トツの出土量を誇る。このうち、朝鮮半島からの搬入土器は、交易を目的に朝鮮半島からのヒト・モノの移動に伴ってもたらされたと理解できる。その系譜をみていくと、平底で小円形の多孔の甗をはじめとする馬韓系、金海・咸安など朝鮮半島南部各地域に由来する多様な系統のものがみられるが、中でも馬韓系の土器が目立つ。このことから、当該期の倭と朝鮮半島との交流は基本的に多元的交流で、本遺跡が朝鮮半島西南部の馬韓系集団が大きな役割を担ったであろう楽浪郡に至る海上交通の東端の拠点であったことが考古学的に実証できたことは大きな成果である。

朝鮮半島系土器の模倣土器については、外面調整が朝鮮半島系譜の格子目タタキや縄目タタキ等だけではなく、ハケ目やケズリなど、倭の伝統的な土器製作技法も併用することから、その属性は複雑である。よって、朝鮮半島系土器の在地での模倣品か、土師器を模倣したものか、あるいは朝鮮半島南部で製作された土師器模倣品が日本列島に搬入された可能性が考えられる。

特に甗というこれまで日本列島にはない器種と造り付けカマドは、渡来人の滞在期間・内容、倭人との関わりなど遺跡での活動内容がある程度推測できる可能性がある。搬入品以外の模倣された甗は多様な技法や形態があり、定型化していない。朝鮮半島系平底鉢は少量あるが、甗を除く煮沸具、高坏や鉢などの供膳具のほとんどは在地の土師器を使用している。

このことから、模倣された甗は、渡来人が在地集団と交渉して、製作を依頼していた状況が想定され、渡来人には土器製作者はあまり含まれなかった。加えて、定着することはない交易のための短期的な滞りで、基本的に生活に必要な道具や食料等は倭人から提供を受けたと推測される。本遺跡の集団は甗・カマドを使用する生活様式を知りえたが、炉という伝統的な生活様式を維持する。これは、カマド・甗等は原則拡散しないことや渡来人の墓地が存在しない状況と整合する。

○日本列島諸地域との関係

古墳時代前期初頭～前半、日本列島各地域で遠隔地の土器が出土する現象が顕著に認められるようになるが、本遺跡で出土した日本列島各地域に由来する土器の数量は、日本列島内でも際立っている。その内容は、畿内系（庄内系・布留系）、山陰系、吉備系土器が主体で、その他西部瀬戸内系、東部瀬戸内系土器、九州でも筑後・肥後系土器等が認められる。

畿内系・山陰系土器は、一部搬入品や製作技術体系の受容が伴い、在地系を含めた折衷・模倣現象が認められ、生産・工人も複合して在地の土器様式内に定着する。一方、吉備系土器は搬入土器のみで、折衷・模倣現象はない。布留系甕は、畿内系に加え、在地系や山陰系土器の要素が認められるが、吉備系列点文は非常に少なく、土器づくりにおいては吉備の影響が非常に少ない。また畿内系・山陰系の中でも一部の器種は長期にわたって器形の情報が伝わっていることなど、土器製作動向は複雑であることが明らかになった。

また、布留系甕は畿内地域にはないサイズの作り分けが認められ、特に長胴甕で、法量の大きいものは、それまでの在地系甕の影響やカマドに掛ける湯釜としての用途も考える必要がある。吉備系土器が搬入品で器種も甕と鉢のみ、甕のスス付着の在り方が吉備と同様であることなどから、カマドでの蒸し調理も含めて、各地域から来訪した集団は故地の伝統的な調理方法を求め、それに応じた適切なサイズの布留系甕が製作され、供給されたことを示している。

山陰系土器は出雲平野の山陰系土器の各器種が在地化しており、量と質において、西日本で山陰系土器の器種がこれだけそろっているところはなく、弥生時代以来の地域間関係に基づく、出雲平野との緊密な関係が窺える。一方、畿内・山陰地域で出土する朝鮮半島系土器や北部九州系土器の出土は非常に少ない。これは、朝鮮半島の渡来人が日本列島各地域に赴いたのではなく、交流の場は博多湾沿岸、特に本遺跡に集約・限定され、日本列島各地域の人々が集ったことを示している。

さらに、博多湾、吉備、山陰、河内等には、第4章第5節日本海沿岸地域の九州型石鍾で示されるように弥生時代後期終末～古墳時代前期前半において、多数の外来系土器などから交流拠点となるような大規模な集落が形成され、その消長が同様であることから、それぞれが密接な関係を持ちつつ新たなネットワークを展開していたと理解されている。ただし、朝鮮半島系土器や畿内系・山陰系・吉備系土器からみえるヒトの動きをはじめとする広域交流は、複雑・重層的で一様ではなく、必ずしも同じ脈絡で地域間を往来したわけではない。加えて、朝鮮半島と同様、畿内、山陰等の他地域から赴いた人の埋葬を示唆する墓はなく、基本的に日本列島各地域との往来は往来レベルが主体で、滞在するにしても短期滞在が主体であったとみられる。

なお、小型精製器種の影響源として中河内地域が示されたことは、当時の土器からみえる広域交流については政治及び権力との距離感が認められ、日本列島規模で活発なヒトの動き、多様な交流については、経済的な視点でも考えていく必要がある。

九州各地域との交流については、筑後～肥後北部からの搬入土器の存在が明らかになったが、畿内・山陰系土器に比べ非常に少ない。遺跡で行った諸活動に際し、九州各地域からの諸物資は必需品で、その移動・運搬にあたっては陸路の利用も想定され、それなりの人数が関わったと予測されるが、その実態は畿内や山陰、吉備と同様、往来レベルの交流に留まることを示す可能性がある。

ただし、九州内での布留式系土器の検討では、土器情報は各地域の拠点集落を介して受容、展開したことが示されており、その伝播にあたっては福岡平野からの土器製作者の移住も考えられ、その実態は複雑である。

○ 生業・生産の指向性～質と量を伴っていたか～

玉生産においては、ガラス小玉鋳型の出土数は5点と少なく、常時ガラス小玉生産を行い、流通させていたとは考えにくい。蛇紋岩製勾玉生産については、技術系譜は不明であるが、技術的に高度なものではない。遺跡には一定程度の渡来人が滞在していたはずであるが、玉生産はいずれも小規模で、高度化、安定・継続化の様相はみえず、質はともかく生産したようにみえる。玉生産以外の手工業生産は不明な点が多いが、本遺跡でみられる手工業生産技術は渡来人が倭人に直接技術を指導し、伝達することはほぼなかった可能性と、先端技術取得のため、朝鮮半島から渡来人を招聘することによって、技術を得ようとした姿はみえない。つまり、本遺跡においては、朝鮮半島系の先進的な技術を直接導入できる環境にあったものの、渡来人は技術者系ではなく、基本的に朝鮮半島から交易のために一時的に往来・滞在し、交易等の所定の目的を果たした後は帰国した交易者が主体であったといえる。これは先のカマド及び甕、朝鮮半島系土器の状況と一致する。

出土漁具の分析では、在来の漁具に加え、網漁法等新たな漁労技術の導入と改良によって、多様な漁法と規模の拡充を図ることで水産資源の範囲を拡大させ、自家供給を大きく超えるような、商品生産に近い自律的な生産と評価できる。博多湾岸において、九州型石鍾・製塩土器・飯蛸壺等の漁具が出土する遺跡では外来系土器が伴っていることが多く、交易を前提とした生産、集約化された分業体制が漁労活動にも要求され、その結果として新たな漁具の導入・伝統的な漁具の改良により、特定の水産物の漁獲や加工が発達したと考えられる。加えて、製塩土器、飯蛸壺の動向から、故地である芸予諸島、大阪湾からその生産技術も含めてダイレクトに導入しているが、故地との関係は継続的なものではないという、先に検討した日本列島各地域に由来する土器の在り方と調和する。

本遺跡では複数の手工業生産が確認できるが、生産域が居住・滞在域と一体になって存在し、機能分化したエリアが有機的に配置された姿はみえない。また、本遺跡にみられる技術共有の多くは遺跡の領域を超えることはなく、一部の漁労活動を除き技術継承も明確ではなく、その規模も小規模でかつ必要に応じた小ロット生産形態のようにみえる。とりあえず交換財を確保するための生産体制であったと想定できる。

これは、古墳副葬品となる精製品の生産や財の循環を引き起こすような戦略物資の手工業生産に重きを置いた状況ではない。ただし、博多遺跡群における鉄器生産は、鍛冶関連遺構・遺物の集中から、その生産技術は一定程度の管理や継承がなされていた可能性がある。

以上、本遺跡における手工業生産は朝鮮半島や日本列島各地域からの技術導入による技術革新を繰り返しながら継続するものではなく、その技術が基本的に周辺に広がることもない。交易の場を維持することを目的に、交易のたびに、必要な分だけ生産し、必要な財が足りれば生産を終了する生産体制であったと理解できる。朝鮮半島との人的交流が幾重にもわたるにも関わらず、その内容は主に交易のみで、渡来系技術や知識の導入には、5世紀に比べ積極的ではなかった集団、地域社会の性格が窺える。

○ 交易の実態～渡来人が西新町遺跡にやってきた理由～

朝鮮半島南部各地域から渡来人がわざわざ本遺跡にやってきた契機・理由は、交易のためとみられるものの、その具体相はあまり良くわかっていない。遺跡内における朝鮮半島や日本列島の各地域からの集団の受入数、居住・滞在度合い、帰国等に至る実態は、複雑で重層的であったことがうかがわれる。

『魏志』倭人伝の記事にある中国王朝との政治的なハイレベルの通交では、ヒスイ等の玉類、真珠、織物・布、生口などを献上している。一方、経済的な交易を含むローレベルの交流・交易では「南北市糴」の記事にあるように、朝鮮半島との主要交易品の一つとして「コメ」が想定され、その他絹・布、碧玉・水晶の玉類などが交換財として予想される。

「加耶の鉄」等の外部物資は付加価値の高いものが多いと考えられ、日本列島各地域の集団は地域の特産物、渡来人にとって付加価値の高い交換財を携え、外部物資と交換するために本遺跡にやってきたと考えられる。ただし、山陰では古墳時代初頭には玉生産が盛んでなくなっているなど、これらの想定される交易品は玉類以外いずれも遺物として残りにくいものが多く、交換財の中身の把握はなかなか難しい。しかし、近年、大型船（準構造船）の素材となる大径のクスノキ材が日本列島から朝鮮半島にもたらされた可能性の指摘など（柴田 2022）、交換財の中身については、史書に捉われない幅広い視点での検討が今後必要である。

なお、本遺跡内で行われた日本列島産の交換財と外部物資の交換交渉の場面において、交換財の値段がはつきりしなかった際、各地域の集団からの要請に応じ、本遺跡の集団は対外交関係先との間に立って積極的な交渉調整、仲介者としての役割を担った可能性を考えている。加えて、朝鮮半島各地域の集団との友好関係や情報網を活かし、朝鮮半島各地域の集団が求める交換財の情報について、本遺跡の集団が日本列島各地域の集団に提供し、日本列島各地域の集団が用意可能な交換財の付加価値を高めたという情報提供者の役割を担っていたことも十分ありうると思われる。

さらに、朝鮮半島の目的地までの長距離航海を成功させるためには、その間の中継地との最低限の友好関係は必然で、渡海時期や潮、海流を見極める知識や技術の経験値を持ち、それが伝承されていくことが必要である。今回の検討において、馬韓系の集団の活動が大きかったと予測できるが、本遺跡の集団は漁労活動に伴う操船技術や航海技術に関する知識、朝鮮半島各地域の集団との友好関係を活かし、移動の直接の担い手として従事した可能性があるとともに、朝鮮半島及び日本列島内各地域の地域勢力の接点、調整役としての役割を担ったとみている。

○ 西新町遺跡と政治勢力

一般的に外国への贅沢な献上物など、よりハイレベルなもののほど、その流通範囲も大きいと想定されるが、本遺跡出土の畿内系土器は大和地域の直接的な影響はほぼみえず、河内地域の土器様相との親和性が認められる。また、大和東南部のような墳墓の規模や内容によって、地域社会内のエリート層の明示は起きていない。また逆に当該期、中国、朝鮮半島との交渉を示す物証は、瀬戸内～畿内にかけては非常に少ない。よって、本遺跡の集団が関わった交易ネットワークに関しては当

時の政治勢力が主導した強い強制力がなかったことを示している。

本遺跡を統率した地域勢力は、本遺跡の墳墓とされる藤崎遺跡における複数の三角縁神獣鏡の存在から、古墳時代の政治権力の形成にあたり、中国・朝鮮半島の諸勢力との交渉・交易は欠かせない要素であったといえ、朝鮮半島南部の諸集団とのコネクションを持つ本遺跡の集団は倭王権にとって非常に重要であったと想定できる。

ただし、本遺跡の存立は地域内での相互依存、経済的な裏付けを抜きにしてはありえない。加えて交易品の調整等、日本列島各地域に一定の影響力を伴うためには、ある程度の政治的意思決定が必要である。畿内系の小型精製器種の一部は、継続的に畿内からの器形情報が伝わっており、祭祀という面では畿内からの継続的な影響が想定される。今後、王権や地域首長との関わり等積極的な意義づけの検討が今後求められる。

○西新町遺跡とは何か

弥生・古墳時代の「倭」社会は、中国・朝鮮半島からモノ、技術、情報等を盛んに受容し、それらを定着させることで社会が発展するが、それを維持・発展させるためには、中国・朝鮮半島とを繋ぐ国際交易拠点・結節点が必要であり、地理的・歴史的に博多湾がその大きな役割を担った。

早良平野では小型精製器種自体があまり振るわず、小型精製器種を用いた儀礼的な広がりもないことが予想されるが、これは外部との接触の増加によって取引の安全性や病氣・治安の問題も同時に生じるため、地域勢力はこれらを囲い込む必要も生じていた可能性が考えられる。さらに、本遺跡はちょうど立地的に伊都国と奴国の領域の中間点に位置するは、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいる可能性があり、それらが古墳時代初頭、本遺跡が交易センターとしての性格を強く浮き立たせることになった。

本遺跡は、弥生時代中期後半から漁労や交易を生業の主体として営まれ、甕棺墓群も形成されている。後期前半には集落が一時衰退し、後期末に遺跡南側を中心に集落が再形成される。このような集落動態は、博多湾岸における一般的な集落構成である。後期中葉以降、糸島平野を中心に楽浪系土器が増加し、博多湾西側に対外交流の中心があるが、後期末までは博多湾での多系統の広域交流チャンネルがみられる。古墳時代初頭の本遺跡の整備により交流チャンネルは集約化されるものの、多系統の交流チャンネルはかなり縮小されつつも維持される。

布留0～1式新段階をピークとする本遺跡出土の国内外各地域の土器から、朝鮮半島や日本列島各地域の地域集団を連結した交易網が形成され、相互に連動することでネットワークとして機能し、長距離かつ広範囲な地域からヒトが流入し、本遺跡自体が大きな求心力を持ったとみられる。この状況は古墳時代初頭に活発化した対外交流関係に日本列島各地域の集団が参画した結果と捉えられる（重藤 2018、p336）。ちなみに、山陰地域との弥生時代中期以来の伝統的な交流ルートは維持されているが、瀬戸内から畿内ルートについては弥生時代後期までのネットワークとは質・内容ともに再構築・大きく更新されている。

一方、朝鮮半島の生活様式と接した本遺跡の集団は、堅穴住居カマドや甕などの新来の調理を積極的に受容・融合した姿がみえず、朝鮮半島系要素の多くも本遺跡外に波及することはない。このように、本遺跡の集団の様々な場面で能動的な選択が日本列島各地域への技術・情報の伝播にあ

たっても影響を及ぼしていると考えられる。ちなみに、遺跡では交易に伴って入手したモノ、技術に対し、強い制約をかけたような様子は確認できないため、遺跡に集った日本列島各地域の人々にある程度広く門戸を開放していたと想定される。

また、鉄等の外部物資の交換財を調達するため、玉類、コメ、木材など、遠隔地を含む他地域からの特産品の流通あるいは生産を一定程度調整するとともに、足りないものは自ら一部生産も担うが、本遺跡での生産規模は小規模で、生産技術は高度化に至らず、継続的ではない。このように博多湾沿岸の遺跡間相互補完、分業の傾向がある手工業生産は、高度な専門化や中国・朝鮮半島からの最先端技術の導入による手工業生産という方向性はみえず、古墳時代中期以降の渡来系工人がもたらした技術革新とは質的に異なる。つまり、渡来系技術を活かすような生産流通機構を持たなかった、この生産流通の不完全さこそが本遺跡の特質ともいえる。

広域的な地域同士の政治的な統合が古墳時代の特徴の一つとすれば、広域社会の形成には日本列島内外各地域を結び付ける地域集団が不可欠であり、その調整役となる地域集団の一つが本遺跡を含む博多湾の在地勢力であったと推測できる。多くの場合、日本列島各地域の地域勢力が北部九州の地域勢力と全く関係を持たず、独自に中国・朝鮮半島との対外交渉を行うことはなかったと考えている。ただし、朝鮮半島系・畿内系・山陰系・吉備系土器からみえるヒトの動きは複雑で一樣ではない。この違いは何に起因するのか今後比較検討を深めることで、本遺跡の意義についてもより明確になる。なお、日本列島各地域の地域勢力は北部九州の地域勢力と対等な関係で、本遺跡が調整役となるものの、各自が主体的に対外交渉を行ったと想定している。

本遺跡では、堅穴住居カマドや朝鮮半島系土器、畿内系・山陰系・吉備系土器が特定居住・滞在区、あるいは居住・滞在区内の特定地点に偏って出土する傾向はなく、出自集団によるコロニーを形成するのではなく、集落に混じり込んでいる在り方を示す。これは、広域的な地域間関係の前提として、他地域の集団は移住を通して故地との交流回路を維持するのではなく、日本列島内外各地域との交易に直接的に従事する人、商品となる財を調達する人々、足りない商品（贈答品などは別システムか）を生産する人、海を越えて渡海する人々など、交渉・交易、交通、運搬、保管、生産等のある程度の役割分担した集団が複数入り混じった列島内外との交流は、往来しないしは短期滞在が基本で、生活様式については可能な限り故地の伝統に近い。足りない部分は西新町の在地集団から供給を受けた、それが本遺跡の実態といえるのではなからうか。

また対外交渉にあたって、交易に関わる倭と朝鮮半島どちらの集団も知識・経験値・コネクションを保持していたとみられるが、本遺跡の集団が朝鮮半島への航行やそれらとの交渉の任務をいかに円滑にして遂行しようとしたのかという点については、これらを考古学的に証明するのは非常に難しい。ただし、本遺跡から朝鮮半島まで実際に渡海しようとするれば、時季や気象、地形等の自然環境や集団関係、社会環境によって制限を受けざるをえない。特に朝鮮半島南部から西部の多島海は、潮位差が大きく、潮流の激しい難所が少なくなく、パイロットとしての的確な航路の指示や各寄港地の人々との友好関係、言語が必須で、円滑な航行には海上地理と潮流を熟知する寄港地ごとの地域集団の協力が不可欠といえる。つまり、朝鮮半島との交渉は、ノウハウ・コネクションを持った地域集団との関わりがあって初めて円滑に遂行できたといえ、朝鮮半島と日本列島各地域の人々が混在する本遺跡の集団はまさにその条件に合っている。

ただし、本遺跡の集団が交易をある程度を独占したかといえ、ローレベル交易についてはある

程度管理・統制していた可能性があるが、政治的なハイレベル交渉となると、遺跡からその痕跡となる遺物（威信財）の出土はなく、朝鮮半島の金海大成洞古墳群にみられる巴形銅器などの倭系遺物は畿内系遺物に位置づけられ（井上 2014）、金海加耶と倭中樞部との政治的交渉は、本遺跡の交易スキームとは別次元のものであった可能性がある。

本報告書では、各テーマに精通した研究者の比較検討が行われ、対象遺物について様々なレベルで相対化し、本遺跡の在り方をこれまで以上に形あるものとして提示するとともに、体系的に検討する土台を設けることができた。

今後は、朝鮮半島各地域の資料増加に伴う比較研究の進展や近年議論となっている文字の使用を示す板石硯など、取り上げることができなかったテーマや他の考古資料の動向を踏まえた議論をアップデートしつつ、地域社会や遠隔地間交流の中での本遺跡・集団がどのような役割を果たし、日本列島と朝鮮半島双方の在地勢力・社会がどのような対応を取ったのか、古墳時代社会の成立といかなる関わりを持つかの意味を考古学的に究明する必要がある。今後の研究の進展に期待したい。

【引用・参考文献】

- 井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』 学生社
- 大庭孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』 九州歴史資料館
- 久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交渉機構」『考古学研究』第 53 巻第 4 号
考古学研究会
- 久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』発表要旨集・資料集 第 19 回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 重藤雄行 2018「九州からみた畿内」『古墳時代の畿内』講座畿内の考古学第 2 巻 雄山閣
- 重藤雄行 2024「渡来系集落」『九州考古学の最前線 1 縄文～古墳編』季刊考古学別冊 43 雄山閣
- 柴田昌兄 2022「朝鮮半島系準構造船（加耶タイプ）の生産と日韓の造船技術」『縄向学の最前線』縄向学研究第 10 号 縄向学研究センター
- 辻田淳一郎 2022『鏡の嗣葬』『筑紫と南東』シリーズ地域の古代日本 KADOKAWA

大庭孝夫（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 6	登録番号 0005

西新町遺跡出土品再整理事業報告書

西新町遺跡 3・12～15・17・20・22 次次出土品総括報告

令和 7（2025）年 3 月 31 日発行

発行 九州歴史資料館

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

TEL：0942-75-9575

<https://kyureki.jp/>

印刷 アオヤギ株式会社

〒 810-0004 福岡県福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9-31

TEL：092-761-2431

